
仮想戦記（仮

ロックウッド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮想戦記（仮

【Nコード】

N8552W

【作者名】

ロックウッド

【あらすじ】

露西亞帝国がシベリアに残存し、日英同盟が存続された世界を中短編の連作で描く仮想戦記

目標はバブリーな日本

登場兵器他の詳細設定は筆者HP「茨城駐屯地・改」

<http://rockwood.web.fc2.com/index.html>

にて公開中

1867 御陵衛士

斎藤は、目の前に広がる光景を見て、思わず眉をしかめていた。長円寺内の屯所には続々と旅装の男達が現れていた。男達の数は多く、5、60人ばかりもいるようだった。

なかには屯所の中に入れずに長円寺の外でこちらを伺っているものもいた。

刀を抜いて確かめるまでもなかった。男達がかなりの戦闘力を有していることは様子を見ているだけで分かった。

周囲を鋭い目で探っているものもあれば、休んでいるものもいる。おそらく見張りや休息役という役割分担が自然と出来ているのだろう。

これほどの数の人間がいるというのに勝手に旅装をとるようなものはいなかった。

かなりの長行軍であつたらしく、旅装はくたびれてはいたが、よく整備された跡があつた。

それに資金も豊富なようだった。旅装はかなりの重装備だった。それに斎藤が見る限りでは男達は全て同じ様な旅装をしていた。

また、何人かは武具か何かでも入れているのか長持を運んでいるものもいた。

長持は行軍のために用意されたのか傷だらけだったが、頑丈なものだった。それに製作者か問屋の印なのかわからないが、目立たないが上品な印がつけられていた。

つまり旅装も含めて彼らは同じ場所で装備を調達したことになる。彼らは三々五々と集まってきたのではなくある集結地からまとまって行軍を始めたのだ。

その集結地は江戸程ではないにしてもかなりの大都市であること

は間違いない。

そうでなければこのように大量量産された装備を一挙に調達することなど不可能だ。

おそらく大藩の城下町が彼らの本来の根拠地であり、出発点だったのではないのか。

勿論このような装備を予め整えることができたということは彼らが無計画な脱藩者ということはありません。

すくなくとも役人たちの、それも藩内でもかなりの上位者の黙認がなければこのような大人数が装備を整えることなどできないのではないのか。

伊藤がつれてくるといった援軍とはこれだったのか

御陵衛士創設頃に、伊東甲子太郎は盛んに援軍を呼んであるとか、同志は我々だけではないと言っていたのを斎藤は思い出していた。

しかし斎藤を含め、御陵衛士のうち伊藤の側近を除く大半の人間がそれを信じていなかった。

伊藤にそこまでの人脈があるとも思えなかったし、そもそも新選組に伊藤はずいぶんと多くの人間と一緒に入隊しているのだから、伊藤の同志はそれで全てだと思われていたのだ。

だが、目の前の男達が本当に全て援軍なら、伊藤の人脈は大したものになる。

今のところ御陵衛士はわずか15人を数えるばかりにすぎない。

この男達が、全て御陵衛士に合流すれば戦力は倍増どころではない。

在京の集団としてはかなりの戦力と組織力を持つことになるのではないのか。

伊藤はこれだけの人数を集めさせることに成功した。

それも斎藤たち御陵衛士の他の面々には全く知られること無くことを進めたのだから、斎藤や近藤局長達が思っていた以上に伊藤は

策士ということになる。

だが当の伊藤本人は旅装の男達に盛んに声をかけている。その様子はとても御陵衛士の首領には見えなかった。

次々と男達の間をまわっていると、まるで彼らに媚を売る御用聞きのようにだった。

おそらく当たらずとも遠からじなのだろう。彼らの行動にしても伊藤が声をかけたから上洛したという単純な話だとは思えない。

伊藤の援軍がどうだという話があったとしても、それは単にきっかけか、あるいは口実に過ぎないのではないのか。

斎藤が眉をしかめながら考えていると、老人とその伴らしい若者と話し込んでいた伊藤がふと振り返った。

「ああ、斎藤君、こちらへきてくれないか」

どうやら伊藤は御陵衛士の面々を売り込もうとでもしているらしい。老人に斎藤たちを紹介しようとした。

「藤田先生、彼が斎藤君です。この若さで新選組で組長まで務めた逸材ですよ」

あまりに媚びへつらうような調子の台詞だった。褒められているはずだが、斎藤は白けながら聞いていた。

だが、伊藤はそんな斎藤の様子には気がついていないようだった。老人が伊藤や斎藤をどう評価しているかは分からなかった。

奇妙な老人だった。年の頃はおそらく60は越えているのではないのか。

見た目だけならば枯木のような体に見えるが、一刀流を修めた斎藤には老人の気迫が感じられた。

それに旅装の汚れ具合を見ても男達はかなりの長旅を終えたばかりのはずだったが、老人にも伴の若者にも疲れは見えなかった。

老人は真っ直ぐに斎藤を見つめているが、その目からは感情が読めなかった。

感情がないというわけではない。ただそれを普段はしまい込んで
いる。そんな印象を受けた。

それに対して若者は分かりやすかった。年の頃は齋藤と同じか、
すこしばかり年上だろう。

若者は齋藤に挑むような、あるいは値踏みするような視線を向け
てきている。

「齋藤君、こちらは藤田東湖先生と御子息の小四郎さんだ」

思いがけない名前に、齋藤は思わず目を見開いていた。

「藤田です」

老人は短く名を名乗りながらも、齋藤から目を離さなかった。

藤田東湖の名前は齋藤も知っていた。

水戸学と呼ばれる水戸藩で形成された学問、あるいは学問体系が
あったが、藤田東湖はその水戸学の大家だったはずだ。

しかし藤田東湖の名を世に知らしめているのは水戸学の大家とい
うだけではなかった。

藤田東湖は現在の水戸藩藩政の方向性を作り上げた実質的な指導
者であったと考えられていた。

もともと藤田たちは先代の水戸藩藩主徳川斉昭の元で尊皇攘夷を
唱える改革派であつたらしい。

だが、彼ら天狗党と呼ばれていた改革派は、徳川斉昭が幕政から
失脚すると共に、藩政の権限を保守派に奪われていた。

彼ら改革派が天狗党と呼ばれ始めたのもこの頃のことらしい。

上士の多かつた保守派が、これまでの下士達もが加わっていたこ
れまでの藩政に対する鬱憤を晴らすために、天狗になっている者共
という意味を込めて呼び始めていたらしい。

もしもそのままの状況が続けば、彼ら天狗党は激昂して拳兵する

か、それとも歴史の闇に人知れず消えていったはずだ。

そのような状況が一変したのは、今から三年ほど前、ちょうど新選組がその前身である壬生浪士組を結成させる頃のことだった。

水戸城からも程近い港町の那珂湊において、水戸藩とアメリカ合衆国海軍とが交戦したのだった。

実のところ、何故そのアメリカ合衆国海軍のフリゲートが水戸藩と交戦することになったのかよくわかっていなかった。

水戸藩によれば、卑怯にもアメリカ合衆国海軍フリゲートが那珂湊の街を奇襲砲撃したことから戦闘が開始されたことになる。

しかしフリゲートからの対地砲撃以前に、那珂湊の陸地での白兵戦闘が行われたのが住民等によって目撃されており、水戸藩の公式見解とは食い違いを見せていた。

水戸藩の公式見解に対して、アメリカ合衆国海軍はこの交戦は、水戸藩がアメリカ南部連合に加担したため、それを阻止するために行われたと説明していた。

つまり、内戦状態にあるアメリカ合衆国と各国との通商路を破壊するため、太平洋で戦闘行動をとっていたアメリカ南部連合海軍の艦艇に対して、水戸藩が密かに補給を行っていたため、その警告として砲撃を行ったというのだ。

これが正しいとすれば、陸地での戦闘は警告文の布告でもしに上陸した陸戦隊と水戸藩兵とのあいだに起こったものであると考えられる。

しかし、事態の埒外にあったために逆に第三者の視線でこの戦闘を分析することのできた斎藤たちからすればアメリカ合衆国海軍の説明も奇異に感じられた。

彼らの説明を信じれば、水戸藩はアメリカ南部連合海軍艦艇に対して補給を行ったことになるが、そのような行為の証拠をアメリカ

合衆国海軍フリゲートがどうして得ることができたのか。

那珂湊への砲撃を行ったのはフリゲート一隻だけであつたらしい。情報収集力の限られる単艦行動でどうやって補給活動の実態まで調べるのは相当困難ではないのか。

第一、そんな証拠が得られるほどアメリカ南部連合海軍艦艇の動向を把握しているのであれば、むしろ海上で敵艦と交戦する方を選ぶのではないのか。

アメリカ合衆国海軍フリゲートの目的が本当に南部連合からの通商路保護であるのならば、それこそが目的であり、敵艦の補給路を立つというのは手段でしかないはずだ。

だが、今に至るも日本周辺の海域でアメリカ合衆国海軍とアメリカ南部連合海軍が交戦したという情報は伝わってこなかった。

それ以前に水戸藩がアメリカ南部連合への支援をすることに何の意味があるというのが全くわからなかった。

南部連合艦艇に支援を行ったところで水戸藩に得るところは何も無いのではないのか。

いや、それどころか当時の大多数日本人たちにとって、アメリカが合衆国と南部連合に別れての内戦状態にあるという状況そのものが興味の埒外にあつた。

むしろアメリカ合衆国海軍による那珂湊砲撃後の通告によって、初めてアメリカが内戦状態にあることを知ったものも多かったはずだ。

実際には補給を求めたのはアメリカ合衆国海軍フリゲートの方で、それを那珂湊に駐留していた水戸藩の役人たちに断られたために戦闘となつたのではないのか。

斎藤は事件前後の状況や双方の公式な見解からそう判断していた。

あるいはこの当時は薩摩や長州でも外国艦船との交戦があつたら、この戦闘はこれらに関する交渉に対して何らかの影響をおよぼすために行われたのかもしれない。

真実は今のところ闇の中にあつた。

いずれにせよ、この戦闘は水戸藩のみならず尊皇攘夷を掲げる諸藩にとって大きな影響をあたえることとなつた。

奇襲的な海上からの砲撃とはいえ、水戸藩の戦力では米合衆国海軍のフリゲートの行動を阻止することが出来なかつたためだ。

いくら準備の整わない平時とはいえ、那珂湊は水戸城からわずか数理しか離れていない。

つまり水戸藩は根拠地から出撃したにもかかわらず、那珂湊が灰燼とかしてから砲兵を含む主戦力が前線に到着するような始末であつたらしい。

この前後に薩摩藩や長州藩が行つた戦闘でも同様であつたが、現在の日本国の戦力では先進国との戦闘は極めて困難であつたのだ。

それ以前に、この戦闘の結果、水戸藩の藩政は大きく揺れ動くこととなつた。

当時の藩政を担つていた保守派の諸生党は、改革派の天狗党から戦闘の不始末を大いになじられることとなつた。

那珂湊にあつた財産を焼けだされた在国の商人や漁民たちもこれに同調していた。

これで諸生党は大きく影響力をそがれることとなつた。

だが、那珂湊での戦闘結果を見れば天狗党が掲げるような過激な尊皇攘夷を安易に実施するのは自殺行為としか思えなかつた。

もしも天狗党がそのまま諸生党を抑えこむ形で、攘夷を前提とした藩政を行うような態勢になつてしまえば、さらなる戦火が水戸藩

を襲うことになってしまったのではないのか。

この混乱する状況の中で徐々に藩政の部隊に復帰してきたのが藤田東湖だった。

前藩主徳川斉昭の側近であった藤田東湖は、他の天狗党の面々と違って諸生党が藩政主流となるよりも早くに幕政、藩政から退いていた。

十年近く前の安政の大地震で大怪我をおった為に、隠居し、長期の療養を行っていたためだ。

しかし水戸学の大家として、また今は亡き徳川斉昭の側近として天狗党の面々からの信頼は厚かった。

それに長年藩政から退いていたから、諸生党から過度に危険視されることもなかったらしい。

このような自身の曖昧な立場を利用して、藤田東湖は諸生党と天狗党との間を取り持つことに成功した。

どうやら現藩主である徳川慶篤による要請で藤田東湖は動いたらしいが、その成果は絶大なものがあつた。

藩の重鎮である藤田東湖に説得された天狗党と諸生党は、お互いの主張をすりあわせることに成功した。

現在では水戸藩は、藩主徳川慶篤のもの、現実的尊皇派とも言うべき立場を貫いているらしい。

だが、これが將軍というよりもは、現在の幕閣たちの警戒を促すこととなった。

藩政に再び返り咲いた藤田東湖が再び隠居生活へと戻ったのは、幕府からの監視の目を和らげるためでもあつたらしい。

だが、今齋藤の目の前に再び隠居生活に入ったはずの藤田東湖の姿があつた。

息子である藤田小四郎を伴っているということは、周囲にいる男

達はかつての天狗党で藤田を慕っていた者たちなのだろう。

もちろん、これだけの人数を送り出した水戸藩も彼らの存在を認知していることは間違いない。

実際には、彼らはここ京都で近いうちに大きな政変が起こると見た水戸藩が送り込んだ私兵集団であるのかもしれない。

おそらく現藩主である徳川慶篤が幕府との衝突を恐れて、藩公認によるものではなく、藤田の私兵集団のようにみせかけて送り込んだのではないのか。

これでは近藤局長の企みも無駄に終わるな

自分が関わっている策謀であるというのに斎藤は他人事のように考えた。

元々は、新選組のさらなる綱紀粛正のために伊東甲子太郎らの離脱を認めたと近藤局長から斎藤は聞いていた。

伊東を何らかの理由をつけて殺害することで、新選組の人員に裏切り者の末路を教えようというのだ。

しかしこの策が成功するには条件があった。

裏切り者たちの戦力が新選組に対して十分に小さいものであることが必要だったのだ。

新選組の兵力が二百人を数えるとはいえ、御陵衛士も十名を超えるそれなりの集団となっている。

御陵衛士の分裂後も脱退したものが十名程度はいると聞くから新選組の戦力はさらに低下しているはずだ。

新選組と御陵衛士のお互いの隊士の行来を禁止する約定を設けたのも御陵衛士の戦力拡大を阻止するためだった。

しかし、斎藤の前の旧天狗党の男達がみな御陵衛士に合流すれば、

御陵衛士の人数は一挙に膨れ上がる。

未だ新選組のほうが多数とはいえ、その戦力差は格段に新選組側に不利となるだろう。

さらに、肅清される伊藤の立場の問題もあつた。

伊藤はあくまでも裏切り者たちの首魁として斬られる必要があつた。

新選組の隊士によって肅清されるのが、役も持たない単なる平隊士のような小物であれば肅清による綱紀肅正という効果は薄くなつてしまつたろう。

だが、これから先、伊藤が御陵衛士の指導者として影響力を發揮することは無いのではないか。

人数から言えば旧天狗党の男達のほうが現在の御陵衛士の隊士よりもはるかに多いのだし、何よりも混乱した水戸藩を唯一人でまとめ上げた藤田東湖とどさくさに紛れて御陵衛士を創り上げた伊東ではあまりに格が違いすぎる。

それに伊藤もかつて水戸学を学んだと斎藤は聞いたことがあつた。いわば水戸学における大先輩でもある藤田を、伊藤が建前上でも自らの配下に置くとは思えない。

しばらくは軍師が何かについてもらうにしても、いずれは藤田こそがこの集団の長となるだろう。

いずれにせよ旧天狗党の男達がそう簡単に伊藤の指揮を受け付けるとは思えない。

これでは逆に御陵衛士こそ旧天狗党に吸収されるようなものではないのか。

しかし、そのような新体制となつたあとでも、伊藤や斎藤たち御陵衛士を立ち上げた者たちが、排除されるとは思えなかつた。

真実はどうであれ、藤田たち旧天狗党は伊東甲子太郎率いる御陵衛士に招かれて上京したという建前を貫くのではないのか。

幕府から水戸藩への批判をかわす事は出来なくとも、表向き脱藩者ということにしてしまえば辻褃合わせぐらいは出来るだろう。

それに御陵衛士という孝明天皇御陵を守護するという任は幕府側からの圧力をかわすのに便利なのではないのか。

だから、天狗党の男達も、伊藤と御陵衛士という既存の組織を出来る限り利用し、保存しようとするのだろう。

だが、下手をすれば伊藤は倒幕派と佐幕派双方から肅清される可能性があった。

新選組からは当然狙われているし、旧天狗党の脱藩者も事態が急変すればすべての責任を伊藤に押し付けて帰国してしまうかもしれない。

伊藤がそこまで理解しているのかはわからない。だが、この先、伊藤が生き残るためには旧天狗党の男達を盛り上げて、勤皇派に取り入るしか無いのだろう。

そこまで考えると、伊藤がやたらと藤田たち旧天狗党の男達に下手に出ているのもうなずけるような気がしていた。

斎藤が藤田東湖に頭を下げた挨拶をしようとするよりも前に、屯所の門に新たな気配があった。

ざわざわとした声に斎藤が振り向くと、天狗党の男達の様子を伺う二人の男達が見えた。

一人は斎藤よりも少しばかり年上のようなのだが、それでもまだ三十にはなっていない若い男だった。

身の丈六尺はありそうな大男だったが、総身に知恵が回りかねたという事はなさそうな、教養と自信にあふれた顔だった。

もう一人は中背のやや華奢な男だった。

こちらは斎藤よりも若そうだった。

若い方の男は軽薄そうな表情で、屯所の中をじろじろと見回しているが、斎藤は男の身のこなしや視線の動きから、この男も並々ならぬ剣術使いであると判断していた。

男達が何かを言う前に、藤田小四郎が声を上げた。

「久坂さん、瀬戸口君じゃないか。二人とも京に戻っていたのか……」
「どうやら二人の男達は藤田小四郎の知り合いらしかった。」

小四郎は笑みを浮かべながら藤田東湖に向き直った。
父親に旧友を紹介しようというのだろう。

しかし、小四郎が口を開くよりも早く藤田東湖が軽く手を上げて制した。

「少し疲れた。信、それよりもお前の友を伊藤さんに紹介してきなさい」

藤田小四郎は、あまり疲れているようにも見えない藤田東湖を怪訝そうな目でみやったが、すぐに頷くと伊藤に目を向けた。

伊藤は戸惑った顔で小四郎と東湖、それに門の前の二人を交互に見ていたが、最後にはぎこちない笑顔で藤田小四郎に顔を向けて頷いた。

藤田小四郎と伊藤が連れ立って門の方に向けて歩いて行くのを斎藤はぼんやりとした顔で見送った。

伊藤は、肝心の売り込みのために斎藤を藤田東湖に紹介することを忘れてしまったらしい。

このまま藤田東湖のそばにいるべきか、それとも伊東達についていくべきか、斎藤は珍しく迷っていた。

そして、斎藤が何らかの結論を出す前に藤田東湖の声が響いた。
「斎藤さん、わたしは一度あなたと話をしたいと思っていたのです」

どこか巨大な穴の底から響くような声だった。

何故か斎藤はそう感じた。そして次の瞬間勢い良く藤田に向き直

っていた。

つまり藤田は伊藤に紹介されるまでもなく、斎藤を以前から知っていたということになる。

もちろん若輩者とはいえ、新選組の組長として斎藤の名は、それなりに京では知られていたはずだ。

だが、今の藤田の言葉にはひどく重みがあった。

単に新選組の若手構成員という知識だけで斎藤を知っているというわけではなさそうだった。

斎藤は思わず鯉口へと手を伸ばしかけた。

実のところ斎藤は、新撰組の近藤局長が御陵衛士へと送り込んだ間者としての顔を併せ持っていた。

それがこの藤田に知られているとすれば危険が身に迫っている。

最悪の場合、藤田を斬らなければならぬだろうか。

しかし、頭目が着られて激高するであろう50人からの男達の囲みを破って脱出することなのであるのか。

斎藤の背にひやりとした汗が走った。

だが、緊張する斎藤とは対照的に、藤田東湖は悠然としていた。それどころか、表情に柔和ささえ現れ始めていた。

「実は水戸を出る直前に古い友人から斎藤さんのことを聞いたのです。」

一度、かつてのように彼と腹を割って話しあってみる、とその友人は言っていました。

それが近藤さんと話し合うことにもなるのだから…とも」

斎藤は呆然として藤田の言うことを聞いていた。

藤田の台詞を信じるとすれば、すでに斎藤が新選組の近藤が送り込んだ間者であることを把握しているということになる。

しかし、斎藤が呆然としている理由はそんなことではなかった。

古い友人…だと

斎藤を強烈な既視感が襲っていた。

その男と再開したのは半年ほど前、京の街がまだ雪に包まれていた頃のことだった。

所用で外に出た帰り、斎藤は茶店の軒先で声をかけられた

どこかで聞いたような声で、ただ「やあ」と声をかけた男を斎藤は怪訝そうな顔で見た。

年の頃は三十路前後か、薄ぼんやりとしたお世辞にも美男子とは言えない顔だった。

さりとて不細工という程でもない。

雑踏に紛れれば一町も行かぬ間に見失ってしまうだろう特徴のない男だった。

斎藤はしばし男の顔を見つめてからようやく彼が古い友人であったことを思い出した。

「随分と久しぶりだね山口君」

「いや、今は斎藤と名乗っているのです」

「ああ、そうでしたね斎藤君」

思わず怪訝そうな顔になった斎藤の肩に白いものが振り落ちた。

斎藤と男が空を見上げると再び雪が振り落ちてくるのが見えた。

かなりの本降りになりそうだった。

斎藤は男の手招きに従って茶店に入った。

それから暫くの間、雪が小降りとなるまで熱い茶を飲みながら男と話をしていた。

どんな話をしていたのかはあまり覚えていない。

おそらく聞いた話ではない。世間話に過ぎなかったのだろう。

だが、男には世間話に混じって近藤局長からの極秘の命令を相談

していた。

局内どころか、局長と自分だけが知る秘中の秘のはずだったが、斎藤は男に口を開いていた。

それが何故だったのか、どうしてそんな話になったのか、斎藤はまるで覚えていなかった。

たわいもない世間話の合間にためらいもなくこううちわけていた。

「いま、近藤さんから間者になってくれないかと頼まれている」

斎藤は、新撰組屯所の奥深くで囁くような声で近藤が言ったことをゆっくりと思い出していた。

今日のように雪の降る夕刻、茜色に染まるでもなく、ただ薄暗い部屋で陰謀を企む近藤の目だけが鈍く輝いていたのがひどく印象的だった。

「何でも新選組から離脱しようとしている伊藤さんたちに従うふりをして組織内の情報を集めて欲しいということなんだが…」

さすがに斎藤は次の言葉を濁らせた。だが、友人はそんな斎藤を弾劾するかのようには鋭く斬り込んできた。

「それだけ…なのかな。情報収集のためだけに、これまで多くの隊士を粛清してきた斎藤君を戦線から離脱させようというのは不自然ではないか」

斎藤はぎくりとして友人の顔を見つめた。

表情の浮かんでいないその顔は、まるで最近はやりの怪談集にあったのつべら坊のようだった。

一息つくと、斎藤は周囲を見渡してから小声で言った。

「あなたの言うとおりだ。近藤さんは情報を収集しながら、機会があれば伊藤さんを斬るつもりでいる。

いや、伊藤さんの同志たちも粛清することで綱紀肅正をはかろう…ということらしい」

「だが、斎藤くんはあまり愉快に思っていないようだ」

「それはそつだ。これはただ隊士を粛清するというのではない。彼

らは何かの悪事を働いたからそこで斬られた。

しかし伊藤さんたちに潜り込んでじっくりと情報をつかんだ上で暗殺するというのは明らかな陰謀ではないのか。

どうにもさっぱりとした戦いにはならないだろうな」

そこまで言うとは齋藤はしばらく雪の降る外を見た。

白い雪が外界の不浄なものを覆い隠すかのように降っている。

だが、それは覆い隠すだけだ。本質は未だ雪に隠されながらも存在している。

齋藤はぼんやりとそんなことを考えていた。

しばらくそれに付き合うかのように押し黙っていた友人は、しばらくしてから口を開いた。

「だが、君は結局そこに行くことになるだろうな」

「局長の命令だからね。そつだ結局は是非もないことさ」

「しかし……」

友人は首をかしげながらいった。

「しかし、齋藤君、君こそがいずれこの国の行く末を左右する系になる。僕にはそう感じられる」

齋藤は呆気にとらえて友人の顔を見た。

いくら何でも「この国の行く末」とは言いすぎだろう。

しかし齋藤はすぐにそのことを忘れていた。

今、藤田東湖に向き直って始めて、古い友人との会話が鮮明に思い出されていた。

もしかすると「この国の行く末を左右する系」とは今、この状況のことを指し示すのではないのか。

そつだとすれば……少なくとも近藤局長のつまらない陰謀の片棒を担がされるよりもは面白そうだった。

何しろ自分こそが「この国の行く末」を決定する権限があるという事なのだから。

退屈だけはしなくてすむだろう。

気が変わったのか、うつすらと笑みを浮かべる斎藤一を藤田東湖は見つめ続けていた。

1916 ユトランド沖海戦

何故、俺はこんなところにいるんだろう。

急速に激しさを増していく艦橋の中で、特に仕事を与えられているわけでもない栗田中尉は、恐怖を紛らわせるためか、そんなことを考えていた。

日本海軍特務艦隊の派遣以降、観戦武官の任についていたものは、そのまま日英両海軍の艦隊運用を円滑なものとするために連絡士官の任についていたが、今現在はさしあたってすべき任務もなかった。

栗田中尉は、艦隊司令部の編成上ではビーティー中将に直率する形だったが、中将自身も艦隊に対する命令を出し終えた後は、しばらく押し黙っていた。

旗艦ライオン個有の将兵や、司令部の幕僚らが砲撃戦を実施すべく忙しく命令を下し、受けている間、ビーティー中将と栗田中尉は共に彫像のように押し黙っていた。

自艦の砲撃、着弾による衝撃にも微動だにしなかった。

周囲の将兵達の少なからぬ数が、外見からは恐怖の色も見せぬそんなビューティー中将と栗田中尉の二人を見やっつて尊敬の目を向けていた。

眉一本動かさぬまま、栗田中尉はそんな将兵の態度をみて、自己嫌悪に陥っていた。

何故、みんな俺がただの見掛け倒しだと気がつかないのだろう。

それは、栗田中尉が海軍に入ってからずっと考えていたことだった。

栗田中尉が海軍兵学校を卒業したのは今から六年前、1910年の事だった。

兵学校の卒業成績順位は悪いどころではなかった。クラスヘッドには程遠いが、少なくとも上の下か上の中には入る優秀と言って間違いのない成績だった。

だが、帝国海軍の重鎮達の何人かにとって当時の栗田少尉の成績はまだ不満足なものだった。

奇妙なことに、同時にそうであっても当時の栗田少尉を彼らが特に目をかけることは間違いようのない事実だった。

彼ら、つまり帝国海軍重鎮の中で次第に影響を薄めつつも、未だ隠然たる勢力を誇る水戸閥にとって栗田海軍少尉は期待の星であったのだ。

水戸市に根付いた栗田家は、栗田中尉の祖父、父と二代続いた国学者の大家として知られていた。

栗田中尉の父は、有名な大日本史が完成した時の編集員として知られていたが、むしろ個人として有名なのは祖父の栗田寛の方だった。

水戸藩、いや日本国幕末期の偉人の一人とされる藤田東湖に栗田寛が師事していたからだ。

元々、大日本史を編纂する彰考館に小僧として入った栗田寛は、藤田東湖らにその才覚を認められ、可愛がられていたらしい。

武士の出ではなかったが、異例なことに藤田東湖に従って幕末期に上京し、御陵衛士の一員として活躍した話は、それから50年も経たぬのに伝説とかがしていた。

栗田寛が英雄的な活躍をしたというわけではない。もちろん少なからぬ役目を果たしたのは事実のようだったが、それよりも新政府樹立直前の京都動乱でその構成員の殆どが戦死した御陵衛士の、数少ない生き残りとして有名となった。

だが、新政府樹立、東京への遷都の後には、栗田寛は政治の表舞台から姿を消した。彰考館に戻った栗田寛は、藤田東湖ら幕末の動乱で亡くなった者たちのあとを埋めるように、再び国学者として大日

本史の編纂に従事し、また、水戸学の後継者育成へと取り組んだ。あるいは、水戸閥の軍人らが、栗田寛を高く評価する理由はこの行為にこそあったのかもしれない。

政治の表舞台で何かを成し遂げ、そして本人は賞賛を受けることなく在野へと雌伏する。だが一朝事あらばふたたび立ち上がり、名を残す。

それは彼らが信奉する藤田東湖の生き方そのものではなかっただろうか。

だが、晩年の祖父を見ていた栗田中尉は、単に彼が歴史が好きで、政治に興味がなかったから国学者としての道に戻っただけなのではないかと考えていた。

晩年の栗田寛は、気難しく、孫を可愛がるよりも子や孫が、自分が成し得なかった大日本史の完成へと携わることを望む、偏屈な老人としか栗田中尉には思えなかった。

しかし、周囲はそうは考えなかったようだった。

藤田東湖が、その最後の年に御陵衛士の首領として活躍したようには、栗田寛の人生の最後は劇的なものとはならなかった。

彼はで一人の国学者として死んだ。

そして、その娘婿である栗田勤も国学者であった。

だが、そうであっても水戸閥は栗田家を名家の一つとして扱っていた。

軍人の道と同じく、水戸学の大家もまた、水戸の人間にとっては尊敬すべき家系であったからだ。

だから、栗田寛の孫である、栗田健男が海軍軍人としての水戸を歩まんと決意した時、周囲の目は期待に満ちたものであったのである。

あるいは、彼こそが、在野へと雌伏していた栗田家にとって、天狗党、御陵衛士をまとめ上げた頃の晩年の藤田東湖の再来となるの

ではないかと思われたからだ。

だが、栗田中尉が国学者の三代目としてではなく、海軍軍人としての人生を歩むことを決意した理由は、藤田東湖のように藩だとか国だとかの為というわけではなくもっと単純なものだった。

少年時代の海への憧れが一因であることは間違いないが、それよりも祖父や父への反発、あるいはコンプレックスであったような気がする。

要するに親父や爺さんのような学者になるにはオレの頭は悪かったのサ

同期や後輩達に海兵への志願理由を聞かれた時には、栗田中尉は最後にはそう答えていた。

しかし、栗田中尉がどう思おうとも、周囲はそうはとらなかつた。水戸閥にとって彼は英雄の血を受け継ぐ将来の派閥首領であつたのだ。

だから、海軍兵学校を卒業した後も、栗田中尉にはそういった水戸閥の面々からの庇護や支援が絶えなかつた。

問題は、英雄になどなるつもりが無い栗田中尉にはそういった行為はありがた迷惑にしかならなかつたということだった。

おそらく、英国海軍への連絡士官としての派遣、それも本大戦において速力と砲力から有力な艦隊主力の一翼としての地位を高めつつある、ビーティー中將指揮下の巡洋戦艦艦隊旗艦への配属という抜擢を受けたのも派閥の力関係が働いたのだろう。

第一、本来なら敵艦隊と遭遇する確率の高い巡洋戦艦部隊旗艦乗り組みの連絡士官であれば、栗田中尉よりも先任の下村少佐の方が適任ではなかつたのか。

実際、栗田中尉が着任するまでは、下村少佐がビーティー中將の連絡士官として旗艦ライオンに乗り組んでいたのだ。

特務艦隊の増援と同時に行われた連絡士官の増大によって、栗田

中尉他の士官たちが着任した。

それと共に、それまで連絡士官が着任していなかった総旗艦アイアンデュークへと下村少佐が派遣されることとなった。

これは、見方によっては、下村少佐は、栗田中尉の着任によって、活躍しそうな部隊から押し出されたある種の左遷となってしまうのではないのか。

確かに総旗艦への着任は栄転に見えるが、これまでの本大戦での稼働率を考慮すれば、むしろ巡洋戦艦部隊のほうが主力になっているからだ。

だが、下村少佐は、栗田中尉ににやりと笑みを浮かべただけだった。その目は、ほかの派閥の男たちと同様に、将来の提督候補生に勉強してこいといっていたような気がする。

下村少佐は米沢の出身で水戸閥の人間ではなかったはずだが、幕末期の海坂藩や奥羽越列藩同盟に参加していた藩の出身者には、水戸藩による新政府へのとりなしに恩義を感じているものが少なくないという。

だから、陸の会津閥もそうらしいが、大正の時代になつたいまでも、奥羽の諸藩出身者は緩やかな水戸閥の一員であるともいえた。

おそらく下村少佐も、派閥からの働きかけか、説明が栗田中尉の着任前にあつたのだろう。

またもや本人のあずかり知らぬところで派閥の力が動いていた。

栗田中尉には面白く無い話だった。

だからなのだろうか、いつの間にか、栗田中尉は周囲の本音を話すことなく、仮面をかぶるように表情を消していった。

それがまた、晩年の藤田東湖の伝説に重なっているようで、栗田中尉の知らぬところで評価を上げていったのだが、本人は自分を見たの見掛け倒しと判断していった。

栗田中尉の思惑など関係なしに、事態は動き始めていた。敵艦隊の発見、砲撃戦の開始からわずか30分ほどしか経ってはいなかった。

最初は英艦隊による命中弾の発生だった。

どうやら複数の敵艦に命中弾がほぼ同時に発生したらしい。見張り員からの報告は抑制されてはいたが、喜色を完全に隠すことはできていなかった。

これまでほぼ同時に発砲を開始したにもかかわらず、一方的に叩かれていた英国艦隊の士気はあがっていた。

ライオンの艦橋でも、複数の将兵がお互いに笑みを見せ合っていた。ビーティー中将はわずかに頷いただけだった。

しばし起きた喧騒のなか、栗田中尉は僅かに眉をしかめていた。

一方的な展開は脱したものの、英独海軍艦艇の命中率に差が出てきているのは間違いなかった。

英国海軍式の優秀な射撃指揮装置を背景とした射撃誤差修正方式よりも、独海軍の光学観測を重視しているらしい砲撃法の方が有効なのだろうか。

だが、二年前の開戦以後、幾度か行われた海戦では、彼我の命中率にさほどの違いは出ていない。

とすれば、これまで敗北を喫していない英海軍のほうだが、どちらかと言えば負け続けている独海軍よりも戦訓やそこから得られた新戦術、新手法の取り入れに熱心ではないということなのかもしれない。

いずれにせよ、この海戦後に、この彼我の命中率の違いを数値化し、その理由を明らかにする必要があるだろう。

戦況をどこか他人ごとのように感じながら、栗田中尉はそう考えていた。

今は連絡士官としての任に付いているが、英国海軍本国艦隊に編入された日本海軍艦艇が比率から言えばごく少ない事を考えれば、

栗田中尉達の任務が、連絡士官と同時に、観戦武官のように戦訓を調査することも求められているのは間違いない。

だが、栗田中尉が考えていられたのはそこまでだった。

背後からの轟音と同時に、これまでとは比べものにならない衝撃が艦橋内を襲った。

これまで不動だった栗田中尉とビーティー中将も床へと投げ出された。二人は同時に立ち上がるうとしてお互いに顔を見合わせた。

床が傾斜していたり、艦橋構造が破壊している様子はなかった。

ライオンへの命中弾があったようだが、致命的なものではなかったようだ。

背後からの衝撃があったということは、機関部か、後方に向けられた砲塔に着弾したのだろうか。

疑問への回答はすぐにもたらされた。艦橋に詰めている見張り員からの報告だった。

彼らもかなりの衝撃が襲ったはずだが、いち早く職務に復帰しているのは見事だった。

だが、見張り員の声は内心の衝撃を表すかのように震えていた。どうやら着弾はQ砲塔に命中したらしい。

栗田中尉は、ビーティー中将に素早く視線を向けた。中将がわずかに頷いたのを確認すると、中尉は素早く艦橋後部へと向かった。

見張り員の目で見ると、自分の目で確かめたほうが正確だった。栗田中尉は、艦後部を見てわずかに眉をしかめた。

艦中央部に位置するQ砲塔は上部装甲がかち割られていた。装甲には着弾のあとらしい大穴が開いていた。

ただし、煙や閃光は見えなかった。おそらく砲塔内部での応急処置がスムーズにいったのだろう。

この時期の英国海軍では、発砲間隔を短縮するため、弾庫から危険なほど多数の砲弾を持ちだして、予め薬室の近くに準備する傾向にあったから、着弾から即誘爆へと至る可能性すらあった。

栗田中尉は再びビーティー中将の元に戻った。手短かにQ砲塔の状況を伝達すると同時に、伝令がQ砲塔長との連絡が途絶えたことを伝えた。

「どうやらハーヴェイ少佐は勇敢に働いてくれたようです」

チャットフィールド艦長がビーティー中将に言った。砲塔長が、艦長が何かしらの命令を下す前に、自己判断で弾庫への注水を実施したのだろう。

中将は頷いた。だが、それ以上の命令を下そうとはしなかった。現状は我が不利であったが逃げ出すわけには行かなかった。

それに、ビーティー中将直率の六隻の巡洋戦艦の後方には有力な艦隊が追隨していた。彼らが戦闘に加入すれば戦況は一変する、筈だった。

しかし、ライオンの艦橋を、再び衝撃が襲った。

今度は物理的な衝撃はさほどのものではなかった。むしろ最初はドロドロという低い音響が聞こえた。この艦に被弾したわけではならしい。

再び見張り員からの報告が入った。

「最後尾、インディアファイガブルが離れます」

栗田中尉だけではなかった。何人かの司令部要員が双眼鏡を艦隊後方へと向けた。

たしかに、最後尾をいくインディアファイガブルが傾斜しながら戦列を離れようとしていた。

緊急回避などの命令のない戦術行動をとっているにしては不可解な光景だった。角度が悪くてよく見えないが、おそらく艦後部、舵機付近へ命中弾があつて舵が効かなくなってしまったのだろう。

そして、インディアファイガブルを見守っていた数人の士官は、その瞬間を目撃することとなった。

完全に戦列を離れたインディアファティガブルに再び独艦からの砲撃が着弾した。

命中弾は複数あつたらしい。それに戦列から離れたことで敵艦からの砲撃距離も伸びていたから、砲弾は、舷側装甲ではなく、垂直に近い落角をもつて水平装甲へと命中していた。

インディアファティガブルの脆弱な水平装甲は、独艦から放たれた砲弾に耐えられなかった。

栗田中尉は、上空から何かがインディアファティガブルの水平甲板に突き刺さつた、様な気がした。実際には弾速からいって、視覚で捉えられる速度だつたとは思えない。

だが、弾着による影響は、着弾の次の瞬間に現れていた。ライオンと比べても小さな、角張つた艦橋と、その後方の三本マストで支えられた射撃指揮所が消滅していた。煙突も中央部がかけているような気がする。

さらに、次の瞬間にインディアファティガブルに破局が訪れた。

巨大な、数百トンもある連装砲塔が爆発によるものだろう赤い火炎と共に拭き上げられた。だが、砲塔を吹き飛ばしても、誘爆で艦内に生じた爆圧は十分に低下しなかつたらしい。

吹き飛ばされた砲塔が、ふたたびバーベットへと戻るよりも先に、船体を構成する鋼材が爆圧によつて折り曲げられ、破断していた。

誘爆はまだ続いていたが、インディアファティガブルの運命はすでに決っていた。

栗田中尉たちが見守る中で、巡洋戦艦インディアファティガブルは海底へと没していった。

ライオンの艦橋をひどく沈んだ雰囲気襲った。

今のところ、艦数で見ればむしろ優勢であつたはずのドイツ艦隊に対して、さしたる損害を与えているように見えないのに、一隻が撃沈され、隻数で同数へと並ばれてしまった。

これで意気消沈しないほうがおかしかった。

だが、彼らを率いるビーティー中将は無言のまま、艦橋の窓から彼方を見つめていた。

こちらに向けて砲火を放つドイツ艦隊を見ているのではなかった。ドイツ艦隊のさらに後方を見ていた。

なにがそこにいるというのか。栗田中尉は怪訝に思っつてその方角を見た。

一帯を覆う靄に邪魔されて、一万五千ほどの距離にあるドイツ艦隊は視認性が低下していた。

だから、そのさらに後方から放たれた砲撃を示したのは発砲による赤い閃光だけだった。

砲声が聞こえてきたのはそれから一分半ほど経つてからだつた。それよりもずっと早く、ドイツ艦隊の周囲に弾着によつて巻き上げられた水柱が立ち上がった。

そして、砲声が聞こえたのとほぼ同時に、伝令からの弾んだ声がライオンの艦橋に響いた。

「通信室より連絡、現在友軍艦艇よりの通信を受信中。本文…ワレヒエイ、ワレヒエイ…日本艦隊です」

ビーティー中将は、栗田中尉の方を見て満足気に頷いた。どうやらようやく味方艦隊、日本海軍第三特務艦隊が戦闘に加入したようだった。

「これは、どうなっているんだ…」

戦艦比叡の狭苦しい艦橋から、高倍率の双眼鏡で敵艦隊の様子を観察していた小杉少将が思わずつぶやいていた。

36センチ主砲の連続射撃中にもかかわらず、そのつぶやきを聞きつけた参謀長的一条大佐が表情を変えぬまま僅かに首をかしげながら言った。

「九割九分、敵ドイツ海軍艦隊です」

少将は眉をしかめ、不機嫌そうな声で言った。

「そんなことは分かっている…我が艦隊は巡洋戦艦四隻、ビーティ―中将指揮の艦隊は…一隻減っているようだがまだ五隻が健在だ。これに対して敵艦隊は五隻、ほぼ倍の戦力なのだから敵に勝ち目はない…そうだな？」

「理性的な指揮官であれば、誰でもそう判断するしかありません」
それを聞くと、小杉少将はさらに表情を不機嫌にさせていった。
「ならば、何故奴らは脱出せずに漫然とビーティ―中将達と砲撃戦を続けているのだ」

小杉少将の言うとおりだった。リッツォーと思われる巡洋戦艦を先頭としたドイツ艦隊は、比叡を始めとする第三特務艦隊主力の金剛型巡洋戦艦四隻からの砲撃を浴びながらも、英巡洋戦艦部隊との同航砲撃戦を続けていた。

命中弾こそないが、比叡から順に敵一番艦から四番艦までを射撃している第三特務艦隊の中には、すでに挟叉を得ている艦もあった。ふと小杉少将は何かに気がついて、一条大佐に振り返った。

「九割九分で敵艦隊…残りの一分は何だと考えている？」

大佐は無表情のまま、さして迷いもせずと言った。

「ドイツ海軍の光学的な欺瞞。全ての見張り員の集団幻覚。この海域特有の未知の自然現象、あるいは屋気楼。あるいは味方艦隊の誤認…」

「もういい。いくら霧に包まれているとはいえこの距離で敵艦隊を誤認などするものか」

一条大佐が抑揚のない声で続けるのを小杉少将が遮った。最後の可能性にだけ反応したのは、それ以外があまりにも馬鹿馬鹿しく思えたからだ。

「あれが敵艦隊であることは間違いない…だとすれば、奴らがあのまま砲撃戦を続行している意味をどう見る」

「第一に、敵が勝てると判断している場合」

「勝てる？兵力差が倍近く……いや、トマス少将の戦隊が合流すれば三倍近くにもなるのか」

呆れたような声で小杉少将が言った。やはり一条大佐は淡々と答えた。

「敵艦の性能が我軍の予想をはるかに超えている可能性も」

「そのようなドイツ海軍の技術力を英国情報部がつかみそこねていたというのか」

小杉少将は首をすくめたが、その動きは精彩を欠いていた。

第三特務艦隊を含む日本海軍遣欧艦隊は、英国主導で行われたガリポリ上陸作戦の終盤において、英国情報部や参謀部の甘い判断のつけを払うためにかなりの損害を被っていた。

その経験から、特に遣欧艦隊の上級指揮官は、英国海軍はともかく、英国諜報部からの情報を常に疑うようになってしまっていた。

「もっとも、私は英国情報部をもう少し高く評価しています。この可能性は殆ど無いでしょう。もし敵が自らの勝利を信じているのなら、それは敵指揮官の精神状態に原因を求めべきかもしれません」

小杉少将は、半ば呆れたような表情になった。

「事前情報を信じればだが、敵高速艦隊の指揮官はヒッパー提督だ。ヒッパー提督が指揮した今次大戦の幾度かの戦闘を見るかぎり、彼は冒険的ではあっても狂人であるとはとても思えん」

まるで小杉少将の言うことを全く聞いていなかったかのように、一条大佐が続けた。

「第二の可能性として、敵艦隊が高速の、彼らの分類で言えば、偵察艦隊であることに留意すべきかもしれません」

怪訝そうな顔で小杉少将が向き直った。

「どういう意味だ、あれが敵主力ではないことはわかるのだが……」
「後方には戦艦を中核とした敵主力艦隊が航行中であると思われるま

す。おそらく、あの敵艦隊は我が方をそこまで誘引するつもりなのでしょう」

それを聞くなり、小杉少将は、これまでの精彩を欠く表情を消し払ってニヤリと笑みを浮かべた。元々、少将は攻撃的な指揮官として知られていた。

海上護衛を主任とするであろう第一、第二特務艦隊ではなく、巡洋戦艦を主力とする第三特務艦隊の指揮官に選ばれたのも、その果敢な性格を考慮されてのことではないのか、艦隊内ではそういう噂が飛び交っていた。

「それだな、そうに違いない。相手の艦隊を主力艦隊で各個撃破する。見事に決まればこれほど効果的な作戦はあるまい」

一条大佐は、やはり表情を変えぬまま今後の艦隊軌道を尋ねた。もつとも、小杉少将の判断はすでに予想していた。

艦隊指揮官である小杉少将や参謀長一条大佐だけではなく、第三特務艦隊の司令部要員は遣欧艦隊に編入された当時からほとんど変わっていない。

すでに、相手の考えを読み取ることくらいはできていた。

だからこそ果敢な判断を下す指揮官の元に、慎重すぎる性格の参謀である自分が配属されたままなのだろう。一条大佐はそう判断していた。

「迂回挟撃準備！最大戦速で敵艦隊を一旦追い抜かず。その上で単縦陣のまま敵前で丁字を描いてこれ以上の南下を阻止する。我が艦隊とビーティー中将、トマス少将の三個艦隊で敵を揉み潰すぞ」

小杉少将が、目を輝かせながら、勢い良く言い終わると同時に制止の声が2つ上がった。

「反対です」

「それは危険です」

制止の声を上げた二人は、顔を向け合った。ほんの僅かに面白そ

うな顔になった一条大佐は、相手に先に話すように促した。

カナンシユ英国海軍サブルテナントは、日本人ばかりの比叡艦橋で、臆す事無くキングスイングリツシユで喋り始めた。

英国海軍から派遣された連絡士官であるカナンシユは、艦隊司令官と参謀長の掛け合いをどこか馬鹿馬鹿しそうな目で見ていた。

自国の諜報部を侮辱されていると感じていたからだ。

カナンシユは連絡士官としてこの司令部に配属されてからずっと、司令部人員に馴染めないものを感じていた。

「現在、我が戦隊は、ビーティー中将指揮の巡洋戦艦部隊主力と敵艦隊を挟んで砲撃戦を行なっております」

カナンシユは第三特務艦隊をフリートではなくスコードロンと言った。

当初、英国海軍は、第三特務艦隊を、金剛型巡洋戦艦四隻の第四巡洋戦艦戦隊とその他の軽快艦艇戦隊とに分離して英国海軍本国艦隊に組み入れようとしていた。

しかし、日本海軍は、ガリポリなどでの英国軍上層部の稚拙な戦争指導に危機感をいだいており、あくまでも第三特務艦隊はビーティー中将の指揮を受ける独立艦隊として分派を拒んでいた。

英国海軍本国艦隊に正式に組み入れられて、勝手な指導のもとで損害を被りなくなかったのだ。

もちろん、多くの英国海軍軍人はこのような曖昧な措置に反発していた。

指揮系統の単純化は組織編成の基本であるというのが彼らの理屈だった。

だが、遣欧艦隊の将兵たちは、論理的な英国海軍士官たちの言葉の影に、人種差別的な、決して論理や理屈だけでは説明できない暗い感情を感じ取っていた。

おかしなことに、第三特務艦隊の権限の怪しいところのある上級指揮官となったビーティー中将自身は、第三特務艦隊に比較的好意

的だった。

ビーティー中将は、まだ20代のシナ艦隊若手士官であった頃に義和団の乱に接している。その時の何らかの経験によるものかもしれない。

しかし、多くの英国海軍軍人、いや英国人はいまだ日本や極東アジアを未開の蛮人と考えているものも多いうだった。

下級ながら貴族の生まれで、これまで欧州を離れたことのないカナンシユも、典型的な欧州人らしく多少の人種差別的意識を持っているようだった。

それにもかかわらず、英国にとって、強大な戦力を備えつつある日本国軍は、無視できない同盟国軍になりつつあった。

本来であれば、その日本艦隊の旗艦司令部への連絡士官として着任しているのが、他国海軍であれば、中、少尉にすぎないサブルテナントのカナンシユ唯一人というのが不自然だった。

だから、連絡士官として、カナンシユが抱える仕事量は一人のサブルテナントに与えられるものとしては多かった。

このような矛盾した立場や、日本人への無意識化の反発などが手伝って、カナンシユは更に周囲と相容れない壁のようなものを創り上げてしまっていた。

日本海軍の名称である艦隊、フリートではなく、英国海軍が与えようとした、戦隊、スコードロンと表現したのも、その表れなのかもしれない。

一条大佐は、戦隊との表現にも眉ひとつ動かさなかった。英語がさほど得意ではない小杉少将は、次にカナンシユが何を言うかに集中していた些細な単語は聞き逃していた。

艦橋の隅に控える作戦参謀の高野少佐は、僅かに眉をしかめたが、小杉少将に正体していたカナンシユはそれに気が付かなかった。

「もしここで我が戦隊が最大戦速での航行を行えば、砲撃戦の継続は困難か、命中率の著しい低下をもたらすでしょう。その間に本隊が被害を被る可能性があります。第一、ビーティー中将からの命令がないではありませんか」

「中将閣下からは、事前に独自の判断で裁量と思われる行動を為せと命じられている。閣下からの命令がないことは理由にならん」

カナンシユが思わず鼻白むほどびしゃりと小杉少将は遮った。

果断な判断をくだす一方で、小杉少将は政治的とも言える発言を嫌っていた。

あるいはカナンシユの人種差別主義者的な傾向に内心面白く思っていないのかもしれない。

それとも英国海軍への不信をカナンシユ個人にぶつけているのか。

小杉少将は鋭い視線を保ったまま、次に一条大佐に顔を向けた。

司令部内部の不協和音に懸念を抱きながらも、そのような感情を表に出さないまま、一条大佐がいった。

「現在、敵艦隊との距離が不明です」

それまで押し黙っていた高野少佐が、参謀長を補足するように尋ねた。

「つまり迂回挟撃のための時間がないかもしれないということですか」

「その通りです。もしも我々の予想よりも敵主力艦隊が至近にあった場合、我が艦隊は、有力な敵主力の前に無防備な側背を晒すことになります」

小杉少将は、忌々しそうな表情で頷いた。

敵単縦陣の前方を塞ぐ形で単縦陣を航行させる丁字戦法は、自艦隊の火力を最大限発揮することのできる有力な陣法ではあったが、もしもこの時反対側から敵艦隊が出現すれば、丁字を描いていた単縦陣は挟撃され、最後は分断されて各個撃破されてしまうだろう。

「結局このまま同行砲戦を続けるしかない、ということか」

「自分も参謀長に同意します。すぐにトマス少将の戦隊も戦闘に入ることができるでしょう。このまま同行砲戦で敵偵察艦隊主力を叩ききるまでビーティー中将主力が耐久するのを期待すしかありません」

高野少佐は言外に自分たちだけが危険を背負うことはないと言わせていた。

小杉少将に伝えるためか、高野少佐は日本語で言ったが、カナンシユもその微妙な意図は感じ取ったようだ。

小杉少将や高野少佐を無視するようにそっぽを向いたカナンシユを横目で見ながら、一条大佐は思わずため息を付きそうになって慌ててそれを隠し通した。

第三特務艦隊は、沿岸防衛型として歴史が始まった日本海軍にとって、実質上初めての主力艦の対外派遣だというのに、すでにその司令部内には不協和音で満ちていた。

外見や喋り方とは全く違って、常識的な人間を自称する一条大佐にとつて、これは困惑すべき事態だった。

今は、司令部要員同士の個人間の問題で住んでいるが、いずれはこれが外交的な問題となる可能性も否定出来なかった。

相変わらず、周囲からは無表情に見える顔で、一条大佐は視線を敵艦隊の彼方にあるビーティー中将本隊に向けた。

旗艦ライオンには連絡士官として、日本海軍から栗田中尉が乗り組んでいるはずだ。

彼はこのような苦勞を背負い込んでいるのだろうか。

そうであれば若い彼がその重圧で押しつぶされなければよいが、そう考えていた。

同航砲撃戦は続いていた。

栗田中尉は再び轟音を聞いていた。

やはり旗艦ライオンの後方からだった。

見張り員は音が聞こえるよりも早く視認しているはずだが、その報告は轟音が消えさってからとなった。

今度はインディファティガブルよりもライオンに近い位置の艦に被害があつたのだろう。

栗田中尉の推測は、見張り員からの報告によって肯定された。

撃沈されたのはクイーン・メリーだった。弾薬庫に直撃弾を食らつたのか、轟沈のようだった。

クイーン・メリーよりも後方を航行する艦は、その残骸を回避するために転舵していた。

その結果一時的に砲撃は中断し、静寂が支配していた。

司令部には重苦しい雰囲気か漂っていた。表情を変えずにいるのはビーティー中将と栗田中尉だけだった。

どこか自嘲的とも思える、この場には似つかわしくない声音が響いたのはその時だった。

「今日の我が艦隊血塗れじゃないか、何かがおかしいんじゃないかね」

まるで他人事のような台詞だった。啞然として司令部要員はその声の持ち主、ビーティー中将を見つめた。

中将は、周囲からの視線に臆することなく、僅かな笑みさえ浮かべながら、チャットフィールド艦長個人に言うかのように顔を向けていた。

チャットフィールド大佐と栗田中尉は、他の司令部要員と違って啞然とした表情を浮かべたりはしなかった。

ビーティー中将の態度が演技であると思破っていたからだ。もちろん二人共その演技を邪魔するようなことはしなかった。

ただし、栗田中尉はなぜか一人足を踏み出した。

それが何故であつたのか、栗田中尉は最後まで思い出せなかった。

あるいは彼も演技をしていたからかもしれない。

ビーティー中将とは違って、ずっと前からだった。だから栗田中尉は変わらぬ無表情でこう告げていた。

「だとすれば閣下、我が艦隊の行動はひとつしかないかと思われませんが」

ここから逃げ出すつもりなのか、そうとも思ったのか、あるいは連絡士官にすぎない栗田中尉が発言するのを諫めようとしたのか、色をなして詰め寄ろうとした他の司令部要員をビーティー中将は手で制した。

再び轟音が響いた。ただし今度は敵艦隊の方角からだった。

見張り員が敵二番艦、おそらくデアフリンガーが沈没しつつあると報告した。

英艦隊か、日本艦隊か、どちらによる戦火かはわからなかった。

見張り員からの報告を聞くとビーティー中将は笑みを強くしていた。

「よろしい、クリタ君もそういつている。日本人にできて、英国人に出来ぬはずはないな」

次にビーティー中将が何を言うつもりなのか、完全に把握している栗田中尉は深々と頷いた。

ビーティー中将は、チャットフィールド大佐に向き直るといった。「チャットフィールド君、今日はどうも我が艦隊の命中率が優れないようだ。左舷二点に転舵して距離を詰めたまえ」

だが、その命令が実行されることはなかった。チャットフィールド大佐が復唱するよりもはやく伝令からの声が響いたからだ。

前方に偵察に出ている巡洋艦戦隊から電信が入っていた。伝令はそのまま、電信の内容を読み上げた。

第二軽巡洋艦戦隊を指揮するグットイナフ代将の旗艦サウザンプトンが、別動の敵艦隊を発見したらしい。

敵艦隊の規模や編成は不明だが、戦艦クラスが含まれているのは確実らしい。

グットイナフ代将は、敵弾を交わしながら、詳細を掴むべく敵艦隊に接近するつもりだった。

電信の二報目が入った頃から、彼方から発砲音が聞こえてくるようになった。どうやら敵艦隊は予想よりも近くにいららしい。

また、次々と入電するグットイナフ代将からの報告によれば、十隻以上の弩級戦艦や数隻の旧式戦艦が含まれるとのことだった。

再び押し黙っていたビーティー中将は、敵艦隊が主力であることを確信したらしい。

打って変わって険しい表情になると、司令部要員に向き直った。

「今度はこちらが本国艦隊に敵を誘引する。180度回頭し、北上する。以上を各戦隊に連絡せよ」

通信参謀が頷くと復唱しようとした。栗田中尉は僅かに首をかしげながらビーティー中将に言った。

「意見具申。閣下、通信は連続して行うべきではないでしょうか」

復唱を遮られた形になった通信参謀は、嫌そうな顔で栗田中尉を見た。

ただし、意見そのものは最もだとも思ったのか、遮ったりはしなかった。

むしろ周囲の、他の司令部要員の方が栗田中尉を睨みつけていた。「十年前の日露戦争における海戦において、日露両艦隊が通信妨害を行った戦訓があります。それに日本人は英語が得意なことでは知られていません」

もちろん、英語がどうこうというのは大した意味を持たなかった。どのみちモールス電信では、言語はさして影響しない。

それよりも、情報の伝達が不十分になってしまふことを恐れていた。

英国艦隊は、巡洋艦艦隊主力と第五巡洋艦戦隊との交信に支障をきたし、緻密な艦隊行動を取れなかったように、電信の性能に不安があった。

もしも、また電信を受信しそこねれば、今度は有力な敵艦隊直前ではばらばらな行動をとってしまうかもしれない。

ビーティー中将は、栗田中尉の意見を取り入れるつもりだった。

「命令を訂正する。180度回答し北上、各隊我に続け。以上を継続発信」

通信参謀はこんどこそ復唱すると手早く文面を書き込み伝令に渡した。

「クリタ君」

艦橋の窓から敵主力がいるであろう方向を見ていたビーティー中将は、ふと振り返ると栗田中尉に向き直った。

「只今の具申は見事だった。いずれまた海の上で君を見るときがあつても、君がそのことを忘れずにいることを願う」

栗田中尉は戸惑いながら、答えた。あれは戦訓から導きだされたものだった。

日露戦争において英国は観戦武官を派遣していたが、通信妨害のことまで戦訓としていたのかはわからなかった。

だが、よく考えると、連絡士官としては越権行為であつたかもしれない。

落ち着いて考えれば、あれが連絡の徹底を欠いていた英国艦隊司令部への批判と取られても不思議ではなかった。

しかし、ビーティー中将はほんの僅かニヤリと笑みを浮かべた。

中将の目は、そうではないといていた。

今の電信に関する具申ではないとすればなんなのか。

怪訝そうな顔の栗田中尉に、ビーティー中将は、小声で言った。

おそらく砲声や命令、復唱の騒音で栗田中尉以外の誰にも聞き取れなかったはずだ

「誰もがシェークスピアを上手く演じられるというわけではないしな」

栗田中尉は一瞬目を見開いた。

意見具申とは、電信のことではなかった。

敵艦隊への接近命令、というよりもその時の中将の演技の事のようだった。

ビーティー中将は、一瞬だけ栗田中尉に照れくさそうな顔を向けると、ふたたび険しい顔になった。

この表情も演技なのかもしれない。そう思いながらも、栗田中尉も同じような表情を創り上げた。

あるいは指揮官の孤独を、はるか上位にあるはずの中将と共有したような気がしていた。

もう少しばかり、この創り上げられた、あるいは創り上げられようとしている英雄という演技を続けてみるのも悪くはないのかもしれない。

そう考えていた。

1919シベリア遡行1

奇妙な機体だった。

アムール川を遡行する不知火の艦橋から、伊原中尉はその飛行機を見上げていた。

翼面に日の丸を掲げているから日本軍機であることは間違いなかったが、伊原中尉の記憶にはない機体だった。

シベリア派遣軍には海軍だけではなく、陸軍も若干の航空機を投入しているらしい。

ハバロフスクまで同行してきた高崎の搭載機ではなさそうだった。おそらくあれは陸軍機なのだろう。

ただし、陸軍機であれ、海軍機であれ、かなりの無茶をして運用されているはずだ。

砲術科士官の伊原中尉は、飛行機のことにはよくわからなかったが、航続距離が大して長くはないことは知っている。

滞空が可能なのは長いものでも6時間程度と聞いている。

巡航速度は毎時百キロ程度というから、往路復路を単純に考えて航続距離は最大でも300キロ程度になる。

進出距離が三時間で300キロというと大した距離に思える。

しかし、不知火は、日本軍が拠点を置くハバロフスクから500キロ近く離れたアムール川流域を航行中だった。

おそらく上空の航空機は、シベリア鉄道を使って燃料や支援部隊を進出させて運用しているのだろう。

だが、これは航空機を含む資材や物資、それに運用する人員を急速に消耗させる行為だった。

日本軍をふくむシベリア派遣軍が抑えているのはシベリア鉄道沿

いに点在する大都市のみでしかない。

都市部を離れるとボルシェビキ派パルチザンが徘徊する危険な荒野が広がっている。

おそらくシベリア鉄道近辺に航空機の滑走路を含む支援部隊が展開しているのだろうが、警戒、防衛のための部隊も随伴しているのではないのか。

あるいは、その戦闘部隊こそが主力であり、その支援部隊である航空機のみが不知火の支援に赴いたのかもしれない。

いずれにせよ、この作戦が集結した頃には、無理な運用を強いた航空機材は、消耗して戦力外となってしまうのではないのか。逆に考えれば、そこまで無理をして戦力を整える価値があるほどの何かがこの作戦にあるということなのかもしれない。

不知火が航行する流域のすぐ近くの陸地に、やけに目立つ印が付けられた通信筒を落として去っていく航空機を見守りながら、伊原中尉はそう考えていた。

すぐに不知火の艇長である大石大尉が減速と通信筒を回収するための搭載艇の発信を命じた。

伊原中尉は、大石大尉に頷くと艦橋を離れて、搭載艇に乗り込むため艦尾に向かった。

吹き曝しの艦橋にいるよりも、通信筒を回収するために体を動かしていたほうが温まるのではないのか、そう考えていた。

春を迎えるというのに、それだけアムール川流域は冷え込んでいた。

すでに搭載艇を下ろそうとしている不知火のすぐ脇を、僚艦の陽炎が追い抜いていった。

その向こうには、無限に広がるような荒野と、彼方の森林地帯が見えた。

伊原中尉は、その光景を見て、不思議なことに、欧州では全く感じなかった、世界の広がりを感じていた。

見える景色そのものは欧州で見たものときほど変わらないのに、そう感じるのは、ここまで航行してきた流域を見てきたからだろう。実際、山に囲まれた東北の小都市で生まれ育った伊原中尉には、今不知火が航行している流域は想像もできない場所だった。

外洋航行能力に乏しい不知火と陽炎は、五千トン級運送艦の高崎に牽引されてオホーツク海に隣接するニコライエフスクに移動した。本来の計画では、ニコライエフスクを拠点としてシベリア派遣軍を支援することになっていた。

しかし、ニコライエフスクに到着した時点で、その計画は大きく拡大されることとなった。

ニコライエフスクでの短時間の休息と補給を行ったこの部隊は、アムール川を遡行してこの地方随一の都市であるハバロフスクまで進出することとなった。

ウラジオストクから、シベリア鉄道を最大限利用して進出したシベリア派遣軍の行動が意外なほど早く、すでに一部の部隊によってハバロフスクが拠点として運用され始めていたからだった。

鈍足の高崎に従って組まれた航行計画は、四日間ほどの長大なものだった。

オホーツク海沿岸にあるといってもよいニコライエフスクからハバロフスクまでは、一千キロちかくもあつたのだ。

その間は、海図や同行するロシア遠征軍所属でシベリア出身の士官がなければ、たちまち支流に迷い込みそうになる河川航行が続いた。

しかし、排水量400トンに満たない東雲型駆逐艦を原型とする不知火はもちろん、五千トン級の高崎も航行に不安のあるような、急流や浅瀬といった危険な流域は、全く存在しなかった。

それだけアムール川は広大だった。

航行の間も、僅かな都市部を除くと景色はほとんど原野が占めていた。

それは、単調な光景であるにもかかわらず、この部隊に所属する多くの日本人達を圧倒し、大陸の広大さを感じさせずにはいられなかった。

一千キロといえば、東京から鹿児島間の距離に匹敵する。

その長大な距離がほとんど全て荒野で、そして大海ではなく内陸部の河川に過ぎないからだ。

この流域を同時期に航行するのは不知火や高崎だけではなかった。ハバロフスクまで遡行する間も、何隻かの貨物船とすれ違っていた。

この時期は、氷結のため冬の間途絶えていた、河川を利用した水運が再開される時期に当たるのだという。

勿論、日本でも利根川や信濃川のような河川では、水運の利用が行われているが、アムール川の水運はそれらとは規模が全く異なっていた。

高崎と同程度の大型貨物船すらさほど珍しい存在ではないらしい。さすがにハバロフスクを超えると大型貨物船は数を減らしていったが、おそらく大型船が航行できなくなると言うよりも、それだけの大型艦を航行させるほど大容量で利潤のある積荷を必要とする人口密集地が途絶えてしまうからではないのか。

あるいは、これより先は支那とロシアとの国境線にあたるからかもしれない。

二十年ほど前の義和団事件の頃にも、当時の清国とロシア帝国との間で軍事衝突があった。

その時はこの流域を利用して軍艦が遡行し、兵員の急速展開をおこなったらしい。

だから、この先は生活や流通のための河川ではなく、国境線という意味づけのほうが強くなるのではないのか。

そう言えば、見える風景は殆ど変わらないのにハバロフスクを超えてしばらくしてから、緊張感が高まっていったような気がする。

これも日本では考えられないことだった。

昔の幕藩体制の頃は、河川を国境とすることもあったはずだが、今の日本国では、河を越えた、視認できる距離に仮想敵国が存在するなど考えられない。

そんな緊張した流域を砲艦のように重装備の不知火と陽炎は航行していった。

日露戦争目前に駆逐艦として就役した不知火が、特務艦籍に編入されたのは欧州での大戦の戦訓を受けてのことだった。

この大戦において、日本軍は少なからぬ陸海軍戦力を欧州に投入していた。

だが、それは決して日本政府が欧州での戦闘参加に熱心であったというわけではなかった。

大戦勃発直後に日本国は英国に習ってドイツを始めとする中央同盟に宣戦を布告した。

その結果、日本国は青島を始めとする太平洋におけるドイツ側拠点の制圧を行うこととなった。

この作戦は概ね短期間で成功裏に終わっていた。

補給線も短く、強大な戦力を誇る日本軍に対して、十分な練度と

士気を維持していたとはいえ、寡兵で補給に乏しいドイツ側が長時間抗し得るはずもなかったからだ。

これと同時に、欧州の戦禍の及ばぬ極東に位置する日本国に対して、兵器などの物資の注文が殺到することとなった。

当時、すでに日本国は工業化の端緒が開いたところといえたから、小銃や小口径の支援火砲といった基本的な兵器類や弾薬の生産能力に不安はなかった。

そのため、英国やフランスは日本に対して、安価にライセンスの供与など行い、自国のみでは供給量に不安のある小火器等を生産させることとなった。

それどころか、技術者を派遣しての技術指導まで盛んに行なっており、重火器やエンジンの生産まで日本に担当させるようになっていた。

当初、フランスなどは、巨大な潜在国力と技術力を有すると考えられていたアメリカ合衆国の参戦を期待していたらしい。

しかし、モンロー主義に凝り固まった合衆国議会が参戦を拒み続けた結果、この方針は否定されていた。

そもそも、諸外国への支援、干渉であるドル外交を行ったタフト大統領の政策が批判されていた当時、立法府のみならず行政府も、欧州への干渉は消極的だった。

だから、アメリカの代替として日本国が選択されることとなった。連合国の一大工場として期待された日本国では、成長を始めていた財閥系を始めとした企業群によって次々と工場が建設され、これまで海外移民によって諸外国へと向かっていた余剰労働力を貪欲に吸収していた。

生産開始当初は品質が安定せず、散々な評価だったが、英仏からの技術指導が軌道に乗り始めると、次第に性能の安定した良質なも

のが生産されるようになってきていた。

こうして製造された火器や消耗品は、同じく大戦を契機に拡張された造船所で、次々と建造される貨物船に載せられて、欧州へと送られていった。

戦禍の及ばぬ極東で安定して生産され、次々と送られる兵器類は、中央同盟国側に対して連合国側の大きなアドバンテージとなっていた。

しかし、明らかにこの兵器生産は、日本国側に有利であった。

この利潤のため日本国内は未曾有の好景気となったが、その一方で政治的にイギリスやフランスに弱みを握られたのも事実だった。

その結果が、両国による欧州への参戦要求だった。

欧州で諸国が血を流しているための好景気といっても良いのだから、日本もその利息を払えというわけだった。

そして、参戦を断ればライセンスや技術供与の引き上げもありえたのだから、兵器類の輸出に経済を依存させていた日本政府に選択の余地は残されていなかったともいえた。

このような事情から、半ば渋々と日本国軍による欧州派兵が実施されることとなった。

ガリポリ戦への増援という形で始まった日本陸海軍による欧州派兵は、国軍から選抜された精鋭達に大きな損害を与える一方で、日露戦争後途絶えていた貴重な近代戦における戦訓を得ることも出来た。

それは、国家総力戦という概念であったり、日露戦争でその端緒を見せていた機関銃の脅威、それに新兵器である航空機の価値であった。

そして、そのような戦訓の1つに、ガリポリ戦の様相から導きだされた、専用の揚陸機材開発の必要性があった。

この当時、揚陸戦を行う場合、小型のカッター多数を内火艇やタグボートで牽引するという方法で兵員の上陸を行なっていた。

だが、これは非効率な上、危険なやり方だった。

内火艇の貧弱な発動機では、多数のカッターを曳航する場合、速力が極端に遅くなるし、タグボートは出力が大きくとも図体も大きく、無防備だから被弾には弱かった。

何よりも、結局は沿岸で兵員を詰め込んだカッターは、動力艇から切り離されることとなる。

そこから海岸まで無防備なカッターがのろのろと人力で自走することとなるのだ。

これでは防御側から撃つてくれと言わんばかりの危険な態勢といえた。

ガリポリ戦の場合は、これでもさほどの問題は生じなかったらしい。

様々な事情から、防御側のオスマン帝国軍が大した沿岸防御陣地を構築し得なかったからだ。

だが、第二次上陸戦では、すでに英国軍が、船首から道板を展開して上陸を容易にした自走艇を投入していた。

また、実現こそしなかったが、英国はバルト海での上陸作戦を一時期計画していたらしい。

つい最近になって、どうもこの作戦はフィッシャー提督の勇み足であつたらしいことがわかってきたが、それでも上陸戦のため機材開発なども実施されていたという噂だった。

それに、英国海軍では艇の代わりに旧式巡洋艦を用いた大型揚陸艦とでも言うべき艦の改装計画があつたらしい。

実際に戦場に投入されたのは、貨物船を改装した船だったが、上手く行けば一千名単位の兵員を迅速に揚陸させることも可能だった。

そのような計画の存在を知った日本海軍でも、類似の艦艇を求める声があがっていた。

しかし、大きな戦力を持つ英国海軍とは違って、日本海軍には、旧式巡洋艦といえども有力な機材であり、揚陸艦という未だ胡乱気な存在に改装するような余裕はなかった。

大型艦の代わりとして、選ばれたのは、この当時戦力価値を急速に減じていた三等駆逐艦に類別される小型駆逐艦群だった。

雷型を嚆矢とする三等駆逐艦は、日露戦争を見越して、あるいはそれを契機として大量に建造されたクラスだった。

これらの黎明期の駆逐艦は当時実用化され始めていた魚雷を用いて、主に夜襲で敵主力艦を襲撃する艦艇として就役した。

日露戦争においてはこれら各級の小型駆逐艦は、日本海海戦などで漸減邀撃作戦で大きな戦果を上げることとなった。

なかには、敵司令官ごと敵艦艇を拿捕するものまであった。

しかし、これらの小型駆逐艦は、日露戦争後の日本海軍の基本戦略に合致していなかった。

ロシア帝国を破った日本海軍は、本格的な外洋海軍として成長しようとしていたのだが、船型が過小な小型駆逐艦群は、十分な外洋航行力を発揮することが出来なかったのだ。

だから、日露戦争後の日本海軍の駆逐艦は大型で航洋力を有するものが建造され始めていた。

小型駆逐艦に止めを差したのは、欧州大戦の勃発、それに伴う地中海への進出だった。

これまで日露戦争後に建造していた大型化した駆逐艦でさえ、本格的な護衛作戦などに従事するには航洋力が不足していたからだ。

小型駆逐艦にいたっては何をいわんやだった。

それに、神風型以前の小型駆逐艦は、船型だけではなく、技術的に見ても時代遅れの存在となりつつあった。

兵装の面では、さほどの進化があったわけではない。

備砲や雷装の大口径化や増数はあったが、これは船型の拡大に伴うものといってもよかった。

それよりも技術の革新は機関部で起こっていた。

すべての三等駆逐艦は、ボイラーで発生させた蒸気をシリンダー内で膨張させてピストンの往復動運動を発生させる蒸気レシプロ機関を主機に選択していた。

これに対して、駆逐艦のみならず、最近建造された艦艇の多くは、蒸気を回転翼に当ててタービンを回転させる蒸気タービン方式になっていた。

前世紀末に出現した蒸気タービンは、それまで多用されていた蒸気レシプロ機関に対して効率の点で極めて優れていた。

日露戦争前後には、すでに英国海軍はすべての艦艇を蒸気タービンとするよう決定するほどだった。

これは英国海軍の後を追う日本海軍も一緒だった。

予算や、技術力の低さに伴う生産性の低さから蒸気レシプロ機関を採用せざるを得なかった艦艇もあったが、基本的にはタービン機関の採用は前提条件となっていたといっても良かった。

だから従来型の小型駆逐艦の多くは就役後二十年を待たずして陳腐化していたのだった。

小型駆逐艦群が未だ駆逐艦籍にあるのは、大型駆逐艦の数が未だ出揃わないためではないか、最近では乗組員たちはそう自嘲しているらしい。

実際、欧州大戦が集結した今、続々と地中海で活躍した大型駆逐艦が帰還しているなかで、小型駆逐艦は、近いうちに老朽化してい

る艦から駆逐艦籍を離れ、掃海艇などの特務艦に類別する計画があるという噂だった。

もしも、このような状態で三等駆逐艦が余剰となっていなければ、不知火と陽炎の揚陸艦への改装計画は持ち上がらなかったのではな
いか。

もっとも、英国の道板を付けた揚陸艦と不知火の改装では内容が大きく変わっていた。

英国海軍の揚陸艦が、直接海岸や、棧橋に着岸して道板を展開して兵員を上陸させるのに対して、不知火には道板のような揚陸用の機材は搭載されていなかった。

その代わりに、単装二基が搭載されていた雷装を撤去した後部甲板には、カッターが増載されていた。

つまり、兵員の上陸手段は、不知火自身ではなく、搭載するカッターとなる。

これでは、従来の海岸付近で多数のカッターを下ろして、内火艇で牽引した従来のやり方と変わらないようにも思える。

不知火の特徴は、カッターを牽引するのが内火艇ではなく、母艦である不知火自身が務めることができるという点にあるかもしれない
かった。

それに、これまでの上陸戦では大型貨客船などで大量の兵員とカッターを輸送していたが、これらの船は図体が大きいから、的となるのを恐れて沿岸砲の射程には容易に近づけなかったし、第一、浅瀬となる上陸岸近くまで航行すれば座礁する危険もあった。

しかし、不知火の場合、原型が400t程度の小型駆逐艦だから沿岸までかなり近づけるはずだった。

つまり、不知火は、上陸する兵員を輸送する貨客船とカッターを牽引するタグボートの双方の任務をこなす事が可能ということだった。

それに、対艦用の雷装こそ撤去されているが、対艦対地どちらにも使用できる備砲は原型からそのまま残されているから、最も危険となる兵員の上陸時に、これを援護する火力を提供することさえ可能だった。

問題があるとすれば、乗り込める兵員数に限りがあることだった。原型が小型駆逐艦なのだから当然なのだが、大型の貨客船を改装した英国艦が千名単位の兵員を輸送するのに対して、不知火は缶室を半減して兵員室に当てているにも関わらず、一個小隊弱の兵員を輸送するので手一杯だった。

最近では海軍陸戦隊も、陸軍に習って機関銃や迫撃砲などを装備するようになっていたから、それら重量機材を含めれば、一隻で輸送できるのは実際には半個小隊というところだった。

本艦の改装時からそれはわかっていたから、最小限の編成単位である一個小隊を輸送するために、不知火と陽炎の二隻が改装されることとなった。

だが、これはあまりにも過小な戦力だった。

揚陸艦搭載火砲の援護があるとしても、一個小隊程度の戦力では本格的な上陸戦など到底不可能だろう。

ただし、大型貨客船で兵員を輸送するのと比べると、不知火と陽炎が兵員の上陸に要する時間は極めて短かった。

実戦で不知火と陽炎を使用するとすれば、上陸戦本隊ではなく、本隊上陸前の海岸堡の確保や、沿岸を長駆しての迂回上陸、あるいは敵海岸堡への逆上陸作戦となるのではないのか。

第一、不知火と陽炎の二隻は本格的な揚陸艦ではなく、急増の改装艦に過ぎない。

海軍がこれから先、本格的な揚陸艦を建造するとすれば、不知火と陽炎の実績を調査してからとなるだろう。

だから、不知火も陽炎も駆逐艦籍を離れた後、曖昧な特務艇籍に転籍されたのだろう。

だが、軍艦籍にない改装の特務艇とはいえ、海軍が不知火にける期待は決して小さいものではないらしい。

不知火は急速揚陸艦としてだけでなく、現在のように代用の河川砲艦としての任務もこなすことができる多様性をもっていた。

少数とはいえ、陸戦隊を輸送することもできることを考えれば、平時の警察任務に用いるのは、純粋な砲艦よりも適しているかもしれない。

それに、現在は兵員の輸送に用いる搭載艇は従来型の人力のカッターだったが、将来的には、海軍の支援のもと陸軍が開発している小型の発動機搭載艇を搭載する計画もあった。

実は、欧州大戦の戦訓を受けての揚陸戦機材の開発は、日本海軍よりも、陸軍の方が熱心だった。

日本国は大陸に多大な権益を有していたが、その一方で兵力の上陸地点や根拠地となる兵力の事前展開地としては遼東半島の関東州のみであったからだ。

日露戦争で得た権益であったはずの朝鮮半島に駐留する朝鮮軍は、すでにその編成を解かれていた。

一時期は朝鮮半島の併合も計画されていたというが、十年ほど前の伊藤博文公暗殺未遂事件以後はそのような声も立ち消えていた。伊藤博文公自身が半島の併合には否定的だったが、暗殺未遂によって公はさらにその思いを強くしたらしい。

あるいは、当時の日本国が飲み込むには、朝鮮は中途半端に過大であったのかもしれない。

併合に反対する民衆の存在があるかぎり、半島の植民地化には多大な弊害が生じるのではないのか、そういう声が国内に広がってい

った。

それでも海外の帝国主義を見習った膨張主義者は、併合に執心だっただけで、それも今次大戦勃発後の急速なロシア帝国との関係改善によって立ち消えしていた。

そもそも、朝鮮半島や満州を日本国が、得ようと、あるいは中立化しようとしていたのは、強大なロシア帝国の南下方針から、帝国本土を守るための縦深地として必要であったからだ。

だから、そのロシア帝国との関係が良好であれば、無理をして半島を維持し続ける必要性も薄くなっていたのだ。

それに、欧州への本格的派兵を決意した日本陸軍に、二個師団を基幹戦力とする朝鮮軍を遊ばせておくような余裕は、なくなっていたのだ。

財政界にしても半島への融資はその見返りが少ないという結論が出ていた。

朝鮮軍は、麾下の一個師団を関東州防衛強化に送った後に解散し、その司令部や、残りの一個師団は遣欧軍に転用されていた。

そして日本政府は、朝鮮半島を治める大韓帝国はすでに一定の国力が存在するとして日韓協定を一方的に破棄し、半ば放置していた。

だから、いざ大陸に事変が起こり軍事介入しようとした場合、それが根拠地からの安全な陸路進出ではなく、敵前上陸となる可能性は少なくなかったのだ。

ただし、これは日本国が大陸への介入に積極的というわけではなかった。

日本国の方針として、朝鮮半島や大陸への膨張には、すでに消去的になっていったからだ。

すでに日本国は工業化、貿易化による富国路線を選択しており、市場としてはともかく、海外植民地など必要としてはいなかったか

らだ。

しかし、ロシア帝国の崩壊と、ボルシェビキによる政権成立は、そのような日本国の国家方針を大きく揺るがしかねない事態を招いていた。

せつかく、今次大戦を切っ掛けに急速に改善の方向に向かっていたロシアとの関係が、また振り出しに戻ってしまうかもしれないからだ。

日本軍が、大陸や半島に展開していた戦力の大部分を撤収させていたのは、日清、日露戦争期に過剰に拡大していた兵力の適正化や、遣欧軍派遣のための部隊を捻出させるためではあったが、それを可能としたのは、ロシア南下の脅威度が低下したためだった。

だが、ロシア人との関係が悪化すれば、日本陸軍は再び大陸へと大兵力を展開しなくてはならないのではないのか。

そのような声が陸軍参謀本部を中心にあがるようになっていた。

兵力の再展開とはいってもことはそう単純ではなかった。

欧洲大戦の戦闘からすれば、陸軍師団のさらなる重装備化は必至だったからだ。

日露戦争の教訓から、機関銃や迫撃砲、それに野砲などの増強を行なっていた日本陸軍ではあったが、欧州での戦闘結果から、兵員の損耗を抑えるためにさらなる重装備が必要という結論が出ていた。すでに重工業化が始まっていた日本国内では労働力の需要が逼迫しており、それを反映して、日本軍では人間の命の値段が著しく上昇していた。

軽々しく兵の命を損なうためには行かない以上は、敵軍にまさる砲火を叩きつけるしか無かった。

さらに、師団規模の部隊でもって広大な満州で機動戦を行わせる

ためには、広大な偵察範囲を誇る飛行機の運用はもはや不可欠になつているといえた。

ただし、黎明期とも言える飛行機は、未だ繊細で、それを操り、整備する人間は選抜され、十分な教育を受けたプロフェッショナルが必要だった。

これら重装備化をすすめる師団を複数、新たに本土を遠く離れた大陸に展開させるには膨大な予算が必要となるだろう。

また、強力な兵力を展開させるには遼東半島に押し込まれた関東州は狭すぎる。

再び朝鮮半島に平時から展開するのは外交上難しかったから、満州鉄道沿いの土地に展開させるしかない。

下手をすれば、縦深地でしかない満州の地を安定化させるために、せっかく抜けだした大陸への介入に再びのめり込まなければならぬいかもしれなかった。

そのような事態になれば、陸軍の近代化、重装備化も画餅に終わり、そのための予算は、大陸での行動で使い果たしてしまうのではないのか。

当時の日本政府はそのような悪夢に怯えていた。

そして、広大なロシアの地をボルシェビキが完全に掌握した場合、その悪夢が現実のものとなる可能性は決して低いものではなかった。共産主義者が皇帝に取って代わったとしても、伝統的なロシアの南下政策がおさまるとは思えない。

軍事的、経済的にみても、ロシアが栄えるためには不凍港が必要不可欠だからだ。

むしろ、政治的な交渉が難しくなった分、ボルシェビキの方が強引な南下政策をとる可能性は高いのではないのか。

日本や英国のような立憲君主制とボルシェビキの共産体制ではイデオロギーがあまりにも違いすぎる。

政治的な妥協はありえても、日英と共産政権が同盟を結んだりすることは考えられない。

それがいつかはわからないが、ボルシェビキが安定した政権を確立したときは、イデオロギーの違いから両者は闘争するのではないのか。

そう考える政治家や財界関係者は決して少なくなかった。

だから、陸軍参謀本部や日本政府がシベリア派遣軍にかける期待は大きかった。

欧州に大兵力を派遣しながら、数少ない内地に残留していた部隊をやりくりして派遣軍を編成したのも、そのような悪夢を実現させないためだった。

チェコ軍団救出を目的としたシベリア出兵は、実質上の内政干渉戦争であると強く米国は反発していた。

だが、実のところ、米国が言うように、日本や英国が領土的野心を抱いているわけではなかった。

彼らの目的は、あくまでもロシア帝室を復興させて、共産主義政権を打倒することにあった。

しかし、日本国を始めとする、シベリア派兵を行った連合国は、共産政権を打倒するのは相当に難しいという結論を出さざるを得なかった。

シベリアという、ロシア帝国からすれば、田舎といっても良い地方であっても、予想以上にボルシェビキ、あるいは彼らに同調するパルチザンの活動が活発であったからだ。

それだけ強引なロシア皇帝の戦争指導は、破綻しかけていたということなのだろう。

民衆レベルの反発は強かったのだ。

だから、出兵から半年がたった今でも、シベリア派遣軍はかろうじてシベリア鉄道沿線を確認しているに過ぎなかった。

それに、シベリア派遣軍が支援すべき白系ロシア人勢力は、赤軍に対してそれなりに強力ではあったのだが、あまりにも雑多な集団に過ぎなかった。

ロシア帝国の復興という第一目標が困難であることに気がついた日本政府は、次善の策として白衛軍を中核とした傀儡政権の樹立を目論んでいる。

そのような噂も流れてきていたが、それも難しいのではないのか、シベリア派遣軍司令部ではそう考えているようだった。

白衛軍と一括りにしても、その内実は異なっている。

いまは赤軍という共通の敵に対して戦ってはいるが、状況が落ちて着けば分裂してしまうのではないのか。

勿論、そうなれば膨大な戦力を抱える赤軍の数の前に圧倒されてしまっただろう。

これを塞ぐためには白衛軍には何か、象徴的な、シンボルとなる存在が必要だった。

だが、それが何なのか、前線で戦う日本軍将兵にはわからなかった。

1919シベリア遊行2

通信筒の回収を終えて、報告のため不知火の艇長室に入った伊原中尉を迎えたのは、ケレンスキー大尉の伶俐な視線だった。

ハバロフスクで乗り込んできたロシア帝国軍のケレンスキー大尉は、ひどく取っ付きにくい印象を与える男だった。

乗艦してからわずか一日とはいえ、笑みどころか、表情の変化一つ見せようとはしなかった。

だが、その視線にたじろぐ様子すら見せずに、伊原中尉は不機嫌そうな顔で睨み返した。

両者が睨み合っていたは、僅かな瞬間だった。

ふと気がつくくとケレンスキー大尉は視線を逸らしていた。

階級章がなければまるで山賊のような伊原中尉の軍袴に不気味なものを感じ取ったのかもしれない。

だが、確かに伊原中尉の格好は、海軍軍人らしくは全くなかった。衣類は、艦隊勤務者の黒い第一種軍装や、夏季用の第二種軍装ではなく、欧州大戦への本格参戦を契機に制定された陸戦衣を艦内でも脱ごうとしなかった。

第三種軍装と早くも俗称されている陸戦衣は、海軍が欧州での戦闘で、通常の艦内勤務用の軍装のまま陸戦に挑んだ陸戦隊があまりにも陸地で目立ったことから慌てて制定されたものだった。

未だに海軍すべての部隊に行き渡るほど流通してはいないが、欧州での戦闘激化に伴い常設となった特別陸戦隊では、第三種軍装はすべての将兵に支給されていた。

横須賀の砲術学校を出てから、戦艦での砲術分隊に短期間所属していた以外は、ほとんど陸戦畑を歩いてきた、伊原中尉も、勿論第三種軍装は制定された当初から支給された一人だった。

と言うよりも、伊原中尉自身が、あまりにも陸地で目立つ艦内勤務用の軍装が、カーキ色の保護色を軍装とする陸軍に対して、陸戦隊の死傷率が、著しく高い原因の一つであると上層部に訴えかけた一人でもあったのだ。

ただし、伊原中尉が陸戦衣をずっと艦内でも着込んでいるのは別の理由があった。ここ何年かずっと第三種軍装ばかりを着込んでいたものだから、通常の軍装をどこへやった忘れてしまっていたのだ。一度、欧州で乗艦が撃沈されて私物をすべて喪失したときに軍衣も仕立て直したはずだったが、その後どうしたのかをよく覚えていなかった。

その後はずっと陸戦が続いたから、陸戦衣以外の軍装を着こむ機会などなかった。

おそらく行李の奥にしまいこまれているはずだったが、もしかしたらしばらく前に実家へ送った荷物の中に紛れたか、横須賀の士官宿舎に届けられていたのかもしれない。

どうせ内地に帰るまでは、陸戦衣で通しても問題はないだろう、当の伊原中尉はそう考えていた。

陸戦畑一筋という珍しい経歴から、中尉は陸戦のエキスパートして、ある意味で恐れられていたが、戦闘以外では妙にずぼらなところのある男だった。

最近では、陸戦隊だけではなく、艦隊勤務者でも地中海などの温暖な気候では第三種軍装を着こむのが流行っているらしいが、それらある種の伊達者は陸戦衣であっても紳士らしく、折り目がぴしりと決まっているアイロンの掛けられた状態を維持していた。

しかし、伊原中尉の場合は折れ目どころかシワだらけで、激しい陸戦の連続ですり切れたところを、ここばかりは独身の海軍士官らしい妙にうまい裁縫で、つきあてしてある場所も少なくなかった。

これでは、うるさ型ではなかったとしても、まともな海軍士官の

上官なら、叱責するところだろう。

だが、陸戦畑の伊原中尉には、艦隊勤務者とは違う雰囲気を与える所があった。

特に敵意をむき出しにするというわけではないのだが、どこか圧倒させるようなところがあったのだ。

それに、陸戦畑の伊原中尉が上級者と会う機会はさほど多くはなかったし、陸戦隊の上級者も、さほど格好は変わらなかった。

少なくとも、陸戦隊の中では、制服を綺麗に保つたり着こむことよりも、陸戦衣をすり切れるほど酷使するもののほうが尊敬される、海軍では奇妙な世界が広がっていた。

だから、折り目のはっきりしない陸戦衣を着込んでいても、伊原中尉があまりとやかく言われることは少なかった。

それに伊原中尉が異装なのは軍衣だけではなかった。

伊原中尉は、陸戦衣の上に、大型の拳銃を吊っていた。

マウザーというドイツのメーカーで生産されたその拳銃は、重量が一キログラムを超える重量級の拳銃だった。

陸海軍とも士官が所持する拳銃は、9ミリの回転式拳銃や、8ミリ南部式大型拳銃などが主に使用されていた。

これらの拳銃は、近距離での護身用というべき位置づけがなされていた。

士官が自ら銃を撃つよりも、指揮に専念させ、兵員が保有する火器の威力を発揮させたほうが部隊全体の戦力は向上するはずだからだった。

しかし、伊原中尉は、少人数の陸戦隊では、別の考えもありうるのではないかと考えていた。

陸戦隊が保有する火器の大半は、陸軍の歩兵部隊が使用する歩兵

銃よりも、取り回しのし易い反面射程の短い騎銃を使用していた。

また、陸戦隊は市街戦に投入される機会も多く、自然と交戦距離は短くなる傾向があった。

そのような短距離での交戦では、大口径の拳銃も小銃とさして変わらない威力を発揮することができるはずだ。

そう考えて伊原中尉は、ドイツ軍からの鹵獲品であるマウザー拳銃を使用していた。

ドイツ軍ではこの拳銃が広く使用されているのか、銃本体や弾薬の鹵獲品は多く、使用弾薬や消耗品の入手もさほど困難ではなかった。

護身用の拳銃よりも大型ではあるが、グリップは細長いから、小柄な日本人でも発砲体勢を安定させるのは難しくなかった。

南部式拳銃などよりもずっと大きいのに、グリップが細い理由は、グリップ内の弾倉を納めていないからだ。

と言うよりも使用弾薬が大きすぎてグリップ内に納められなかったのではないのか。

マウザー拳銃が使用する弾薬は、ボトルネックされた高初速の銃弾で、拳銃弾としては威力は格段に大きかった。

初速が速いから、近距離では弾道は良く安定することになる。

だから、グリップ後部に木製のホルスター兼用ストックを取り付けければ、近距離限定とはいえ、狙撃銃のような使い方も出来た。

このように主力火器に準ずる威力を発揮するマウザー拳銃だったが、ホルスター兼用ストックまで揃えればかなりの図体と重量になる。

だから、伊原中尉のように、この拳銃を愛用する士官の数はそれほど多くはなかった。

この大型の拳銃にホルスター兼用ストック、さらには、ホルスターを固定するためのハーネスまで付けた伊原中尉は、かなりの異様

となった。

さらに、伊原中尉はモーゼル拳銃に加えて軍刀まで吊っている。その軍刀は海軍制式の長剣ではなかった。

陸軍ならともかく、海軍士官はほとんど儀礼用としての価値しかない短剣を帯びるくらいで、コンパスが狂うといってその短剣すら嫌うものも少なくなかった。

それに、銃火器が未発達で、射程や発射速度が大したものではなかった前世紀ならばともかく、機関銃や戦車のような機械化が進んだ現代戦において軍刀が活躍する場は急速になくなりつつあった。

欧洲大戦においては、幾つかの戦場で騎兵部隊による白兵突撃が敢行されたというが、そのほとんどが塹壕や機関銃を駆使した防御側によって衝撃力を発揮することが出来ずに、いたずらに戦力を消耗させる結果に終わったという。

日本軍がどうなるかはわからないが、各国軍では近い将来には軍刀は制式武器から外れるのではないのか、そう予測するものは多かった。

ステレオタイプなサムライのイメージからなのか、欧州人からは刀に異様なまでにこだわると言われる日本人ではあったが、実のところ、日本軍においても軍刀の価値は下がっていた。

塹壕戦では、防御火器の機関銃の威力が高すぎて接近戦の機会は少なかったし、白兵戦になった場合に最も活躍したのは意外なことにスコップや銃床だった。

この時期の軍刀は、実質上、指揮刀としての価値しか発揮していなかったといってもよかった。

それならば、少人数の陸戦小隊を指揮する伊原中尉が軍刀を持ち歩く必要はあまりないはずだ。

やはり上官からそう指摘されたこともあったが、伊原中尉は、欧州で戦友となつたフランス軍騎兵士官の形見だといって所持を許されていた。

もつとも、形見という話はかなり誇張されたものだった。

実は伊原中尉は、その騎兵士官が本当に戦死したのかどうか確認していかなかったのだ。

その軍刀の元の持ち主である、騎兵士官が所属する部隊が全滅したのは事実だった。

しかし、部隊が全滅したといつても、その士官が戦死したという確証はない。

伊原中尉が知っているのは、実際には、その部隊が主戦線への迂回機動に失敗し、大損害を受けた後に再編成のために後方に送られたということだけだった。

そして、戦友というのも怪しい話だった。

譲られたのは、友情のためではなく、休養中だったパリ郊外の士官クラブで興じたカードゲームのツケを、その士官が払えなかったためだ。

実のところその士官とは初対面だった。

その士官はかなり強情な性格の男だった。

別にカードゲームのツケなど次にあつた時に返してもらえばいい。珍しく勝ち続けていた伊原中尉は苦笑いしながらそう言ったのだが、その士官はそれを聞くなり、渋い顔でほとんど押し付けるようにして軍刀をツケがわりに渡してきたのだ。

おそらく、損耗の激しい騎兵部隊にいた士官には、本当に次の機会があるのかどうか不安だったのだろう。

だから、今の借りを残したくない、その一心だったのではないのか。

それを理解したものだから、伊原中尉も黙って受け取ったのだ。

本当に次の機会にでも返せば良い、その時はそう考えていたのだが、その士官の部隊が全滅したことでそれも不可能になった。

もつとも、伊原中尉はその軍刀のことをさほど深く考えていたわけではなかった。

歐洲大戦に従軍した将兵にとって戦友達の戦死は、好んでのことではなかったが、さして珍しいものではなかった。

自軍あらばともかく、いちいち他国軍の一度しか会ったことのない人間のことを覚えてもいられない。

さすがに経緯が経緯だから、軍刀を捨てるわけにも行かなかったが、普段は、行李の中に放り込んだままだった。

モーゼル拳銃に加えて、ほとんど忘れていたような軍刀まで帯びる様になったのは昨日、ハバロフスクをたつてからのことだった。

ふと、気配を感じて、伊原中尉は顔を上げた。

一瞬、ケレンスキー大尉がどこか居心地が悪そうな顔をしていたが、伊原中尉と視線が合うと、とたんに不機嫌そうな表情になってそっぽを向いた。

もつともそれは伊原中尉も大して変わらなかった。

だが、伊原中尉の視線は、通路側に向けられていた。

程なくして、一人の陸軍士官と談笑しながら、不知火艇長の大賀大尉が入ってきた。

艦橋指揮を若い航海長に任せてきたのだろう。

もう一人の陸軍士官は、不知火乗艦者のうち、唯一の日本陸軍軍人である水野大尉だった。

陸軍からのオブザーバーである水野大尉は、ケレンスキー大尉と共にハバロフスクから乗り込んで来ていた。

水野大尉は、シベリア派遣軍司令部からの正式な命令書を持ち込んでいた。

その命令書の出所は、元をたどれば、東京の陸海軍中枢からのものであるらしかった。

それだけでもすでに異様だが、いま、不知火と陽炎をハバロフスクから更に上流へと逆行させる作戦の内容は、更に奇妙なものだった。

その作戦は、不知火と陽炎が、高崎と共にニコライエフスクからハバロフスクへと逆行する間に急遽立案されたものであったらしい。作戦命令書の慌ただししい文面がそれを物語っていた。

おそらく、不知火と陽炎は途中からその作戦に組み入れられたのだろう。

当初からこの作戦に従事することが決まっていたのであれば、鈍足の高崎を置いて、二隻だけでハバロフスクへの急行を命じられていたのではないのか。

だが、実際には、高崎とともにハバロフスク郊外に設けられた河川港に入港した二隻に慌ただしく補給と、連絡将校の派遣が行われたのだ。

本来であれば、不知火と陽炎は、支援艦艇の高崎と共に、乗組員の休養を兼ねて、しばらくニコライエフスクで、日本本土からの回航による艦体への影響を調査することになっていた。

当初の目的地がニコライエフスクからハバロフスクに変わっても、その予定は大筋では変わらないはずだった。

そのために、不知火と陽炎の改造にあたった艦政本部の宮本造船少尉が不知火に同乗していた。

魚雷や缶室を撤去し、兵員室などに改造した不知火と陽炎は、船体のバランスが原型から大きく変化している。

だから、本格的な行動の前に、徹底した調査を行う必要があった。

この調査が終了した後は、不知火と陽炎は、八バロフスクを拠点としたボルシエビキパルチザンの索敵殲滅作戦に従事することになっていた。

高崎とその搭載機は、陸戦隊を展開させて、直接パルチザンへの索敵殲滅を行う二隻を支援することになっていた。

飛行機による広大な索敵範囲と、高い機動性をもつ艦艇による兵員の急速展開は、これまでの対ゲリラ作戦とは次元の異なる機動性と柔軟性を発揮するはずだった。

陸戦隊は、軽装ではあるが、支援火器として重砲替わりに艦砲を使用できるし、場合によっては飛行機による空襲も可能だった。

だから、この行動には、海軍だけではなく、当然のように陸軍も注目していた。

今回は、アムール川を行動範囲とした限定的なものになるが、手法自体は広大な大陸の海岸線でもさほど変わらないはずだ。

つまり、陸軍としては、将来的に起こりえる大陸への軍事介入作戦のモデルとして今回の行動を見ていたのだ。

陸軍の興味はかなり大きいらしく、海軍が不知火と陽炎、それに高崎の派遣を決定した直後から接触を始めていた。

日本本土からの回航には間に合わなかったが、連絡士官の名目でオブザーバーを派遣することも早々と決定していた。

しかし、そのオブザーバーである水野大尉の任務は、本来のオブザーバーではなく、陸海軍中枢の意思を伝達するクーリエとなった。

水野大尉が持ち込んだ命令書に記載されていた作戦は、奇妙なものだった。

作戦自体が奇妙と言うよりも、命令書の内容自体が奇妙だった。不知火と陽炎の二隻は、アムール川をハバロフスクを超えて五百キロほど遡行し、そこに展開するロシア人部隊から目標を入手し、ハバロフスクまで持ち帰ることとされていた。

だが、命令書自体には、その「目標」が一体何であるのか、ロシア人部隊とはどのような戦力なのか、予想される敵集団はあるのか、そもそもロシア人部隊と合流する具体的な地点さえ不明だった。

ロシア人部隊の正体に関しては、ある程度は伊原中尉たちにも予想はついていた。

現状のロシアで日本軍と接触しようというのだから、白衛軍の一派であるのだろう。

あるいは、有力な貴族や金持ちがボルシェビキを恐れて、日本軍を始めとする連合軍側に庇護を求めてきたのかもしれない。

「目標」というのはその庇護の保証となる財宝か何かなのではないのか。

予想される敵集団は不明だが、これは到着したばかりの部隊が現地の情勢に暗かったためだ。

しかし、これらは伊原中尉達による推測に過ぎなかった。

水野大尉やケレンスキー大尉は作戦の子細を承知しているらしいのだが、現地的情勢などは詳しく説明したものの、「目標」やロシア人部隊に関する情報は、最期まで秘匿するつもりようだった。

言い換えれば、彼らを含む軍中枢は、作戦の主目的などに確信を抱いているようだが、現地の実行部隊には、作戦立案の経緯や、情報を伝達しないつもりだったのだ。

軍隊では、命令は絶対とは言うが、実際に作戦を遂行する部隊が、作戦内容の理解を曖昧なまま実施するケースはあまりないはずだ。

伊原中尉は、作戦の子細を説明しようとせず、のらりくらりと正式な命令を盾に説明を拒否する水野大尉や、ケレンスキー大尉に憤

りを感じていた。

一体、何故自分達が戦わなければならないのか、それを理解しないまま戦う兵の士気がどうなるのか、彼らは考えたことがないのではないのか。

末端の将兵たちに、戦争の理由を説明しろとか国家戦略を語れと言っているわけではない。

兵達をただの駒扱いしてしまえば、彼らは指揮官たちを信頼しなくなる。

ただそれだけの話だった。

それ以上に、指揮官である伊原中尉ですら「目標」の詳細を知らないというのは、作戦を実施する上で大きな危険性をはらんでいた。もしも、この時点で水野大尉やケレンスキー大尉の身に何かが起こっても、作戦内容を周知していない現状では、大賀艇長や伊原中尉が為す術は何もないからだ。

だが、伊原中尉は、過去にも子細が説明されなのまま強行された作戦のことを聞いたことがあった。

作戦の詳細は覚えていないが、その部隊は訳がわからぬまま戦果を上げて、無事撤収に成功していた。

その後、伊原中尉は気になる噂を聞いていた。

その作戦は、諜報によって得た情報を元に立案されたというのだ。それも敵軍支配地域に潜ませた密偵などではなく、政府中枢に食い込んだ大物スパイからの情報だというのだ。

だから、実行部隊に対して、情報源を特定させるような説明をすることが出来なかったというのだ。

もしかすると、今回の作戦も、後ろめたい手段で入手した情報に基づいているのかもしれない。

あるいは防諜のために、情報に接する人間を極端に絞り込んでいくのだ。

だが、どちらにせよ、伊原中尉達が信用されていないことには変わりはない。

すでに不知火はハバロフスクを離れているのだから、兵たちの口から機密が漏れる心配もないはずだった。

だから、伊原中尉は、水野大尉や、ケレンスキー大尉への反感を隠そうともしなかった。

その水野大尉は、伊原中尉の異様な重装備に、一瞬目を見開いたが、次の瞬間には、愛想よく笑みを見せた。

「寒いなか、通信筒の回収ご苦労でした」

伊原中尉は、黙って頭を下げた。

実のところ、水野大尉の腰の低さには、逆に胡散臭いものを感じていた。

水野大尉は、シベリア派遣日本陸軍の参謀部に所属する士官だった。

欧州大戦当時は、駐在武官補佐官として東部戦線を形成するロシア帝国に派遣されていたらしい。

帝政が崩壊するよりも早く、教育の関係で国内に戻されたが、ロシア語には堪能であったので、シベリア派遣軍の参謀部に配属されたという。

だが、伊原中尉は、水野大尉のその経歴を少々疑っていた。

ロシア帝国に派遣されていたのは事実だろうが、単純な駐在武官の補佐が任務であったとは思えない。

実際には、十年前の日露戦争時に、明石大佐によって構築された反帝政組織などとも接触する情報将校だったのではないのか。

愛想の良い笑みの向こうに、どこかそのような想像をかきたたせるような胡散臭さが水野大尉にはあった。

にこやかな表情をしながらも、その目は凍り付いているようにも感じられた。

そのようなことを伊原中尉が考えていたのは、根拠のない推測というわけではなかった。

シベリアへの出勤前に、シベリア派遣軍司令部付というのは、情報収集や宣撫工作、更に踏み込んだ諜報活動に従事する機関員の表の顔と聞かされていたからだ。

そんな組織に身を置いているのだから、恐らく、水野大尉は、陸軍入隊当初から情報将校として、諜報活動に従事していたのではないのか。

表向きは日本国と、ロシア国内の反帝政組織とのつながりは、日露戦争の終結と同時に絶たれたことになっている。

平時に、他国の反政府組織と接触するなど、内政干渉以外の何者でもない。

相手が半植民地のような後進国ならまだしも、日本が勝利したとはいえ、ロシア帝国が列強の一翼を占めることに違いはない。

しかし、実際には組織との接触ルートは、地下に潜って維持されていたのではないのか。

終戦に合意したといっても、ロシア帝国の南下政策が容易に変化するとは当時の日本政府も思っていなかったはずだ。

再戦の可能性は決して低くはないとも考えていたかもしれない。

だから、万が一のために、反政府組織との繋ぎは欠かさなかったはずだ。

だが、新たにルートを開拓するわけではないのだから、明石大佐のような大物を使う必要があるわけではない。

水野大尉が、さして経験があるとは思えない中、少尉の頃からロシア帝国大使館に配属されていたのは、そのような思惑があったか

らではないのか。

その、反政府組織との連絡役でもあった水野大尉が、シベリアへと派遣された。

伊原中尉は、その意味に気がついた時、愕然としていた。

おそらく水野大尉は、再び組織と接触しようとしているはずだ。

それも今度は、接触ルートの維持などという消極的な行動ではないから、陸軍の機関を上げての支援を得ての行動だろう。

勿論、その目的は組織を支援することではない。

シベリア派遣軍の目的はロシア帝国の維持、あるいは、ボルシェビキ政権との緩衝地帯となる傀儡国家の樹立だからだ。

つまり、水野大尉は、今度はロシア帝国を存続させるために、十年前は味方であったはずの組織を壊滅させるつもりなのだろう。

そこに、かつての友を裏切るという後ろめたさや、逡巡は全く感じられなかった。

そのような、剣呑さを隠しもつ水野大尉に対して、ケレンスキー大尉はむしろ分かりやすい男だといえた。

ケレンスキー大尉が、周囲に対して壁を作り、ことさらに不機嫌そうな表情を作っているのは、不安の裏返しとしか思えなかった。

周囲を、かつての帝国人である日本人に囲まれているからか、戦闘への恐怖なのか、あるいは作戦そのものへの不安なのか、それは分からない。

ケレンスキー大尉は、ロシア遠征軍に所属する歩兵士官であったらしい。

少なくとも昨日の自己紹介ではそう名乗っていた。

西部戦線のフランス軍への支援として派遣されたロシア遠征軍は、

最盛期には二個師団基幹の一個軍団を数える一大戦力となっていた。自国内の東部戦線に投入する膨大な戦力に加えて、日本陸軍が派遣した遣欧軍とほぼ同規模の大兵力を、ロシア帝国は西部戦線に派遣していたのだ。

そもそもは、フランス軍が、人口比から言えば、西部戦線よりも東部戦線の兵力はもつと大規模で有るべきだと抗議したところから、ロシア遠征軍は編成されらしい。

この兵力派遣要請は、殆どフランスの言い掛かりに等しかったが、ロシア帝国は、フランス軍が構築する西部戦線を強化せざるを得なかった。

東部戦線では、強力なドイツ帝国軍によって、ロシア帝国は圧迫されていた。

この時点でフランスが単独でドイツ帝国と講和でもされれば、ドイツ軍は、後背を憂うことなく東部戦線に全力をできるだろう。

ただでさえ、政治的な不安を抱えていた当時のロシア帝国は、そのような大攻勢に耐えられなかったのではないのか。

こうした弱みにつけこまれる形で、強引に編成されたロシア遠征軍だったが、意外なほどその戦意は高く、兵力不足に喘ぐ英仏を中核とした西部戦線において慈雨となった。

しかし、ロシア帝国軍は、兵員こそ十分に送り込んだものの、ロシア遠征軍の装備、特に重火器の類は貧弱極まりなかった。

ロシアの工業化は、他の欧州諸国と比べて遅れて始まったから、この当時でも、自国内の東部戦線で消耗する装備を生産するの一手一杯だったのだ。

それどころか、自国産だけでは銃火器の生産が間に合わずに、日本国から小銃の大量輸入も行なっているほどだった。

だから、欧州大戦終盤のロシア遠征軍の装備品は、大半が日本製に切り替わっていた。

実は、ロシア遠征軍は、西部戦線への輸送過程から、日本軍と共同で行動していた。

というよりもロシア帝国や他の連合側参戦諸国には、海上輸送される大部隊を護衛出来るだけの海上戦力を展開させるだけの余力がなかったのだ。

だから、ロシア遠征軍本隊の輸送は、日本軍遣欧軍の第二陣とタイミングを合わせて、同時に行われることとなった。

むしろ、日本軍の輸送に、ロシア遠征軍が便乗したという方が正確だった。

そして、西部戦線に到着した後のロシア遠征軍への補給も、ほとんどが日本軍経由で行われることとなった。

実は、ロシア遠征軍の編成規模は当初はもつと小さかったらしい。師団にも満たぬ、旅団規模の部隊が幾つか編成される程度でお茶をにごすつもりだったらしい。

ところが、日本軍の輸送に便乗できるということが判明したものだから、その規模を拡大させるようにフランス側がねじ込んだのだ。その結果、二個師団級という大兵力が一度に輸送されることとなった。

しかし、ロシア帝国には、帝国ドイツをまたいだ、戦線の反対側に位置する自軍に対する、長大な補給線を維持する能力も、また意思もなかった。

本来であれば、フランス軍がその代わりに補給を実施するはずだったが、彼らも自軍への補給で半ば手一杯だった。

その結果、ロシア遠征軍の補給の面倒は、ほとんど一手に日本軍に任されることとなった。

拡大された国内の工場を総動員させて、兵器や消耗品を大量生産している日本国ならば、ロシア遠征軍への補給も可能だった。

書類上は、ロシア遠征軍への補給物資は、ロシア帝国から日本国

へ発注され、現地にて売却されたことになっていたが、当然その代金は、今も未回収のままだった。

あるいは、そのように日本軍に依存していたからこそ、シベリア出兵への同道を求められたロシア遠征軍は、シベリア派遣軍への随行を拒否出来なかったのかもしれない。

ほとんど成り行きでシベリアへと舞い戻ったロシア遠征軍だったが、シベリア派遣軍にとっての価値は非常に大きかった。

チエコ軍団の救出という名目で開始されたシベリア出兵だったが、これに先陣をロシア遠征軍のロシア人にきらせることでさらなる大義名分を得ることが出来たからだ。

それに、当たり前前の話だが、ロシア語を母語とする数万の将兵は、言葉の壁に行き詰まりがちな住民の宣撫工作に威力を発揮することができた。

もしも彼らの存在がなければ、これだけ早期にハバロフスクへ進出することも出来なかったのではないのか。

当初は、ロシア遠征軍自体がボルシェビキに寝返って反乱を起こすのを警戒する声も上がったらしいが、少なくとも日本軍と長期間行動を共にした将兵が裏切るとは心情的な問題を抜きにしても考えづらかった。

それに、ロシア遠征軍の高級士官達は、母国を遠く離れての長期間の戦闘行為を考慮して、皇族に近い貴族出身の士官が多く、革命側につくとは思えなかった。

ロシア遠征軍の将兵の中には、日本軍との行動の中で、片言ながらも日本語を取得したのも少なくなかった。

そういった将兵は、語学力の高いものから、日本軍の各部隊が競いあつようにして、通訳として出向させられていた。

彼らの多くは、自発的に協力していた。

日本軍の対ゲリラ部隊と、住民との間の軋轢を彼ら通訳が解消させることが出来れば、それだけ自国民の被害は少なくなるからだった。

実は、長期のボルシェビキゲリラとの索敵殲滅戦を有利に展開させるため、捕虜や住民との通訳のために不知火にも、ロシア遠征軍から出向していた少尉が乗艦していた。

彼は補給将校で日本軍との接触も多かったせい、流暢な日本語を話すこともあって伊原中尉も期待していた。

しかし、水野大尉とケレンスキー大尉が乗り込んできたせいで手狭となった不知火から追い出される形で、そのロシア人の少尉と、艦政本部から派遣された宮本造船少尉は、陽炎への移動を余儀なくされていた。

その少尉が、不知火を離れる前に、怪訝そうな顔になって、伊原中尉に気になることを告げた。

彼はケレンスキー大尉を、フランスで、つまりはロシア遠征軍の中で見たことがない、そう言っていた。

ロシア遠征軍は、二個師団にもなる大戦力だったから、士官の人数も膨大なものとなっていた。

だから、彼が一人の士官を見たことが無かったといっても、そう不自然ではないように思える。

しかし、補給将校だった彼は、他隊に訪れる機会も多かったはずだ。

その言葉には、十分な信頼性があるような気がした。

伊原中尉は、そのことを思い出しながら、ロシア遠征軍所属を自称する、眼の前でむっとりとしているこの男の正体は何者なのか。

ハバロフスクを発って以来ずっと、得体のしれない不安感が、伊原中尉を襲っていた。

1919 シベリア遊行3

「揃いましたね」

そう言うつと水野大尉は、会議室を兼ねる艇長室のテーブルを片付け始めた。

通信筒の中身を広げさせようというのだろう。

しかし、伊原中尉は、通信等から手を話そうとしなかった。

片付け終わった水野大尉だけではなく、ケレンスキー大尉も、動こうとしない伊原中尉を怪訝そうな目で見ていた。

だが、彼らの視線にたざろぐこともなく、伊原中尉がいった。

「まだ一人、国枝兵曹長が来ておりません」

水野大尉は、それを聞いても眉をしかめたただけだったが、ケレンスキー大尉は一瞬、啞然とした表情になった。

直後に伊原中尉を睨みつけたが、中尉は気にもしなかった。

「兵曹長は、カッターの揚艇中か」

大賀艇長もさして気にした様子もなく尋ねた。

「乗員を手伝っていましたが、すぐにすむでしょう。出したのは一艇だけです」

「ならすぐに来るだろう。それでは国枝兵曹長が来てから始めるとしましうか」

後半は水野大尉に顔を向けて、大賀艇長は言った。

「下士官の同席は認められない」

ケレンスキー大尉は、険しい表情で、それだけをぶっきらぼうに言うつと、顔を背けた。

伊原中尉は、ケレンスキー大尉以上に物騒な表情になっていた。

「国枝兵曹長は、自分の副官だが、陸戦小隊の次席指揮官でもある。勿論小官が指揮不能となれば、代わって国枝兵曹長が指揮をとるこ

とになる。作戦内容の説明を行うのは当然と思うが」

だが、ケレンスキー大尉はそっぽを向いたまま反論さえしよつとしなかつた。

すでに、今回の作戦中の行動方針は水野大尉とケレンスキー大尉が乗艦したときに説明してある。

だからここで改めて説明する必要はない。そう考えているようだった。

ここで、険悪な雰囲気吹き払うかのように、ケレンスキー大尉と井原中尉に交互に顔を向けながら、水野大尉が乗り出してきた。

「今回の作戦行動中は、作戦会議及びそこで決定された事項、これらの情報は原則、士官にのみ情報を開示する。」

これは規定の作戦方針です。勿論シベリア派遣軍の海軍代表もこれを承知しております。

この作戦は、我が帝国と、ロシア帝国、それに連合軍すべての国運を左右しかねない重要なものなのです。

防諜対策としても異常と思うかもしれませんが、どうか納得していただきたい」

丁寧な口調だったが、水野大尉は、陸海軍上層部まで持ちだして有無を言わず規定の方針を貫くつもりの方だった。

伊原中尉は、雲上の上層部まで持ち出されて嫌そうな顔になったが、大賀艇長は平然としていた。

「下士官以下に与える情報を制限するという規定の方針は、陸戦小隊長も小官も理解していますよ」

水野大尉は、それを聞くとにこやかな表情で頷いた。

ケレンスキー大尉もそっぽを向いていた顔を元に戻した。ようやくこれで話ができる、そう考えたのかもしれない。

だが、伊原中尉は、一瞬目を見開いたあと、意地悪そうな顔になった。

大賀艇長が何を言いたいのか理解していたからだ。

ほとんど言い掛かりか、詐欺に等しいような気がしていたが。

その時、艇長室の扉をノックする音が聞こえた。

大賀艇長が素早く入れというのと、のっそりと熊のようにながしりとした体格の国枝兵曹長が入ってきた。

「小隊長、揚艇作業終わりました」

それだけ言うと、国枝兵曹長は、伊原中尉の斜め後ろに立つとうと

した。

それを妨げるように水野大尉がいった。

「申し訳ないが、国枝兵曹長、貴官には出席資格がない。退席して待機してもらいたい」

国枝兵曹長は、怪訝そうな顔で水野大尉を一瞥してから、伊原中尉に顔を向けた。

陸軍の士官から命令されるいわれはないから、これは要請ではない。だとすれば直属上官の伊原中尉がなにか言うだろうと思ったのだろう。

だが、伊原中尉はニヤリと水野大尉に笑みを見せたが、無言のままだった。

その代わりに、大賀艇長が口を開いた。

「構わん、陸戦隊副官が退席する必要はない。

陸軍のことはよくわかりませんが、海軍では、兵曹長は特務士官にあたります。

つまり、国枝兵曹長は下士官以上の位なのだから、作戦会議に出席する資格を有しています」

にこやかな顔の大賀艇長に、水野大尉は呆気に取られた顔になったが、すぐに苦笑いを返した。

実際には伊原中尉が、副官である国枝兵曹長に作戦会議の内容を説明してしまえば一緒なのだから、水野大尉自身には、出席者の制限にたいしたこだわりは無いのだろう。

ただ、杓子定規なケレンスキー大尉の手前言わざるを得なかったのではないのか。

国枝兵曹長は、事情がよく飲み込めない様子だったが、伊原中尉が、頷くのを見て、押し黙ると中尉の後ろについた。

ケレンスキー大尉一人が、忌々しそうな目で国枝兵曹長を睨みつけていたが、歴戦の陸戦下士官がその程度の視線でたじろぐことなどありえなかった。

伊原中尉は、何事もなかったかのように、通信筒から中身の紙を取り出すと手早く卓上に広げた。

通信筒に詰められていたのは、ところどころに鉛筆書きのある一枚の地図だった。

伊原中尉は、最初に意外なほど丁寧な鉛筆書きに感心していた。おそらく、この地図上の書き込みは、機上での作業となっただけだ。

飛行機に搭載できるサイズと重量の無線機は、未だ空想のものでしか無いから、上空からの偵察による情報を、手早く陸上の部隊に知らせるためには、それが一番簡単で、確実な方法だった。

だが、そのために専用の機材が開発されたわけではないから、せいぜい画板に紙を固定するくらいではないのか。

それならば、手早く殴り書きのようになっても不思議はないが、この地図の書き込みは、殴り書きとは思えないほど丁寧だった。

単に字が上手い下手だというのはない、閲覧者の事を第一に考えた搭乗員の丁寧さが感じられるのだ。

あるいは、これまでの経験から、飛行機による偵察能力を地上部隊に伝達するためには、そのように丁寧に書かないと信用されないと思っっているのかもしれない。

だが、伊原中尉がこのような事を考えていられたのは、ごく短時間のことだった。

伊原中尉だけではなく、艇長室に集まった全員が、食い入る様に地図に見入っていた。

それだけ価値のある地図だった。

地図と、搭乗員のものらしき書き込みを加えれば周囲の状況が手に取るようにわかるのだ。

勿論、搭乗員が目撃できなかった情報を得る手段はないから、航空偵察のみを情報源とするのは危険だった。

しかし、人口密度の低いシベリアでは、大部隊を飲み込む市街地がないから、少なくともある程度以上の規模の部隊が分散せずに移動していれば、搭乗員が観測できる可能性は高かった。

やけに正確な地図だった。

少なくとも、シベリアへの出勤前に本土で受領したアムール川の河川図よりもは、ずっと正確だった。

本来、不知火と陽炎はニコライエフスク周辺で行動するはずだったがから、河口域はともかく、こんな上流域の地図が必要となるのはずっと先のことだと思われるからだ。

ハバロフスクでの短期間の補給でも、現地の地図を派遣軍司令部から入手することは出来なかった。

幸いなことに、まだそんな事態には陥っていないが、更に上流に遡行していけば、本流と支流を取り違えて駆逐艦二隻が迷子になることも考えられた。

だが、この地図は、不知火が航行できそうもない細い支流まで記載されていた。

さすがに水深は不明だが、これがあれば迷子になることだけは避けられるのではないのか。

その支流の中でも、比較的大きなものの中州に、目印が付けられ

ていた。

それが「目標」とロシア人部隊なのだろう。

中洲はシベリア鉄道のからそれほど離れていなかった。

おそらく、シベリア鉄道から降り立ったロシア人部隊は、防御に適したそこまで移動したのではないのか。

周辺の地形を見るかぎり、アムール川を逆行する艦艇と連絡が付きそうな地形で、ここは最も防御に適した地点だった。

反対岸からは、小銃の射程外となるし、中洲への渡河点さえ抑えてしまえば、相当の大部隊でもない限り突破は難しそうだった。

だが、地図上で気になる点は他にもあった。

シベリア鉄道と、その中洲の中間地点ほども印が付けられていた。

そこでは、かなりの兵力が移動しているらしかった。

印のすぐ下に、移動方向と、予想敵戦力が記載されている。

それを見るなり、伊原中尉は絶句していた。

この記述を信じるならば、この地点で移動しているのは、日本軍の基準で言えば一個大隊を優に超える戦力となるだろう。

勿論、これだけの戦力が、まとまって動いている以上は、単なるボルシェビキ側パルチザンなどではありえない。

このあたりは海岸から遠くはなれているし、冬季にはアムール川は凍結しているから、人口密度は極端に低かった。

シベリア鉄道の沿線といっても良い土地だが、めぼしい駅は無いから、市街地を形成するほど大きな都市は殆ど無い。

ブラゴヴェシチエンスクのような要塞都市があるだけだ。

だから、行動半径の小さいパルチザンが大兵力を用意できるとは思えなかった。

それに、移動方向と共に記載された移動速度はかなり早かった。

観測期間がそう長く取れたとは思えないから、速度観測の信頼性

はさして高くないが、少なくとも鈍重な補給部隊を随伴しているとは思えなかった。

このままの速度で進んでいるとすれば、不知火が現場に到着する前に、この部隊は中州に到着しているだろう。

勿論、根拠地を遠く離れて機動中の部隊が、補給部隊を有していないとは考えられない。

つまり、補給部隊は別個に存在していると考えるのが自然だった。これは根拠地からの出撃を繰り返すパルチザンとは、性質が異なっているような気がした。

むしろ、正規軍のような、後方に補給廠を置く野戦軍に近い

これが噂の赤軍、なのか

かつて赤衛隊と呼ばれていた赤軍は、パルチザンがボルシェビキ派のいわば民兵であるのに対して、正規軍に当たる軍隊らしい。

完全に志願兵で編成され、階級も士官もなく、指揮官は選挙によって選ばれるというから、他国の正規軍とは性格の異なる組織であるらしい。

赤軍、あるいは赤衛隊は、対ドイツ戦に投入されているらしく、これまでシベリアではその存在は、確認されていなかった。

だが、党の軍隊とも言える赤軍は、ボルシェビキ中枢にとって、政治的に信頼性の高い戦力の筈だった。

これを投入するということは、ボルシェビキにとっても「目標」は奪還か、破壊するだけの価値のあるものだといえるのではないのか。

伊原中尉は、そつとケレンスキー大尉の顔を見た。そして少なからぬ衝撃を受けた。

ケレンスキー大尉の顔には、これまで意図的に押さえ込んでいた感情がありありと浮かんでいたからだ。大尉の顔は、青を通り越し

て白くなっていた。

水野大尉は対照的に、表情を消し去っていた。

おそらく脳裏では何らかの計算がなされているのではないのか。

その処理を行うために、にこやかな表情を作り出すためのリソースを計算に振り向けた。

機械のような冷たさが水野大尉からは感じられた。

伊原中尉は、ケレンスキー大尉の顔を見つめると、尋ねた。

「この…中州にいるロシア人部隊はどの程度の戦力を有しているのですか」

聞きたいことはそれだけではなかった。重火器は有しているのか、高い士気を維持しているのか、それとも烏合の衆なのか。

だが、何よりも兵力が過小であれば、大兵力にもみ潰されて一瞬で終わってしまうだろう。

ケレンスキー大尉は、不安そうな顔で、伊原中尉に向き直っていた。

だが、意外なほどケレンスキー大尉の持つ情報量は多かった。

「正規軍の編成は取っていないし、重火器は殆ど無いが…約一個中隊程度といったところだろうか、ただし士気は高い。おそらく相手が大部隊であっても最後の一人まで戦うのではないのか」

伊原中尉は、最期まで聞いていなかった。

ロシア人部隊は、とりあえず士気が高い、装備が貧弱な一個中隊であるらしい。

詳細はどちらも不明だが、接近中の部隊に対して1：3の兵力差は大きかった。

ただし、攻防三倍則などといわれるように、防御側が有力な陣地を構築できれば三倍程度の戦力と互角に渡り合うことは可能だ。

今回の例で言えば、防御側は特に人為的な陣地を構築しなくとも、予め中洲への渡河点という防御上優位な地形を抑えている。

だから、陣地構築の手間は最小限で済むはずだ。

彼らが予め敵部隊の襲来を予測していれば、すでに陣地を構築している可能性も低くはないはずだ。

伊原中尉達陸戦隊は一個小隊規模でしかないが、不知火と陽炎による艦砲射撃の支援を加えれば、防御側の戦力は格段に向上する。

兵力差は大きい、必ずしも絶対的なものではなかった。

ただし、防御側のロシア人部隊と、こちらの部隊が綿密な連携を取る必要があった。

それが可能なのか、それは分からなかった。

ロシア人部隊の正体さえ分からないのだから、連携が取れるかどうかなどわかるはずもなかった。

結局は、情報を小出しにするから、戦術的な選択肢をも狭める結果になるのだ。

伊原中尉は、そう結論を出すと、ケレンスキー大尉にさらに尋ねようとした。

精神的なショックを受けているらしいケレンスキー大尉ならば、今は警戒心が低下しているはずだ。

案外あっさりとこれまで秘密にしてきたことでも喋るのではないのか、そう考えていた。

だが、伊原中尉が口を開くよりも早く、国枝兵曹長が怪訝そうな声を上げた。

「これは敵の…増援なのでしょうが」

伊原中尉は、怪訝そうな目で兵曹長が指さす先を見た。

そこには、一隻の船舶が行動中であること、その推測諸元が書かれていた。

例の中洲がある支流への分岐点よりも、更に上流を航行していたらしい。

ただし、アムール川はこのあたりではかなり蛇行しているから、

距離はさほど離れているわけではない。

シベリア鉄道から出発したであろう敵部隊から分岐したと仮定しても、距離の面からはさほど無理がなさそうだった。

ただし、国枝兵曹長がこの船舶の書き込みを敵部隊と判断した理由はもつと単純だった。

書き込みに、銃撃を受けるとあったのだ。

その書き込みのみが、その場で慌てて書いたのか、殴り書きになっているのが周囲とやけに浮いていた。

通信筒を投下した飛行機には、敵味方識別のためか、主翼に大きく赤い日の丸が描かれていた。

それに、この周辺で飛行機を運用するほどの支援部隊を投入する事ができる勢力がいるとは思えないから、そんなものがなくとも、飛来した飛行機が日本軍のものであることは、常識で考えればすぐに分かるのではないのか。

それがわかって飛行機に銃撃してきたとすれば、誤射などではありえない。

自衛した地域住民や、白衛軍などの諸勢力である可能性は低いだろう。

これが赤軍の別動部隊だとすれば、どの程度の戦力なのだろうか。伊原中尉は、丹念に書き込みや、周辺の地形から、船舶の諸元や発信地などを推定していった。

結論はすぐに出た。

書きこまれた情報をや地形は判断すれば、少なくとも不知火と陽炎に載せられる陸戦隊よりもずっと大規模な部隊が行動しているのではないのか。

もしかすると、河川を利用した柔軟な機動力を発揮することのできる、この部隊の方が敵の主力なのかもしれない。

だが、伊原中尉は、違和感にとらわれて食い入るように地図を見つめた。

そして、あることに気がつく、無意識のうちに、水野大尉の方を見やっていた。

水野大尉は、地図から視線をそらすことなく、丹念に情報を読み取っているようだった。

自分の動きに気がついた様子のない水野大尉の姿に安心すると、今度は意識しながら地図に視線を戻していた。

敵部隊の動きはあまりにタイミングが合いすぎていた。

地図の情報を信じれば、地上から進撃する部隊が中洲に到着するのとはほぼ同時に、例の船舶が支流へと侵入するのではないのか。

中洲の陣取る部隊から見れば、地上からの進行に対して防備を固めた次の瞬間に、無防備な背後を襲われる事態に陥るのではないのか。

これは攻撃側の赤軍にとって理想的な分散合撃だといえた。

しかも地形や保有機材の関係から、内戦の防御部隊が機動力を發揮して各個撃破を図るのは難しかった。

それどころか、赤軍もロシア軍部隊も共に航空機材を保有しているとは思えないから、防御側にとっては包囲されているという情報すら得られていないはずだ。

つまりこのような情報を得ているのは、自在な航空偵察が可能な日本軍のみということになる。

そう考えると、この分散合撃を図る赤軍の行動は上手く行きすぎているような気がした。

敵味方ともに偵察を放った状態で分散合撃を図っているわけではない。

一度出発してしまえば、河川上の船舶部隊と、地上部隊が連絡をとるのも難しいはずだ。

第一、この広大なシベリアの地で、一体どうやって目的のロシア人部隊の性格な位置を掴むことができたというのか。

船舶部隊が出発したのは、地形を考えれば、少なくとも不知火がハバロフスクを出発したのよりも前の時間になるだろう。

その時は少なくとも、赤軍は、ロシア人部隊の現在地か、日本軍との合流地点が中洲であることを把握していたことになる。

勿論、通常の偵察では、このような危険な分散合撃をとるだけの決断を指揮官にとらせるほど確度が高い情報を得ることは不可能だろう。

陸上部隊と船舶部隊による分散合撃など、正規軍でも困難ではないのか。

可能性はひとつしか無かった。

ロシア人部隊の側に、内通者がいるのだ。

その内通者からもたらされた情報によってボルシェビキは動き出したのだろう。

それも、虎の子であろう、根拠地から遠く離れたシベリアで運用できる赤軍精鋭部隊や船舶まで投入している。

ボルシェビキにとって、内通者の信頼性はかなり高いと考えられているのではないのか。

だが、情報を性格に把握しているはずのボルシェビキ側にとって、未知の存在が唐突に戦域に出現した。

他ならぬ不知火と陽炎だ。

しかも、赤軍のふたつの部隊と、不知火が中洲に到着するのはほぼ同時だった。

伊原中尉には、これが偶然だとは思えなかった。

不知火も赤軍も、そして、ロシア人部隊も、実のところ情報源は同一なのではないのか。

今度は確信を持って、伊原中尉は視線を水野大尉に向けた。今度は視線に気がついたらしく、水野大尉も顔を上げた。

だが、伊原中尉には、再び作り上げられた愛想笑いの向こうの、水野大尉の考えまで読み取ることは出来なかった。

地図に見入っていた中で、最初に声を上げたのは、ケレンスキー大尉だった。

もしかするとケレンスキー大尉も、何か不審なものを感じていたのかもしれない。

大賀艇長と、伊原中尉に、向けた顔には、悲壮な表情が浮かんでいた。

ケレンスキー大尉は、呼吸を整えると、ゆっくりと、意識してはつきりとした発音で言った。

「本艦が、敵部隊の合流に先じて目的の中洲に到着することは可能だろうか」

伊原中尉は一瞬、息を呑んだ。大賀艇長も、眉をしかめるといった。

「これだけの情報では、敵部隊の移動速度の推定が曖昧になる。だから概算しかできないが、おそらく中洲まで最短距離で航行すれば、陸上から接近する部隊と中洲の部隊が接敵する前に到着することは必ずしも不可能ではない。

しかし、その場合はこの支流から、離脱する際に敵水上部隊と鉢合わせする可能性が高いが……」

「本艦の戦力からすれば、支流からの脱出は不可能ではないと判断する。小官は、直ちに目的地に進出、「目標」を確保の上、本艦のみで脱出することを進言する」

伊原中尉と、国枝兵曹長は思わず顔を見合わせていた。

ロシア人部隊は、「目標」を手土産にシベリア派遣軍の庇護を受けようとしているのではないのか、陸戦隊の指揮官達はそう考えていたのだが、少々事情が異なるらしかった。

ケレンスキー大尉の言うとおりに、不知火が「目標」を確保してロシア人部隊を置き去りにすれば、彼らは大部隊に飲み込まれて消滅するはずだ。

もしも、ボルシェビキが、「目標」の移動を察知して、ロシア人部隊を殲滅する理由が無くなったとしても、彼らは「目標」という担保を失っているから、発言力が低下して、シベリア派遣軍からの庇護を受けられない可能性もあるのではないか。

陸戦隊員達が考えているほど、ロシア人部隊は単純な存在ではないらしい。

伊原中尉がそつと水野大尉の顔をうかがうと、大尉は、驚いてはいるものの、特に意見はないらしい。

実のところ、水野大尉にとっては「目標」がどうなるかと構わないのではないのか。

ここまで事態が動き出した時点で、水野大尉には「目標」の価値は本当は消失しているのかもしれない。

肝心の艇指揮官である大賀艇長の反応は鈍かった。

不知火艇長である大賀艇長は、陽炎艇長よりも先任だから、実質上二隻の隊司令でもある。

その大賀艇長は、しばらく地図を睨みつけながら、無言で考え事をしているようだった。

次第に、室内の全員が、身動き一つせずに、大賀艇長を見つめていた。

やがて、しびれを切らしたケレンスキー大尉が口を開こうとした瞬間に、大賀艇長が顔を上げた。

艇長の顔には、迷いや逡巡はかけら一つ見えなかった。
自身有りげな声で大賀艇長は言った。

「不知火及び陽炎は、このままアムール川を遡行、敵水上部隊を船上で撃破した後、支流に入り、中洲に急行、陸戦隊を展開して友軍を支援する」

そう一気に言うと、大賀艇長は、伊原中尉に向き直った。

伊原中尉達陸戦小隊は、隊編成上は大賀艇長の指揮下にあるわけではなかった。

本来は、陸戦隊と不知火、陽炎の二隻は同列で、飛行機などと共に、高崎に座乗した臨時戦隊司令官の指揮下に入ることになる。

高崎やそれに座乗した司令部の進出が間に合わなかったために、不知火と陽炎の二隻だけの行動となったから、大賀艇長が正式な指揮官として任命されたわけではなく、先任というだけにすぎない。

だから、伊原中尉が異をとねえれば、上官とは言え、大賀艇長は強く言える立場にあるわけではなかった。

しかし、伊原中尉は、間髪を入れずに、大賀艇長に向かって大きく頷いた。

「陸戦隊小隊長も同意見であります。艇長」
それを聞くと、大賀艇長は、にやりと笑みを見せて、不安そうな顔をするケレンスキー大尉の肩を叩いた。

「安心しろ、ケレンスキー大尉。我が海軍は、決して友軍を見捨てたりしない。

水上部隊を先に撃破するのは、敵が抵抗出来ない段階で無力化するためだ。

相手は合流すれば大部隊だが、河川上では無防備な船舶の積荷に過ぎない。」

自身有りげな、大賀艇長に、ケレンスキー大尉は、ぎこちない笑

みを見せた。

い。もしかすると、ケレンスキー大尉が初めて見せた笑みかもしれな

1919シベリア遡行4

揚陸揚艦艇に改装された不知火の艦橋は、改造前とほとんど変わりが無いらしい。伊原中尉はそう聞いていた。

少なくとも航海や戦闘に関する機材は、ほとんどそのまま搭載され続けていた。

だが、何隻かの純粋な駆逐艦に乗艦したことのある伊原中尉には、不知火の艦橋に入るたびに違和感にとらわれることが多かった。

数少ない、新規搭載品である防弾板が、従来型駆逐艦そのものの不知火の艦橋の中で異様さを放っていたからだ。

陸戦支援の機会が多くなる不知火では、近距離から機関銃や小銃などの小口径弾を被弾する可能性が指摘されていた。

より大口径の砲弾を被弾した場合、無防御の駆逐艦など問答無用で撃沈されてしまうだろうからさして考える必要もないが、小口径の小銃弾程度の被弾で要員が一人人事不省に陥って戦力価値を失うようでは、陸戦支援の意味がなくなってしまう。

だから、艦橋や、砲側には小銃弾対応の防弾板が備えられていた。

だが、防御を重視したのはいいのだが、防弾板の配置や性能が厳密に吟味された形跡は感じられなかった。

その存在を陸戦小隊指揮官の伊原中尉が知ったのも、不知火に乗り込んでからだった。

陸戦隊員や乗員達に使い勝手を確認したりや、小銃弾による被弾テストなどを行ったこともないらしい。

つまり不知火にとって、防弾板の装備でさえ、揚陸艦艇としての実戦テストの一つということなのではないのか。

伊原中尉は、そう考えていた。

不知火の艦橋に伊原中尉が上がった時、すでに艦橋は緊張に満ちていた。

敵船はまだ発見されていないが、戦闘が間近に迫っていることは、陸戦隊員を含む全乗員が感じ取っていた。

結局、不知火は、支流への分岐点を越えてアムール川本流を逆行していた。

予測が正しければ、すぐに敵船が見えてくるはずだった。

水上砲戦では、陸戦隊に出番はないが、乗員の少ない駆逐艦改装の不知火では、個有の乗員が負傷する可能性は少なくない。

だから、このような場合は、陸戦隊員も砲側などで待機させていた。

すでに陽炎でも同じような体制に入っているらしく、数百メートル離れた水域を航行する陽炎からも緊張感が漂ってくるようだった。しかし、大賀艇長はそのような緊張とは無縁らしく、艦橋の防弾板にもたれかかるようにして、時折双眼鏡で周囲を観察していた。勿論、大賀艇長に弛緩した様子は見えなかった。ただ、自然体でいるというだけだ。

指揮官が必要以上に緊張した姿勢を見せても、乗員たちに悪影響を与えるだけだと考えているのだろう。

付き合いはそう長いわけではないが、伊原中尉は、大賀艇長の戦闘指揮官としての適性を信頼していた。

伊原中尉は、落ち着いた足取りで大賀艇長に近づいた。

臨時編成の部隊だから陸戦小隊長の戦闘配置は特に定められていないが、常識的には、艇指揮をとる艇長の近くにいたほうが状況の

把握もしやすいはずだ。

大賀艇長に近づくと、艇長以外には聞こえないような声でいった。「あの、陸軍大尉をどう思いますか」

ほんの僅かに眉をしかめながら、大賀艇長は伊原中尉をみやった。「質問の意図が見えんな」

大賀艇長は、つまらなそうな顔で答えた。伊原中尉は、気にした様子もなく続けた。

「情報畑の人間をどこまで信用したものですかね…あの航空偵察を実施した飛行機だって機関の回し者なのではないでしょうか」

やはり、大賀艇長はつまらなそうな表情を崩さなかった。

「自分の命までかかっているんだ。嘘はつかんと思うがな」

「我々はともかくロシア人は困…」

伊原中尉の不自然な語尾に、大賀艇長は怪訝そうな顔で振り向いた。

ばつの悪そうな評定をした伊原中尉の後に、どこか自信のなさそうな曖昧な笑みを浮かべたケレンスキー大尉が突っ立っていた。

あまりロシア人に聞かせた聞かせたくない話だったが、ケレンスキー大尉の様子をみる限り、詳細まではわからなくとも、何を話していたかくらいは気がついているのだろう。

間の悪そうな顔をした二人に見つめられたケレンスキー大尉は、居心地が悪そうに身動きした。

大賀艇長がわざとらしく咳払いをすると、作り笑いを浮かべながらいった。

「敵船の予想船速が幅広いものだから断定はできないが、戦闘がすぐに始まる可能性もある。ケレンスキー大尉は水野大尉と一緒に甲板室か、下甲板にでも待機してもらいたのだが」

どのみち敵艦が大口径の砲を保持していれば、駆逐艦の不知火の

艦体などは、どこにあたってもし紙障子のようなものだが、下甲板あたりにもいれば、小銃弾からは安全だろう。

だが、ケレンスキー大尉は、決然とした表情を見せると首を振った。

伊原中尉と大賀艇長は顔を見合わせた。どうにもこれまでのケレンスキー大尉の印象とは違っていた。

あるいは、これが彼の地なのかも知れないが。

ケレンスキー大尉は、生真面目な表情で、伊原中尉と大賀艇長の顔を交互に見ながらいった。

「その…本格的な戦闘に突入する前に、二人には言っておきたいことがあるのだ」

大賀艇長は眉をしかめた。ケレンスキー大尉に避難してもらいたいのは事実だった。

ケレンスキー大尉や水野大尉に何かあれば、ロシア人部隊と合流する際に意思疎通を図ることが難しくなる。

共同で防衛戦を行うためには、事情を知っていそうな二人の存在は不可欠だと考えていたのだ。

だが、ケレンスキー大尉は、そんな艇長の様子に気がついていないのか、更に身を乗り出してきた。

伊原中尉は、少々怪訝そうな顔をしていた。

「我々を友軍と呼んでくれた大賀艇長には感謝している。実際に現地に赴く伊原中尉にも敬意を表わさせてもらう。だが、その上で二人に改めて強調しておきたい。我々は「目標」のために命を賭している」

これまでの態度とは一変して、ケレンスキー大尉は、どこまでも真摯な目で二人を見つめていた。

ここまで一部のロシア人達が必至に守ろうとし、そしてボルシェビキが狙う「目標」とはなんなのか、伊原中尉と大賀艇長は、再び

顔を見合わせた。

伊原中尉が、そつと艦橋から見える範囲を見渡した。

厄介な水野大尉はどこにも姿が見えない。まだ甲板室にいるのだろう。

今ならばケレンスキー大尉も口を開くのではないのか。

「もしかすると「目標」というのは……」

しかし、伊原中尉は、最後まで言い終えることが出来なかった。前方を監視する見張り員の声が、不知火の露天艦橋に響いたからだ。

「どうやら敵船と邂逅したらしい。」

「今から船室に戻るのには逆に危険だ。ケレンスキー大尉は防弾板の影で待機しているように」

手早くそう命じると大賀艇長は、双眼鏡を敵船らしき船舶が接近してくる方向に向けた。

同時に不知火には戦闘配置がかかっていた。

不知火と陽炎は、急速に警戒態勢から戦闘態勢に移行しつつあった。

敵船の正体は、通常の河川用貨物船だった。

不知火のような、本来外洋を航行するために作られた船ではないから、平底で航洋力は低そうだった。

殆ど無動力の舾と変わらないような外観だったが、急流のアムール川での使用を前提にしてるためか、かなり大出力の内燃機が搭載されているらしい。

敵船の後部、機関が設けられている区画からは、黒々とした煙が立ち上がっていた。

平底の大して機動力も高そうに見えない河川用貨物船の割には、そのように大出力を発揮しているためか、それなりの船速が出てい

るようだった。

だが、立ち昇る激しい黒煙を除けば、一般の商船とかわりはない。不自然なのは確かだが、見張り員は何をもって敵船と判断したのか。

そう思って伊原中尉も双眼鏡を構えた。

敵船らしき貨物船に焦点を合わせると、思わず伊原中尉は、唸り声をあげていた。

貨物船の船橋には、赤軍所属を証明する真つ赤な旗が高々と掲げられていた。

真新しい、真つ赤な旗と対照的に、敵船の外形はかなりうす汚れていた。

おそらくアムール川が凍結する冬季の間、ずっと上流に係留されていたのではないのか。

アムール川沿いの人口密集地は、殆どハバロフスクやニコライエフスクのような海岸にずっと近い都市やあるいはシベリア鉄道の駅などに限られる。

上流では、小型の河川用貨物船といえども満足な整備を行えるような施設を備えた都市は無いのではないのか。

冬季のアムール川が凍結する時期はかなり長いらしい。年にもよるが、長いときは半年近く河川の航行が不可能になるらしい。

河口近くのニコライフスクやハバロフスクではそうでもないようだが、上流では雪解け直後の急流も合わせると河川航行が危険な時期は長くなるだろう。

それを考えると、河川用貨物船が冬季の間凍結したアムール川上流に係留されているのは不自然だった。

もしかすると、たまたま上流を航行している際に、予想よりも早かった河川の凍結に巻き込まれて、下流への脱出が不可能になった

のかも知れない。

例年であれば、そのような足止めを食らったとしても、整備の間や運荷仕事の遅れだけで済むが、今年だけはそういうわけには行かなかった。

ボルシエビキの革命に巻き込まれたからだ。

この敵船も、上流で係留している間に、革命に巻き込まれてここまで進出してきた赤軍に接收されたのではないのか。

そう考えれば、通常の河川用貨物船が、赤軍旗を上げているわけもわかるような気がした。

赤軍旗を上げている時点で、敵船の正体は判明しているようなものだが、大賀艇長は意外なほど慎重だった。

「前方の貨物船に信号を送れ。本文、本艦はロシア正統政府より治安維持を依頼された日本海軍……」

そこまで言うと、大賀艇長は双眼鏡を目に当てて凝視した。敵船の船名を読み取ろうとしていたようだが、すぐに諦めた。

角度が悪いし、汚れで船名のマーキングも見えないかもしれない。「船名は省略、これより貴船を臨検……」

再び大賀艇長の言葉が止まった。

だが、それは大賀艇長の意思によるものではなかった。

伊原中尉は、半分信じられない思いでその音を聞いていた。

間違いなく銃弾の飛翔音だった。

わずかに遅れて敵船の方向から銃声が聞こえた。

いつの間にか、彼方から近づいてくる敵船の船首付近に銃兵らしき人影が見えていた。

思わず伊原中尉は振り返っていた。

確かめるまでもない、不知火のマストには旭日旗が掲げられてい

る。

どうやら赤軍は相手が日本軍でも構わないらしい。

もしかすると、最初の銃撃は単なる誤射だったのかもしれない。あるいは緊張した敵兵の判断ミスか。

一発目の発砲から、二発目までの中途半端な間隔から、伊原中尉はそう考えていた。

しかし、散発的だった敵船からの銃撃は、たちまち豪雨のような激しさになった。

すでに一発目が誤射であったのかどうかなど関係無かった。

これだけ発砲しているのに銃撃が終了していないということは、少なくとも指揮官の制止はされていないのだろう。

これは赤軍の意思であると解釈してもよいのではないのか。

今度は、大賀艇長の反応は早かった。

と言うよりも、臨検を命じる信号にあまり期待していたとは思えない。

単に、臨検を無視した敵船に射撃する口実のためではないのか。

だが、予想以上に敵船の反応は強硬だった。

ただし、先制攻撃を許したとはいえ不知火と陽炎が敵船に大して優位であることに変わりはなかった。

敵船からの銃撃の密度は高かったが、あまり不知火の脅威にはなっていないかったのだ。

いくら動揺の少ない河川航行とはいえ、船上からの射撃がそうそう命中するはずもない。

第一、小銃の射撃距離としてはまだ長過ぎるのではないのか。

小銃弾の到達距離はもつと長いが、直射弾道をとる小銃で照準す

るにはこの距離はつらいものがあるだろう。

事実、着弾は不知火からかなりバラけていた。

継続射撃で山なり弾道をとることが出来る機関銃ならば、船上の人間に対して有効打を与えられるかも知れないが、少なくとも今のところ敵兵が機関銃を使用する様子はなかった。

勿論、銃撃を受けているのは事実だから、無視することもできない。

不知火の構造物に対して、小銃弾で打撃を与えるのは難しいだろうが、上甲板上に射撃を食らえば、乗員に無視できない被害が出るのではないのか。

特に不知火の艦橋は露天だから、近距離であれば小銃弾でも指揮要員を無力化することは可能なはずだ。

だが、激しい銃撃にも関わらず、大賀艇長は、落ち着き払って敵船への射撃を命じた。

艇長と同じく、実戦経験を持つ砲員もかなり冷静だったようだ。

艦橋両脇の8センチ単装砲は、大賀艇長の命令から間髪を入れずに発砲を開始していた。

両舷後方及び艦尾の8センチ砲は、角度が悪いために発砲できないようだ。

そのかわり、不知火の発砲を見た陽炎も、わずかに遅れて発砲を開始していた。

原型の東雲型駆逐艦とは異なり、不知火と陽炎の備砲は、搭載数は減らしたものの、57ミリ砲と8センチ砲の混載から、強力な8センチ砲のみに切り替わっていた。

本来は、射程や砲弾の炸薬量に勝る8センチ砲による対地支援を前提に計画されたものだったが、その打撃力は水上砲戦においても有効だった。

初速は小銃弾の方が高いが、銃砲弾の重量が大きいので、8センチ砲の方がより低伸する。

それに、小銃と、艦載砲では使用する照準具の精度に大きな差がある。

勿論一発あたりの損害は比較にならない。

小銃弾は、人間などの軟目標に直撃しなければ意味が無いが、8センチ砲弾は榴弾だから、炸裂さえすれば、一発でも致命的な損害を与えることが出来る。

だから有効打を与える可能性ならば、小銃弾の猛射よりも狙いすました8センチ砲の方がはるかに高い。

しかし、不知火と陽炎の二隻が全力で発砲しているにもかかわらず、敵船からの銃撃が途絶える様子は無かった。

双方が全速で接近しているため、河川用の低速船とはいえ、相対速度は30ノットを超えているのではないのか。

この速度は、砲員の照準を狂わせているらしい。

敵船からの銃撃も同様に、ほとんど命中弾は無かった。

大賀艇長は、苦虫を噛み潰したような表情で敵船を見つめていた。何発か、8センチ砲弾が命中している気配はあるのだが、銃兵や機関部に損害を与えるまでには至っていないようだ。

もしかすると反対舷まで突き抜けてから炸裂しているのかもしれない。

双方ともに致命的な損傷を与えることのないまま、接近しつつある三隻の角度がやがて変化してきた。

ほぼ真正面に敵を捉えていたものが、やがて角度がついて、反航戦に近づいていたのだ。

不知火と陽炎は、敵船を右舷側に捉えるように、アムール川の清国よりを航行していた。

逆に敵船は、不知火を避けるようにロシアよりを航行していた。

このまま対敵姿勢に角度が付けば、舷側後方や艦尾の8センチ砲もすぐに発射できるのではないのか、伊原中尉はそう考えた。

角度が急になれば左舷側の方は使えなくなるかもしれないが、それまでに発射弾数で敵を制圧できるかも知れない。

そこまで考えた所で、伊原中尉はどこからの視線を感じた。

慌てて周囲を見渡したが、勿論艦橋要員のほとんどは敵船に注視している。

視線を感じたのはもっと遠くからだった。

伊原中尉は、視線を探して敵船の方向を見た。そして中尉は絶句することとなった。

敵船の長い舷側に、真っ白い塊が何十、いや何百も浮かんでいたからだ。

改めて確認するまでもなかった。

それはスラブ人の真っ白な顔だった。

そして、舷側に配置された百人を超える敵兵からの射撃が始まった。

よく考えれば分かることだった。

ロシア人部隊の約一個中隊に対して、別働隊とはいえ、逆上陸をかけようとする部隊が、小規模であるわけではない。

おそらく貨物船の収容限界など無視して兵員や装備を詰め込んでいるはずだ。

それに、不知火のようにカッターを多数搭載しているわけではない。

敵船は平底で喫水も浅そうだから、浅瀬に無理矢理に突っ込ませて座礁させた上で、兵員を上陸させるつもりではないのか。

勿論、専用の座礁型揚陸艦ではないのだから、回収は難しくなる。

事実上、敵船は使い捨てにするつもりなのだろう。

だから敵船に載せられているのは、迅速な上陸が可能な、重装備を欠いた軽歩兵部隊でしか無いはずだ。

逆にいえば、軽装備の部隊で、敵部隊を確実に制圧しようとするれば、大兵力を展開させれば良い。

おそらく敵部隊はそう考えたのだろう。

あるいは、別働隊にまで、それだけの規模を割けるほど敵部隊の頭数は多いのかもしれない。

何にせよ、一個中隊規模の一斉射撃は脅威だった。

今まで船首付近からしか発砲して来なかったのは、敵船から見ても角度が悪かったためだろう。

だが、反抗戦となった今では舷側からでも射撃は可能だし、距離も近くなっているから小銃弾でも命中を期待できた。

実際に、盛んに砲撃を行っていた右舷一番砲の射撃が止まっていた。

艦橋から見下ろすと、砲側の兵員が倒れ込んでいるのが見えた。

うめき声や身動きは確認できるから、負傷してはいても意識があるようだが、銃弾の雨の中を救助するのは困難だった。

こういった場合に備えて、砲員を支援するために陸戦隊の兵員を待機させていたのだが、彼らも銃撃を避けて艦橋を盾にして動きが取れなかった。

その陸戦隊員は、一瞬艦橋を見上げて伊原中尉を見つめると頷いた。

すぐに陸戦隊員は上甲板を匍匐しながら負傷した兵員を回収しに砲側へと近寄っていった。

まだ距離があるから、匍匐前進で被弾面積を極限まで小さくしていけば兵員の回収は可能だろう。

ただし、そのような状態では砲の操作は不可能だ。

こちらには敵部隊よりも強力な火砲があるのに、制圧火力で十分に威力を発揮することができなかった。

敵部隊の銃撃は陽炎にも向けられているらしい。

陽炎からの砲火も心なしが、弱まっているような気がした。

伊原中尉は、打開策を一瞬考え込んだが、結論はすぐに出た。

敵部隊との間に河川があるから妙に考えてしまいが、相手はただの軽歩兵だった。

通常の陸戦と戦法を変える必要などなかった。

伊原中尉はそのような事態に備えて、支援火器の機関銃を仮設の銃座に備えさせていた。

仮設の機銃座はすでに国枝兵曹長指揮のもとで稼動状態にあった。この距離ならば機関銃でも十分に制圧が可能であるはずだ。

轟く銃砲声を無視するような大声で、機銃座の国枝兵曹長に直ちに発砲を命じた。

不知火から、機関銃の発砲が始まったのはその直後だった。

国枝兵曹長は射撃命令を予期していたのだろう。

間髪を入れずに発射された機銃弾は、敵船にとって意表をつくものであったようだ。

一連射目は敵船の舷側近くの川面に着弾しただけだったが、敵船舷側の着弾箇所近くに陣取る敵兵からの射撃が弱まったような気がする。

そして、一連射で照準を掴んだ銃手による本射が開始された。

陸戦小隊が装備する機関銃は、防御用とも言える重量のある重機関銃ではなく、前進する半個小隊を援護するために、随時移動して

射撃を行うためのルイス軽機関銃だった。

現設計は米国人が行ったらしいが、欧州での戦闘で英国軍が最初に採用し、そのライセンス生産の一部を任された日本陸海軍でも直ちに制式採用されていた。

日英での生産数は多く、実戦での使用例も多い。

銃身は空冷式で、円形弾倉を採用していたから継続射撃能力は大して高くはないが、小銃に比べれば雲泥の差があった。

陸戦小隊では、軽機関銃各艇に分乗する半個小隊ごとに一挺づつ、計二挺を配備していた。

本射を開始したのは不知火からだけではなかった。

不知火からの射撃を観測した陽炎からも直ちに射撃が行われた。

機関銃二挺による射撃は圧倒的だった。

銃身や基幹部の加熱による故障を避けるための断続的な射撃とはいえ、程度な散布界の射撃が敵船の舷側に降り注いだ。

本射が開始されると、今度は目に見えて敵船からの射撃が弱まっていた。

機関銃弾で死傷した敵兵は大して多くはないと思うが、集中した着弾に頭を上げることができないようだった。

それに、陸戦小隊からの銃撃は、軽機関銃によるものだけではないかった。

ある意味では、軽機関銃よりも剣呑な火器が敵船に撃ちこまれた。軽機関銃座に寄り添うように設けられた銃座から、迫撃砲弾が発射されていたのだ。

3インチ迫撃砲はルイス軽機関銃と同様に、英国制式火器のライセンス転用と言う形で採用された兵器だった。

簡易な構造ながら、小隊支援火器としては十分な威力を持っており、弾道が山なりになることから、塹壕戦では有力な火器だった。

陸戦隊では、本来一個小隊に一基を装備することになっていたが、二隻に分乗する伊原小隊では、特に半個小隊ごとに一基づつ、小隊で二基を装備していた。

さすがに継続射撃による着弾で照準を修正できる軽機関銃と比べると、迫撃砲の命中率は低いようだった。

撃ちこまれる迫撃砲弾は、川面で虚しく炸裂するだけだった。

ただし、敵船に向かって撃ちこまれる迫撃砲弾は、迫撃砲によるものばかりではなかった。

甲板室などの遮蔽物の陰に隠れた小銃手の何人かは、小銃の銃口にアダプターをつけて小銃擲弾を放っていた。

戦闘に入れば、小銃以外のすべての火器を使用してよろしい。伊原中尉は戦闘前にそう命じていた。

その効果は少なくなかったようだ。

命中する擲弾は少ないが、敵兵の頭を上げさせない効果は十分に発揮させていた。

そして、こちらに敵兵が陣取る陣地を破砕できる重火器がある以上は、敵兵に頭を上げさせないことで十分であった。

敵兵からの射撃が弱まってすぐに、8センチ砲に、予備砲員の陸戦隊員が取り付いていた。

陸戦隊員は、本来の砲操作員である不知火個有の乗員ほどではないが、予備砲員とはいってもその多くは、元々艦隊勤務の砲術科の班員だったから、操砲も手馴れたものだった。

すでに敵船との距離はかなり狭まっている。

それに角度がつきはじめているから敵船は、無防備な横腹を晒していた。

そのせいか、次々と発射される8センチ砲弾は、これまでの命中率が嘘であるかのように、面白いように敵船に命中していた。

命中弾が連続するものだから、敵船に訪れた破局がいつ始まったのか、その損害を与えたのは不知火か、陽炎か、それとも擲弾か迫撃砲弾だったのか、それは最後までわからずじまいだった。

不知火と陽炎は、緩やかな単縦陣を保ったまま、敵船の右舷側を反航して最接近していた。

すでに敵船からの射撃はひどく散発的なものになっていたが、敵船を通過するときも8センチ砲の射撃は継続していた。

ただし、命中率の低い迫撃砲は射撃を中断させていた。

いくら何でも貴重な砲弾を川面に投げ捨てているようなものだからだ。

軽機関銃の射撃中止は命令していないが、こちらも連続した発砲はしていなかった。

思い出したように敵船から小銃が発射されたときに、威嚇のために撃ちこむぐらいだった。

最接近時には、それぐらい敵船の脅威は弱まっていた。

つい先程までその射弾が脅威になっていたとは思えないほどだった。

すでに敵船の反対舷側に引きこまれた負傷兵の手当が始まっていた。

報告では、銃傷による戦死者は出ていないらしい。

遠距離で放たれた小銃弾では、十分な威力を発揮出来なかったのかもしれない。

重傷者もいるようだが、命に別状はないらしい。

手当をされた兵員の何人かは、まだ戦える状態にあるから、あれだけ激しい銃火にも関わらず、不知火の戦力はほとんど低下していなかった。

これに対して、敵船の被害は甚大だった。

やはり8センチ砲弾は敵船の構造に対して致命的な損害を与える威力を持っていたようだった。

氷結するアムール川で使用するためか、敵船は頑丈な構造を持っていたようだったが、中口径砲の連続した射撃には対抗できなかった。

最接近時に観測した様子では、敵船の舷側に幾つか破口が生じていた。

その内の幾つかは危険なほど水面に接していた。

敵船は、連続した着弾にも関わらず、原型を維持している頑丈な構造は持っているが、戦闘艦のように装甲を持っているわけではない。

おそらく船内では浸水が発生しているはずだ。

しかし、最接近時にも継続した8センチ砲弾の弾着があつたにも関わらず、敵船からの反応は鈍かった。

散発的な銃撃もすぐに停止していた。

不知火と陽炎が与えた打撃は無視できないが、あれだけの兵員をすべて無力化出来たとは思えない。

あるいは、敵船内で人数をかけた損害修復でも行なっているのだろうか。

不気味な沈黙を保った敵船を横目で見ながら、不知火と陽炎は、一度敵船を通過して上流に抜け出していた。

一度距離をとってから回頭して、今度は敵船を追い抜かすように機動するつもりだった。

ただし、敵船に与えた被害はかなりのものように思えるから、もしかすると再度接近する前に、敵船は沈没しているかもしれない。

敵船からの反応がなくなっていた理由は、上流部で回頭をする

頃には判明していた。

それまで死角になっていた敵船の反対側に幾つもの物影が見えた。最初は不要な重量物を投棄しているかと考えていた。

これも敵船から遠ざかって初めて気がついたのだが、予想以上に敵船の舷側に与えた被害は大きかつたらしい。

目で見てすぐに分かるほど敵船は、損害を受けた右舷側に大きく傾斜していたのだ。

応急修復など不可能だった。

敵船は徴発された貨物船にすぎない。当然船内の隔壁は最小限しか無いだろう。浸水は即沈没に繋がるはずだ。

今浮いているのさえ奇跡に近いのではないのか。

だから左舷側の重量物を捨てさって、一時的にでも傾斜を復元しようとしているのではないのかと考えていた。

しかし、敵船の左舷側の物体に動きが見えたことでその考えは早々に捨て去られた。

双眼鏡で観測すればすぐに分かったのだが、左舷側の物体は人間だった。

つまり、敵兵は、沈もうとする敵船から脱出しようとしていたのだ。

おそらく散発的な銃撃は殿に残ったものだったのだろう。

それで事態は判明したが、彼らの行動が成功するとは思えなかった。

解氷したとはいえ、アムール川の水温はまだ低かった。

そんな川面に十分な装備もなく飛び込んだ所で、川岸に辿り着く前に溺死してしまうはずだ。

運良く河を上がったとしても、すぐに衣類を乾燥させなければ凍死するだけだが、人口密集地どころか、人家の全く見えないこんな場所で簡単に衣類を乾燥させるような熱源があるとは思えない。

彼らは恐らく全滅するだろう。

第一、船舶という輸送手段を失った時点で、彼らが「目標」のいる中洲にたどり着くことは不可能になった。

だから、彼らが生存しようがどうなるうが、無力化出来たことに間違いはなかった。

不知火と陽炎は、再び単縦陣で敵船に今度は後方から接近していた。

敵船にはすでに動きはなかった。

機関部からも人員は対比したのだろう。

黒煙も上がっていないかった。

そして再接近する前にゆっくりと敵船は横倒しになって沈んでいった。

不知火と陽炎が敵船が沈んだ水域を通過するときには、すでに川面に浮かぶ僅かな漂流物以外敵船の存在を示すものは残っていないかった。

すでに別働の敵部隊は中洲にたどり着いているかもしれない。

不知火と陽炎は船速を早めながら、敵船の沈没水域を離れていった。

その姿を一つ、また一つの姿を消しながら、川面に浮かぶ敵兵が見つめていた。

1919シベリア遡行5

艦橋で双眼鏡を覗き込む伊原中尉の視界には、予想外の光景が広がっていた。

不知火と陽炎が到着した時、すでに中洲への渡河点は敵部隊によって制圧されていた。

伊原中尉は、無意識のうちに出ていた自分の低い罵り声に我に返って、そつと隣で同じように双眼鏡を構えているケレンスキー大尉を盗み見た。

ケレンスキー大尉の顔は真っ青になっていた。

心なしか、双眼鏡を持つ手も震えていた。

無理もなかった。

中洲にいる「目標」は、ケレンスキー大尉達ロシア帝国軍人の君主となるべきマリア皇女とその妹君のアナスタシア皇女であるのだから。

敵船との交戦を終え、中洲への分岐点へ急ぐ不知火の艦橋で、ケレンスキー大尉は、周囲を気にしながら、大賀艇長と伊原中尉に「目標」の正体を告げていた。

周囲の他の将兵に聞かれることよりも、水野大尉に「目標」の情報を二人に伝えた事実を知られたくない、ケレンスキー大尉はそう考えているようだった。

おそらく、ケレンスキー大尉は、水野大尉を派遣した日本軍の中樞から、実施部隊への情報伝達を禁止されていたのだろう。

「目標」の正体を知れば、確かにそれもうなずける話だった。

軍中樞は、ロシア帝室最後の生き残りらしい二人が、無事に八バロフスクに到着して、シベリア派遣軍司令部の庇護下に置かれるまで極秘でおきたかったのではないのか。

作戦途中で赤軍などに日本軍の干渉が露見した場合、内戦干渉だと抗議されるおそれがある。

勿論、シベリア派遣軍に戦力を派遣した日本を始めとする国際連盟列強各国は、ボルシェビキ政権を正統政府として認めていないが、アメリカなどの中立国からの干渉は避けたかったはずだ。

だからハバロフスクという大都市で、皇女を守り立てたロシア正統政府を発足させて既成事実を作り上げてしまつつもりだったのだろう。

しかし、大賀艇長と伊原中尉は、その情報の制限は行き過ぎだと考えていた。

ケレンスキー大尉が危惧したように、実際に実施部隊の作戦を立案する現地指揮官が正確な情報を把握していなければ、誤った憶測によつて危険な行動を取る可能性もあった。

極端な話、もしも大賀艇長や、伊原中尉が「目標」を何らかの物資だとも誤認していれば、敵部隊の殲滅を優先して、「目標」など後で回収すればいいとばかりに、巻き添えにするような作戦を実施してしまうかもしれない。

幸いなことに、敵船を殲滅した不知火と陽炎は、「目標」を敵部隊から防衛すべく、中洲へと突き進んでいる。

この段階で情報を制限する必要性は薄い、ケレンスキー大尉はそう考えたのだろう。

中洲に展開するロシア人部隊、その正体も今では、ケレンスキー大尉の原隊であるヴォスネセンスキー軽騎兵連隊の生き残りであると判明していた。

元々ヴォルスネセンスキー連隊は、前ロシア皇帝ニコライ2世が、その次女であるタチアナ皇女を名誉連隊長に任命するほどロシア皇室と縁の深い、事実上の近衛部隊ともいえた。

近代になってから、明治維新によって、これまでの組織と隔絶した軍組織を整備しはじめた日本人にはにわかには理解し難い話だったが、元々西洋の連隊は軍組織上の結節点というよりも軍隊、あるいは傭兵集団の基幹となる組織であったという。

元々は、封建貴族などが有する部隊が連隊であり、ある君主の軍隊とは、その貴族たちが戦時に持ち寄った連隊の集まりであるらしい。

日本で言えば、藩兵が連隊であるようなものだと伊原中尉は解釈していた。

最も、伊原中尉も大賀艇長も、明治維新以後の日本軍が組織された以後の生まれだから、藩兵といっても実感があまりなかった。

未だに藩閥は強かったが、それはその地域の出身というわけであって、藩閥が独自の組織を有しているわけではない。

勿論、日本が近代的な軍を編成するにあたって参考にしたのは欧州各国の軍隊だった。

しかし、日本軍を組織編成するにあたって参考にしたのは、軍の編成単位や戦術であって、歴史ではなかった。

だから、未だに制度として英国軍などに残っている名誉連隊長という概念は、日本では軍人であってもよく知る人間は少なかった。

名誉連隊長、あるいは連隊所有者というのは、かつては実際に連隊を所有する貴族などであったという。

かつての封建制度であっても、必ずしも連隊の所有者が、その指揮官であったわけではない。

日本で言えば、藩兵の所有者は藩主であつても、実際に戦闘指揮官となるのは藩主ではなく、家老が務めているようなものであろう。

近代軍では、当然連隊を含む軍組織の所有者は国家であるし、その最高指揮官は国家元首である大統領や、国王となる。

連隊長は、あくまでもその単位の指揮官にすぎない。

ただし、名誉職としての連隊所有者や伝統的な連隊の独自性を残している欧州国家は少なくないらしい。

ロシア帝国や英国もそうであり、正規の指揮官である連隊長とは別に、名誉連隊長とよばれる連隊所有者を抱いていた。

ロシア帝国の連隊が数多く、また名誉職に過ぎないとはいえ、ニコライ2世が、適当な部隊の名誉連隊長に愛娘を任命するはずもなかった。

連隊長を始めとする連隊士官の多くは帝室に忠誠を誓う貴族出身のものばかりだったし、下士官兵も政治的信頼性を重視して選抜されていたらしい。

そのヴォルスネセンスキー軽騎兵連隊も、悪化する東部戦線へ出征することとなった。

前線に投入された初戦で負傷したケレンスキー大尉は、すぐに後方へと療養のため戻されたが、連隊自身も戦力を半減させるほどの損害を被って、再編成のためモスクワの原駐地に帰還していた。

しかし、ヴォルスネセンスキー軽騎兵連隊が再編成されることはなかった。

彼らが原駐地に帰還するのに前後してロシア革命が起こったからだ。

その後、彼らも革命の混乱に巻き込まれたらしい。親帝室派のヴォルスネセンスキー連隊は、革命政権にとっては厄介な扱いをうけたのではないのか。

ケレンスキー大尉は口を濁したが、この革命前後の時期には、連隊員もかなりの苦勞をしたのだろう。

さらに、去年になってチェコ軍団の蜂起が伝えられると、ヴォルスネンスキー連隊もこれに合流してシベリアへ逃れようとした。この頃には革命政府からの迫害も本格化しており、貴族や郷士の多かつた連隊員や家族の中には肅清されたものも多かつたようだ。

だが、連隊員達のシベリア鉄道での脱出が半ばまで進んでいたときに、とてつもない情報が入ってきた。

行方不明となっていた皇帝一家は幽閉されており、しかも一家の処刑命令が出される寸前だというのだ。

情報源に接したのは連隊中枢のごく一部だけだったが、情報の確度はかなり高いものであったらしく、ヴォルスネンスキー連隊は、皇帝一家の救出に乗り出した。

その結果、皇帝や皇后の救出は叶わなかったものの、四皇女の3、4女であるマリア皇女とアナスタシア皇女の救出には辛くも成功した。

しかし、ボルシェビキは2皇女の脱出を阻むためにかなりの警戒網を構築したらしく、ヴォルスネンスキー連隊主力が警戒網のすきを突いて皇女とともにモスクワ周辺から脱出するために一冬を越さなくてはならなかった。

それでもボルシェビキの情報網から完全に逃れることは出来ず、連隊は日本軍の援助を受けるために連絡将校としてケレンスキー大尉を派遣した。

これがケレンスキー大尉が知りうる情報の全てだった。

すでにヴォルスネンスキー連隊主力はハバロフスクに到着しているらしい。

皇女達と同行しているのは、軽装備のわずか一個中隊に過ぎない。戦力としてはあまりにも過小だったが、厳重な警戒網をシベリア鉄道を使いながらすり抜けるためには、小集団で目立たないように

行動するしか無かったのだ。

そのように逃げ隠れしながら進んできた一行だったから、その火力には大して期待出来なかった。

保有する火器はせいぜいが小銃で、拳銃やなかには刀剣しかも持ち合わせていないものも少なくないらしい。

そのような集団だったから、数を頼みに攻め寄せる敵集団に対抗できずに渡河点を明け渡してしまったのではないのか、最初は伊原中尉はそう考えていた。

しかし、よく観察すると、それにしても奇妙なことに気がついていた。

すでに騎兵を主力とする敵集団は渡河点を超えているが、その渡河点周辺で戦闘が勃発した形跡がないのだ。

渡河点は敵集団によって制圧されているが、さしたる防御部隊が配置されている形跡もなかった。

それに対して、渡河点の反対側に位置する、アムール川支流の中心部に向かってつき出すように伸びている突端部では、小銃のものばかりとはいえ、激しい銃声が聞こえていた。

銃撃の密度から判断すれば、敵味方共にかんりの戦力を維持しているようだった。

渡河点をめぐって激しい攻防戦を繰り広げてから、この場所に押し込まれたとすれば、味方部隊の戦力の消耗が少ない気がする。

中洲の突端には、漁師の休憩場所か避難場所でもあるのか、丸太で組まれた質素な番屋が建っていた。

銃声は、その番屋を囲むようにして起こっていた。

伊原中尉は、しばらく考えてから、ようやく事態に気がついた。

おそらく、ヴォルスネセンスキー連隊の将兵たちは、寒風を凌ぐために皇女達を番屋に入れたのだろう。

そして、皇女達のいる番屋を守るためにその周囲に陣地を展開させた。

番屋周辺に十分な防衛体制を築くためには、数少ない戦力を集中させる必要がある。

だから、渡河点は無防備なまま放置され、その代わりに番屋周辺で激しい防衛戦が起こったのだろう。

だが、ヴォルスネセンスキー連隊の将兵たちのそのような判断は間違っていた。

皇女達のいる番屋を防衛するのが最優先であるのは当然なのだが、そのための手段として番屋周辺への展開を選んでしまったために、逆に皇女達たちを危険に晒すこととなっているのだ。

もしも彼らが、少数のみを番屋に配置して、主力を渡河点周辺に置いた場合、敵部隊が無防備に渡河を行なっている時点で攻撃が出来たはずだ。

そうすれば敵部隊の中洲への渡河を完全に阻止することはできなくとも、渡河を大きく遅滞させることは出来たはずだ。

番屋周辺に兵力をどうしても展開させたいのであれば、最初に渡河を妨害した時点で後退しても良かったはずだ。

しかし、ヴォルスネセンスキー連隊の将兵たちは無謀にも、番屋を小銃の射程内に捉えた距離での交戦を余儀なくされている。

もしかすると、彼らは、他の渡河点からの上陸を警戒して番屋周辺に立てこもるしかないと考えたのかもしれない。

だが、敵部隊の規模は彼らに対して多い。騎兵部隊も伴っているようだから、安全な渡河点は地形を見るかぎり一箇所しか無いはずなのだ。

幸いなことに敵部隊にも野砲や、もつと簡易な迫撃砲のような重火器は保有していないようだ。

もしも敵部隊が十分な射程を有する重火器を有していれば、番屋を直接視認できる地点に観測部隊が進出した時点で状況は決していたはずだ。

歩兵による小銃射撃のみで観測部隊を無力化させるのは難しいから、為す術もなく番屋は完全に破壊されていただろう。

敵部隊は、歩兵部隊の援護のもとで騎兵部隊が散発的な襲撃を繰り返しているようだ。

戦果は少ないが、防衛部隊に与える影響は小さくなかった。

このままでは薄皮を剥がされるようにして防衛体制は崩壊するのではないのか。

敵部隊が散発的な襲撃を続けているのは、河川からの増援部隊の到着を待っているのだろう。

あるいは、余計な損耗を避けているだけかもしれない。

しかし、防衛体制に十分な損耗を与えたか、あるいは増援部隊が到着して彼我の戦力差が圧倒的なものになれば、大攻勢へと転移するはずだ。

大部隊による包囲攻撃を受けてヴォルスネセンスキー連隊の残存部隊は消滅し、「目標」も永遠に失われるだろう。

渡河点から番屋までの縦深を放棄した時点で、彼らの命運は決していた。

敵部隊の河川からの増援が消滅し、その代わりに不知火と陽炎という戦力が出現したが、それでも戦況を大きく変化させることが出来るかどうかは分からなかった。

不知火と陽炎に搭乗した陸戦隊は重火器を保有する有力な部隊だが、その戦力単位は中洲で戦うヴォルスネンスキー連隊の約一個中隊よりも更に少ない一個小隊程度にすぎない。

かれに不知火と陽炎の備砲を加えてもここまで悪化した戦線を大きく動かす力があるとは思えなかった。

戦力投入のタイミングを間違えば、重火器の展開を終える前に、敵の大部隊によって一蹴されて壊滅するかもしれない。

残された手段はひとつしかないように思われた。

ケレンスキー大尉が言っていたように、「目標」である皇女のみ救出に目的を絞り込むのだ。

陸戦小隊は、上陸した後に、敵部隊の襲撃から皇女を引き離して、不知火と陽炎にお連れした上で、二隻共に撤退するのだ。

勿論、ヴォルスネンスキー連隊員達の回収は考慮されない。

というよりも積極的に彼らを囷か全滅を前提とした遅滞防御部隊として活用せざるを得ないだろう。

元々彼ら全員を回収することは、不知火と陽炎の容量から言って不可能だった。

おそらく陸戦小隊の重火器も現地で放棄するしかなくなるだろう。それだけ迅速に行動する必要があるしかなかった。

むしろ、中洲に残されるヴォルスネンスキー連隊員に最期まで使ってもらったほうが有益になるだろう。

それだけに艦橋から戦況を見守るしか無い伊原中尉は、焦りの色を隠すことができなかった。

まだヴォルスネンスキー連隊員たちが防衛線を維持している間に手早く上陸しなくてはならない。

そうでなければ重火器の展開など不可能だ。

一時的にでも重火器を使用して敵部隊を遠ざけなければ、皇女を

安全に不知火まで移譲させるのは難しいだろう。

しかし、指揮官である大賀艇長から、陸戦隊のカッターへの移乗命令はなかなか出なかった。

すでに移送に手間取りそうな重火器などは船上でカッターに固定されているから、あとはカッターを水面におろして、小銃など携帯火器のみをもった身軽な陸戦隊員達が移乗すれば準備は終了する。

だが、大賀艇長は、ついさっきから通信室に籠っていた。

一体どこからの通信なのかはよく分からなかった。

もしかすると、陸上のヴォルスネンスキー連隊員からの通信なのかもしれない。

効果的な展開地点などの情報を伝達しているのではないのか。

だが、今は巧緻よりも拙速が必要な時だった。

すぐにでも陸戦隊を発信させて、素早く離脱したほうが安全な筈だった。

伊原中尉とケレンスキー大尉が苛々としながら艦橋で待機していると、ようやく大賀艇長が通信室から出て来て艦橋に戻ってきた。

怪訝そうな表情の大賀艇長に構うことなく、伊原中尉は勢い込んで陸戦隊の移乗命令を求めた。

いつにない早口で畳み掛けるように言われた大賀艇長は、始めて伊原中尉の存在に気がついたように、戸惑ったような表情で向きなおった。

伊原中尉は、そんな不審な大賀艇長に対して、熱心に現状の推測を説明した。

早いうちに陸戦隊を上陸させて、皇女達とともに不知火に引き上げる。

また重火器は迅速な撤収を果たすために現地に投棄するが、ヴォルスネンスキー連隊に引き渡すことを前提に、弾薬はすべて移送する。

大雑把な作戦方針はその程度だった。詳細は上陸してから決定するしか無い。

だが、大筋ではこの状況ではこれしか無いはずだ。

伊原中尉は、そのような自身の判断を余すことなく大賀艇長に伝えた。

足りない部分や、伊原中尉の知りえないヴォルスネンスキー連隊に関する情報はケレンスキー大尉が補足した。

気がつく二人の言葉は止まっていた。すでに説明は終わっていた。

二人とも言葉は尽くしていた。あとは指揮官である大賀艇長の判断を仰ぐだけだった。

しかし、いつになく大賀艇長は慎重だった。

大賀艇長は、しばらく無言のまま二人から視線を逸らして、中洲の番屋と空へと顔を向けていた。

もしかすると先ほどの通信は大賀艇長の判断を左右するようなものだったのかもしれない。

伊原中尉とケレンスキー大尉は顔を見合わせてから、さきほどの通信の内容を尋ねようとした。

だが、それよりも早く、大賀艇長は二人に向き直っていた。

いつの間にか、水野大尉も艦橋に現れていた。

水野大尉も通信室に籠っていたらしい。

いまは、水野大尉の動向も気になったが、それよりも大賀艇長の判断を確認する方が優先された。

大賀艇長は、ひと言ひと言をはっきりと発音しながら言った。

「陸戦隊の搭載艇への移乗を許可する。弾薬類は規定量を搭載。水野陸軍大尉及びケレンスキーロシア帝国軍大尉もこれに同行を要請する」

伊原中尉は頷くと艦尾に向けて走りだそうとした。

すでに他の陸戦隊員たちはカッター近くで待機させている。

逸る心を抑え切れないのだろう、ケレンスキー大尉は、すでに走り出していた。

水野大尉は、それ一瞥してから、ケレンスキー大尉を監視するかのようには追いかけていた。

そのように思えたのは、ケレンスキー大尉から「目標」の正体やヴォルスネセンスキー連隊のことを打ち明けられたせいかもしれないかったが。

伊原中尉も彼らを追いかけようとした。

だが、それよりも早く大賀艇長の言葉が続いた。

話はまだ終わってはいなかったらしい。

伊原中尉は、訝しげな表情で振り返っていた。

だが、大賀艇長は、すでに艦首の方に向き直っていてその表情はうかがいしれなかった。

どのみち大して気にするようなことでもないのかもしれない。

移乗した後の待機時間は長くなるかもしれない。

大賀艇長はそう言ったが、そのようなことがありうるとは思えなかったからだ

だが、伊原中尉の予想は覆された。

伊原中尉やケレンスキー大尉を含む陸戦隊員達は、素早く水面に降ろされたカッターへと移乗した。

予め重火器はカッターに固定しておいたから、移乗といっても携帯するのは小銃程度の軽装備だった。

だから移乗作業そのものは極めて短い時間で終了した。

その後は不知火とカッターとをロープで結びつける作業が発生した。

機動力のある不知火で揚陸地点直前までカッターを曳航するため

だ。

だが、何度も繰り返し行われた事前の訓練のお陰で、実戦といえども係留作業も短時間で終了した。

揚陸準備はこれで終了していた。見たところ、僚艦の陽炎でもほぼ同じ時間で作業は終了していたようだった。

日本海軍が実戦において揚陸作業を行った例は今まであまりないから、これは貴重な戦訓となるはずだった。

しかし、肝心の不知火は沈黙したまま揚陸地点への移動を開始しようとしなかった。

陽炎もその場に留まったままだったが、こちらは旗艦である不知火が行動しようとしなからだろう。

流れのある河川の中にいるのだから、推進力のないまま静止することはできない。

実際に、カッターは、水面に降ろされて、不知火から伸びたロープに係止された位置からほとんど変化していなかった。

ロープのたるみから判断して、不知火の推進器は停止してはいないようだった。

河の流れに逆らうようにして、不知火と陽炎は最低限の推進力を保ったまま中洲との距離を保って静止し続けていた。

不知火が動き出す気配は一向になかった。
陸戦隊員達は苛立たしげな表情で不知火を睨みつけていた。

すでに不知火との距離は離れていた。不知火とカッターとをつなぐのは曳航用のロープしかなかった。

これでは状況を把握するのは困難だった。

それに、状況が把握できていないのは不知火の乗員も同じらしい。後部の備砲に取り付いた乗員が、カッターに移乗した陸戦隊員と同じように怪訝そうな表情で艦橋のある前部を伺っているのが見え

しかし、不知火の艦橋は、艦上の構造物に邪魔されて死角になっていたから、艦橋の様子を伺う事はできなかった。

陸戦隊員達の手前、伊原中尉は押し黙っていたが、時間が経つに連れて、大賀艇長への信頼感が失われているような気がした。

よほど、曳航用のロープを切り離して自力でカッターを岸に寄せようかと持ったくらいだ。

だが、揚陸地点の岸辺まではまだかなりの距離がある。自走するカッターでは時間がかかりすぎるだろう。

それにカッターを移動させるのに陸戦隊員たちが疲労し尽くしてしまつては元も子もない。

今は、大賀艇長を信頼して待機し続けるしかなかった。

しかし、中洲から銃撃音が途絶えたことで伊原中尉は、待機し続けるという自分の判断に自信が持てなくなっていた。

指揮官としては最悪に近い状態だったが、伊原中尉はそのことに気がついていなかった。

それよりも大賀艇長への不信感が先にあつたからだ。

銃声が途絶えた時点で、ケレンスキー大尉は半ば恐慌状態にあつた。

ヴォルスネセンスキー連隊の将兵達が全滅したのではないかと考えたからだろう。

勿論、その場合皇女たちも無事でいるわけではない。

だが、新たな銃声の中洲から聞こえたことで、伊原中尉とケレンスキー大尉は顔を見合わせながら安堵の溜息をついていた。

状況はよくわからないが、戦闘が集結したわけではなさそうだった。

敵部隊が、敗北したヴォルスネセンスキー連隊の生き残りに止め

を刺しているのとも違つようだ。

おそらく敵部隊の襲撃は一旦は終了したのだろう。それを確認したヴォルスネセンスキー連隊員が、未だ抵抗の意思を失っていないことを明らかにするために発砲した。

根拠はないが、そんな気がしていた。

もちろん、敵部隊の攻勢がこれで終了したわけではないだろう。おそらく連続した襲撃の間に乱れきつた陣形を再編するために、一時的に後退しただけではないのか。

後退といつても中洲から撤退するほど遠距離まで下がるとは思えない。

せいぜい渡河点近くにまで下がるだけだろう。

だが、戦闘は一時的にも終了したのだから、すぐにも上陸を果たすべきだった。

結果論だが、今ならば安全に重火器を送り込むことも出来るだろう。

しかし、不自然な待機は更に続いた。

その頃には、不知火の後部砲員達も、長く続いた待機に苛立つていたらしい。

一度など、乗員の一人が、艦橋のある前部に向かってから、しばらくして不貞腐れたような表情で戻ってきたことさえあった。

おそらく乗員にもこの待機の理由は説明されていないのだろう。

伊原中尉は、もう待機をし続ける必要性を感じていなかった。

母艇による曳航も期待すべきではなかった。

自力で中洲まで航行して、皇女達と共に脱出するしかなかった。

確かに自力での中洲までの航行で陸戦隊員達は疲労するだろうが、

最初から戦闘を前提としていないのだから、考えてみれば大した障害にはならないはずだ。

もし陸戦隊員達が疲労しきって帰りの航行に耐えられなかったら、カッターに代わりにヴォルスネセンスキー連隊の生き残りを皇女と共に押し込めて、オールを押し付けてしまえばいいのだ。

中洲に取り残されて遅滞防御を行うのが陸戦隊員達に切り替わるだけのことだ。

重火器の操作には陸戦隊員たちのほうが慣れているのだから、そのほうが効率はいいかもしれない。

元は軽騎兵であるヴォルスネセンスキー連隊員達がオールの操作に手馴れているとは思えないが、支流を下って不知火に合流するくらいなら出来るだろう。

あとから考えると馬鹿馬鹿しい判断だったが、緊張感を敷いられる長く続いた待機が、伊原中尉から正常な判断力を奪い去っていたようだった。

伊原中尉は、不知火とカッターをつなぐロープを切り離させようとしていた。

同時に陽炎に係留されているカッターに乗り込んでいる残りの半個小隊にも合図をさせて行動を共にさせるつもりだった。

不知火の艦尾に動きがあったのは、伊原中尉が具体的な行動を起こそうとした瞬間だった。

最初はその意味に気が付かなかった。

不知火の艦尾近くで、乗員が手旗信号を送っていた。

どうやら長い待機も終わったらしい。信号は、不知火の急加速に警戒せよと告げていた。

信号のあとすぐに不知火は加速を開始した。

蒸気レシブ機関特有の連続する警戒なエンジン音さえ聞こえてきそうだった。

これまでの長い待機が嘘であったかのように、不知火とやや遅れた陽炎は、中洲へと軽快に航行を開始していた。

缶室を半減させているとはいえ、元が軽快艦艇の駆逐艦であるだけに、両艦の動きは素早かった。

たちまちのうちに中洲の岸边が近づいてきていた。

それを見ながら、伊原中尉は慌てて自力で航行しそうになっていたことを反省していた。

もしも陸戦隊員たちにオールをこがせて自力で航行させているいても、中洲までの航行が長時間なものになっていただけだったろう。

不知火による曳航は短時間で終了していた。

すでに不知火と陽炎が接近するには、水深は危険なほど浅くなっているはずだった。

舳先に付いている陸戦隊員達の手によって勢い良く曳航用のロープが取り外された。

これから先は、陸戦隊員たちがオールを漕いで揚陸地点まで進むしかない。

しかし、自力でカッターをこがなければならぬ時間はさほど長くないはずだ。

すでに陸戦隊員たちを満載したカッターと上陸地点との距離はそれほど近づいていた。

1919シベリア遊行6

カッターが着岸した衝撃は、それほど強くなかった。

予め予測していなければ、それと気が付かなかったかもしれない。それだけ衝撃は弱かった。

中洲は、ほとんど柔らかい砂で形成されているようだった。

カッターが流されないように、着岸と同時に、周囲の樹木に固定するためのロープを持って駆け出そうとした陸戦隊員が足を取られて、その場で転びそうになっていた。

踝辺りまで埋まりそうになったが、何とかその兵は数少ない樹木に向かって駆け出していった。

だが、それもその兵が騎銃しか抱えていない軽装備だったからだ。これでは重量のある重火器の移送には手間取るかもしれない。

それに、このような砂地では地形を変えるような塹壕陣地を構築するのは不可能だろう。

ヴォルスネセンスキー連隊員達が十分な機材を有しているとも思えないから、実際は僅かな地形の起伏を利用して防御陣地を築くしかないのではないのか。

日露戦争以後の戦訓では、防御側が適切に機関銃などの重火器を配置した場合は、攻撃側に対して圧倒的な優位になる。

だが、それも十分な陣地を構築したとしての話だから、偽装や築陣がされていなければ防御側優位の方則も揺らぐかもしれない。

中洲への上陸を果たした日本軍だったが、すぐには動き出すことはできなかった。

不用意にヴォルスネセンスキー連隊の陣地へと近寄れば、戦闘の直後で興奮した彼らから銃撃される可能性が高かったからだ。

だから、まずはケレンスキー大尉を先頭にして、友軍を明らかに

した上で接近しなければ危険だった。

しかし、そのような手間を考えても合流は難しくなさそうだった。陣地の中心である番屋と上陸地点とがごく近距離にあったからだ。漁民の休憩地となる番屋が水面に近い位置にあるのは当たり前なのだが、事前に通信筒から出てきた地図で確認していたよりも、ヴォルスネンスキー連隊員の陣地と水面との距離は近いような気がする。

上空からの偵察では、距離を見誤っていたのか、それとも干潮の関係で川岸が番屋に寄ってきているのかもしれない。

先に敵水上部隊を殲滅した大賀艇長の判断は正しかったということがある。

それが地形を見た伊原中尉の結論だった。これしか番屋との距離がないのでは、川岸から敵部隊に上陸されてはひとたまりもなく、多数の敵上陸部隊にもみ潰されて終わったのではないのか。

極端な話、敵部隊は上陸すらする必要がないかもしれない。不知火と陽炎に対してそうしたように、舷側からの急射を行うだけでも膠着した戦況を一変させていたかもしれない。

そのような危機的な状況に置かれているのを感じたためかもしれない。

先頭に行くケレンスキー大尉は、ほとんど走りだすような勢いで番屋に近づいていった。

重火器の上陸と小隊主力の移動の指揮を国枝兵曹長に任せると、伊原中尉も少数の兵だけを連れてそれに続いた。

ケレンスキー大尉の行動は、はたから見れば無防備なほどだった。ほとんど無造作に戦闘直後の陣地に近づいていく。

だが、これは危険な行為だった。戦闘の興奮は、直接の戦闘が終了してからも暫くの間は將兵たちから抜け落ちることはないからだ。だから、些細な物音などでも発砲する兵士は少なくないし、平時に考えられているほど敵味方の識別も簡単ではない。

しかし、ケレンスキー大尉は、無頓着に陣地に近づいていった。

実際に、最初に出会って兵士は、彼らに気がつくなり、慌てて銃を向けてきた。

伊原中尉達は慌てて準備してきた日本軍旗を示そうとしたが、それよりも早くケレンスキー大尉が喜色をあらわにしながら、親しげに兵の名前を叫んでいた。

その大声に気がついたのだろう。周囲からはわらわらとロシア人達が姿を表した。

彼らはしばらく呆然とケレンスキー大尉の顔を見つめていたが、すぐに何人かが駆け寄ってきた。

ケレンスキー大尉以上に満面の笑みを浮かべながら、彼らは大尉を抱きすくめていた。

それを見守る將兵たちも、お互いに顔を見合わせながら安堵の笑みを浮かべていた。

平服のままであったり、軍服を着ていても上下どちらかだけだったり、装備や服装はいい加減だったが、指揮や練度はたしかに高そうだった。

考えてみれば、ケレンスキー大尉も元々彼らに先行して派遣されていたのだから、顔なじみなのはあたり前のことだった。

だが、伊原中尉と護衛の兵たちは、呆氣にとられるばかりだった。しかし、伊原中尉達が部外者でいられたのも短時間のことだった。ケレンスキー大尉をようやく開放したロシア人達によって彼らも揉みくちやにされて歓迎されたからだ。

ヴォルスネセンスキー連隊員たちが増援を待ちかねていたのは間

違いなかった。

中洲に陣取るのはヴォルスネセンスキー連隊の一部、約一個中隊という話だったが、それを指揮しているのは佐官だった。

番屋の前で、折り畳みテーブルの上に広げた簡素な地図を前にしていた男が、騒々しい気配に気がついて顔を上げた。

疲労の色は隠せないが、戦意までは失っていないようだった。その目は鋭く、顔つきは精悍だった。

歳の頃は40は越しているだろう。

平服の上から、ロシア帝国陸軍の軍服を上着だけ羽織っていた。軍服に縫えつけられた階級章は、陸軍中佐を示していた。

中佐は、ケレンスキー大尉に気がついても、他の將兵のように騒いだりはしなかった。

ただ、ひどく人好きのしそうな笑みを浮かべて、やあサーシャと呼びかけただけだった。

それに対して、ケレンスキー大尉は、涙を浮かべんばかりでぐしゃぐしゃになった顔で敬礼をしていた。

次に伊原中に向けて中佐は笑みを向けた。

伊原中尉は、素早く堅苦しい敬礼をしながら言った。

「日本海軍、伊原中尉であります」

「ロシア帝国陸軍、マクシモヴィッチ中佐です。あなた方の来訪を皇女殿下に代わって感謝いたします」

感涙で使い物になりそうもないケレンスキー大尉を一瞥すると、伊原中尉は慌てて続けた。

「申し訳ありませんが、自分が率いてきた部隊は一個小隊に過ぎません」

そう言いながら、伊原中尉は素早くマクシモヴィッチ中佐が広げていた地図に目を向けた。

伊原中尉の意図に気がついたのだろう、マクシモヴィツ中佐は簡潔に状況を説明した。

敵部隊は少なくとも一個大隊以上の戦力を保有しているらしい。砲兵などの重装備は確認されていないが、その半数は騎兵らしく機動性には優れていた。

状況は、事前の推測と殆ど変わりはなかった。

伊原中尉は、ため息を付くといった。

「やはり我々を加えても敵部隊を撃退するのは難しいかと…」

マクシモヴィツ中佐も同じ判断らしく、頷いて賛意を見せた。

「我々をここまで輸送した不知火と陽炎の収容人員は限られます。

申し訳ありませんが、皆さんをお連れすることはできません」

下手に希望を持たせるようなことは言うべきではなかった。

伊原中尉は、マクシモヴィツ中佐の目を真つ直ぐ見つめながらいった。

マクシモヴィツ中佐は、一瞬落胆の表情を浮かべたが、そんな自分を恥じるように次には笑みを浮かべた。

「中尉が気に止むことでありません。最初からこのような事態は予測していましたから…皇女殿下の付き人として、連隊で一番若い士官と兵を一人づつ選んであります。何とかこの四人だけでも八バ口フスクまで無事にお連れしていただきたい」

最後はほとんど懇願するような声だった。

伊原中尉は、感動を覚えながらいった。

「機関銃や迫撃砲のような重装備は置いていきますから、四人と言わずにもう少し移送することは可能ですが」

「いや、追加の人数を選抜する時間が惜しい。それに人数が少ないほうが身軽でしょう。機関銃はありがたく使わせて頂きます。最後まで我々は皇女殿下のために戦いましょう」

もうこれ以上話すことは何も無いように思えた。

伊原中尉は押し黙って頭を下げた。

「増えるのは三人だ」

出し抜けにケレンスキー大尉の声が聞こえた。

慌てて伊原中尉が振り返ると、ケレンスキー大尉は、すでに小銃を構えていた。

元は日本軍の小銃だが、欧州大戦時にはロシアにも盛んに輸出されてきたものだった。

ケレンスキー大尉の小銃を構える姿も様になっていた。

伊原中尉は何かを口にしようとしたがそれは果たせなかった。

ケレンスキー大尉がそれより早く首を降っていたからだ。

その決意は固いらしかった。

伊原中尉は、言葉の代わりに唸り声を上げると、押し黙ってから腰の軍刀を外していた。

そして、無言のままフランス製のサーベルを、押し付けるようにケレンスキー大尉に差し出していた。

ケレンスキー大尉は、無言のまま大尉を睨みつけるようにサーベルを柄ごと突き出した伊原中尉を驚いて見たが、しばらくしておずとしながらサーベルを手にとった。

「私がもらっても良いのだろうか：その、日本軍の備品ではないのか」

伊原中尉は、苦虫を噛み潰したような顔でいった。ただし見るものが見れば、作った表情だと気がつくだろう。

気を抜けば、悲壮な表情になりそうだったからだ。

「元々は戦死したフランス軍士官からもらったものだ。第一、機関銃や迫撃砲まで置いていくのに備品もクソもないだろう。それに：俺よりあんたが持っていたほうが役に立ちそうだ」

ケレンスキー大尉はそれを聞くと、ニヤリを笑みを見せると素早くサーベルを腰に固定して、見事な敬礼をしてみせた。

それからすぐに、伊原中尉の肩越しに、何かを見てそちらに向けて緊張した顔を見せた。

伊原中尉がそちらに顔を向けると、マクシモヴィツチ中佐も敬礼しているのが見えた。

そして、番屋から素早く二人の男がかけ出して直立不動で扉の前に陣取った。

よく見ると片方は、ひどく年若い兵だった。

紅顔の少年兵は、十代の半ばくらいにしか見えなかった。

もう片方は士官だったが、階級章は少尉で、士官学校を出たかどうかも怪しそうな年齢だった。

すると、この二人が皇女の付き人なのか：

そこまで気がつくと、伊原中尉も慌てて敬礼をした。

番屋からは、更に二人の女が出てきた。

それは間違いなく皇女だった。

衣類は質素で豪勢なものでは無かったし、表情からもひどく疲れた雰囲気が漂っていたが、それでも気品は隠すことができなかった。歳の頃は二十歳前後だから、間違いなくロシア帝国の第三皇女マリアと第四皇女アナスタシアなのだろう。

マクシモヴィツチ中佐は、伊原中尉を手招きすると二人の皇女の前には歩み出た。

「殿下、こちらは日本軍の伊原中尉です。彼が殿下を日本軍の艦艇でハバロフスクまでお連れします」

伊原中尉は、ひどく緊張した声で申告した。

「日本海軍中尉、伊原であります。皇女殿下をお連れすることは小官にとって光栄の極みであります」

落ち着いた様子でマクシモヴィツチ中佐は続けた。

「殿下、事態は切迫しております。いつまた無政府主義者共が襲撃

してくるかもしれません。どうか、お早く」

だが、マリア皇女は不安そうな顔で、マクシモヴィツチ中佐と、伊原中尉の顔を交互に見た。

「ですが：あなた方はどうするの」

マクシモヴィツチ中佐はそれに答えなかった。にこやかな笑みを浮かべてこう言っただけだった。

「どうかお早く」

それに覆いかぶさるかのように、日本語とロシア語の見張り員の声が同時に聞こえた。

「敵騎兵部隊接近」

伊原中尉が、見張りの声が聞こえた方向に双眼鏡を向けると、中洲の反対側に微かに土煙が見えた。

湿地といっても良い中洲の中であれだけの土埃を上げるといふことは、かなりの規模の騎馬部隊が移動していると考えられた。

もはや時間的な余裕は、全く無くなったと判断するべきだった。

伊原中尉は、焦燥感に襲われた表情を隠すことなく、皇女に向かつていった。

「もう余裕は御座いません。直ちに移動します」

マクシモヴィツチ中佐も頷くと、皇女の付き人に任命された二人の将兵に合図をした。彼らは無言のまま皇女のものらしきの荷物を担ぎ上げた。

あまり大きな荷ではなかった。持ち出せたのはそれだけだったのだろう。それは落日の帝国の象徴なのかもしれない。

柄にも無く伊原中尉は一瞬そう考えると、首をふった。

今はとにかく、皇女たちを守ってこの場を逃れなくてはならなかった。

だが、マリア皇女は、不安そうな表情ながらも、付き人の少尉の先導で川岸まで動き出そうとしたが、彼女に手をつながれたアナ

スタシア皇女は動こうとしなかった。

妹を呼ぶマリア皇女の言葉も聞こえなかったかのように、アナスタシア皇女はひどく澄んだ瞳で空を見上げていた。

伊原中尉は、眉をひそめながらアナスタシア皇女を見ていた。

アナスタシア皇女は、これまでの辛い拘束、逃亡生活の中で精神を病んでいるのではないのか、彼女の澄んだ瞳はその証拠なのではないのか、そう考えていたからだ。

実際、伊原中尉は、欧州戦線で、精神を病んだ将兵を何人も見つけてきた。

しかし、伊原中尉の心配は杞憂だった。

アナスタシア皇女の視線は何かを追うように動いていった。

自然と周囲の人間の何人かが彼女の視線を追うように空を見上げていった。

伊原中尉は、空を見ると、一瞬愕然とした表情になっていた。

そして彼女は、しっかりとした発音で、こういった。

「あれは…鳥かしら？」

それが鳥などであるはずはなかった。まだ距離はあったが、その飛行機の識別は容易だった。

伊原中尉だけでなく、陸戦小隊員たちには見慣れた横廠式口号水上偵察機だったからだ。

口号偵察機は、二年ほど前に制式化されたばかりの新型国産機で、それまでの主力機であった輸入機のモーリスファルマンなどと比べると格段に高性能の機体だった。

欧州へは送られなかったから、実戦経験はまだないはずだが、速力や、兵装の点でモーリスファルマンを大きく上回っているらしい。

口号偵察機は一機だけではなかった。二機が緻密な編隊を組んだまま、中洲に向けて急速に接近しつつあった。

角度が悪いために、薄い褐色に塗られた尾翼に書きこまれているはずの呼称番号は見えなかったが、状況から考えて間違いなく八から始まる番号の高崎航空隊個々の番号が書かれているはずだった。

この周辺で、水上機である口号偵察機を編隊で運用できるのは、事実上の航空母艦として改装されている高崎しか無かったからだ。

しかし、口号偵察機の航続距離を考えれば、八バロフスク周辺にいたはずの高崎から発進したのでは、この地点まで飛行出来るはずはなかった。

無茶な片道飛行だったとしてもここまでではたどり着けないはずだ。つまり、母艦である高崎も、不知火と陽炎を追いかけるように、八バロフスクを離れているたのだろう。

その時、唐突に伊原中尉は、不自然な大賀艇長の態度と長く続いた待機時間の理由に気がついていた。

おそらく高崎は、不知火に発進させた飛行機の概略到着時間を通信で送っていたのだろう。

だが、未だ開発されたばかりの飛行機の性能は不安定だから、それに全幅の信頼を置くことはできない。

だから大賀艇長は判断を保留していたのではないのか。伊原中尉にカッターへの移乗を許可した時点では、まだ通信中だったのかもしれない。

すでに、伊原中尉は、急速に接近する口号偵察機の意図を見抜いていた。

素早く迫撃砲の砲座に近づくと、伊原中尉は発砲準備を命じた。

迫撃砲手は、怪訝そうな顔で振り返った。

彼は、すぐにもロシア人に迫撃砲を渡して撤退するつもりで、身振り手振りで手近なロシア人將兵を捕まえて使い方を説明していたところだった。

しかし、弾幕を張る機関銃ならばともかく、いきなり渡された迫撃砲で正確な照準が出来るとも思えない。

水平の確保などの射撃準備にも十分な時間をかける余裕はないから、実際には盲撃ちになってしまうだろう。

しかし、伊原中尉が口号偵察機を指さしながら、弾種を告げると、下士官の砲手はにやりと笑みを見せて、部下の兵たちを怒鳴り上げると素早く発砲準備を行なっていった。

口号偵察機が、上空を高速で航過していったのはその直後だった。あまり時間はなさそうだった。

ただ上空を飛びさっていっただけとはいえ、口号偵察機が戦況に与えた影響は少なくなかった。

陸戦隊員達は歓声を上げて、中には、識別のためか日章旗を振り回すものもいた。

マクシモヴィッチ中佐達ヴォルスセンスキー連隊員達は呆気に取られて見送っていっただけだったが、彼方に見えるボルシェビキ騎兵部隊は少なからず混乱しているようだった。

もしかすると、飛行する機械を今まで見たことがないのかもしれない。

騎馬はさしたる影響を受けていないようだが、それに乗る騎兵達は何人かが戸惑ったように空を見上げているのがこの距離からでも容易に認識できた。

そこへ狙いすましたかのように迫撃砲弾が弾着した。

勿論水平も満足にとれていない迫撃砲が容易に初弾命中などする

はずもない。

実際、迫撃砲弾は彼らから距離があるとところに着弾していたから、被害は全く出なかったはずだ。

しかし、彼らに被害が出なかったのは、迫撃砲弾の弾着がずれていたいた為だけではなかった。

弾種が破片を周囲に撒き散らす榴弾では無かったからだ。

発射された発煙弾は、着弾箇所から白リンの燃焼効果による煙を盛大に立ち上らせているだけだった。

見慣れぬ飛行機械の上空航過と、白煙弾の弾着によりしばし混乱していた敵騎兵部隊は、すぐに統制を取り戻していた。

実質的な被害が無かったものだから、障害にはならないと判断したのだらう。

再開された進撃は散漫なもので、重火器や飛行機からの攻撃を警戒した様子はなかった。

どうやら敵部隊は、これまで近代兵器を使用した戦闘に参加したことのない部隊のようだった。

数が多いが、兵員の質が高いとは思えなかった。

一度航過した口号偵察機は、ゆっくりとしたロールを打ちながら旋回していた。

操縦員の練度がかかなり高いのはその動作からもうかがえた。

旋回半径が大きいせいいかも知れないが、二機は緊密な編隊を維持しながらも、高度や針路に全くブレを感じさせ無かったからだ。

それに、操縦員席の後の偵察員席に座る搭乗員が、こちら側を観察しているのが見えた。

勿論この距離で顔が見えるわけではないのだが、肌色の顔が見える面積でそれは容易に判断できた。

すでに口号偵察機が発煙弾周囲の敵部隊を特定しているのは明らかだった。

水平旋回を終えた二機の口号偵察機は、襲撃機動に入っていた。

敵騎兵部隊は勿論、ヴォルスネセンスキー連隊員達もそれにまだ気がついていないようだが、口号偵察機は、まっすぐに敵騎兵部隊の前進予測位置に突進していた。

そして、敵騎兵部隊が気がついた時にはもう手遅れだった。すでに逃げようがない位置まで口号偵察機は近づいていた。

あるいは、そこまで近づいても一度目の航過の経験から、口号偵察機を無力な存在だと高をくくっていたのかもしれない。

そして、口号偵察機から投下された爆弾は、敵騎兵部隊の鼻先をへし折るような近距離で爆発した。

その時にはすでに投弾を終えた口号偵察機は、再び水平旋回に入ろうとしていた。

爆発はそれほど大きいものではなかった。

元々口号偵察機は、その名が示す通り偵察機にすぎないから爆装はさほど大きなものではない。

しかし、これまで飛行機をほとんど見たことがなかったような将兵にとつては、上空から落とされた爆弾の威力は、危険なほど大きいものを感じるはずだった。

それに、衝撃を受けたのは、人間だけではなかった。

着弾による破片で実際に負傷した敵將兵はあまり多くはなさそうだったが、突然の爆発に驚いて暴れだした乗馬に振り回されて落馬したものは少ななさそうだった。

実際の被害よりも混乱が大きいのは確実だった。

伊原中尉は、ついさつきまで感じていた焦燥など嘘であったかのように凄惨な笑みを見せると、軽機関銃の銃手に発砲を命じた。

直ちに発射された機銃弾だったが、その弾着は間延びしているような気がした。

軽機関銃による射撃を行うには距離があるものだから、着弾までに時間がかかって散布界が広がってしまったているせいだろう。

ただし、先ほどの空爆と同じく、実際の効果よりも、敵将兵に与える心理的な効果は大きかったようだ。

次々と連続して着弾する機銃弾と、上空で横旋回を続ける口号偵察機を恐れているのは確実だった。

実際には、この距離では軽機関銃で騎兵部隊に突撃を断念させるほどの打撃を与えるのは難しいし、彼らが下馬して歩兵として接近すれば目標は小さくなるから、さらに防御射撃の効果は薄れてしまっただろう。

そして、口号偵察機の爆装重量はさほど大きくないから、投下される爆弾はさっきの一発きりだった。

つまり、上空を旋回する口号偵察機には、もう威嚇以上のことはできないのだ。

しかし、敵部隊がそれに気がつく様子はなかった。

この距離からでも敵部隊が逡巡している様子が手に取るようにかがえた。

敵部隊にとって止めとなったのは、中洲の後方から聞こえてきた爆発音だった。

いつの間にか、中洲の沿岸に沿うように、支流の上流側に向かって不知火と陽炎が航行を始めていた。

しかも、二隻は連続した発砲を続けていた。

着弾点は中洲の反対側だった。

この場所からは直接視認できないが、おそらく渡河点を砲撃しているのだろう。

渡河点を確保するために、少数の部隊は残留しているかも知れないが、重火器を装備していない部隊では、水上からの砲撃には無力だった。

そして、それを確認した敵騎兵部隊の行動は素早かった。

おそらく、不知火と陽炎によって渡河点を制圧され、中洲に取り残されることを恐れたのだろう。

数少なく自力で動けない重傷者や戦死者を拾い上げると、渡河点の方向へと去っていった。

脅威が去ったというのに、ヴォルスネセンスキー連隊員達の反応は鈍かった。

あまりに短時間に、それも小銃の決戦距離よりも彼方で行われた戦闘で、あれほど強大に見えた敵部隊があっさりと後退していったことが信じられないようだった。

陸戦隊員たちの方は、感極まって万歳の声を上げるものもいたが、大部分は概ね冷静だった。

彼らにしてみれば、高崎搭載機による敵情偵察と爆撃、それに不知火と陽炎による支援砲撃は、臨時戦隊の編成以来続けてきた訓練想定そのままだったからだ。

敵騎兵部隊が去ったあとの戦場は、妙に静かだった。

渡河点を狙っていた不知火と陽炎の砲撃も短時間で終了していた。敵部隊は、すでに渡河点を越えて大陸へと去っていったのだろう。

上空を何度も巡回する口号偵察機のエンジンが立てる爆音だけが中洲に響きわたっていた。

1919シベリア遡行7

伊原中尉が予想していたとおりだった。

ゆつくりとこちらに向けて戻ってくる集団を見ながら、伊原中尉はため息をついていた。

出発したときにはその集団に混じっていたはずの水野大尉の姿が消えていた。

戦闘はすでに終結していた。

燃料がギリギリだったのだろう、口号偵察機は、あのあとすぐにアムール川の下流を航行しているであろう高崎へと戻っていった。

ただし、その前に口号偵察機は、通信筒を落としていった。

通信筒には、最後に上空から観測した敵部隊の動向を書き込んだ用紙が入っていた。

簡素な地図に書きこまれたものだが、後部の偵察員席に乗り込んだ搭乗員がこのような作業に慣れていたためだろう。

必要最低限の情報を入手することはできた。

それによれば、やはり敵騎兵部隊は中洲から撤退して、シベリア鉄道のある方向へと向かっていったらしい。

伊原中尉は、敵部隊の撤退を確認すると、中洲の渡河点への偵察を国枝兵曹長に命じていた。

敵部隊は、戦死者や重傷者も担ぎ上げて撤退していったが、渡河点にも不知火と陽炎から攻撃が加えられたから、そちらには何らかの遺留品が残されている可能性があるのではないかと考えたからだ。水野大尉は、渡河点への偵察への同行を強く進言した。

口号偵察機がもたらした情報を確認してから、水野大尉がそれぞれとしているのに気がついてきた伊原中尉は、上級者の、それも陸軍士官の同行に眉をしかめた国枝兵曹長を説き伏せて、渡河点へと

送り出した。

自分自身は、念のために陣地の再構築と銃火器の展開の指揮を取りながら、伊原中尉は、偵察に出した国枝兵曹長達が帰ってくるのを待っていた。

陣地の再構築を命じたものの、あまりその命令に意味はないように思えた。

十中八九はすでに危機は去っている。ヴォルスネセンスキー連隊員の中には、煮炊きの準備を始めたものさえ出てきていた。

こちらに戻ってくる国枝兵曹長たちの顔にも緊張感はあまり浮かんでいなかったようだった。

報告をしようとする国枝兵曹長を遮って、伊原中尉はつまらなそうな表情でいった。

「水野大尉は、不知火に移ったのか」

敬礼のために上げかけた手を下ろすタイミングを失って、国枝兵曹長は、首をかしげながらも頷いていた。

「確かに、あの大尉は渡河点に着くなり、待機していた不知火からカッターを呼び寄せて移乗して行きましたが：最初からわかってたんですな」

にやりと共犯者の笑みを浮かべながら国枝兵曹長は何度かうなずいてみせた。

伊原中尉は、首をすくめた。

「確信があったわけじゃない。だが、あんまり陸軍さんにくるつかれても面白くないしな。あっちに行ってくれるならそれにこしたことはないとは思っていた」

国枝兵曹長は怪訝そうな顔になった。

「しかし：何で大尉がここを離れるとわかったんです」

伊原中尉は、シベリア鉄道の、敵部隊が去っていった方向をしば

らく見てからため息をつきながらいった。

「多分、彼らは帰れないよ」

国枝兵曹長は、しばらく押し黙っていたが、先を促すように、伊原中尉を見つめた。

しばらくしてから、国枝兵曹長に向き直ると、伊原中尉は淡々とした口調で言った。

「考えてもみる。陸軍さんが海軍にそう簡単に頭を下げると思うか。おそらくボルシェビキ退治の本隊は陸軍さんが別に用意しているはずだ。あの飛行機を飛ばしてきた奴らがな」

「つまり、水野大尉は、その本隊に敵部隊の撤退方向を知らせるために不知火の通信機を使おうとしていた……ということですか」

「多分な。俺達にお鉢が回ってきたのも、単に陸軍の部隊では、アムール川までの展開が間に合いそうもなかったからじゃないのかな。だが、シベリア鉄道を使用すれば、ボルシェビキ部隊を帰路で待ち伏せすることは難しくはないはずだ」

そこで伊原中尉は再び首をすくめた。

「最も、これは俺の推測に過ぎんがな。水野大尉は単に状況を上に知らせるために不知火に移乗しただけかもしれないし、単に寒かっただけかもしれない」

もうこれでこの話は終わりにするつもりだった。

どのみち、ボルシェビキ部隊がどうなるかと大して伊原中尉の状況に変化があるわけではない。

水野大尉が彼らをどう扱うのかも興味も持てなかった。

「それで、肝心の渡河点の方はどうだったんだ。何か遺留品はあったのか」

伊原中尉が気を取り直して尋ねた。

「渡河点は不知火と陽炎に随分と叩かれたみたいですね。補給品やら荷馬車があつたみたいですが、砲撃では破壊されていました。こ

れだけ持って来ましたが」

そういつと、国枝兵曹長は、何かの缶詰を差し出した。

よく見ると、缶詰に書かれていた表記はロシア語ではなかった。

伊原中尉は、日本語でイワシ油漬と書かれた缶詰をしばらく面白そうな顔で眺めた。

おそらく、欧州大戦時に日本から輸出されて倉庫に貯蔵されていた物資を、今回の行動に補給物資として転用したのだろう。

伊原中尉は、しばらく弄ぶように缶詰をいじくっていたがすぐに興味を失って国枝兵曹長に投げ返した。

「逃げ出したときに捨てていったんなら、毒が入っている心配はないだろう。すぐに喰ってしまえ。…それより渡河点に死体はなかったのか？」

「何体が転がってましたよ。ほとんどは不知火と陽炎の砲撃で吹き飛ばされたようでしたが…」

そこで口籠った国枝兵曹長に伊原中尉が視線を向けると、兵曹長は要領を得ない様子で説明した。

「その…何人かの死体は砲撃ではなくて銃撃で殺されてたんです」「ヴォルスネセンスキー連隊と渡河点で戦闘した時の戦死者ではないのか」

怪訝そうな顔で伊原中尉はそういつたが、国枝兵曹長はすぐに首を振った。

「いえ、仏さんはまだ血が流れてましたから、死んでからまだそんなに時間は経ってなかったはずですよ。むしろ、撤退時に仲間割れを起こしたような感じでしたね、死体の向きも中洲のこっち側から撃たれたようでしたし」

そういつと、国枝兵曹長は、渡河点側、つまり大陸の本土側に向けて指鉄砲を向けた。

伊原中尉はしばらく考え込んでいる仕草を見せたが、しばらくしてはっと気がつくくと、国枝兵曹長に勢い良く尋ねた。

「近くに馬だとかは倒れていなかったか」

「いや：そんなのはありませんでした。そういえば仏さんのほとんどは襲撃してきた兵隊よりもよさそうな服を着てました。あと妙な格好をした：坊さんみたいな死体も一人分ありました」

それを聞きながら、伊原中尉は考え込んでいた。

結論はすぐに出ていた。というよりも、伊原中尉は、すでにその結論に達していた。

実のところ、国枝兵曹長からの情報は、推論を重ねるための材料ではなく、敵部隊が撤退していった頃からずっと考えていた仮説を裏付ける証拠でしかなかった。

しばらく迷ってから、伊原中尉は顔を上げていった。

「その坊さんというのはよくわからんが、本当にそいつらは仲間割れを起こして殺されたのかもしれない。ただし、ここを実際に襲撃してきたのは噂のコサツクらしいから、彼らには仲間割れという意識はなかったかも知れないが」

国枝兵曹長は首をかしげた。

日露戦争でもコサツク騎兵は、日本軍を相手に活躍したと聞いていた。

その割にはこの襲撃は中途半端で、粘り強さにかけているような気がしていた。

日露戦争では、このような中途半端な陣地よりもずっと防護された日本軍の陣地に対してコサツク騎兵は下馬戦闘で果敢に挑んだらしい、と国枝兵曹長も聞いていたからだ。

だが、国枝兵曹長からそう質されると、伊原中尉はなんでもなさそうにいった。

「コサツク騎兵がさっさと後退した理由は簡単だ。無理をしてまで戦う理由が彼らに無かったからだ」

国枝兵曹長は、要領を得ないと言った様子で伊原中尉をみつめた。

伊原中尉は、苦笑しながら国枝兵曹長にいった。

「よく考えてみる、俺たちだってケレンスキー大尉が打ち明けてくれるまで「目標」の正体には気が付かなかったんだ。多分、殺されていたのはボルシェビキの中枢にいた人間なんだろう。そいつらの指揮でコサック騎兵は動員されたが、肝心の目標のことは知らされていないかった。そう考えれば不自然な点は説明がつくのではないか」

国枝兵曹長は、呆気に取られたような顔で伊原中尉を見ていた。だが、反論したり、疑問を持ってしているような様子はなかった。それを確認すると、伊原中尉は続けた。

「コサック騎兵が簡単に撤退するのも当然だ。戦う理由もよくわからないのに赤軍なんぞのために命を張る気にはなれんのだろう。ロシア軍のことはよく知らんが、コサックの大半は白衛軍側に付いているらしい。これで赤軍は貴重な自軍の騎兵を失ったというわけだ」

国枝兵曹長は、珍しくおずおずとした自信なさ気な調子で反論した。

積極的に伊原中尉の言うことを論破すると言うよりも、まだ信じられないといった様子だった。

「しかし…あの皇女方は、ロシア帝国の最後のお姫様なんでしょう？いくら何でもそんな重要な存在を相手にするのに説明もなしだなんて無茶じゃありません…」

国枝兵曹長の言葉は不自然に途切れた。
唐突に気がついてしまったからだ。

伊原中尉はにやりと国枝兵曹長に笑みを見せた。

しかし、その笑みはひどく自嘲的なものだった。

「そう、俺たちだって同じようなものだ。よく分からんまま戦わされていただけだ。こっちは機密漏洩を防止するためだろうが、あつちはおつと切実な理由じゃないのかな。もし兵曹長が反乱軍に与したとして、昨日までの王族を、それもつら若い姫さまを簡単に殺せると思うか」

国枝兵曹長は、一瞬不敬なことを考えて身震いした。伊原中尉は

それを確認して、嘆息を漏らしてからいった。

「そんな真似は主義者でもない限り中々出来んよな。だからボルシエビキも行きがかり上赤軍に入ったようなコサツクに簡単に情報を伝えようとはしなかつたんだろう。それが命取りになるとも知らずにな」

それが伊原中尉の結論だった。

しばらく国枝兵曹長は、押し黙って伊原中尉を見ていた。

伊原中尉も無言のままだった。

実のところ、伊原中尉は気まずい思いを抱いていた。

今の結論も、状況証拠からそう判断しただけで、それが本当なのか確かめるすべはないのだ。

それに、伊原中尉も国枝兵曹長も海軍の一下級士官であるにすぎない。

今は敵部隊の内情よりも、作戦が無事に終了したのを単純に祝うべきなのかも知れなかった。

しばらく泳いでいた国枝兵曹長の視線が、伊原中尉の腰のあたりで止まった。

「そういえば、いつもの軍刀はどうしたんです」

伊原中尉が、我に返ったように向き直ると、今まで困惑していたような顔を見せていた兵曹長の顔には、いつものようなふてぶてしい下士官らしい表情が浮かんでいた。

国枝兵曹長は自分が気にしても仕様がなにとでも考えたのだろう。しばらく怪訝そうに伊原中尉は、腰の周りに手を当ててから、初めて気がついたようにいった。

「そういえばケレンスキー大尉に預けたままだったな…どうしたものかな、今更返してくれといったも間が抜けているような気がするなあ」

「どうせ借金の形なんでしょう？別に大尉にあげてしまっても…」

そこで国枝兵曹長は台詞を止めると、慌てて敬礼をした。

伊原中尉も、一瞬不審そうな目を国枝兵曹長に向けたが、すぐに気がつくとはやはり慌てて体ごと振り返ると、敬礼した。

中尉が予想したとおり、そこにはお付の少年兵を連れた皇女がいた。

確か妹君のアナスタシア皇女であったはずだ。伊原中尉はどうかしてそれを思い出していた。

だが、皇女に向けて何かを言うことも出来なかった。

戦闘中の興奮も抜け落ちた今では、何も言葉が出てこなかったのだ。

よく考えてみれば他国とはいえ、直接皇族方に話しかけること自体が不敬ではなかったのか。

場所が場所であれば下級士族の家柄にすぎない伊原中尉が、皇族を急かすなど不敬罪どころではないのではないのか。

そんなことを考えながら、恐る恐る伊原中尉は、アナスタシア皇女の顔色を伺った。

アナスタシア皇女は、敬礼をしたまま硬直したような二人を面白そうな目で見ながら小首を傾げていた。

お付きの少年兵は、同情の目で二人を見ていた。

「やはり日本人といっても私達と変わらないのね」

まるで子供のような事を言うと、アナスタシア皇女は、手を口に当ててやけに上品な仕草で小さな笑い声を上げながら、付き人の少年兵に振り返った。

アナスタシア皇女の様子はやはり子供のようにだったが、戦闘中に感じたような不安になるほど澄んだ瞳は消え失せていた。

その代わりにアナスタシア皇女は明るく、天真爛漫な様子だった。これが彼女の本来の性格なのだろう。

顔を向けられた付き人の少年兵は、戸惑ったように、中途半端な

笑みを浮かべただけだった。

そんな少年兵の様子に構うことなく、アナスタシア皇女は、伊原中尉に向きなおって言った。

「よくわからないのだけれど、もうあの人達が襲ってくることはないのかしら」

ほんの僅かな不安がアナスタシア皇女の目には浮かんでいた。あの人達とはボルシェビキに動員されたコサック騎兵たちのことをさすのだろうか。

もしかすると彼らは今頃逆に殲滅されているのかもしれない。

ついさっきまでそんなことを国枝兵曹長と話していたことを思い出しながら、伊原中尉は安心させるように笑みを見せながらいった。もっとも無理やり作られた笑みはひどくこわばったものになったが。

「ご安心ください殿下。先ほどまで飛行していた我軍の偵察機が撤退する敵軍を観測しております。また、この中州への渡河点では母艦が警戒待機しておりますので、不意の襲撃があっても十分に対応できます。殿下はどうか安心してお休みください」

そう言いながら、伊原中尉は少年兵に目を向けた。

必死で、目でもいいから皇女殿下を連れて行けと訴えたつもりだったが、彼には伝わらなかつたようだ。

伊原中尉が何かを訴えたいのはわかるのだが、何を伝えたいのか、なぜ喋ろうとしないのか、理解出来ないといった様子で少年兵は首をかしげていた。

必死に少年兵に訴える伊原中尉を横目で見ながら、国枝兵曹長はそつとその場から逃れようとしていた。

背後の不振な動きを感じ取って振り返った伊原中尉が放った鋭い視線に邪魔されて、一人で逃げ出そうとする企みは阻止されてしまったが。

周りには陸戦隊員だけではなく、ヴォルスネセンスキー連隊員も

いる筈だったが、関わり合いになるのを避けたのか、姿が見えなかった。

日本人たちの不自然な動きに気がついているのか見えないのか、アナスタシア皇女は、再びくもりのない笑みを浮かべながら小首をかしげた。

「ではお姉さまと私だけではなく、皆をハバロフスクまで連れていくてくださるのね。あのシラヌイとかいう二隻では小さすぎてできないという話だったけれど」

また口ごもりながらも伊原中尉は、一言一言考えながら言った。不知火と陽炎、それに自分達以外の行動は類推するしかないが、状況から考えてそれほど間違いはないはずだ。

「あの偵察機は水上機ですから、母艦である高崎が周囲の水域を航行中です。しかし、高崎は我々と同時にハバロフスクに到着して、我々がこちらに向けて出港した後も留まっています」

その後すぐに出港したとしても高崎の巡航速度は大して高くありませんし、それにハバロフスクからこちらは、かなり川の流れに逆らって航行することになりますから、高崎の機関出力ではここへの到着は明日になるでしょう……」

「その船には全員が乗り込めると考えて良いのかしら」

伊原中尉は、しばし視線を泳がせた。戦隊を組むのだから、高崎の旗艦としての司令部要員の収容能力や水上機母艦としての能力は把握しているのだが、余剰人員をどれだけ乗せられるのか。そんなことは今まで考えたことがなかったからだ。

「おそらく…高崎の船体構造は5000トン級の商船ですから、連隊員全員を詰め込むことはできると思います。元が貨物船だったはずですからどの程度の乗員区画があるのかどうかはわかりませんが…」

それを聞くと、アナスタシア皇女は、目を細めながら、考えこむ

ように、左右に視線を向けた。

いい機会だとばかりに、国枝兵曹長は、再び逃げ出そうとしていたが、伊原中尉は逃さなかった。

小声で許可も得ずに退出するは不敬と脅すように低い声で言うときくりとして、国枝兵曹長は観念したようにため息を付いた。

二人でそんなことをしていたものだから、アナスタシア皇女が再び満面の、それも面白いはずらを思いついた笑みを浮かべ始めたところを見損なってしまうていた。

「決めたわ、ここに向かっている船に全員が乗るのが難しいなら、私はそのシラヌイに乗船することにしましょう」

ぎよつとして伊原中尉と国枝兵曹長は、アナスタシア皇女に二人揃って向き直った。

一体この皇女は何を考えているのか、高崎よりも不知火のほうが狭苦しいのは当然ではないのか。

一方、アナスタシア皇女は、二人が不思議そうな顔をしている方に不思議そうに首をかしげながらいった。

「タチアナ姉様の連隊員はタカサキに乗ってもらいますが、私とお姉さまはシラヌイともう一隻に分乗することにしましょう」

伊原中尉と国枝兵曹長は顔を見合わせた。

初期の計画と変わって、不知火と陽炎には撤収した陸戦隊員だけではなく、回収した重火器も再び載せる予定だから余剰スペースはさほど大きくならないはずだ。

だから皇女以外の付き添いを多数乗せることはできない。そういつて高崎への座乗を進めようとしたのだが、アナスタシア皇女は、伊原中尉の説明を遮って、不思議そうな声でいった。

「でも、あなたは私とお姉さまを二人でシラヌイ一隻に乗せようとしていたはずよ。それに随員はこの子だけ、お姉さまは少尉一人だからそんなに場所は取らないはずだわ。それともあなたレディーに向かつて太っているかと聞くつもりではないでしょね、言っておき

ますが、私もお姉さまも重くはないわ、ここ数ヶ月で随分と軽く
なりましたはずだし」

そう言うと、アナスタシア皇女は、ふともの悲しそうな表情にな
った。

ここ数カ月で軽くなったとは、ボルシェビキによる軟禁生活のこ
とを言っていることは、伊原中尉と国枝兵曹長にもわかったから、
二人ともかける声が見つからずに、オロオロとするばかりだった。
もっとも、それすら伊原中尉達に話の腰を折れさせないためのア
ナスタシア皇女の作戦だったのかもしれないが。

アナスタシア皇女は、二人が押し黙ってしまったのを一瞥して確
認すると続けた。

「それに、自分の口から言うのも何だけれども、私達は重要人物で
あるはずですよ。危機管理の点から言ってもマクシモヴィツ中佐と
お姉さまと私、それぞれ分散させて移動させたほうがリスク管理の
点からもよろしいのではなくて？」

それに元が貨物船というのならば、タカサキは鈍足であるはず。
ケレンスキー大尉からシラヌイは高速の戦闘艦だと聞いているわ。
ならばそちらのほうがいざという時の逃げ足も早くなるし、何よ
りハバロフスクまで短時間で到着できるのではなくて？

安心してくださってよろしいわ、ケレンスキー大尉から、ハバロ
フスクには、すでにタチアナ姉様のヴォルスネンスキー軽騎兵連
隊の主力が私達を待っています。あなた方にはそこまで私達を運ん
でくだされば結構なのよ」

たたみかけるように言われて伊原中尉は目を白黒させて、国枝兵
曹長に顔を向けた。

まさか二十歳にもならぬような娘から危機管理やリスク管理など
という言葉が出てくるとは全く想像も出来なかったからだ。

国枝兵曹長もなんととも言えないような複雑な顔をしていた。

だが、伊原中尉がアナスタシア皇女の言うことに逆らえるとも思

えなかった。

確かにリスクを分散させるという意味では、いざという時の自衛戦闘すら可能な不知火と陽炎に両皇女を乗艦させるというのは間違ではないように思えたからだ。

当のアナスタシア皇女は、伊原中尉が断るなどとは考えてもいなかったのかも知れなかった。

話はそれで終わりと言わんばかりに、右往左往する二人に背を向けるように北の空を見上げていた。

伊原中尉達も、異変を感じて、アナスタシア皇女の視線の先を見やった。

そこには、ここまでアムール川を逆行する最中に見かけた陸軍機が飛行してきた。

おそらく撤退する敵軍の観測のために飛来してきたのだろう。

だが、その飛行機が通信筒を落としてきた時のようにアムール川の上空まで接近することはなかった。

元々戦闘地点であった中洲を基点として搜索を行うためにここまで飛来してきただけなのだろう。

その飛行機は、中洲を遠くに見た地点で緩やかな旋回を行うと、再び北方へと飛びさっていった。

しばらく北方に消えていく飛行機を見つめていたアナスタシア皇女が、つぶやくように言った。

「やはりあれは鳥だったようね」

不審そうに伊原中尉は、アナスタシア皇女に目を向けた。

しかし、背後の少年兵は、期待に満ちた目で皇女を見つめていた。「戦火という炎の中から蘇る不死鳥…大丈夫、私達は必ずこの国を立ち上がらせてみせるわ」

伊原中尉は、自分よりも年若い少女のようなアナスタシア皇女の強い口調に圧倒されるものを感じていた。

これが為政者、皇族というものなのか…

案外、アナスタシア皇女の言うように上手く行くのかもれない。
少なくともこの皇女達は、バラバラに戦う白衛軍をまとめ上げる
象徴として、この国を率いていくことになるのだろう。

伊原中尉はそう考えていた。

1919シベリア遡行7（後書き）

特務艇不知火の設定は以下アドレスに掲載中です

http://rockwood.fc2.com/ka
sou/settei/ddsiranicai.html

1947 特設運送艦報国丸1

いつの間にか夜が明けていたらしい。

朝の課業を始める短期現役士官達の声が電信室まで聞こえてきたのだ。

艦の調子はあまりよくないと聞いていたが、乗組員たちの調子は悪く無いらしいな

徹夜明けのぼんやりとした頭にそんな馬鹿馬鹿しい考えが浮かんだ。

ふと我に帰って立ち上がると岩淵上等兵曹は頭を振った。

それですこしばかり眠気がとれたようだった。

だが、体は正直だった。

立ちくらみを起こした岩淵兵曹は、思わず表示卓にもたれ掛かっていた。

当直に入ったばかりの部下の一人が呆れたような顔で岩淵兵曹を見た。

「員長、直には入つとらんですから休んでこられたらどうですか。幸いアリューシャンからの波も減って来ているようですし……」

電測は新しい分野の職種だからか、ズケズケとモノを言う若い兵隊には事欠かなかった。

岩淵兵曹は、不満顔になりながらも、その部下の肩越しに逆探が捉えた電波強度を表示している表示面を睨みつけた。

確かに、ダッチハーバーを始めとするアリューシャン諸島に展開する米軍基地を発生源とする電磁波の強度は、一時期と比べて減少しつつあった。

すでに報国丸はアリューシャン諸島への最接近を終え、目的地バンクーバーへと近づいていた。

それに、岩瀧兵曹が表示面を睨みつけていなくとも、報告丸が傍受した電波は記録されるようになっていた。

これならば、しばらくは部下たちに任せても問題は無さそうだった。

岩瀧兵曹は不機嫌そうな表情のままだったが、何度か頷くと声をかけてきた部下に後は任せると告げて電信室を出た。

電信室から出ると、やはり短期現役士官たちが教官の指導のもとで操砲訓練をしているのが見えた。

報国丸は現在こそ特設運送艦籍にあつたが、先の第二次欧州大戦中盤までは、海運会社から海軍に徴用された特設巡洋艦として、海上護衛作戦などにあつていった。

特設巡洋艦から、特設運送艦に艦種を変更するにあつての改装工事で、大半の兵装は下ろしていたが、自衛戦闘のために船橋直前の4、5番砲だけは残されていた。

兵員食堂に降りていくために階段を下りながら、ふと岩瀧兵曹が振り返ると4、5番砲と船橋に今回の航海の直前に新たに増設された数々の空中線が見えた。

旧式の流用砲と最新鋭の逆探や傍受装置という奇妙な取り合わせは、何度見ても岩瀧兵曹を不安にさせた。

それに奇妙な取り合わせは、兵装と電波兵器だけではない。

報国丸は、まるで海軍内部の主流派からかけ離れたハードウェアとソフトウェアの異分子たちをかき集めたようなものだった。

電測学校で、教官補佐として後進の指導にあつていた岩瀧兵曹は、ある技術研究所が新たに開発した傍受装置の操作要員として引

きぬかれた。

その技術研究所は、かつての陸、海軍にそれぞれ存在していた研究所を分離し、兵部省のもとに設けられた陸海空三軍統合の技術開発本部隷下に新たに設けられたものだった。

とはいっても、それぞれの研究所のそのものの分離再編成が行われたわけではなかった。

そうではなく、それまで各研究所の上部組織であった艦政本部などから切り離して、新たに技術開発本部という管理組織を設けただけだ。

だから組織改編前後の各研究所の顔ぶれはほとんど変化がなかったらしい。

帝国三軍の将兵の中には、この組織再編成を屋上屋を架すだけで何の意味もなかったと批判するものも多かった。

岩淵兵曹は、そのような批判には懐疑的だった。

確かに今は兵部省技術開発本部は屋上屋に見えるかもしれない。

連合艦隊のような帝国三軍の実施部隊と技術開発組織との距離感が増大したという批判も事実であるのかもしれない。

しかし、組織統合の成果を短期間で評価してしまうのは危険ではないのか、岩淵兵曹はそうも考えていた。

技術開発本部の上部組織である兵部省がその好例だった。

名前こそ古めかしいが、兵部省は陸軍省と海軍省の合体機関として二年前に編成された日本政府でもっとも新しい省庁だった。

それよりも更に数年遡る第二次欧州大戦の戦時中には、海軍軍令部と陸軍参謀本部の上部組織として統合参謀部が設立されている。

統合参謀部は、それまで陸海軍の連絡機構としてさして有効に活動していなかった大本営に対して政府や財界、それに恐れ多くも天皇自身が疑問をいだいたことが切っ掛けで設立されたと言われている。

それはマルタ島をめぐる幾度かの攻防戦で陸海軍間の協力がなされずに、国際連盟諸国軍の目の前で日本軍の失態を見せたためだった。

内閣総理大臣の隷下に統合参謀部が置かれ、陸海軍、更には陸軍と海軍航空隊の陸上部隊を統合することで新たに誕生した空軍も加わった帝国三軍の軍令機関は、揃って統合参謀部の下部組織であると、戦後に明確に憲法に規定された。

これによって昭和に入ってから何度か過激派将校によって提起された統帥権に関する問題は解決を見せたと言えた。

幾人かの中堅将校達がこれに反対し、クーデターを画策したという噂もあったが、第二次欧州大戦終結一年目の終戦記念日に天皇が三軍の設立や統合参謀部の説力に尽力した米内海軍大将や板垣陸軍大将を、異例にも個人名を上げて賞賛するコメントを発表したことで、このような動きも立ち消えしたようだった。

いわばはしごを外された形になった過激派将校たちだったが、最近では戦後の軍備縮小に伴う再編成によって軍からパージされつつあるらしい。

考えてみれば、昭和維新と叫んだ過激派将校たちの動きが、急速に勢いを失っていったのも歴史の必然であったのかもしれない。

彼らが再現しようとした御維新、つまり明治維新における闘争の象徴である戊辰戦争も、佐幕派の雄藩である会津藩などが早々と新政府軍に恭順の意を示したことで、あっけないほど流血を見ることなく集結していたからだ。

昭和維新を叫ぶ過激派には、佐幕派最後の砦たる五稜郭も与えられなかった。ただそれだけのことだった。

兵部省の設立もこの三軍統合の流れにしたがって起こったものだ

った。

ただし、昭和デモクラシーとまで呼ばれた軍の民主化という意図しない流れまで創り上げた統合参謀部設立に対して、兵部省の設立は三軍内部にさほどの衝撃を与えることはなかった。

独立した軍政組織を当初から持たずに兵部省に委ねた帝国空軍は例外としても、陸海軍にさほどの影響を与えなかったのは、兵部省に吸収された形の陸軍省、海軍省が陸軍部、海軍部として実質上残されたままであったからだ。

やはり兵部省も屋上屋に過ぎない。陸軍省海軍省に空軍省を加えただけのことはなかったのか。

そういった批判が軍内部から続出したのも当然だった。

それくらいなら、各軍で独立した軍政部を持ったほうがマシだった。

陸海軍大臣という軍政部門のトップを失うことで、政治への関与権を奪われた陸海軍で、そのような批判は顕著だった。

だが、兵部省設立によるメリットは、陸軍部、海軍部の人員を少しづつ入れ替え、あるいはお互いの組織内へと人事交流を図ることで少しずつ表に現れるようになってきた。

特に陸海軍で共通する部分の多い医務局などが組織統合を果たしていくとその効果が如実に現れるようになってきていた。

考えてみれば当然のことだった。

兵部省という新たな組織が構築されたとはいえ、これまで陸軍省や海軍省が行って来た軍政活動を停止させることができるわけはない。

行政上、書類上の組織統合は一夜にして起こるとしても、事実上の組織統合は日常業務を怠らないように緩やかに行うしかなかったのだ。

おそらく技術開発本部の設立も同じような傾向をたどることにな

るだろう。

岩淵兵曹はそう考えていた。

艦艇や戦車の構造に携わる技術者が同じ仕事につくことはないだろうが、電探や医療技術の開発などは三軍で統合してしまっても構わないはずだ。

そのような組織統合がだんだんと進んでいけば、三軍共同機関によるメリットも大きく出てくるのではないのか。

そう考えていた岩淵兵曹の考えはそう的外れでも無いようだった。電波傍受装置の操作習熟のため出向を命じられた技術研究所では、すでに陸海軍にかつて所属していた技術者たちが混じり合って新たな装置の開発に取り組んでいたからだった。

その電波傍受装置は、原理的にはこれまでの逆探と変わらないものだった。

ただし、傍受可能な電磁波の波長や強度は格段に広がっている。それに傍受した電波の諸元を記録する装置も備えられていた。

装置自体は岩淵兵曹が出向してきた頃にはほとんど完成していた。操作部も兵曹が着任後は変更されなかったから習熟にかかった期間は短かった。

そして、その傍受装置が実艦に搭載されることと、その操作員として岩淵兵曹が乗り込むことが決定された。

これは新兵器だから、新型の戦闘艦に乗ることができなのではないのか、そう漠然とそう考えていた岩淵兵曹の期待は搭載艦が運送艦だと聞いて打ち砕かれた。

もっとも岩淵兵曹が落ち込んだのはほんの一瞬だった。これは戦闘兵器ではないし、実験段階と言ってもいい兵器だった。

だから、開発段階では運送艦に搭載されるのだろう。いずれは戦闘艦に搭載されるはずだ。

しかし、岩瀧兵曹が落ち着いていられたのも搭載する運送艦が、本当は特設運送艦で、しかもそれが報国丸であると聞かされるまでだった。

それを聞くなり思わず岩瀧兵曹はうんざりとした表情を浮かべていた。

実は岩瀧兵曹は過去に報国丸と同型の護国丸に乗り組んでいたことがあった。

当時は報国丸も護国丸も特設巡洋艦として海上護衛任務についていたのだが、岩瀧兵曹はその時ドイツ海軍との戦闘で死ぬような思いをしたことがあったのだ。

だが、岩瀧兵曹は落ち込むのも早かったが、立ち直るのも早かった。

あの時は特設巡洋艦だったが、今度は戦闘任務につくことを想定していない特設運送艦だった。

それに第二次欧州大戦も集結したのだから危険なことになることもないだろう。

そう考えていた岩瀧兵曹だったが、実際に傍受装置を搭載された報国丸に乗り込むと今度はさらに啞然とすることとなった。

報国丸に搭載された新機軸は、傍受装置だけではなかった。

主機は、新型構造のディーゼルエンジンが搭載されているらしい。この航海にも、報国丸固有の乗員の他に、その新機関のデータを取得するために艦政本部第五部の将兵も多数乗り込んでいた。

さらに船倉には簡易梱包システムとかいう新機軸が導入されていた。

岩瀧兵曹にもよくわからなかったが、これは荷役作業の時間短縮や簡便化を目的としたものらしい。

鉄板で組み上げられた大きな箱の中に、予め荷物を運び込んでおき、その箱ごと荷役港へと輸送して貨物船へと積みこむ。

これで細かな荷物をいちいち人手をかけて港から船へと運びこむよりも圧倒的に短時間で荷役作業を終了させることができるらしい。

どうにも、岩渕兵曹には、予め組み立てられた鉄箱の製造コストなどデメリットばかりが目立つような気がするが、このシステムは日英露共同の大掛かりなプロジェクトという話だった。

国内でも、艦政本部や兵部省はこの荷役システムに大きな期待をかけているらしい。

元々は第二次欧州大戦において日本本土から欧州へと向かう船団を編成する際に、荷役を行う港湾設備の能力を超過したことから考案されたシステムらしい。

いずれは民間にもこのシステムを波及させるべく、兵部省のみならず、逓信省なども注目しているという噂もあつた。

報国丸の前部船倉はこのコンテナとかいう名前の鉄箱を固定するための頑丈な鉄桁などが設置されていた。

また、この荷役システムは海上輸送のみならず、鉄道での輸送も視野に入れているらしい。

岩渕兵曹が聞いた話では、バンクーバーで下ろされた鉄箱は、カナダ太平洋鉄道の改造貨物車に載せ替えられてモントリオールまで鉄道輸送されるらしい。

そこには英国に駐留する日本海軍遣欧艦隊が時を合わせるようにして寄港するという話だった。

これによってインド洋―地中海を経由する航路よりも短時間に、遣欧艦隊への補給路が確保されることになる。

初めての輸送となる今回の航海では、鉄箱の中には緊急性は薄いが、将兵たちには有難がれるであろう米や味噌が詰め込まれていると岩渕兵曹は聞いていた。

むしろ、報国丸の今回の改装はこの簡易梱包システムに対応した船倉の改造がメインであり、そこにかこつけて造機を担当する艦政本部第五部が新型エンジンをついでに搭載し、更には技術研究所が北米を航行することから電波傍受実践のチャンスとばかりの新型装置を押し付けてきた。

これが真相らしかった。

これではまるで報国丸は、運送艦ではなく実験艦のようだったが、海軍はさらに報国丸に一般兵科短期現役士官の遠洋航海実習までも押し付けてきていた。

本来、主計科や法務科といった将校相当官を確保するために始まった短期現役士官制度は、先の第二次欧州大戦における下級将校の不足を受けて、いつの間にか兵科士官や飛行科士官まで含む予備将校育成過程へと変化を遂げていた。

現在では海軍のみならず、戦時における将校不足を補うために陸空軍も同様の制度を設けていた。

産業構造の変化によって大学への進学率が向上していることが、このような予備将校育成過程の拡大を後押ししていた。

また、第二次欧州大戦後半で見せた彼ら短期現役士官や海事緒学校卒業者からなる海軍予備員将校達の活躍が、予備将校育成システムの正当性を物語っていた。

第二次欧州大戦後、多くの予備将校達は再び予備役に編入され民間へと戻っていったが、永久服役の職業軍人へと転官して正規の海軍将校になるものも少なくなかった。

また、海軍予備員将校の機関科将校達の少なからぬ数は、海軍に請われて教官職などに着任しているらしい。

これまで日本海軍は蒸気機関を主機としていたから、機関科将兵への教育を行う機関学校でもボイラーを担当する蒸気員やタービン、補機を担当する機械員たちを育成することを前提としたシステムを

構築していた。

だが、海軍は第二次欧州大戦に前後して大和型戦艦以降の戦艦にディーゼル主機を採用していた。

また、戦時中に大量建造した船団護衛用の海防艦の多くも同じようにディーゼルエンジンを搭載している。

当然だが、これまで海軍で教育を受けてきた機関科将兵は、ディーゼルエンジンの扱いに慣れていなかった。

これに対して戦時中は、民間船ですでにディーゼルエンジンの本格的な導入が始まっていたことから、民間でディーゼルエンジンの扱いに慣れていた海軍予備員を引き抜き、彼らを中核に据え付けることでディーゼルエンジン艦の運用を行って来た。

しかし、戦後ともなれば、彼らの多くも予備役入りさせなくてはならない。

それに今後建造される戦艦や大型特務艦にもディーゼル主機の搭載は確実視されていたから、海軍職業軍人の永久服役将兵の中にもディーゼル員を要請しなければならないのは急務だった。

幸いなことに、終戦から海防艦の多くは予備艦指定を受けていたから、それらの艦に乗り込んでいた海軍予備員将校を教官として引きぬくだけの余裕ができていた。

だが、海軍はそのような活躍を予備将校たちが示したにもかかわらず、未だに教育課程において短期現役士官達を軽視している傾向があった。

今期の短期現役士官候補生の長期遠洋航海に用いる艦に、練習巡洋艦ではなく特設運送艦を指定したのもその現れなのではないのか、部内ではそう考えられていた。

この時期、日本海軍には、練習任務に当たる専用艦艇が数隻在籍していた。

それだけでも諸外国から垂涎的ではあったが、その内実はさほ

ど充実したものではなかった。

鈍足とはいえ、香取型練習巡洋艦は、候補生教育のための実習施設や講堂、それに諸外国に寄港した際に要人を迎えるための特別公室など容積には余裕があった。

そのため、第二次欧州大戦参戦後は、実戦向けに改装された上で欧州に展開した潜水艦隊や護衛艦隊旗艦として転用された。

四隻が建造された香取型練習巡洋艦は、この本来想定されていないような任務に勇戦したが、大戦終結時に残存していたのはその半数、二隻のみだった。

しかし、いつまでも戦時対応の速成士官教育を続けるわけには行かなかった。

平時であればこそ、戦時には組織の中核として働くことのできるであろう、じっくりと教育を施した士官を育成する必要があった。

書類の上では、日本海軍には練習巡洋艦に加えて、更に二隻の大型練習艦が在籍していることになっている。

実戦部隊であるナンバーフリートから外された戦艦比叟と空母天城がそれだった。

この二隻はどちらも第二次欧州大戦に従事し、やはり共に同型艦を喪失している。

これにより同一艦で戦隊を組めなくなったことと旧式化が顕著になってきたことから練習艦任務に転用されたものだった。

しかし、この二隻では香取型練習巡洋艦が想定していたような、長期遠洋航海実習を行うことは不可能だった。

天城の場合、そもそも練習空母が長距離の航海を前提としていないからだ。

練習空母の任務は、まずもって航空隊の着艦訓練に従事することにあった。

大戦半ばごろから、日本海軍は空母自体とそれに積み込まれる航

空隊を分離させる空地分離を実現させていた。

それに加えて、継戦能力を向上させるために、空母航空隊の数を、実働空母の倍の数揃えるようになっていた。

つまり、洋上を航行する空母に展開する航空隊には、同規模の予備の航空隊が存在することになる。

予備とはいってもある空母に対して固有の航空隊が割り当てられているわけではないから、ある時陸地にあった航空隊が、別のタイミングでは空母に搭載されて展開することがあり得る。

だから陸上に展開している航空隊であっても、航空戦隊への配属命令に備えるために空母への着艦能力を維持し続ける必要があった。それが旧式化し、狭くなった格納庫に新鋭機を収納することのできなくなった天城が退役せずにいる理由だった。

練習空母はこのように、陸上に現在展開している部隊への支援で手一杯の状態で、とても日本本土を長期間留守にすることは不可能だった。

比叡の場合はもっと切実な理由があった。

天城と同じように金剛型の他の三隻を失った比叡であったが、当初八八艦隊構想によって戦艦として起工された天城よりも、その艦齢は長かった。

就役後数度の近代化改装を経たとはいえ、艦体自体の疲労が蓄積しており、再度の練習戦艦化となったのも、現役の戦艦としての使用が困難になってきたという理由もあった。

また、第二次大戦勃発直後の近代化改装時に搭載された主缶も、大戦時の酷使によって不良箇所が増えているらしい。

実は戦時中の長期連続行動によって機関の調子が悪くなっているのは、香取型練習巡洋艦二隻も同様であった。

しかし艦齢の若い香取型が本国帰還後に長期の入渠期間を含む修理工事を行ったのに対して、これ以上の長期就役が望めない比叡にはそのような予算が下りなかったらしい。

だから、比叡の機関は抜本的な修理工事を行うことなく、その場その場での応急工事を実施し続けるしかない状況だと聞いていた。

今年になって、比叡は親善を兼ねた近海練習航海として、シベリアロシア帝国海軍の根拠地であるウラジオストクへの航海をおこなっていたが、海軍はこの航海に大型艦隊曳船を随伴させるかかなりもめたらしい。

現在の比叡艦長は高松宮少将が務めていた。

高松宮殿下は、ロシア女帝マリア・ニコラエヴナの王婿であるルイス・マウントバツテン伯と懇意であったから、この航海は海軍同士の親善の他に、皇室とロシア帝室との皇室外交をも兼ねたものであったらしい。

そうであるがゆえに、もしも皇族が艦長を務める戦艦が日本海で立ち往生でもしたら帝国の恥を晒すことになりかねなかった。

結局はこの行動中は何事も無く終わったが、機関長ら幹部は気苦労が絶えなかったらしい。

このような状態であるから、同じ旧式化した練習艦とはいっても比叡の場合は、天城と違って近海航海を行うことすら稀で、もっぱら内地で係留された状態で将兵たちへの教育を行う半ば宿泊艦のようない扱いを受けているらしい。

岩淵兵曹が古参の兵曹長から聞いた話では、そのような扱いの艦長に皇族がたをお願いするのも恐れ多い話なので、海軍としては高松宮少将を軍令部かどこかへと転属させようとしたのだが、当の高松宮殿下は新兵たちへの教育任務を気に入ってしまったらしく、その話を断り続けているらしい。

だから柱島に係留され続けている比叡は、呉離宮だとか、宮様御殿だとかいうあだ名で呼ばれていた。

大型練習艦がこのような状態なのだから、残存した二隻の香取型練習巡洋艦に海軍がかかる期待は大きかった。

しかし、たった二隻の練習巡洋艦では、現在の格段に規模が膨れ上がった日本海軍の士官教育をすべて行うのが無理があったようだった。

だから、練習巡洋艦で遠洋航海実習を行うのは、正規の海軍将校、それも砲術や航海、機関といった兵科士官に限られていた。

戦時中の機関科の兵科への統合に伴う制度改正によって、機関学校も正規の機関将校教育を行う兵学校分校と、それ以外の専修学生等の教育を行う機関学校へと分割されていたから、練習巡洋艦で実習を行うのは海軍兵学校出身者に限られると言っても良かった。

これに対して、技術科や軍医科といった兵科以外の将校相当官候補生は、長期の航海実習の必要性も薄いことから、彼らの教育には余剰となつて練習艦に改装された松型駆逐艦などでの近海航海実習を実施していた。

将校相当官の士官は兵科士官と比べて洋上の艦体勤務となる確率は低かつたし、技術科や軍医科士官であれば、各々の部隊に配属後に実習を行うから、候補生の段階で長期間まとまって教育を行う必要性は薄かつたのだ。

このような教育体系のなかで、最も割を食っているのが正規士官以外の、一般兵科短期現役士官や予備士官たちだった。

なぜならば、正規将校同様に長期の航海実習を必要とされていないから、それに充当すべき大型練習艦が存在していなかったからだ。

練習巡洋艦は、正規の兵科士官たちの教育で手一杯だったし、他二隻の大型練習艦も日本本土から離れられず、また駆逐艦改装の急増練習艦では、長期の遠洋航海実習を行うのは困難だった。

確かに第一次欧州大戦前後から後の駆逐艦は大型化し、航洋力を手にしていたが、大洋を航行するのにはまだ過小だった。

アジア周辺の短期航海ならまだしも、教育途上のアマチュアといつてもよい候補生達を長期間乗艦させ続けるのは海軍教育に関して

逆効果と成りかねなかった。

海軍は予備士官達の多くがずっと予備役のままで、永久服役の職業軍人に切り替えるような人間は少ないであろうと予想していたが、海軍を一時の教育の失敗で嫌って予備役でさえ逃げ出したいと候補生達に思われたいとは考えていなかったのだ。

だから、海軍は大型で長距離の航海に適した練習艦任務に耐えうる、それでいて安価に運用できる艦を探していた。

そして、半ば以上実験艦として改装されて北米への航海を予定していた特設運送艦報国丸が練習艦として選択されたのだった。

元々、報国丸は大阪商船が南米航路向けに建造した大型貨客船であるから、長距離の遠洋航海実習を行うだけの航洋力は有している。北米バンクーバーへの往復という本来の航海期間も、一般兵科向けの遠洋航海実習としてはやや短いものの、十分な教育が行える時間があるだろう。

それに、最初は特設巡洋艦として、次は特設運送艦として改装されたとはいえ、元々は大型貨客船であるから、固有の乗員や、改装工事に伴う計測員などに加えて、大勢の候補生や教官達を載せるだけの居住空間や真水、食料を追加搭載できるだけの余裕があった。

問題があるとすれば、報国丸が徴用された特設艦に過ぎず、兵科士官教育に必要な兵装がほとんど搭載されていないという点だった。

このため、教育局や海軍練習艦隊は、大慌てで高角砲や機銃、それに撤去されていた魚雷発射管などの兵装を搭載した。

もともと、これまで搭載していた14センチ平射砲を除く、追加搭載された兵装の多くはダミーや旧式兵器を架台ごとそのあたりの開いた空間に括りつけたようなもので、実弾は14センチ砲弾以外は小火器用しか搭載されなかったから、行えるのは操砲訓練までだった。

それに多くの兵装はただ載せられただけで、射撃指揮装置や電探

との連動といった最近の艦載兵器では必須となっている高度な教育を行うことは不可能だった。

それらの兵装に関する高度教育は、遠洋航海実習終了後に駆逐艦なり、係留状態の比叡で行えばよく、報国丸での実習ではとりあえず航洋術や、洋上での操砲訓練のみで十分である。海軍はそう考えられているようだった。

それを聞いたとき、岩淵兵曹は他人ごとながら、すこしばかり憤慨していた。

兵曹が属する電測も新たな分野であるせいか、第二次欧州大戦戦時中は、予備員将校や短期現役士官出身の将校が少なくなかった。

岩淵兵曹達下士官兵からの予備将校たちへの評価は悪くはなかった。

彼らの多くは兵学校出身者よりも長く娑婆を経験しているせいか、下士官兵を大切に扱うものが少なくなかったからだ。

それに岩淵兵曹が個人的に知る予備将校たちのなかには、戦時下において、兵学校出身の正規将校よりも勇気を示したものもいた。

もともと岩淵兵曹をげんなりさせているのはそのことばかりではなかった。

報国丸への傍受装置の取り付けや着任挨拶などでバタバタと走りまわっていたところに、岩淵兵曹はこの傍受装置の開発目的を初めて聞かされていた。

この兵器は、岩淵兵曹が漠然と考えていたように戦闘中に敵艦からの電探情報を確認するようなものではなかった。

むしろ、平時において敵軍の活動を監視するための兵器だったのだ。

このような兵器が開発されたのは第二次欧州大戦における戦訓が切っ掛けだった。

当時、日本海軍は新たに開発された電探を扱いあぐねている所があった。

夜間や霧中などの視界不良状況においての見張りに大きな威力を発揮することはわかっていたのだが、自らが電波を周囲にばらまく闇夜に提灯のようなものではないかと指摘する指揮官も少なくなかった。

日英共同開発の電波探知機、逆探も広く搭載されるようになるとそのような意見はより強くなっていった。

理論的にいって、逆探は電探の探知距離よりもはるか遠くから電波源を探知することが可能であったからだ。

それを逆手にとつて、新たな戦術を考案、実施するものも現れた。敵軍によって照射された電波を逆探で捉え、密かに有利な位置へと接近し、いざ砲雷撃という段階になって初めて精密測定のために自艦の電探を使用するのだ。

あるいは、最後の射撃諸元まで逆探からの情報を使用することで、全く電波を発せずに、隠密雷撃を行う駆逐艦長まで現れたほどだった。

しかしこのような戦術は危険を伴うものだった。

敵艦からの反撃が脅威というのではない。

そうではなく、敵味方の判別が非常に困難である点が安易な使用を躊躇させたのだ。

例えば、先の大戦中において、後方から敵味方不明の電波を測定したある部隊が、電波源を敵艦と判断し、攻撃態勢に入つて初めて友軍と気がついたことがあった。

この時は、友軍のオーストラリア海軍に対して発砲する直前まで至つたらしい。

実際に砲撃が行われなかったのは、状況を把握した豪州海軍艦艇が発光信号で必死になって警告を行ったからだ。

このような敵味方の取り違えが起きた原因は、豪州海軍艦艇が搭載していた旧式の電探の反応を敵艦艇のそれと誤認してしまったからだった。

当時の逆探は傍受波長源の精密測定は困難だったから、このような状況が再び起こる可能性は否定できなかった。

だから、戦後日英海軍は自軍の電波兵器の性能や信頼性をさらに向上させると共に、敵国が保有する電探の情報や戦術パターンを正確に把握する必要性があると判断していたのだ。

そして、電波兵器情報の取得は、戦時に限られず、平時から行う必要性があった。

戦時中に探知したとしても、それを海軍部隊に広く知らしめるのは時間的に言って困難だが、平時から電波に関するデータベースを構築し、各部隊に配布しておけばいつ戦闘状態に入っても、あるいは緊張状態に置かれても敵味方の判断は用意になるだろうからだ

だから、この傍受装置が実用化したとしても、その多くが装備されるのは戦闘艦ではなく情報収集艦、あるいは民間商船へ密かに搭載されることになるらしい。

我ながら奇妙なものに携わってしまったものだ。岩淵兵曹はそう考えていた。

1947 特設運送艦報国丸2

いつの間にかうつらうつらとしていたらしい。

岩淵上等兵曹は、ふと気がつくと椀の中に箸を突っ込んだまま眠りかけていた。

しかも一度や二度ではなかった。そのたびに目覚めて、何度か箸を動かして口に運んでは、また眠りかけていた。

兵曹が考えていたよりもずっと疲労が蓄積していたのかもしれない。

気がつけば下士官兵用食堂からは人気がなくなりかけていた。

報国丸は雑多な所属の人間たちが乗り組んでいたから、喫食時間もばらばらだったが、それでも兵曹の食事時間は長すぎたようだ。

洗い場当直の主計兵が、いつまでたっても片付かないからか、しられたような目で兵曹を見ているような気がした。

すでに碗内の米は冷え切っていた。だが、幾度目かの覚醒の後、兵曹はぼんやりと椀の中身を見つめていた。

やはり呆けたような顔つきになっていた。

これでは何時迄経っても仕事が終わらないな、岩淵兵曹を見ながら主計兵はそう考えていた。

だが、電測員長に食事を急げと命令するわけにもいかなかった。

不貞腐れたような表情で廊下に視線を向けた主計兵は、次の瞬間慌てて敬礼していた。

誰かが卓の前に立ち止まった気配があった。

だが、岩淵兵曹は顔を上げて誰かの顔を確認するのも億劫だった。どうせ、すぐに立ち去るだろう。そう考えていたのだが、予想に反して、その誰かは、椅子を引いて、兵曹の前に盆をおいて座り込

んでいた。

さすがに不審に思っただけ嫌そうな顔を上げると、すぐに兵曹は、面倒くさそうな顔になって、そしてさらに今度は無表情を作り上げた。

しかし、目の前に座った男はくるくると変わる兵曹の表情に気がついているのかいないのか、にこにここと邪気のない笑顔を見せていた。

下士官兵用の食堂で喫食しようとしているにもかかわらず、男の三種軍装の襟に縫いつけられた階級章は間違いなく少佐のものだった。

この海軍軍人としては太りすぎている紺野技術少佐は、報国丸に乗り組んだ将兵たちの中で、岩淵兵曹が最も苦手な男だった。

艦政本部第五部は造機部とも呼ばれ、日本海軍が保有する艦艇、兵装ほか艤装品の建造、開発を担当する艦政本部の中で機関部に関する計画、開発を行う部署だった。

紺野技術少佐は、その艦政本部第五部の部員で、この航海の前に報国丸に搭載された、新型エンジンの開発に携わっていたらしい。

このエンジンは正確には、これまで搭載されていたディーゼルエンジンの改良型であるという話だった。

各部品や構造を、艦政本部第五部の監督と指導のもとで原型機を建造していた三井造船で再設計されたものだということだった。

実際には、艦政本部第五部で担当している大型軍艦用ディーゼルエンジンの開発研究で得られた技術のスピノフ、あるいは新技術の実証のために、民生用エンジンをテストベットとして建造し、特設巡洋艦の改装期間を利用して搭載したというのが事実であるらしい。

その搭載工事はかなり無理のあるものであったと聞いていた。

機関が据え付けられる台座やプロペラと繋がる中間軸との取り合

い位置などはこれまで搭載されていたエンジンと同様のものであったのだが、元々貨客船のメインエンジンは交換が容易に可能であるように設計されていなかった。

そのため、船倉につながる隔壁を溶断して大穴を開けた上で、メインエンジンや、それに関わる補機類を取り払って、代わりに新設計のものを運び込んだのだと岩淵兵曹は機関分隊に所属する機関兵曹から聞いていた。

比較のために二基装備されているエンジンの片側はこれまで搭載されていたものがそのまま残されていた。

今回の工事期間を利用してオーバーホールは実施したらしいが、従来エンジンのオーバーホールと新エンジンの搭載の並行作業となった機関部の工事はかなりの工数になってしまったらしい。

岩淵兵曹が携わる電子兵装の搭載など、この機関工事の工数に比べれば些細なものであったから、すんなりと施工が決定されたのかもしれない。そのことを知ってから兵曹達電測員はそんな冗談を口にしたほどだった。

紺野少佐は、その新型エンジンのデータを採るために乗艦した艦政本部員たちの指揮官だった。

ただし、岩淵兵曹には、紺野少佐から海軍の伝統的な指揮官らしい威厳や迫力を感じ取ることは不可能だった。

少佐の年齢は、階級やこれまで聞いた経歴から判断すれば、少なくとも岩淵兵曹と大して変わらない30代前半にはなっているはずだったが、自分の仕事を語っている時の表情は、まるでお気に入り玩具を自慢する子供のような目になっていた。

それに海軍の士官らしくもなかった。丸々と太っている割には意外なほど機敏に動く彼の外観がそうだというのではない。便乗した技術士官とはいえ、本来であれば紺野少佐は兵員食堂ではなく、士官室で食事をすべきだった。

しかし、少佐は、士官室に余裕がないだとか、機関室にこもりが

ちになるから他の士官たち食事時間を合わせるのが難しいだとか色々理由を作ると士官室から逃げだしてしまっていた。

ときたま、兵から累進した古参の特務士官が兵員食堂で飯を食うことがあったが、佐官が兵たちに混じって食事をするのは前代未聞であるのではないのか。

このような特殊任務についている特設艦であるからこのような異妙な行為も黙認されているのだろうが、正規の軍艦であれば許されないはずだ。

だが、前に一度岩淵兵曹は紺野少佐にそのようなことをいったのだが、当の少佐は事も無げな表情で、自分がそんな正規艦艇に乗ることがあるとは思えないから気にしなくていいのではないのか、そう言っていた。

岩淵兵曹には、どう考えても特設艦に喜んで乗りたがる佐官の気持が理解できなかつた。

厄介なことに、紺野少佐にとって岩淵兵曹はお気に入りの下士官らしかつた。

所属も職種も異なる二人が知り合ったのは、紺野少佐がどこからかつて報国丸と姉妹船として建造され、同じように海軍に徴用されて特設巡洋艦となった護国丸にかつて岩淵兵曹が乗艦していたと聞いてきたからだった。

その話を聞いてすぐに紺野少佐は岩淵兵曹のところまで駆けつけると、無礼なほど馴れ馴れしい態度で、護国丸に乗艦していた時のことや機関に関する感想を根掘り葉掘り聞き出そうとしたのだ。

正直なところ、岩淵兵曹には迷惑な話だった。護国丸に載っていたのはもう五年も前の話だったし、その間に死にそうな目にもなっている。あまり思い出したい話でもなかつた。

もし聞いてきたのが同輩や新任の士官であれば無視していたところだった。

それに岩淵兵曹は当時から電測を担当する下士官だったから、機

関部のことはよくわからない。

そういつて逃げ出したものの、その後も艦内で会うたびに紺野少佐は馴れ馴れしく話しかけてきていた。

どうにも、紺野少佐の馴れ馴れしい態度よりも、あの変人少佐の仲間だと周囲の人間から思われる方が自分にとって不快らしい。

最近になってようやく岩淵兵曹はそう気がついていていた。

外見通りというべきか、紺野少佐が飯を食う速度は異様なほど速かった。

少佐よりもずっと早く卓についてはいたが、もそもそとゆっくり居眠りしながら食べていた岩淵兵曹がと食べ終わるのはほぼ一緒だった。

二人共食事中は一言も喋らなかつた。

岩淵兵曹はただ、紺野少佐と話しあう理由もなかつたからだが、少佐は何故か食事中には得意話も何もかも一言も口に出さなかつた。

どうやらそう躡けられていたか癖になっているらしい。

だから、紺野少佐が飯を食い終わる前にさつさと逃げ出そうとしたのだが、それは叶わなかつた。

洗い場の主計兵へ盆を返そうとして立ち上がるうとした岩淵兵曹の背に声がかげられた。

「主機の…音が変わったのに気が付きませんでしたか」

ぎくりとしながら、見るからに嫌々そうな顔になって岩淵兵曹は振り返った。

すでに紺野少佐も食べ終えて盆を抱えて立ち上がっていた。

少佐から逃げ出すのには失敗してしまつたらしい。そして経験上、もう少佐からは逃れられないと考えるべきだった。

岩淵兵曹が、紺野少佐に連れてこられたのは報国丸の機関室だつ

た。

少佐の誘いを、岩淵兵曹は何とかして断ろうとしたのだが、それは無駄な努力に終わった。

今、二人は機関室後部の隔壁上部近くの階段踊り場から二基の主機を見下ろしていた。

主機関には報国丸機関部個有の兵員が操作している他に、データ取りをしているらしい艦政本部部員や実習中の士官候補生たちなど意外なほど多くの人間がいた。

機関室に入る前に少佐が自慢気に言った台詞によれば、新型機関の駆動音は従来のものと比べて大幅に低減されているという話だったが、機関室内に響く二基の主機からの轟音からはとてもそうとは考えられなかった。

岩淵兵曹は呆けたような顔で、紺野少佐の説明を聞いている。だが、実際のところ騒音が大きすぎて、少佐の言っていることの半分は聞こえていなかった。

機関室の右舷側に据え付けられているのは、これまで搭載されていた従来型エンジンだった。

燃料ポンプなどの主機付き補機類やメインベアリングなどは今回の改修工事で交換されたと聞いているが、少なくとも見た目は岩淵兵曹が護国丸で見た動画たエンジンと変わらないようだった。

そして、左舷側に据え付けられているのが新設計のエンジンと言っ話だった。

元々左舷側に据え付けられていたエンジンは、戦時中から故障を頻発していたらしい。

岩淵兵曹も参加していた大戦中盤の海上護衛戦闘に従事していた時の被弾によるものらしかったが、戦時中は船渠が塞がれていたことや、とりあえずは動くこと、何よりも元々高速の報国丸は片舷機のみでも低速貨物船よりもは速力が出たから、特設巡洋艦としての運用は無理でも、運送艦としてならば使用に耐えていたらしい。

それが終戦後の大改装でようやく新型エンジンと交換されることとなった。

今までの航海でその設計変更点に何箇所か不具合が発見され、その内の幾つかは船内で修理、改造が行われたらしい。つい先程も左舷機を止めて、整備を行っていたと聞いている。

だが、一見しただけでは兵曹の目には、左舷機と右舷機ではあまり変わらないように見えた。

主気付き補機を除けば、各種補機や主機が据え付けられた台盤との取り合いも一緒の寸法だという話だった。

もちろん、図面上の寸法が同一だといっても、大型船用機関の大きさともなれば、プロペラ軸との個体差による寸法公差は大きくなる。

だから、新しいエンジンの施工にあたっては、工廠工員の職人芸によるシム高さ、据付位置の微調整が施されていた。

もちろん今岩渕兵曹が見ている風景にはそのような微調整の後は見えなかった。

シリンダーの気筒数や口径も同一だから、素人目には同じエンジンにも見えた。

だが、少佐の台詞をエンジンの騒音の中で生返事で相槌を打ちながら聞き流している間に、岩渕兵曹は新設計のエンジンになにか大きな円筒状のものが据え付けられているのに気がついていた。

円筒は内部で分割されているらしかった。接続されている配管の取り合いが前後で違っていているのだ。

それぞれの配管は出入口一対、それが前後にあるから、計四個の配管との取り口が円筒には設けられている。

そのうちの片方の配管の正体にはすぐに気がついていた。というよりもその円筒の位置からしてそうとしか考えられない。

各気筒からまとめられた排気管が円筒の片側に流入するようになっていた。そして円筒の中で何か処理された後に煙突へと導かれる配管へと排出されているようだった。

円筒から出た後の配管は、従来型エンジンの排気配管と機関室上部で合流して煙突へと向かっていた。

騒音のせいか、それとも疲労のせいか、薄ぼんやりとした思考で岩淵兵曹は、円筒に接続されている残りの出入口一対の配管の正体を類推しようとしていた。

もしかするとこの円筒はただの排気マニホールドなのかもしれない。それとも排気ガス温度を低減する装置でも付いているのか。

他の電測員から、水上艦艇を搜索するための赤外線監視装置の存在を聞いたことがあった。

今現在は搜索範囲は夜間であつても目視可能な近距離しか探知できないそうだが、その赤外線監視装置に発見される主な原因は主機から排出される高温の排気ガスであるらしい。

しかし、もう一対の配管の正体はよくわからなかった。

入り口か出口かわからないが、片側の配管が機関室上部から伸びているのはわかった。排気配管とは位置が異なるから、煙突に繋がる配管では無いようだった。

もう片方の配管の行き先を見て岩淵兵曹は首を捻った。

配管は一度下に下がってエンジン中部で何か別の装置に入っている。

その装置には冷却用の配管が接続されているらしかった。他の補機のものと同様、冷却管を示す塗装が施された配管が接続されている。

そして、円筒から伸びてきた配管は、最終的にそこから出て、主機中部に接続されていた。

エンジンのことはよくわからないが、排気管があんな妙な位置に接続されているのだろうか、あるいは復動エンジンの排気管かもし

れないが、下部から出た排気だけ冷却水で冷却する必要があるとは思えない。

しばらく首をひねっていた岩淵兵曹は唐突に気がついていった。

あれは：吸気管ではないのか。つまりこれは排気式の過給器、なのか

岩淵兵曹の表情の変化に気がついていたらしい。あるいは騒音の中で話をする困難さによろやく気がついたのか、紺野少佐が手招きしていた。

少佐が指し示す先には、ガラスと隔壁によって覆われている機関制御室があった。

機関制御室は機関室内の騒音が嘘に思えるほど静かだった。

今閉じたエンジンが置かれた機関室との扉はかなり分厚いようだが、それだけでこれだけの防音性が保てるものなのだろうか。

不思議そうな顔で岩淵兵曹は振り返って扉を見た。

制御室には操作盤に取り付いた数名の下士官の他に、彼らを監督するように一歩下がった位置に座った機械長がいた。

数年前ならば機関兵曹長となるはずだったが、機関科が兵科に統合された今は、彼も兵科の兵曹長だった。

制御室の扉が開いたことで騒音が聞こえたのだろう。機械長は怪訝そうな顔で振り返ると、岩淵兵曹に気がついて軽く手を上げて挨拶した。

岩淵兵曹が敬礼をする間もなかった。一度上げかけた手の持つて行き先が見当たらなくて、兵曹は戸惑って愛想笑いを返した。

機械長もニヤリと笑うと部屋の隅を指さした。そこには機関分隊の持ち物なのだろうコーヒーマーカーがあった。脇には豆の袋とミルまであった。

明らかな私物だったが、仕事に支障がなければ最近ではあまりとやかくいう士官も少ない。

第一、機関分隊の士官以外はめつたに機関室には来なかった。

「随分とモダンなんですか」

岩淵兵曹は機械長の卓にあった彼のものらしいカップと、コーヒーカーの近くにあった空カップにコーヒーを入れた。カップは当然割れることのない金属製のものだった。

機械長にカップを差し出すと自分もカップを口に持っていった。あまりコーヒーには詳しくないが、安い豆ではなさそうだった。

「そのコーヒーの機械のことか？それならあの人の私物だよ。何でもアメ公製の輸入品なんだそうだ」

部屋に入るなり、ドタドタと音を立ててデータを確認しにいった紺野少佐を、機械長は親指でさした。

これも意外な趣味なのだろうか。岩淵兵曹にはよくわからなかった。

「あの扉…随分と音を遮るようですが。何か仕組みでもあるんですか」

再び機械長は扉の方を振り返ってから、すぐに顔を戻して、なんでもないような顔でいった。

「あれ、中に綿だか布切れだかが詰めてあつて音を伝えないようにしてるらしいんだ。何でも鉄砲の減音器と同じ理論だとかいう話らしい」

岩淵兵曹は思わず眉をしかめていた。別にコーヒーが苦かったからではない。

「つまりこの部屋全体が綿入れのようなものですか…そのわりには熱くありませんが」

それを聞くなり、機械長はコーヒーを吹き出しかけていた。

「馬鹿な事言わんでくれよ。一応この部屋用の通風器はあるし、第一断熱されて機関室の熱が遮られるくらいだよ」

「しかしこの壁面に全部綿が詰め込んであるんでしょう？随分と贅沢な話じゃないですか」

「確かに俺が生まれた頃なら綿入れなんて高すぎて兄貴のお古のペしゃんこになつたものしかなかったがな…しかし、電測員長は若いのに考えは古いんだな」

岩淵兵曹は首をしかめた。

「そりゃあ最近じゃ洋服の類も安くなつてきてるらしいですがね。私はずっと艦隊勤務でしたから」

機械長はにやにやとしながらいった。

「最近の物価くらい押さえとくと、海軍から暇を出されて娑婆に出たとき困るぞ。それにあの中に詰められてるのも、娑婆で出回つてる服も最近のは安い満州国製がほとんどらしいぞ」

そんなものなのだろうか、岩淵兵曹はコーヒーを飲みながら考えていた。

確かに、最近では綿製品のようなものは、工業化が進んだ日本国内で生産しては人件費がかかりすぎて、値段が釣り合わなくなつてきているらしい。

それに変わつて満州国が安い労働力を背景に布製品などの輸出に力を入れつつあるらしい。

データの確認を終えたのか、紺野少佐が近づいてきた。

少佐に自由に話をさせると逆に長くなる、これまでの経験でそう理解していた岩淵兵曹は、少佐が口を聞く前に尋ねた。

「あのエンジン付きの円柱は…排気式の過給器なのですか。局戦のエンジンに据え付けるような」

前に航空部隊の下士官から排気過給器の話聞いたことがあった。今では空軍に移籍された局地戦闘機、いわゆる迎撃任務の戦闘機には、高高度への上昇や戦闘機動を可能にするために、高高度の低圧環境下でも十分な吸気量を確保するために排気過給器が搭載されているらしい。

紺野少佐はあっさりと答えた。

「そうですね。あれはターボチャージャーです。…何度か説明した

つもりでしたが、言ってみせませんでしたっけ？」

悲しそうな顔で言われて、岩淵兵曹は詰まってしまった。話半分で聞いていたのか、それともエンジンの騒音で聞こえていなかったのだろうか。

馬鹿正直にそう答えるわけにもいかないから兵曹が戸惑っていると、機械長はそれに気がついたのか、わざとらしく顔を背けた。肩が震えているからおそらく必死で笑いをこらえているのだろう。

どうも少佐の話を真面目に聞いていないのは岩淵兵曹だけではないのかもしれない。

だが、紺野少佐はそんな二人の様子に気がついていないのか、明るい表情に戻すと、今度は機械長に顔を向けた。

「やはり故障の原因はベアリングのバランスシングが狂っていたようですね。さつき確認したところでは、振動や異音は消えているようです」

岩淵兵曹は怪訝そうな顔で聞いていた。機関室の後部から、前部に設けられたこの制御室に来るまでに紺野少佐があの手筒の過給器を素早く見渡したいたような気がしたが、あの騒音の中で異音の有無まで聞き分けていたというのだろうか。

そういえば、過給器を見ている時だけは、睨みつけるような鋭い視線を向けていたような気がする。

「たしかに、ベアリングを交換してからは異常は見られませんな。しかし、ベアリングの歩留まりが悪いんですかね？特に面倒くさい構造とは思えないんだがなあ……」

笑いを収めた機械長は、立ち上がった、制御室に備え付けられた図面帳を素早くめくると排気過給器が載っている図面を開いた。

「ベアリングの構造自体には基本的には問題はないはずですよ。日本標準規格の規格品から材質を上げたものに変えただけですよ。むしろ問題は過給器の方にあるのかもしれない」

「やっぱり速度が？」

「ええ、回転速度が早すぎるんですよ。それで軸受部の冷却が追いつかなくてベアリングの潤滑がおかしくなってしまう。かといってあまり大口径にして回転速度を落とすと今度はインペラーの生産が難しくなりそうですし…」

紺野少佐は唸り声を上げると髪を掻きむしった。機械長はその様子に苦笑いをしながら言った。

「とりあえずは、予備のベアリングを大量に確保しておくしか無いですな。これまでの故障発生時間を考えれば、この航海の間ぐらひは十分に間に合うくらいのは数は確保してありますし、幸いベアリングの交換と整備は容易なように設計されていますからな」

限界にあんたは予め予想していたんだろうという意味を込めているのだろう、機械長はどこかにやにやとした表情になっていた。

「まあ、そうなんですけどね。とりあえず、バンクーバーについたらまたベアリングを交換して磨耗を見てみましょう。本土に帰ったら冷却水の流量を増大するしか無いですね。早く耐熱性の高い新型ベアリングが出来てくればいいんですが…」

「どうだろうね、おそらくそんなベアリングは高くなっちまうでしょうな。出来たとしても片っ端から例の甲巡に持って枯れるような気がしますな」

機械長は肩をすくめながら言った。

「それならそれで、新重巡洋艦に納入予定の従来ベアリングをかつばらう口実ができるじゃないですか」

もう雑談のレベルになってきたらしい。機械長が図面帳を棚にしまつのを確認してから岩淵兵曹は不思議そうな顔で聞いた。

「その…重巡洋艦、いや甲巡にディーゼルエンジンを搭載する計画があるのですか」

紺野少佐はなんでもないような顔で答えた。

「いえ、計画段階ではなく、決定事項です。すでに一番艦用のエンジン生産は川崎と三井で開始されています。過給器は石川島製にな

りますがね」

なぜか紺野少佐は得意満面といった表情になっていた。岩瀧兵曹は、そこにもう一つの疑問をぶつけてみた。

「しかし、自分にはよくわからんですが、商船では燃料消費が少なければいいというのはわかります。そのほうが儲かる、いや、経費が減るんでしょうから。それに戦艦のような大型艦でも航続距離を進捗できるからディーゼルエンジンを採用するというのもうなずけます」

そこから先を言ってもいいものか、ほんの少し迷ったが、兵曹が何を言うつもりなのか察した機械長が、にやにやとこちらを見ているのに気がついて続けた。

「ですが、いくら燃費がいいからといって、ディーゼルエンジンを巡洋艦のような機動力が重要な艦艇に搭載するのはいかなものでしょうか。ディーゼルエンジンは燃費はいいが、重量が過大にあっってしまうと聞いたことがあります。元々燃料タンクが巨大な戦艦ならばともかく、航続距離も短い軽快艦艇ではいくら燃費が良くとも機関部の重量が過大となってしまうのではないですか」

こつこつ議論はもう何度もしているのだろう、紺野少佐は表情を変え、話を続けると身振りでも示した。

「巡洋艦以下の軽快艦艇に対しては従来と同様に蒸気タービン艦とすべきではないのですか、ドイツやアメリカでは日本海軍のものよりも高圧の蒸気を使用していると聞きます。まだ蒸気艦にも効率を向上させる余地はあるのではないのでしょうか」

ここまで言ってから、門外漢のくせに専門家に道理を説くという無茶をしたことに、岩瀧兵曹は赤面していた。

だが、紺野少佐は、珍しく言葉を選ぶようにしていった。

「実のところ…私個人はともかく、艦政本部がディーゼルエンジンの方にこだわっているわけではありません。ただ、蒸気タービンの製造に関してはすでに限界に達している部分が出てきていると考えています」

「限界に…ですか。あの、性能ではなくて製造にですか」

怪訝そうな顔で岩淵兵曹は尋ねた。対する紺野少佐は気分が乗って来たのか次第に饒舌になり始めていた。

「製造に関してです。例えば呉工廠では、新興金属工業という新会社まで作らせてタービンや補機ポンプの製造能力を増大させていますが、前大戦では結局造機能力が不足して海防艦の大部分はディーゼルエンジンの搭載を余儀なくされたと聞いています」

そこまで言うと、さらに紺野少佐は身振り手振りまで加えて来た。振り回した腕に当たりそうになった機械長が迷惑そうな顔で避けた。

「また、安易な蒸気配管の高圧化は大戦中のドイツ海軍艦艇のような故障率の著しい増大を招きます。蒸気の高圧下は同時に冶金や材料学の進化によって生み出される配管の信頼性向上があつて初めて取り組むべきなのです。それに対して」

紺野少佐は力強く右手で制御室の外、メインディーゼルエンジンを指し示した。

「それに対して現在の帝国はディーゼルエンジン製造に関して世界をリードできる立場にあるのです」

いくら何でもそれは言い過ぎではないのか。岩淵兵曹は胡散臭そうな目になっていた。紺野少佐もそれに気がついたのか、じろりと一瞥してから続けた。

「先程も言ったとおり、海防艦や戦時標準船の主機としてディーゼルエンジンは大量に生産された。少なくとも製造ノウハウに関しては確立されたと言つてもいいでしょう。もちろん、整備や修繕に関する技術者もです」

そのノウハウを確立するまでに、現場では予備士官の大量動員など随分と無理をさせられたと聞いているが、岩淵兵曹はしらけた表情になっていた。

「ですから、今ディーゼルエンジンの効率を向上させる技術を確立していけば、いずれ世界のディーゼルエンジンを帝国が支配することも可能であるはずですよ。それだけの技術的先行を確保し続けて…」

そこまで言ってから唐突に紺野少佐は振り返った。しらけた表情をしているのは岩淵兵曹だけではなかった。機械長や、少佐の大声の演説に気がついた機関兵たちの何人かも呆れたような目を向けていた。

わざとらしく咳をして間を持たせると紺野少佐は素知らぬ表情で続けた。

「まあそんな訳です。まあ本当にディーゼルエンジンの開発にのみ力を注いでいるわけではないのです。蒸気配管の高圧化、それに対応したタービンの開発も進んでいます。実際、太刀風型駆逐艦では従来よりも蒸気の質が向上しているそうです」

冷静さを取り戻した紺野少佐に興味をなくしたのか、機械長を除く機関兵は、持ち場に戻っていった。

「それにまだ概念研究段階ですが、艦艇用の主機としてジェットエンジンを搭載するということも考えられます」

「ジェットエンジン、というと奮進機関ですか、震電とかミーティアが搭載しているような…」

岩淵兵曹はあっけに取られた。兵曹の脳裏には巨大な翼を付けて、艦尾から火を吹いている戦艦が震電とミーティアを従えて飛んでいる光景が浮かんだ。

これではまるで押川春浪か海野十三じゃないか。岩淵兵曹は紺野少佐がからかっているものと思っただけだが、少佐は怪訝そうな顔をしただけだった。

「電測長はターボプロップというエンジンをご存知ですか」

「ターボプロップ…ですか？」

岩淵兵曹は首をかしげた。元々エンジンに関しては専門外だ。

「今、英国で開発が進められている航空機用エンジンなんですけど、簡単に言ってしまうと、通常のジェットエンジンと違って、エネルギーの大半を使ってプロペラを駆動させようというものです。つまり、推力はエンジンからの排気ではなくて、レシプロ機のようにプ

ロペラを回転させて得ようというのです」

ようやく岩淵兵曹にも納得できた。

「つまり艦艇用の奮進機関というのは、飛行機のプロペラではなくて、スクリュー軸につないでしまおうと……」

「そうなります。航空機用プロペラよりも艦船のプロペラはずっと低回転ですから減速装置は複雑になるでしょうがね」

だが岩淵兵曹には再び疑問が沸き上がってきた。

「そのターボプロプエンジンですが、基本的には今までの奮進機関なのですよね。だとすると凄まじい轟音を発してしまうのではないですか？最近では潜水艦からの魚雷も音響を追いかけてくると聞いていますが、そんな轟音を発するのは問題となってくるのではないのでしょうか」

紺野少佐は視線を空中に彷徨わせた。どうやら答えられないというわけではないらしいが、それをどうやって説明すればいいのか悩んでいるようだった。

「未だ概念段階ですから、はっきりとしたことは言えませんが、おそらくジェットエンジンを搭載しても音響が持つエネルギーはほとんどが空中に排気と共に排出されるように設計することは不可能ではないと思います」

「空中に……ですか」

「そうです。もともとジェットエンジンの騒音は、後方には激しいものの、側面はそうでもないそうです。ですから、この制御室のように防音壁でエンジン自体を覆ってしまえば、艦内の騒音は最低限で済ませ、大部分は排気と共に排出できるでしょう」

少佐はそこで言葉を切ると、岩淵兵曹に顔を向けた。

「水中への音響は実のところそれほど考慮していません。これはデイズルエンジンに関しても同じ事ですが、ゴムのような柔軟性のある素材の上にエンジンを据付けさえしまえば、船体伝わる振動、すなわち水中への騒音はだいぶ軽減されるはずです。それにジェット

エンジンの騒音源の殆ど排気であつて、水中騒音源となるエンジン自体の振動は従来のエンジンよりも少ないくらいのはずですから」

実のところ、紺野少佐は最後までしゃべることが出来なかった。

一人の兵が、勢い良く機関制御室の扉を開けたからだ。機関兵たちが新たな騒音に振り返ると同時に鈍い音が聞こえた。

制御室に飛び込んできた兵は岩淵兵曹の部下の一人だった。手にはなにか紙束を掴んでいる。

そして、その兵の足元には、勢い良く開けられた扉に吹き飛ばされた紺野少佐の姿があつた。

だが、兵はそんな少佐に気がつく様子もなく、岩淵兵曹のもとに駆けつけた。

「員長、こんなところで油を売つとる場合じゃなかです！」

それだけ言うとおっけに取られている兵曹の手に紙束を押し付けた。

少佐に振舞わされている兵曹の内心のどこかではよくやったと賞賛したい気分だったが、さすがにこれはやり過ぎだろう。何か罰を与えなければなるまいな。

だが、紙束に書きこまれた手描きのメモ、それに傍受装置に直結する記録装置の出力を見てそんな些細なことは忘れてしまつていた。「これは…ダッチハーバーから電波源が移動しているというのか」

数時間前、岩淵兵曹が休憩に入ったときには、むしろ弱まりつつあつた電波強度が急速に上昇していた。

しかも電波源は緩やかに移動しつつあることを数値は示している。移動速度からすると電波源が航空機であるとは思えなかつた。さらに電波源は複数存在していた。

結論はすぐに出た。ダッチハーバーから艦隊、それもこの距離で個々まで明確に探知できるほどの強力な電探を装備した艦を複数含む有力な艦隊が出港しようとしているのだ。

おそらく訓練出勤なのだろうが、目的地はどこだろうか、時系列に従って電波源位置をプロットしていけば、艦隊の進行方向もわかるはずだ。データを得るのに十分な観測時間があつたのかどうかはわからないが、複数の紙束があるということは、少なくとも大雑把な推測は可能であるはずだ。

だが、岩淵兵曹はその作業をすぐに中断した。必要なデータはすでに紙束の隅に書かれたメモに記載されていた。すでに部下の誰かが方角の推移を行っていたらしい。

「ほぼまっすぐに南下しているのか…」

だとすると最接近までさほど時間はかからないだろう。岩淵兵曹は部下に力強く頷くと、機関制御室を駆け出していた。

入った時は、あれほど大きく響いていたエンジンの騒音も気にならなくなっていた。

いまはとにかくアメリカ海軍の電探の情報を出来るだけ詳しく採取することしか考えられなかったのだ。

そういえば、制御室を出るときに何か柔らかいものを踏みつけたような気がしたが、すぐに忘れることにした。

1935 建艦計画変更始末

1

海軍艦政本部から、三菱重工長崎造船所に最上型軽巡洋艦5番艦の主席監督官として、派遣されていた大佐の下に軍令部から電話があったのは昭和10年の初めの頃だった。

だが、電話を受けた大佐は、首をかしげながら話を聞くことになった。

電話の相手が言っているのは相当に奇妙なことだったからだ。その相手は軍令部に所属する海軍兵学校の同期生だった。

彼は、長崎造船所で行われている新船渠の拡張工事を、主席監督官として三菱長崎造船所に要請して一時停止しろといていた。

そのころ海軍休日と呼ばれる軍縮条約時代が終わろうとしていた。正確に言えば条約の失効は1935年のことだった。

もちろん、それは1930年に批准されたロンドン軍縮条約の期限が切れるというだけにすぎない。

だから実際には、その前後から列強各国によって軍縮条約の延長が協議されることになるが、ワシントン軍縮条約から続く軍縮条約のさらなる延長が、実際になされるかどうかは不透明だった。

数年前に、ドイツ共和国首相の座についたヒトラー首相によってジュネーブ軍縮条約からドイツは脱退していた。

また、その直後に国民投票での大多数の支持を受けたヒンデンブルク大統領とヒトラー首相は、国際連盟からのドイツの脱退を宣言していた。

条約の制限下にあるとはいえ、巨大な戦力を誇るイギリスやフランスに対して、現状でまるで大人と子供のような力関係にあるドイツ

ツが、それに拮抗できる戦力を整備することが出来るとは思えないが、そうであればこそ足かせとなる軍縮条約の破棄に踏み切ったのかもしれない。

今のところ、ヒンデンブルク大統領らは、ドイツ国内で未だに強い勢力を持つ軍部に対する求心力を発揮させるために軍縮条約の脱退を制限したと推測されていた。

だが、日本国の意思とは関係なしに、欧州での政治情勢が大きく変化しており、それは欧州列強のパワーバランス、ひいては軍事力の再編成をも予感させるものだった。

このような状況では新たな軍縮条約を締結することには各国も二の足を踏むのではないのか、そう推測するものは少なくなかった。

長崎造船所でも軍縮条約の失効を見越して船渠の拡大工事に入っていたところだった。

軍縮条約が破棄された場合、新たに建造されるであろう新造戦艦は、条約時代に開発された新技術つぎ込まれた基準排水量で四万トンを超える大型艦になるだろうといわれていたからだ。

現在日本海軍に所属する戦艦のうち、最新鋭である長門型は条約の制限上排水量三万トンをやや超える程度におさめられているが、条約破棄を見越した改装計画では、四万トン近くになるだろうと想定されているらしかった。

だから新造戦艦の排水量が四万トンというのは予想としてはおとなしい方だった。

というよりも、16インチ主砲を装備した上で、攻防速のバランスを取った戦艦を三万五千トンという軍縮条約の規定内に治めるのは実質上不可能だったのだ。

だから、想像力豊かなものの中には、日本海軍の個艦優越主義を理由に挙げて、新造戦艦の排水量は五万トン位にはなるのではないかというものもいた。

長崎造船所では、いずれ来るであろう新造戦艦に関する海軍からの要求を見越して船渠の拡張工事を行っていたのだ。

行われているのは単純な船渠の新設だけではなく、建造船渠周囲のクレーン揚力の増大を含む大規模なものになる予定だった。

この船渠自体は計画段階で破棄された八八艦艇計画に伴って建造されていたものだったが、現状では長門型の入渠で手一杯となるサイズだった。

軍令部からの要求ではその拡張工事を中断してほしいというのだ。だが拡張工事を行わなければ、現在の造船所で建造できるのは最大でも長門型程度の戦艦になってしまうだろう。

建艦思想に急な変化でも現れない限り、建造可能な船体の規模は変わりようがないから、この事実に代わりは無いはずだ。

電話を終えた大佐は判断に困る表情をしていた。
艦政本部から出向している大佐に軍令部が命令を下すことは出来ない。

だからあくまでも今の電話の内容は要請ということになる。

それに造船所の監督官に、軍令部が口を出してくるといのは明らかに職務を逸脱する越権行為であるとも言えた。

本来であればそのような命令は軍政を担当する海軍省隷下の艦政本部からくだされるはずだった。

第一、たしか今の相手の所属は、情報を担当する軍令部第三部だったはずだ。

本来、新造艦に関する要求などは軍備を担当する第二部から出るはずだった。

しかし海軍艦艇を実際に設計し、建造に携わる行政を行うのは艦政本部であるにしても、それを要求、認可するのは軍令部の仕事だ。もしかすると軍令部第三部では何らかの新造艦に関する情報を入力しているのかもしれない。

実際に新造戦艦の規模が長門型程度の排水量におさまるのであれば、拡張工事は無駄に終わってしまうだろう。

拡張工事自体は長崎造船所の自事業ではあるが、拡張工事にかかった費用は、いずれ新戦艦建造価格の上昇という形で国費に跳ね返ってくるのだ。

これが拡張された船渠でないと建造できない大型艦に使用するのならはまだ意味もあるが、現状の船渠でも建造できるサイズの戦艦を建造するのであれば、拡張工事分の価格上昇は単なる無駄にしかない。

つまり、この電話を単純に越権行為であるといって無視するわけにもいかなかった。

だからといって、ここで拡張工事を中断してしまうとその後の建造計画は大きく狂ってしまうだろう。

しばらく悩んでから大佐は別の同期生に電話をかけた。軍令部が何故こんな要請を出したのか知りたかったからだ。

一体、海軍の艦政に何が起ころうとしているのか、それが知りたかった。

畑違いなのはその同期生も一緒だったが、彼は自分などよりもはるかに行動力があるし、それにある意味における政治力は、一監督に過ぎない自分とは比較にならない。

どうにかして情報を掴んできてくれるだろう。

「建艦計画が大きく変更されたという噂は本当か」

艦政本部の施設が入った海軍省の廊下で、唐突に背後から声をかけられた宮元造船中佐は、慌てて振り返った。

いつの間にか近づいていた声の主は、宮元中佐のすぐ後ろにたっていた。

声の主である伊原大佐は、硝煙と汗の染み付いた陸戦衣を着込んだまましかめっ面をしていた。

確か伊原大佐は、去年昇進してすぐに横須賀鎮守府付から古巣であるシベリア駐留特別陸戦隊に異動になったはずだった。

日本海軍が、将官クラスを指揮官とする大規模な常設の特別陸戦隊をシベリア・ロシア帝国に駐留させるようになってから、すでに十年以上が経っていた。

それに付き合わされるように、日本陸軍も一個師団を基幹とするシベリア派遣軍を駐留させていたから、日本軍全体がシベリア・ロシア帝国に派遣している戦力は二個師団弱という大規模なものとなっていた。

伊原大佐は、シベリア特別陸戦隊が編制される以前から、シベリア・ロシア帝国に駐留する陸戦隊に一貫して所属し続けていた古強者だった。

というよりも、伊原大佐自身が、日本海軍がシベリア・ロシア帝国に特別陸戦隊を駐留させざるを得ない状況を創り上げた一人だったのだ。

元々日本海軍は、欧州大戦への介入前までは陸戦隊をさほど重視していなかった。

帆船時代のような斬り込み戦術を行うのでもない限り、大規模な陸戦部隊を海軍が抱え込む必要性はさほど無かった。

欧州大戦時に大規模な陸戦隊が編成されたのも、元々はガリポリへの上陸時にいち早く橋頭堡を確保するために編成されたものが、ズルズルと解隊されないまま常設化してしまったただだと明言するものもいた。

欧州大戦終結時点の日本海軍は、いつの間にか大規模になってしまった陸戦隊を、平時においては、大戦で得た貴重な戦訓を維持し続けるための教導部隊的な性質をもつ小規模なものへと縮小させる方針だったらしい。

部隊の核となる下士官を多く集めた教導部隊さえいれば、有事の際に短期間で再び大規模な部隊を編成するのは難しくないはずだった。

十分な教育を受けた士官や下士官達を中核として、動員された兵員を指揮させれば精強な部隊を編成することが出来るからだ。

だが、このような海軍の方針は、シベリア出兵に参加した小規模な陸戦隊が上げた成果によって大きく狂わせられることとなった。

伊原大佐が当時所属していた陸戦小隊を含む特別編成の戦隊が、シベリア地方まで脱出してきたロシア皇帝の遺児であるマリア皇女とアナスタシア皇女を救出することに成功したのだ。

この成功自体は、海軍にとって、ボルシェビキゲリラの鎮圧に成果をあげていた陸軍に対しても誇りうる大きな成果だった。

しかし、その代わりに日本海軍にシベリアーロシア帝国への関与を強要される切っ掛けともなった。

マリア皇女が女帝として即位したシベリアーロシア帝国は、その

成立直後からボルシェビキが支配するモスクワ政府との内戦を余儀なくされた。

1920年代にはバイカル湖周辺が、シベリアーロシア帝国とソビエト連邦との事実上の国境として固定化されたが、それが危うい均衡によるものであるのは間違いなかった。

これに対して日英を始めとする国際連盟諸国は、ロシア帝国への軍事援助を惜しまなかった。

彼らにとって、シベリアーロシア帝国は、異質の政治体制であるソビエト連邦に対する防波堤であったからだ。

シベリアーロシア帝国に対する援助は軍事的なものには限らなかった。

援助というのには語弊があるが、1922年には、イギリスは欧州諸国の王族とも血縁関係を持つルイス・マウントバッテン卿を、マリア女帝の王婿として婿入りさせていた。

これにより、イギリスはロシア帝室を見捨てないという政治的なメッセージを送ったとしても過言ではなかった。

また、遠隔地故にイギリスは、直接の戦力をロシア帝国に派遣することはなかったが、最新の技術や金融関係でロシア帝国を援助していた。

これに対して、日本国は、近接する隣国ゆえか直接的な兵力の派遣に踏み切っていた。

というよりも、ロシア帝国の方から、皇族救出に功のあった日本海軍陸戦隊の駐留継続を打診してきたのだ。

勿論、シベリアーロシア帝国をソビエト連邦に対する緩衝地帯として維持し続けたい日本国政府はその条件を飲んでいった。

政治的には勿論、シベリアーロシア帝国は日本製の兵器を大量に輸入する貴重な顧客でもあったから、財政界からも軍事力の展開によるシベリアーロシア帝国の支援は強く支持されていた。

日本海軍が特別陸戦隊を派遣する以上は、対抗上陸軍も師団級の部隊を派遣せざるを得なかった。

かくして、陸海両軍あわせて二個師団規模にもなる大規模なシベリア派遣軍が編成された。

勿論、シベリア派遣軍の規模は、平時におけるものでしかなかった。

海軍シベリア特別陸戦隊は、ほぼ編制通りの充足態勢だったが、陸軍がウラジオストクに駐留させている第二十師団は、各連隊共に大隊単位の欠員があった。

だから、いざバイカル湖で大規模な兵力衝突が起こる際には、陸軍はさらに数個師団を内地からシベリアーロシア帝国に派遣する態勢を整えていた。

そのために、初の陸海軍共同部隊となったシベリア派遣軍司令部は、平時に有する戦力は海軍シベリア特別陸戦隊と陸軍第二十師団でしかないのに、有事の移動が難しい補給部隊や派遣軍直轄の砲兵などは平時から充実させていた。

その中には、日本陸軍砲兵の虎の子とも呼ばれる列車砲まで含まれていた。

こうして日本海軍にしてみれば、政治上の利害関係から強要されたような形で始まった特別陸戦隊の編制であったが、否応もなく始まった長期の駐留は、海軍に独自の軍警察である警務隊の編制を強要させるなど、組織の再編成を促す切っ掛けともなっていた。

陸軍によらない軍内部犯罪の摘発を目的として編制された海軍警務隊であったが、編制開始から十年近くが経った今では、独自の諜報網を有する、陸軍憲兵隊と並ぶ情報組織へと成長した。

ただし、日本海軍の主力戦闘部隊が戦艦を基幹とする連合艦隊にあることは今も昔も代わりはない。

艦隊勤務者がシベリア特別陸戦隊に向ける目は冷ややかなものだった。

国策と化したシベリアーロシア帝国への支援そのものに対して露骨な批判を加えるものは少なかったが、若手士官達にとってシベリア特別陸戦隊への辞令が左遷と同義語である事実に変わりはなかった。

日本海軍の上層部が伊原大佐に向ける視線は、さらに複雑なものだった。

伊原大佐が皇女達を救出した功績は大きい、彼のせいで大規模な陸戦部隊を抱え込む羽目になってしまったのだともいえたからだ。

だから、伊原大佐が日本海軍の主流である艦隊勤務や連合艦隊司令部といった司令部参謀へと転任する可能性はなかった。

ロシア皇帝から直接勲章を賜った英雄を海軍から追い出すことはできないが、彼の居場所がシベリア特別陸戦隊にしか無いのも事実だった。

奇妙なことに、後発であるはずの陸軍の若手士官達の間では、シベリア派遣軍司令部直轄部隊や、第二十師団への転属は決して悪いコースではなかった。

通常陸軍部隊は、編制地付近の出身者が所属する郷土部隊制度をとっているが、駐屯地がウラジオストクにある第二十師団は、近衛師団などと同様に日本全国から集められた将兵で編成されている。

元々朝鮮半島で編制が開始された第二十師団は、その当時から実際には駐屯地ではない日本本土から補充されていたのだが、ウラジオストクという間違えようもない外地に駐屯するようになって、その傾向は完全に固定されていた。

だから、第二十師団には志願した将兵も多く、外地に展開することと手当も大きかったから、士気や練度は本土に駐留する部隊と比べても高かった。

日本政府がシベリアーロシア帝国への支援を本格化するにあたって、その派遣軍も重要度が高まっていったから、士官級の將校にとっても、シベリア派遣軍への転属は一種のエリートコースとなっていたのだ。

同じシベリア派遣軍に戦力を展開させてはいても、陸軍と海軍、さらには海軍本流とシベリア特別陸戦隊との間には、長い駐留期間の間にかかなりの温度差が生じていた。

3

宮元中佐は、伊原大佐に、恐る恐る声をかけた。

伊原大佐は性格ゆえか、いつも単刀直入に本論へと斬り込んでくるから、下手な事を言えば、すぐさま不機嫌になってしまふのだ。

「大佐は…シベリアにいたのではないのですか」

伊原大佐は、しかめっ面のまま陸戦衣に縫い付けられているシベリア特別陸戦隊の隊章を言わずもがなと言いたげな様子で示しながらいった。

「シベリア帰りだ。内地には今日の朝ついたばかりで、特急を乗り継いで東京に着いたのは一時間前になる。…それで、建艦計画の変更とはなんなのだ」

声はぶっきらぼうだったが、機嫌が悪いわけではなさそうだ。

長い付き合いからそれを悟った宮元中佐は胸の中でそつとため息をついた。

常にしかめっ面をしているせいで勘違いされやすいが、普段の伊原大佐は別に付き合いにくい性格というわけではなかった。

しかし通常軍衣の勤務者ばかりの艦政本部の中では、陸戦衣を着込んだ伊原大佐は目だっつてしょうがなかった。

別に探られて痛い腹があるわけではないが、シベリア帰りの大佐と密談するなどという妙な噂を立てられては面倒だった。

しばらく周囲を見渡した宮元中佐は、空き部屋に伊原大佐を引き釣り込むようにして入れていた。

部屋に入るなり、宮元中佐は伊原大佐に負けず劣らずのしかめっ面を作り上げると伊原大佐を質した。

「建艦計画の変更などという話は一体どこから聞き込んだのですか」

その話はまだ軍令部の一部と艦政本部にしか伝わっていないはずだった。

情報の出所は外務省だが、まさかそんなところからロシア帝国とソビエト連邦との最前線にいた伊原大佐に話が伝わってきたとは思えなかった。

いくら長い付き合いの友人であるとはいえ、軽々しく話せる内容の話でもなかった。

だが伊原大佐は何でもなさそうに返した。

「民間の造船所に監督官として派遣された同期の奴からそれとなく探ってくれといわれてな。やはり計画変更は本当なのか」

それを聞くなり、宮元中佐は眉をしかめた。

おそらく民間の造船所とは三菱の長崎造船所のことだろう。

建造予定の新造戦艦は、呉海軍工廠と三菱重工長崎造船所で同時に起工する計画があったからだ。

まだ計画変更の話は造船所にまでいつていないはずだったが、軍令部かどこかから話が漏れたのかもしれない。

三菱重工長崎造船所では、それに合わせて拡張工事を実施してるという話だったから、その流れから漏洩したのかも知れなかった。

そこまで考えると、宮元中佐はため息をついていた。

このように畑違いの大佐にまで話が伝わるくらいだから、すでに機密は有名無実とかしていると考えるべきかも知れなかった。

むしろ、すでに海軍内部に正確な情報を伝達すべき時点で達しているのかもしれない。

不確かで曖昧な情報が伝わるよりも、そちらのほうが混乱は少ないのではないか、そう考えていたからだ。

しかし伊原大佐は何故建艦計画に興味を示したのだろうか、それが宮元中佐の新たな疑問だった。

兵学校卒業から経歴のほとんどを陸戦畑で過ごしてきた伊原大佐と、軍縮条約が破棄されるにせよ、継続されるにせよ建造されるであろう新造戦艦のイメージがどうしても結びつかなかった。

「いいでしょう。建艦計画の変更については他言無用という条件で説明します。そのかわり大佐が何故戦艦の建造計画に興味を持ったのか、教えてくれますか」

しばらく伊原大佐は珍しく戸惑った顔をしたが、最後には無駄に重々しくうなずいた。

その建造所にいる大佐の同期生には少なくとも話は伝わってしまっただろう。

宮元中佐は、再びため息をつくと話し始めた。

「最初は大佐にお伺いしますが、軍縮条約の延長に関する会議がジュネーブで行われているのはご存知ですか」

わずかに身じろぎしてから伊原大佐がうなずいた。

「ワシントン軍縮条約の延長だったかな。軍令部やG F司令部の一部は条約延長に反対しているとかいう噂は聞いたことがある」

「それが一転して条約の延長に賛成する将官が増えているそうです。いまだ決定はされておりませんが最終的には海軍も総論として軍縮条約の延長に賛成するという形になると思います」

「それは…一体何があったのだ」

伊原大佐は驚いた顔をした。

元々ロンドン、ワシントンと続いた海軍軍縮条約に反対する勢力は大きかった。

軍縮条約で課せられた対米比七割に制限された戦力では、仮想敵である米国海軍の本格的な交戦に不利であったからだ。

特に軍令部員には軍縮条約に反対するものが多く、艦隊派として、軍縮条約が締結された後も、条約に反対し続けて破棄を訴えているらしい。

だが、軍縮条約締結当時も海軍中枢から遠く離れたシベリアにいた伊原大佐に入ってきた情報からでも、艦隊派の主張には無理があることは明白だった。

彼らは八八艦隊計画のような軍備拡張計画を支持していたが、これは相当に無茶のある計画だった。

八八艦隊計画は、建造費だけで当時の国家予算の1/4を使う物になっていったという。

勿論艦隊はただ建造すれば良いというものではなく、建造した艦にはしかるべき教育を受けた人間が乗員として必要だったし、維持に係る予算も膨大なものになったはずだ。

海軍予算の増大と、これによる国家経済の圧迫は、日本一国だけではなく、程度の大小はあっても、米国や英国でも同様であった。

そのまま漫然と軍拡を続けてれば、各国共にいずれ経済が破綻し些細な切っ掛けから先端が開かれていたのではないのか。

それを防いだだけでも軍縮条約の意義は極めて大きかったはずだ。

確かに対米比では日本海軍の戦力が制限されたのは確かだが、軍拡を阻止されたのは米海軍も同様なのだし、シベリアーロシア帝国という共通の支援対象をもつ英国とは一蓮托生ともいえる日本が、ただ一国で米国との戦争に突入する可能性は極めて低かった。

だから、実際には対米比の戦力は、日米で7対10ではなく、日英と米とで17対10とも言えるから、日本海軍が、太平洋と大西洋の両海洋に戦力を分けて展開させなければならぬ米国海軍に対して一方的な不利とは言えなかった。

当時の艦隊派は、欧州大戦を契機に大きく飛躍した日本経済をすれば、大規模な軍拡を続けることも可能だとしていたが、伊原大佐の目には現実を無視した空想的な文句としか思えなかった。

確かに日本経済は空前の好景気を示していたが、それはあくまでも欧州大戦という戦争による特需効果にすぎない。

実際に輸出されている品目は圧倒的に軍需物資ばかりであり、それは大戦の終結と同時に需要が著しく低下していたのだから、下手をすれば逆に戦後恐慌に陥る可能性も高かった。

当時の大蔵大臣による内需の拡大や、シベリアーロシア帝国という新たな軍需輸出先の出現がなければ、実際に大規模な不況へと突入していたのは間違い無いところだという経済学者は少なくなかった。

艦隊派は、八八艦隊構想で建造されていた艦艇の廃艦こそ予算の無駄使いではなかったかと指摘していたが、伊原大佐には必ずしもそうは思えなかった。

条約の規定によって保有量を越えてしまった艦艇の少なからぬ数が、シベリアーロシア帝国を始めとする友好国に売却されて外貨を稼いでいたし、巡洋戦艦として建造されていた天城と赤城は揃って空母改装されるいる。

純粹に廃艦となった加賀、土佐の2戦艦も実艦砲撃標的となつて、平時では得られない貴重なデータを提供してくれた。

この砲撃実験はかなり込み入ったもので、加賀と土佐の艦内には乗組員を想定して豚などの獣を配置して、生物に対する砲撃の影響を観測することまで行われたと聞いていた。

だから、廃艦とはなつても、この2戦艦は日本海軍に多大な貢献をしたことは間違いなかった。

4

しかし、軍縮条約の失効を直前として、条約の延長に反対する艦隊派の勢いが再び拡大してきているらしい。

軍縮条約が締結された当初とは、軍事予算を支える日本経済はさらに進捗しているから、米国海軍に対抗するだけの艦隊を無理なく揃えることは決して難しくはない。

対米比は英国と共同で当たればこちらが有利というが、米海軍はパナマ運河を利用して自在に短時間で戦力を移動させることが出来る。

だから、実際に対米比は七割で考えるべきだというのだ。

軍令部総長の座につく伏見宮博恭王を始めとする艦隊派はそう訴えているという。

実戦経験をもつ皇族将官という伏見宮を筆頭にいただく艦隊派の勢力は大きく、その主張は極めて強かった。

だから、伊原大佐でなくとも、その艦隊派の主張を抑えつけて、軍縮条約延長に踏み切る可能性が高いという話に驚くのは無理もなかった。

下手をすれば、条約延長に賛成する条約派によるミスリードを狙った怪文書ではないのかと疑われてしまっただろう。

宮元中佐は、困惑顔の伊原大佐に軽くうなずくといった。

「何でも外務省ルートで英国からの申し入れがあったという情報が入ってきたのです」

「英国から…だと」

伊原大佐は、しばし首をかしげた様子だったが、ふと合点が行ったような顔になった。

「ということは英国から日本海軍の制限を緩めるための支援があるということなのか」

「そうだと思います。英国としては軍縮条約を延長することで海軍予算を抑制したいという狙いがあったのででしょう。」

具体的には、帝国の海軍力を対米英比で現在の五対三から五対四とすることに協力するというものだったらしいです。

まあロシア帝国と中華民国への武器輸出は順調ですから、今の帝国には無理をしなくともそのぐらいの艦艇を整備できるだけの鉄鋼生産量はあるといえます」

そこで言葉を切ると、宮元中佐はここから先は私見ですがと断ってから続けた。

「英国にしてみれば、ここ最近の米ソ間の接近に脅威を感じているのかもしれない。」

数年前に外務委員のトロツキが渡米したのは大々的に報道されましたが、最近確認されたソ連海軍のキーロフ級重巡には、明らかに米国の技術支援の影響がみられるそうです。

このまま米国の支援によってソ連が軍拡に転じれば、英国は米ソ

によって包囲されてしまうのではないのか、そのような観測もつよいのではないでしょうか。

だからこれに対抗するために我方の陣営も強化する必要がある、具体的には日本海軍を増強することによって太平洋側から米国を牽制する…英国の考えはこのようなものではないでしょうか」

「だが、米国が日本海軍の増強を黙って許してくれるかな、米国にしてみれば、逆に日英によって包囲されるように感じているのではないのか」

宮元中佐は、苦笑しながら答えた。

「どうでしょうね、そこまで行くと我々の判断できる範囲を超えてしまいますが、英国にしてみれば、米国による対ソ支援を攻めつづけていれればいずれ米国は折れると考えているのかもしれない。」

米国にしてみても、日英が揃えて軍縮条約を脱退して軍拡に転じるよりもは、日本海軍の戦力拡大を制限したほうがまだ有利と判断するかもしれませんし」

伊原大佐はそこまで聞くと、納得したように何度か頷きながら言った。

「なるほどな…いずれにせよ条約が延長されれば実質上は対米比八割ということか、それで艦隊派を納得させられるな。これで条約は延長ということになるのか」

宮元中佐は、そこで苦笑いしながらかぶりをふった。

「それが面倒な話になっているそうです。艦隊派では条約に縛られない大型戦艦を欲する一派がまだあるそうです。なんでもその戦艦は六万トンを超える大型戦艦になるとか言う噂があります」

「軍縮条約では戦艦の上限は…」

「排水量三万五千トン、16インチ以下ということになります」

眉をしかめた伊原大佐を横目で見ながら、宮元中佐はさらに続け

た。

「艦隊派がまだ何を言うか分かりませんが、おそらく条約は延長されるでしょう。」

その場合帝国海軍は三万五千トン級戦艦を三隻新造するということになるでしょう。」

また旧式艦の代艦建造も許可されるという噂ですから各国三乃至四隻がさらに代替として建造されることになりました。」

伊原大佐は、また難しい顔になりながら旧式艦の顔ぶれを思い浮かべた。

おそらく代艦を建造されるのは最も旧式の金剛型ということになるだろう。」

「ということは合計で七隻程度が建造されるということか」

宮元中佐は軽くうなずいてから記憶を確認するように行った。

「新型戦艦は新造三隻と練習艦となっている比叡を除いた金剛級の代艦で三隻、計六隻が建造されるという計画です」

このクラスだと呉工廠、三菱長崎造船所、横須賀工廠あとは川崎造船神戸で建造が可能ですから同時に三隻を起工するという、まあここまでくると単なる構想段階ですがね

それに戦艦だけ造ってもバランスの悪い艦隊になってしまいますから巡洋艦や駆逐艦、それに空母もやはり建造されるでしょう

これによって帝国海軍は一回り艦隊規模を…大佐？」

伊原大佐は頭を抱えながら近くのいすに座り込んでしまった。宮元中佐は慌てて大佐のそばに近寄った。

「何てこった…それじゃしばらく予算は建造費に持っていかれてしまっではないか」

意気消沈した様子の伊原大佐に、宮元中佐は首をかしげながら恐

る恐るたずねた。

「大佐は…何故建艦計画の変更に興味を示したのですか…」

それこそが宮元中佐が抱いた疑問だった。

陸戦畑を進んできた伊原大佐と、戦艦の建艦計画はあまりにもイメージが重なり合わなかったからだ。

伊原大佐は、やる気のなさそうな顔を上げるとぼそぼそといった。「いや、新戦艦が小さくなるのならその分の予算を陸戦隊にもらえないかどうかと思っただが艦隊の規模を大きくするなどというつもりなら期待は出来んだろうな」

「陸戦隊の予算をですか…しかし何か予算が必要なものがあつたのですか。それほど大きなものでなければ今の海軍予算なら通るでしょう」

宮元中佐は首をかしげた。

政治的には傍流だが、シベリア特別陸戦隊の予算規模は決して小さいものではなかったはずだ。

「必要なものは…戦車だ。それも警備や搜索用の軽戦車では話にならない。装甲と火力を併せ持った戦車でなければならんだろう」

宮元中佐は呆気にとられた。そんな戦車が海軍に必要なとはとても思えなかった。

確かにシベリア出兵とシベリア・ロシア帝国の成立以来、常設の特別陸戦隊の増勢が行われてはいたが、基本的に陸戦隊は要地警備や海外邦人の救出が任務なのだ。

重量級の戦車ではそのような任務を行うのは難しいだろう。

それどころか輸送などの運用面での問題が多すぎて部隊の足を引っ張ることになるのではないのか。

宮元中佐は造船が専門で、陸戦はあまり詳しくは無いが、それぐらいは予想できた。

だがそのことを質すと伊原大佐はなんでもないようにいった。

「それは認識がいささか不足しているな。最近のソ連軍は機甲化を進めようとしている。国境紛争などの最前線で戦うとその雰囲気を感じられるよ」

「ソ連軍の戦車ですか…」

「うむ。国境紛争などででてくるのは軽量のBT戦車だが、彼らは戦うたびに確実に戦訓を得ている。我が陸軍やロシア帝国軍も八九式中戦車を投入してはいるが、いかんせん機動力に劣る八九式では防衛は出来ても高速のBT相手では追撃戦は出来ん。

陸軍さんだつて戦車部隊の数は限られている」

「それで陸戦隊でも戦車をということですか…しかし実際のところ陸戦隊は軽装備によつて機動力を高めているのではないですか。

戦車などの重装備を部隊に持たせた場合、肝心の機動力を低下させることにはなりませんか」

伊原大佐は眉をしかめた。それからしばらく考え込んでからいった。

「必ずしもそうとはいえないのではないのか。例えばその装備すべき戦車だが装甲と火力、機動力を併せ持った設計を行うことは不可能ではないはずだ。

それにこれからは内燃機関の時代となるはずだ。

アメリカではすでに家用車が珍しくないらしい。帝国でもこれからさき民間でも自動車の保有数が増えてくるだろう。

第一、すでに陸軍では重砲はトラクターで牽引しておるんだ。

陸戦隊でも戦車だけではなく部隊全体の機械化率を高めることで機動力を高めるといふ手法をとるべきだろう」

宮元中佐は再び呆気にとられた。どうみてもそんな重装備は陸戦隊には不釣合いだ。

それに常設の特別陸戦隊ならばともかく、艦隊が臨時に編成する

ような陸戦隊ではそんな装備は不可能だ。

「常識的に考えてそれほどの重装備では陸戦隊の任務を果たすことは出来ないのではないですか…」

そんな装備を抱えたままでは警備任務や上陸戦など不可能です。そのくらいならば対戦車兵器を充実させたほうが効率が良いのではないでしょうか」

「別に艦隊陸戦隊まで重武装しろといっておるわけではないんだ。特別陸戦隊向けだけでも重装備を揃えるべきだ。

それに簡便な対戦車兵器の充実は確かに不可欠だがな、よく考えてみる。今でさえ速射砲は馬匹で牽引しなければならんのだぞ。

この先、さらに重装甲になってくる戦車を撃破できる速射砲が要求されるだろうが、それは馬で引つ張れるようなものではなくなる。そんな大型火砲を運搬する為にどんどん大型化していくトラクタ…それくらいなら最初から戦車を運用したほうがマシだ。

現実的にいって最も有効な対戦車兵器は戦車だよ」

宮元中佐は伊原大佐の言うことに一応は納得できたものの、釈然としない思いは残った。やはり機動力を重要視される海軍陸戦隊にはそんな重装備は認められないのではないのか。そう思っていた。

だから、伊原大佐がふと気がついたように自分のことを見つめてこういったのには閉口した。

「そうだ、貴様その海軍戦車を設計してみないか。貴様は今戦艦を担当していると聞いたが、その戦艦が小さくなるなら設計家の数も少なくなるんだろう。」

ならその分貴様も手が空くじゃないか、その分を戦車の設計にかしてみないか」

これまでの憂鬱そうな表情が嘘であったかのように伊原大佐はにこにこ微笑んでいた。

「確かに予算は制限されるかもしれないが、試作車両を研究目的で作ることは出来るはずだ。いざとなったらそれを量産できるだけの体

制だけでも今から整えておけばいいんだ。

考えてみれば平時から戦時標準規格船を研究しているのだから、
ういう目的なのだしな」

宮元中佐は、呆れたような顔になっていった。いくら何でも伊原
大佐の言っていることは無茶苦茶だった。

「いくら何でもそれは無茶でしょう。いや、試作車両の建造自体は
できるかもしれませんが」

伊原大佐の政治的な権限、いやゴリ押しを前提とすればだが、宮
元中佐は胸中でそう考えながら続けた。

「しかし私の専門は造船です。戦車どころか陸上兵器の設計などお
門違いですよ」

だが、宮元中佐は、伊原大佐がきょとんとした顔をしているのを
見て絶句した。

どうやら伊原大佐は本気で言っていたらしかった。

「だが、最初の戦車は陸上戦艦として海軍で考案されていたらしい
ぞ。それに戦車というものは、言ってみれば装甲で出来た箱に強力
な大砲と内燃機関を押し込んだものだろう。」

そこだけとれば戦艦と一緒にゃないか。細かな設計手法は陸軍さ
んのものを転用すればいいんだし、戦車や装甲板は海軍自前で調達
できるんだから、後はそれを組み合わせればいいだけなんじゃない
のか」

宮元中佐は、本当に伊原大佐は戦車のことを理解しているのだろ
うか、ぼんやりとそう考えていた。

まさかそれからすぐに、本当に伊原大佐によって自分が艦政本部
から引きぬかれて、海軍技術研究所の別室扱いでシベリアに編制さ
れた戦車開発班の班長に任命されるとは思いもよらなかつた。

ましてや、艦政本部の上層部が、シベリアーロシア帝国との関係が強すぎる伊原大佐と親しいという理由で、宮元中佐を特に引き止めなかったとは考えもつかなかった。

1940タラント防空戦1

もう11月の半ばに入るが、地中海は夜といえども暖かった。

だから、マリーオ・ボンディーノ大佐が、艦橋脇のひどく狭いブルワークから見下ろす第二主砲塔脇の上甲板には、何人かの水兵が談笑しながら夜の海を眺めているのが見えた。

彼らの視線の先には、漂白中のヴィットリオ・ヴェネトを防衛するように低速で航行する駆逐艦アルティリエーレの姿があった。

ヴィットリオ・ヴェネトを中心に、ゆっくりと回頭し続けているアルティリエーレの様子を見て、思わずボンディーノ大佐はにやりと笑みを見せていた。

就役してからまだ日の浅いヴィットリオ・ヴェネトの完熟訓練に付き合わされている形のアルティリエーレだったが、自身の将兵の練度も自慢できるものではなかった。

先月のマルタ島沖で起こった夜間戦闘でアルティリエーレは、前任の艦長が戦死するほどの大損害を受けていた。

戦闘自体は、直前にアルティリエーレに半ば試験目的で取り付けられていたドイツ製レーダーの効果もあって、有力な英国海軍部隊に対して引き分けに持ち込んでいたが、大破した艦橋に取り付けられていたレーダーは当然、喪失していた。

アルティリエーレは、戦闘後に生存していた幹部要員の手でなんとか母港まで帰還していたが、タラント軍港に付属する工廠で行われていた修理が終わったのはつい先日のことだった。

すでに戦時中であることもあり、短期間で現役に復帰させるために、修理工事は艦橋を建造中の同型艦用に施工中であったものを最大限流用するものとなった。

だから、工事完了後のアルティリエーレは、他のソルダディ級とは微妙に異なるシルエットとなった。

そのせいと言うわけではないだろうが、アルティリエーレの姿は、ボンディーノ大佐には、どこか不安を覚えるものに映っていた。

おそらくボンディーノ大佐の不安感の理由は、新たに製造されたハードウェアにあるのではなかった。

ここの機器そのものは、新造されたとはいえ、ほとんどこれまでのもので変わりないものだったからだ。

問題があるとすればアルティリエーレの艦そのものではなく、乗組員というソフトウェアにあるはずだった。

一ヶ月近くかかった修理の間に、アルティリエーレの数少ない古参兵は、すでに他の艦へ異動しており、代わって多くの新兵が配属されていた。

それどころか、未だに正規の艦長人事さえ行われておらず、代理で指揮をとっていた副長がそのまま艦長に就任するという噂が流れていた。

そんな状態だったから、すでに代替艦が配属されている原隊の第11駆逐隊には戻らずに、所属も宙に浮いたままだった。

だからこそ、夜間航行と昼間対空戦闘演習を行うヴィットリオ・ヴェネトへの同行があっさり認められたのだろう。

今もアルティリエーレの舵取りには、どことなくぎこちない感じがしていた。

艦長代理のルティーニ中佐は、艦隊勤務の長い歴戦の指揮官だったから、おそらく実際に舵輪を預かる操舵員が新兵なのか、それとも舵取の指揮をとる当直士官が新米なのだろう。

あれではルティーニのやつも苦労しとるだろうな

艦橋でやきもきしながら叱咤激励しているのであろう士官学校後輩の、ルティーニ中佐の生真面目な顔を思い浮かべながら、ボンディーノ大佐はにやにやと笑みを見せていた。

もつともボンディーノ大佐が艦長を務めるヴィットリオ・ヴェネ

トにしても、あまり他所のことはとやかく言えるような状態ではなかった。

本来ヴィットリオ・ヴェネトは同型艦の中でネームシップとなる一番艦となるはずだった。

実際、起工日こそ同日だったものの、命名、進水式では二番艦であるリットリオよりも一ヶ月近く早かったのだ。

しかし、進水後に機関部に不具合が発見されたことで、艤装期間が計画よりも長くなってしまい、結局就役日は大きくずれ込んで、二番艦リットリオの後塵を拝することとなってしまった。

だから、本来の予定ではとうの昔に戦力化されていなければならぬこの時期に、ヴィットリオ・ヴェネトは演習を続ける羽目になっていた。

もつとも艦長であるボンディーノ大佐には大した危機感があるわけではなかった。

確かに地中海でも戦端は開かれてしまったとはいえ、予想よりも先頭は激しくならなかったからだ。

イタリア海軍の仮想敵であったフランス海軍が、早々と母国が降伏してほとんど無力化されていたし、予想外の敵国となった英国海軍も地中海での行動はさほど盛んにならなかった。

その理由は明らかだった。

フランス降伏直後に、地中海西端の出入り口であるジブラルタルをドイツ空軍降下猟兵部隊などの高速展開部隊が占拠してしまったからだ。

明らかにジブラルタルの領有権を主張するスペインの協力があったのだから、今もなおスペインは関与を否定していた。

だが、法的には中立であっても、スペインのフランコ総統がドイツよりに傾きつつあるのは確かだった。

その証拠に、ジブラルタルは未だに補給線の伸びきったはずのドイツ軍の占領下にあった。

ジブラルタルに駐留するドイツ軍の補給物資の幾らかはスペインを経由して陸路で運ばれているらしい。

それはドイツおよび同盟国にとって、スペインの中立を犯さないためだけの公然の秘密となっていた。

ジブラルタルがそのような状況だから、夜陰に紛れた潜水艦による突破を除けば、英国海軍が地中海の西端から入り込むのは不可能になっていた。

つまり、英国海軍は、有力な本国艦隊を保有しているにもかかわらず、地中海に戦力補充を行うのが難しくなっていたのだ。

今では、地中海に展開する英国海軍は、戦力を保持するためにエジプトを固めていると信じられていた。

ボンデューノ大佐に危機感がないのは、そのような戦況だけではなかった。

大佐の長い艦隊勤務の中で乗り組んだどの艦よりも、ヴィットリオ・ヴェネトは優れたハードウェアだった。

高い防御力と打撃力、それにこれまで建造された戦艦よりもずっと速力も高かった。

機関部の不具合は確かに就役を遅らせはしたが、予め問題点を洗い出すことができたとも言えた。

それに、ソフトウェアたる兵員も決して悪いわけではなかった。確かに新兵は多いが、それだけに鍛えがいはあるはずだ。

実際に、訓練期間の間兵員の練度と士気が上がっていくのがボンデューノ大佐には感じられていた。

ヴィットリオ・ヴェネトが、先に就役したリットリオを追い抜い

てイタリア海軍で最高の戦艦となる日はさほど遠くないはずだ。

ボンディーノ大佐はそう考えていた。

もつとも、そうとでも考えていないと、この大事なときに訓練に明け暮れる自艦の様子に憤慨してしまうからかもしれないが。

ふと背後に気配を感じてボンディーノ大佐が振り返ると、済まなさそうな顔をした機関長がつたつていた。

機関長が妙な表情をしているのには理由があった。

ヴィットリオ・ヴェネトがこんな所で漂流していたのは、機関長の指揮下にある機関部に原因があったからだ。

一時間ほど前に、機関部から艦尾にある軸室の中間軸受の温度が異常に上昇を続けている。

そう報告を受けたボンディーノ大佐は、即座に機関長に機関停止と原因追求を命じていた。

一時間たつてようやく、原因を探りあてた機関長がここまで報告にやってきたのだろう。

だが、ボンディーノ大佐は、彼にしては珍しいほど陽気な声でいった。

「どうだ機関長、原因はわかったのか」

相変わらずすまなさそうな表情をしている機関長の顔を見れば一目瞭然だったから、ボンディーノ大佐は、出来るだけ機関長に余計なプレッシャーを与えないようにしていた。

しかし、まだ若い機関長は、ボンディーノ大佐の配慮に気がつく様子もなく、ただ恐縮しているだけだった。

「原因はウチの新兵のミスでした。その：機関室から軸室に行く潤滑油ライン入り口のバルブを絞り過ぎていたんです。それで高速回転中の中間軸受で油切れが起こりかけて過熱したようです」

ボンディーノ大佐は一度頷くと、確認するようにいった。

「では、現在は原因は取り除かれていると考えて良いのだろうか」
機関長は、大きく頷いた。

「現在は、潤滑油供給量は正常に戻っています。念の為に軸室の潤滑油系統を機械長に確認させましたが、異常は見つかりませんでした」

それを聞いて、ボンディーノ大佐はしばらく考えこんでからいった。

「潤滑油が一時切れて加熱していたということだが…軸受メタルが破損している可能性はないだろうか。ああ、このまま最大戦速を發揮させても問題はないのかといった意味で考えて欲しいのだが。専門家としてどうだ」

予めこのような質問が来ることを予期していたのだろう。機関長はよどみなく答えた。

「正確な磨耗度は、帰港後に過熱していた軸受を開放してみないとわかりませんが、この訓練公開期間中に最大戦速を發揮させた程度では異常は起こらないでしょう。少なくとも原因がこの潤滑油切れに起因するものは…という意味ですが。」

幸い過熱状態は短時間で終了しましたから、熱による損害はさほど大きくはないはずです。就役時の造船所の確認値を見るかぎりでは当該軸受の素性は悪くありません。過熱によって停止点検はさせてもらいましたが、あのまま航行を続けても暫くの間は大きな問題は起きていなかったはず。本艦の機関部はそれだけの余裕が持たされて設計されていますから。

それで…どうでしょう。現在の軸受隙間を計測して造船所のデータと比較すれば磨耗度の推定くらいは可能ですが…」

機関長としては点検の時間がもたえられるかどうか気になるのだろう。ボンディーノ大佐は苦笑しながら首を振った。

「いや、とりあえず訓練終了まで走り続けられるならいいよ。詳細な点検は帰港後に行なってくれ。いくら我らが空軍の制空権内とは

いえ、片舷だけ使用できる状態で漂白し続けたくはないからな」

そういうとボンディーノ大佐は、機関長の肩を叩いた。

「それよりも原因のバルブ識別のやり方を機関部で考えてみてくれ。新兵に徹底して教え込むなんてお定まりの奴じゃ駄目だぞ。そのポカした新兵にもアイディアを出させてみるというかもしれない。一度しくじった奴の方が案外今度は失敗しないもんだ。

とにかく機械長や缶長、工作員長とも話し合って機関部全体で話し合ってみてくれんか」

機関長は、一瞬ほっと安心したような顔になると、気を引き締めたような表情で頷くと、すっと手を上げて敬礼した。

しかし、ボンディーノ大佐が答礼することはなかった。

何か異音を聞いたような気がした。

怪訝そうな顔になった機関長に手を上げて黙らせると、開いた右手を耳に当てて空に向けた。

しばらくそうしていてから、くるりと機関長に向きなおった。ボンディーノ大佐の顔には、いつの間にか、凄まじい緊迫感が漂っていた。

「何か…エンジン音のようなものが聞こえなかったか」

機関長は首を傾げるばかりだった。

「私には特に…」

ボンディーノ大佐は、機関長が言い終わる前にそれを無視するように視線を変えて、上甲板に集まっていた水兵たちの様子を凝視していた。

大佐のように何かを聞きつけたのか、何人かの水兵が、周りの兵たちを黙らせて、ついさっきの大佐のように聞き耳を立てようとしてた。

しばらくそれを睨みつけてから、ボンディーノ大佐は機関長に振

り返った。

鋭い目で睨みつけられた機関長は、たじろいで、一步下がろうとした。

しかし、ボンディーノ大佐の視線は、機関長の顔ではなく、耳に向けられていた。

騒音であふれた機関室からがってきたばかりの機関長の耳には、この音が聞こえないのかもしれないと考えていたからだ。

つまり、この音源の音量はかなり小さいのだろう。

鋭い目付きのまま、半ば駆け出しそうな勢いで、ボンディーノ大佐は艦橋内部に戻ろうとした。

しかし、それよりも早く見張り員からの報告が上がった。

ヴィットリオ・ヴェネトの右舷側に反航する航空機があるらしい。ほんの僅かな星明りの中でよく見つけたものだ、脳裏でそう考えながら、ボンディーノ大佐は、艦橋脇に据え付けられた見張り員用双眼鏡の脇に近寄っていった。

その後を所在無げな様子の機関長も続いていた。

当直の見張り員は、まだ十代であろう、海軍に入隊して間もないと見える新兵だった。

機関長は、経験のなさそうなその見張り員を胡散臭そうな顔で見ている。新兵の報告にあまり信用を置けないのだろう。

だが、ボンディーノ大佐は頓着せずに、若い見張り員のすぐ後に立つと、いった。

「航空機はどのへんだ」

すぐ後の立っているのが艦長だとまだ気がついていないのか、見張り員は素早く包囲と角度だけをいった。

その間も航空機に合わせているのか、双眼鏡は見張り員によってわずかに動かされ続けていた。

見張り員の動きには迷いは見られなかった。

その頃になってようやく当直士官が双眼鏡を手にして持ってきたが、ボンデーノ大佐が鋭い目で睨みつけると、その視線に気圧されたのか顔を真っ青にしてしまった。

当直士官の手からもぎ取るようにして双眼鏡を手にすると、ボンデーノ大佐は見張り員の言った方向に双眼鏡を向けた。

しかし、ボンデーノ大佐は、すぐに航空機らしきものを捉えることは出来なかった。

当直士官の持っていた双眼鏡は、手持ち式のさほど大口径のものではないから、見張り員用の大口径の双眼鏡よりも数段暗かった。

見張り員用の双眼鏡は、下部を固定して、重量を気にせずに設置することができから、そのような大口径化が可能だった。

不機嫌そうな唸り声を上げながら、ボンデーノ大佐が何度も双眼鏡を振っているのを見かねたのか、機関長がつぶやくようにいった。

「何かの誤認ではないのか……」

だが見張り員はすかさずに反論した。かなりの確信があるのだらう。

「間違いありません。複葉機、複数、反航続けています」

その時、出し抜けに夜の闇を引き裂くような凄まじい光量の光芒が、空へ伸びた。

光源はヴィットリオ・ヴェネトではなかった。

やはり何らかの異変を察知したのか、いつの間にかアルティリエーレが探照灯を空に向けていた。

探照灯は、見張り員の言っていた方角とは見当違いの方向を当てもなく照らしただけだったが、予め航空機のいそうな方向に双眼鏡を向けていたボンデーノ大佐には、低い雲底への反照だけでも十

分な光源となった。

間違いなかった。夜空の中、複数の複葉機が光を避けるように、ゆっくりと機動しているのが見えた。

それを確認するやいなや、ボンデイーノ大佐は、大声をあげた。

「総員戦闘配置、右対空戦闘、最大戦速即時待機。機関長、機関部準備出来次第報告」

機関長は、ボンテイーノ大佐が言い終わる前に、機関指揮所へと走り去っていた。

総員直を告げる大音響の耳障りなアラームが鳴り響くなか、ボンデイーノ大佐から双眼鏡を取り上げられた当直士官が、おずおずといった。

「複葉機と聞きましたが…もしかすると空軍の戦闘機ではありませんか。確か我が空軍の戦闘機は半数が複葉機だったはずですが。もしも夜間飛行中の友軍に誤射でもすれば問題となるのではありませんか」

慎重論を唱える不安そうな顔の当直士官にしばらく何も答えずにボンデイーノ大佐はじつと見張り員と一緒にあって双眼鏡で飛行機の機動を見つめていた。

飛行機が視野から離れたのか、ボンデイーノ大佐は目から双眼鏡を離すと、所在無げに突っ立っていた当直士官の手に押し付けた。

「空軍機じゃないな、戦闘機にしては短すぎる…オイ機種は分からんか、水兵」

ボンデイーノ大佐は見張り員に尋ねた。

今度は見張り員からの報告は即座には帰って来なかった。

帰ってきた返事も、双眼鏡を淀みなく動かす手つきと比べると自身がなさそうだった。

目には自信があるが、敵機識別表の暗記にはあまり自身がないらしい。

あるいは飛行機の存在まではわかるものの、識別出来るほどの光量がないのかもしれない。

「英国海軍の…ソードフィッシュかアルバコア…ではないでしょうか」

ボンデイーノ大佐もそれに頷いた。

「まあそうしか考えられんよな…よく見つけた水兵。だが識別表はちゃんと暗記しておけよ」

そう言うとボンデイーノ大佐は、軽く見張り員の肩を叩いた。

ようやく肩を叩いたのが艦長だと気がついた見張り員は、雲上の佐官から直接にほめられて素直に相好を崩したが、双眼鏡を動かす手はそのあいだも止まらなかった。

その様子に満足そうに頷くと、ボンデイーノ大佐は艦橋の中にはいった。

だが、大佐はすぐに打って変わって不機嫌そうな顔になると、後をついてくる当直士官にいった。

「空軍が夜間に編隊でこんな所をうるつくほど熱心なはずはあるまいよ。夜間飛行の訓練ならもつと内陸部で、それに少数機で行うはずだ。哀しいかな、我が空軍に編隊飛行で夜間に地形物のない海上を飛行できる腕のある奴はそうそうおらん」

「ならば…哨戒飛行中なのではないでしょうか。ソードフィッシュにせよアルバコアにせよ単発の艦載機です。こんな本土に近い海域で英国海軍の空母が安穩と航行できるとは思えなせん」

おどおどとしながらも、意外としつこい性格なのか、当直士官が言い募った。

再び大佐が口を開く前に、伝令が機関指揮所からの電話を差し出した。どうやら早くも機関長が指揮所に滑りこんだらしかった。

「機関、出せるな」

簡潔にそれだけを言ったが、機関長からの返答も負けず劣らず短

かった。

確かに軸系の不具合を調査するためにタービンへの蒸気移送は止めていたが、缶圧は落としていなかったから、再始動は容易だった。

各部署から続々と総員配置完了の報告上がってくるのを確認しながら、ボンデイーノ大佐は当直士官に向き直った。

「安心しろ、あれが空軍の哨戒機ならあっちも誤射を恐れて近づいてはこん。こっちは誤射で友軍を撃墜しても気まずくなるだけだが、あっちは文句をいう事もできなくなってしまっからな」

兵器な顔で物騒なことを言うボンデイーノ大佐に、当直士官は眉をしかめたが、大佐はそれに気がついた様子もなく続けた。

「それに、恐らく本艦は攻撃もされんだろう…」

周囲の兵に聞かれて緊張感が削がれるのを恐れたのか、ボンデイーノ大佐にしては小声の台詞に、当直士官が怪訝そうな顔をしていると、大佐は呆れたような顔になっていった。

「オイオイ、そんなんじゃ兵に馬鹿にされて終わるぞ貴様。今のが敵機なら、何で海上でのんびり護衛一隻で漂白しとる絶好の標的である本艦に向かってこないんだ。もしかすると労せず海上で戦艦を撃沈したという世界初の栄誉を手に行けるかもしれないのだぞ。確固たる目標があったから我々から逃れようとしたんだ。」

あのまま本艦に反航した姿勢で飛び続けたらどこへ行き着くと思
う」

そう言うなり、ボンデイーノ大佐は海図台に載せられた近海海図の、ヴィットリオ・ヴェネトの位置からすすつと指を走らせてからある一点で止めた。

「まさか…あの機体はタラントを襲うというのですか」

「貴様の言うとおり英国海軍が安穩と航行できるはずもない。それだけの覚悟を持って奴らは来たということだ…伝令！通信指揮所繋
げ」

ボンデューノ大佐は、伝令から電話機を受け取ると通信長に向かつていった。

「タラント司令部に向かつて電信を入れる。本文、英海軍ソードフイツシユ多数を発見、タラント空襲の可能性大警戒を要す。それから座標、時間をつけて発信しろ」

総員戦闘配置完了が伝令から伝えられると、ボンデューノ大佐は、凄みのある笑みを見せると、艦長席に腰掛けながらいった。

「機開始動、一戦速。航海長、針路180。伝令、同文を通信指揮所に送付、アルティエーレに送れ」

航海長は怪訝そうな顔で振り向いた。

「針路180…南ですか？」

「南だ。いくらソードフイツシユが複葉の鈍足で、本艦が高速戦艦でも飛んでる奴には追いつかん。だが、ソードフイツシユを発艦させた空母はそうじゃない。今からタラントに向かつてても混乱に巻き込まれるだけだが、空母を攻撃することは出来るかもしれん…朝になれば本艦の搭載機だって飛び立てるから、それまでに敵空母がいそうな概略海域に移動する。」

…どうせタラントの司令部は寝入っているか、混乱しているかだから小官がアルティエーレを指揮して独断専行しても事後承認されるだろう。多分」

最後の方はあまり自身がなさそうな口調だったが、ボンデューノ大佐の奇妙なほど人を圧倒する笑みに何かを言おうとするものはいなかった。

1940タラント防空戦2

いつもながら、カタパルトで射出されるときの加速度は大きかった。

過大な加速度がもたらす一瞬の衝撃と不快感を、シートに思い切り背を押し付けてやり過ぎすと、ビスレーリ海軍中尉は、素早く愛機であるレッジャーネRe・2000Pアストーレの機体に異常がないかを確認した。

コクピットから見える範囲では、主翼にもフロートにも異常はないようだった。

操縦桿の手応えも、普段通りで異常は感じられなかった。

ビストーリ中尉は、大きく溜息をつくと、今度は安堵感から背もたれに体を押し付けていた。

ビストーリ中尉が大きさに安堵するのも無理はなかった。

イタリア海軍独立戦闘飛行群に配備されたアストーレは、運用が開始されたばかりの新型機だったからだ。

ただし、今のところアストーレを装備する飛行群は、独立戦闘飛行群のみだったから、製造された数は極めて少なく、すでに生産は終了していた。

というよりもアストーレの機体構造自体は、殆ど不採用に終わったレッジャーネRe・2000ファルコのままだったから、生産と言うよりも、ファルコからの改造が終了したといってもよかった。

アストーレの原型は、空軍次期戦闘機計画で不採用となったRe・2000ファルコではあったが、その分類は陸上戦闘機ではなかった。

戦闘飛行群に配備されているのだから戦闘機には間違いないのだ。

が、アストーレは機体下部に巨大なフロートを括りつけられた水上戦闘機に改造された機体だった。

ビストーリ中尉が知るかぎり、このように通常の陸上戦闘機を水上戦闘機にと改造した例はなかったはずだ。

というよりも、現代において水上機方式の純粋な戦闘機を運用しているのはイタリア海軍以外にはないのであるのか。

噂では日本海軍の水上偵察機の中には空戦能力を持つものもあるというが、最初から戦闘機として設計されたわけではないはずだ。

だから水上戦闘機を現在保有しているのはイタリア海軍だけという事になるのだが、ビストーリ中尉があまり誇る気にはなれなかった。

今のところ独立戦闘飛行群が保有する唯一の水上戦闘機であるアストーレがかなり無茶な機体だったからだ。

アストーレの原型となったファルコは、競合試作でマツキ社は開発したMc.200サエツタに敗北して不採用となった機体だったが、頑丈な機体構造や速度性能などは、むしろサエツタを上回るものがあつたらしい。

この競合試作の敗北を受けて、レッジアーネ社でファルコの開発主任であつたロンギ技師などはかなり憤慨していたらしい。

あるいは、ロンギ技師など主任旧スタッフの何人かが、現在では事実上の敵国となつてしまったシベリアーロシア帝国の企業であるセーヴェルスキイ航空工業で働いていた過去が政治的に問題視されたのかもしれない。

セーヴェルスキイ航空工業は、日本帝国からの輸入に頼っていたロシア帝国初の本格的な航空機メーカーではあつたが、当初は日本やドイツからの技術導入、あるいは技術者の雇入れをおこなつてた。

その中に、当時は反共という意味で未だ友好国であった、イタリアやドイツの技術者も多数派遣されていたのだ。

実際、ファルコの機体構造や設計思想は、頑丈な機体構造を指向するロシア帝国や、翼内タンクによる航続距離の進捗をはかる日本帝国軍機の影響を色濃く残すものだった。

あるいは、そのあたりが未だに運動性能にこだわり保守的な複葉機であるフィアット CR・42を採用してしまうイタリア空軍には、受け入れ難かったのかもしれない。

だが、その不採用に終わったレツジャーネ Re・2000ファルコにビストーリ中尉の上官である独立戦闘飛行群司令が目を付けたのだった。

イタリア海軍独立戦闘飛行群は、将来の海軍航空部隊の空軍からの独立を見据えて設立された部隊だった。

大型水上戦闘艦から発進する水上偵察機ではなく、本来は、いずれイタリア海軍でも建造が予想される飛行甲板を備えた航空母艦での運用が前提となっていた。

しかし、軍縮条約ではイタリア海軍にも空母建造枠は割り振られていたものの、財政難にあえぐイタリア政府が空母の建造を認めることはなかった。

地中海西部を部隊とした対フランス戦を前提とする限り、イタリア海軍の決戦場は空軍の行動圏内にとどまるはずであるから、高価な空母から制限のある艦上機を無理に運用する必要性はないと判断されていたのだ。

それに加えて、独立戦闘飛行群は空軍からはじき出されたりした物が多く、良くも悪くも海軍内で独立した雰囲気を持っていた。

ビスレーリ中尉自身も、鼻部疾患を理由に空軍に不採用となって民間操縦士となっていたところを、どこから嗅ぎつけてきたのかよ

く分からない隊司令にスカウトされて、ただ空を飛べるからという理由だけで海軍に入隊した、やはり変わり者ではあった。

そんな規格外の部隊だから、中々ちゃんとした機体は回って来なかった。

旧式化して艦隊航空部隊で用廃となった戦闘飛行艇カント25RやマツキM・41bisを譲り受けて使用していたほどだった。

だから飛行群初の新型機が配備されると聞いたときは、搭乗員のみならず部隊員全員が躍り上がって喜んだほどだったが、実際に配備されたのは空軍で不採用となった機体の改造機だった。

独立戦闘飛行群は、専用の水上機母艦を有していたから、ここから運用するためにアルトールは、Re・2000ファルコにフロートなどを取り付けて水上機に改造していた。

ただし、原型機を改造したレッジアーネ社には、水上機開発のノウハウはなかったから、飛行群司令が、空軍時代のコネのある馴染みの飛行艇修理会社に依頼して水上機に仕立て上げてしまった。

アストーレの型番にある末尾のPは改造にあたった修理工場の頭文字から取られていた。

しかし、レッジアーネ社には、水上機への改変や、改造にあたる会社のことは知らせていなかったらしい。

ファルコは、空軍で不採用に終わった機体だったから、中途半端な輸出用機で終わると思っていたレッジアーネ社では当初ロンギ主任技師を始め海軍制式採用を受けて大喜びであつたらしい。

彼らは、おそらくファルコを海軍では軍港の局地防空に使用するのだろうと考えていたのだろうが、作られた先からミラノはマツジヨール湖に輸送されるのを見て愕然としたに違いなかった。

それどころか、頑固一徹なところのあるロンギ技師は、ミラノの

飛行艇修理会社に殴りこみに行ったとまで言われている。

その時実際には何があったのかは分からない。

ビスレーリ中尉もそういう噂を聞いたことがあるだけだった。

しかし、その後ロンギ技師が暫くの間レッジアーネ社の工場をほっぽり出して、ミラノの飛行艇修理工場でファルコの水上機改造にのめり込んでいたのは確かかなようだった。

修理工場の社長である親父と意気投合したとか、主任設計技師に惚れ込んだとか、色々噂は立てられているが、アストーレの改設計にレッジアーネ社のロンギ主任技師も加わっていたのは間違いない。

だから、製造元ではないサードパーティーによる改造機とはいえ、純正な機体には代わりはないはずなのだが、元々陸上機として開発されていた機体を改造したせいか、アストーレのどこかちぐはぐな感じは抜けきらなかった。

だが、ビスレーリ中尉達搭乗員は、アストーレに早くも愛着を感じ始めていた。

確かに長距離哨戒機を兼ねるための航続距離を長大させるためのフロート増槽や、狭い艦内格納庫に収容するための折りたたみ機能付き主翼など、不安感の拭えない構造は少なくないが、原型機であるファルコ譲りの高い機動性能など優れた点も多かった。

それ以上に、空軍にはじき出された自分たちと、次期主力戦闘機になりそこねたレッジアーネ Re・2000シリーズを重ねあわせているのかもしれない。

タラント郊外の、独立戦闘飛行群のために新たに設けられた水上戦闘機基地から発進したビスレーリ中尉のアストーレは、当然のよ

うに海上に下ろされて滑走するのではなく、長大な地上設置式のカタパルトから射出されていた。

母艦を用いなくとも、施設の整った地上基地から射出訓練を行うために設置されていた、半ば教育資材として導入されていたカタパルトだったが、アストーレが飛行群に採用されてからは、必要不可欠な装備となった。

過加重状態のアストーレは、フロートに対して、自重を除く装備等が重すぎて、海上から発進するのが難しかったのだ。

海上を進む友軍艦隊の上空援護を主目的とされたアストーレには、長大な航続距離が要求されていた。

保有機材の少ない独立戦闘飛行群が、重厚な防空網を構築するためには、一機あたりの稼働時間を極限まで拡大する必要があったのだ。

それに、場合によっては、単座とはいえアストーレにも長距離哨戒任務を行う場合があった。

そのような多機能性を兼ね備えていると説明しなければ予算請求が通らなかつたのではないのか、搭乗員たちはそう噂をしていた。

アストーレの主フロートの大半が燃料タンクを兼ねているのはそのためだった。

危険極まりない構造だし、まだ誰も試したことはないが、燃料満載時では、着水した瞬間に重すぎてフロートが沈みこむのではないのか、そういうものもいた。

普段は、そのような長大な航続距離を要求されることはないから、主フロート内の燃料タンクがすべて使用されることはなかつた。

しかし、今のビスレーリ中尉の愛機には燃料が主フロートまで満載されている。

ビスレーリ中尉達、独立戦闘飛行群の搭乗員たちは本来、明日予定されている襲撃訓練の為に母艦に収容されているはずだった。

タラントから出向した母艦から射出されて、同じく対空戦闘訓練を行う戦艦ヴィットリオ・ヴェネトと駆逐艦アルティリエーレに模擬襲撃をかけるはずだった。

しかし、母艦にて整備中に、主フロート燃料タンク内の燃料漏れを起こしたビスレーリ中尉の愛機だけは、整備施設の整った陸上基地で徹底した再整備を受けていたのだ。

このタラント郊外の新基地には、製造メーカーであるレッジアーネの分工場も新設されていた。

うまくいけば海軍空母用の機材として売り込めるから、小規模メーカーであるレッジアーネも売り込みに必死なのだろう。

最近では、ロンギ技師や改造した飛行艇修理会社の技師も、ほとんどこの分工場にいるらしく、ビスレーリ中尉の愛機も海軍の整備兵だけではなく、彼ら製造元の手厚い整備を受けることとなった。

それはいいのだが、ヴィットリオ・ヴェネトからタラント空襲の警報を受けたとき、即座に飛行可能だったビスレーリ中尉の機体には、確認のために主フロート内にも燃料が満載されていた。

予定では、今夜一晩そのままにしておいて、明日の朝に漏洩がないことを確認してから、試験飛行が予定されていたからだ。

だから、係留位置の関係上、搭載機の射出が不可能な母艦搭載の機体に代わって、ただ一機発進したビスレーリ中尉の機体は、ある程度飛行して燃料を消費しない限り、着水も困難な危険な状態だった。

ビスレーリ中尉は、過加重状態の愛機に負担をかけないように、ゆっくりとタラント中心部を避けるように旋回しながら高度を上げていった。

ヴィットリオ・ヴェネトからの空襲警報は、タラントの司令部や各艦、各防空陣地にも伝わっているはずだった。

そんな状態で、タラント上空を無神経に飛行したら、敵機と誤認されてたちまち蜂の巣にされてしまうかもしれない。

そう考えてタラントの中心部を飛行するのは避けたのだが、この距離から見る限り、その配慮は懸念であったかもしれない。

タラント軍港は、その広大な敷地や収容した艦艇を防備するため、各所に防空陣地が構築されていたが、軍港内の艦艇にも、防空砲台にも動きは見られなかった。

それどころか、探照灯の明かりひとつすら見えなかった。

わずかに首をかしげながら、ビスレーリ中尉は、タラント軍港の様子を観察していた。

独立戦闘飛行隊群の司令は、ヴィットリオ・ヴェネトからの通報を受けるなりすぐにビスレーリ中尉機の発進を命じたが、他の部隊、艦の指揮官たちには、それほど危機感はないようだった。

やはり、新兵の多いヴィットリオ・ヴェネトによる誤認なのではないのか

それは、ビスレーリ中尉は、とりあえずあがって敵機を迎撃しろという群司令からの命令を聞いてから、何度も思い浮かんだ疑念だった。

常識的に考えて、このような夜間に、敵主力部隊が存在する拠点へと少数機で空襲をかけるような無茶な指揮官がいるのだろうか。

ビスレーリ中尉は、首をかしげたまま、タラント軍港から、上昇を続けるアストーレの同高度へと視線を向けていた。

一度、陸地上空で高度を取ってから、ヴィットリオ・ヴェネトが航行しているはずの方向を、地形を目標にして確実に確認してから洋上飛行へと移行しようとしてビスレーリ中尉は考えていた。

ただでさえ地形という目標物のない洋上での飛行は困難を極めるが、これに夜間の単独飛行という悪条件が加わるのだから、慎重に越したことはない。

燃料に余裕はあるから、いざとなればコンパスを確認してただ南に飛行して、陸地に戻ってから地形を確認すればタラントへは辿りつけるのだが、一応隊の中でも古参に数えられつつある自分が、そのような無様な飛行をするわけにはいかなかった。

奇妙なものを見たのは、タラント港上空へ最後に視線を向けたときだった。

あれは…黒煙か…

艦艇の係留地上空に、黒い塊が浮かんでいた。

淡い月明かりの中、油断すると見逃しそうになるが、位置からすると、係留されている艦艇の機関からあがったものに間違いなさそうだった。

今日はあまり強い風が吹いていないようだから、煙突から上がってここまで吹き散らされずにそのまま上昇していたのだろう。

もちろん、よく整備され、通常燃焼している機関が黒煙などあげるはずもない。

それにこの時間帯ならば、泊地の艦隊は当然錨泊しているから、夜明けに出港を予定していたとしても、発電機くらいしか起動していない筈だ。

この黒煙はおそらく、ボイラーをあらためて点火させたか、昇圧させようとしてもしてバーナーに詰まっていた煤でも吐き出されたのか、あるいは混合比が安定していなくて未燃焼の燃料がでたのだろう。

う。

もちろん、練度の高い機関員がいつまでもそのような不自然な状態で機関を運転するはずもないから、この黒煙もすぐに散ってしまっただろう。

だが、この黒煙の下には、間違いなく上陸していた乗組員の乗艦もそこそこに出港しようとしている艦がいる筈だった。

基地隊のことはよくわからないが、少なくとも艦隊の方は、空襲を本気で警戒しているようだ。

缶圧を昇圧させながら、緊急出港準備をしつつある艦隊を横目でみながら、想定していた巡航高度までアストーレを上昇させきったビスレーリ中尉は、警戒中の艦隊からの誤射を恐れるようにゆつくりと南に機種を向けると孤独な哨戒飛行を開始しようとしていた。

不思議なことに、すぐに吹き散らかされそうな黒煙を見たことで、ビスレーリ中尉の孤独感は消え失せ、逆に士気は高まっていた。

これから先、孤独な飛行が続くが、この問題に対処しているのは少なくとも自分だけではない。

そんな単純なことを確認しただけなのに、ずいぶんと気が楽になっっていた。

もしかすると、高度を上げて、月明かりに隠されていたおずおずと輝く星空を見たからかもしれない。

この星空を独り占めして飛ぶのも悪くないかもしれないな。視線を、周囲と計器に忙しく動かしながら、ビスレーリ中尉はそう考えていた。

だが、ビスレーリ中尉の考えは間違っていた。

星空は独り占めなどされていなかったし、孤独な飛行も長続きしなかった。

1940タラント防空戦3

戦闘の開始は唐突だった。

少なくともヴィットリオ・ヴェネトの艦橋にいたものの中で、いきなり飛び込んできた照明弾の閃光に目を焼かれる前に、攻撃の前兆を掴んでいたものはいなかったはずだ。

砲撃が敵予想方向の前方からではなく、左舷後方よりから行われたからだった。

その時、ヴィットリオ・ヴェネト乗組員の注意は前方へと向けられていた。

視界の利かない夜間に、タラントへ向かった攻撃隊を発艦させた敵空母をいち早く発見しなければならなかったからだ。

夜が明ければ、ヴィットリオ・ヴェネトに搭載された三機のメリジオナリRO・43水上偵察機を使用して広域偵察を行うことも可能だった。

しかし、艦載機を展開させることができるのは敵空母も同様だった。

その頃にはタラントを攻撃した部隊も帰還しているだろうから、油断すれば、純粋な水上砲戦部隊であるこちらが先手を取られて空襲を受ける可能性もある。

それに戦闘機部隊を展開させて我が偵察機を妨害するのも難しくないはずだった。

だから、出来れば艦載機の発着艦が難しい夜間の間に敵空母を補足して撃沈してしまえばそれが最善だった。

しかし、いくら地中海が狭いとはいえ、敵空母を探しだすのは常

識的に言って非常に難しかった。

ここまで哨戒網に引つかからなかったことを考えると、敵艦隊が大規模なものであるとは考えづらかった。

敵空母一隻のみの単艦行動である可能性すら低くはなかった。

しかし、ボンデーノ大佐は、敵空母の発見に関しては楽観視していた。

少なくとも敵空母が攻撃隊を発艦させた海域は、予想とさほどかわりないはずだった。

攻撃隊の機体は、複葉機のソードフィッシュかアルバコアだった。おそらくは、未だ英国海軍で主力攻撃機であるソードフィッシュであるはずだった。

ソードフィッシュは五年ほど前の戦前に就役が開始された機体だったから、その性能もかなり把握されている。

その航続距離や攻撃時の燃料消費、それに加えて、ヴィットリオ・ヴェネトと敵攻撃隊が遭遇する前の予想航路をたどれば、敵空母の位置を類推するのは難しくくない。

発進後に移動することも予想されるが、夜間飛行を強いられる敵攻撃隊の航法の困難さを考えれば、それほど複雑な機動はできないはずだった。

もしも大きくイタリア半島から離れるような航路を選択すれば、敵攻撃隊と邂逅することは格段に難しくなるだろうからだった。

問題があるとすれば、敵攻撃隊から、警報が発せられていた場合だった。

ヴィットリオ・ヴェネトの通信室からは、先ほどの不期遭遇直後に何らかの通信波を傍受していたから、その可能性は高かった。

ただし、その場合も状況は大して変わらない。

どのみち、攻撃隊を発進させた敵空母が取りうる機動余地は、攻撃隊を回収するという前提がある以上たいしてないはずだ。

しかし、予想外に、敵艦隊が現れたのは、敵空母の予想位置である南方からではなく、敵空母を求めて南下していたヴィットリオ・ヴェネトの左舷側となる西方からだった。

突然、ヴィットリオ・ヴェネトの周囲を橙色の、夕焼けにも似た色で周囲を照らす照明弾の弾子が現れた瞬間、ヴィットリオ・ヴェネト乗員の大半が呆然としてしまっていた。

いち早く立ち直ったボンディーノ大佐が、左舷見張り員に声をかけるよりも早く、海面を伝っておどろおどろしい砲声が聞こえてきていた。

思わず獣のような唸り声を上げると、ボンディーノ大佐は、素早く艦橋内に響き渡るように声をあげた。

「左、対水上戦闘、主砲確認取れ次第敵一番艦を射撃、副砲同じく確認取れ次第敵二番艦を射撃、舵そのまま、速力そのまま…左見張り員、敵勢どうか」

最後は怒鳴りつけるような大声となった。

それに答えるかのように、主砲指揮所や副砲指揮所から復唱が帰ってくるよりも早く、左舷見張り員からの報告が上がってきた。

もっとも、報告よりも早く、ボンディーノ大佐はその内容を把握していた。

左舷見張り員と同じように、双眼鏡を左舷の敵艦隊がいるであろう方向に向けていたからだ。

それは間違いなく、敵艦の発砲だった。

彼方に赤白い閃光がいくつも発生していた。

「八時から九時の方角、敵艦…三隻、発砲炎から連装砲塔四基、クインエリザベス乃至ロイアル・サブリン級とみとむ」

見張り員からの報告が聞こえると、艦橋内に緊張が走った。ある

いは、恐慌の前触れであったかもしれなかった。

相手が、クイーンエリザベスにせよ、ロイアル・サブリン級にせよ、旧式ではあったが、共に15インチ主砲八門を持つ未だ有力な戦艦だった。

砲身長こそ42口径とヴィットリオ・ヴェネトの50口径砲よりも短いため、初速では劣るが、砲弾重量は同程度はあるはずだった。それが三隻ともなれば、苦戦は免れなかった。

しかし、ボンディーノ大佐は、報告を無視するように、主砲指揮所につながる電話を取り上げて、砲術長を呼び出した。

砲術長が電話に出るよりも早く、左舷見張り員からの悲鳴のような報告が聞こえた。

「敵艦再度発砲、一斉射撃に移行した模様」

慌てて電話に出た様子の砲術長が出ると、ボンディーノ大佐は、一度はんと馬鹿にしたような声を上げると、砲術長だけではなく、わざと艦橋要員に聞こえるように大声で言った。

「敵艦の種別を間違えるな、相手は悪くて重巡洋艦、おそらく軽巡洋艦だろう」

ボンディーノ大佐の視線は、艦橋内に設置された時計、その秒針に固定されていた。

敵艦の発砲間隔は十秒程度しかなかった。戦艦や重巡洋艦クラスの主砲が取りうる発射速度ではありえなかった。

「こつちも照明弾を撃とう。12センチ砲はとにかく照明弾を打ち上げてくれ。相手が軽巡なら距離は一万程度のところにいる筈だから12センチ砲でも照明弾なら届くだろう。ともかく相手を照らささんことには何時までも幽霊を怖がるようになっちまうぞ」

砲術長が復唱するのを確認して、電話機を伝令に返すと、ボンディーノ大佐は、弾着に備えた。

計算が正しければ、すぐに弾着があるはずだった。

ヴィットリオ・ヴェネトの前後方向に弾着による水柱が上がったのは次の瞬間だった。

ボンディーノ大佐は、複雑な表情でそれを見ていた。艦の前後にほぼ同時に水柱が上がっているが、着弾点の距離からして交叉されているとは思えなかった。

おそらく、三隻の敵艦がほぼ同時に発砲しているから、そう見えるだけで、ヴィットリオ・ヴェネトとそれぞれの着弾点との距離はかなり大きかった。

そこだけ見れば、敵艦の照準が大きくずれているとしか思えなかった。

しかし、ヴィットリオ・ヴェネトの前後方向はともかく、左右舷方向のずれは小さかった。

次弾も、測角のズレは同程度だった。

というよりもこれだけの急斉射では、着弾観測よりも早く発砲しているはずだ。

このような射法からみても、手数で攻める巡洋艦であることは間違いないさそうだった。

すでに英海軍ではレーダー射撃が実用化されているというのか……

着弾による水柱を見ながら、ボンディーノ大佐は、眉をしかめてそう考えていた。

英海軍の大型艦艇にレーダーが搭載されるつあるらしいという噂は聞いていた。

それにレーダーは、測距よりも測角の方が精度が荒くなるらしい。だから、敵艦から見て距離は正確なのに、角度が悪いということになるのではないのか。

その頃になって、ようやくヴィットリオ・ヴェネトからも発砲が開始された。

ただし、それは敵艦を狙ったものではなかった。というよりも、現状では敵艦を照準できるほどの数値が揃わないだろう。

だから、最初に発砲したのは、照明弾を発射した礼砲を兼ねる12センチ砲だった。

そして、12センチ砲の発砲にやや遅れて、敵艦の第三斉射の着弾が発生した。

しかし、着弾点は海上ではなかった。

最初の発砲と同様に、ヴィットリオ・ヴェネト周囲をまばゆい明かりが照らし出していた。

やはり第一斉射と同様に照明弾が発射されたようだった。

眩しい光に、すこしばかり目を細めながら、ボンディーノ大佐は、先ほどの考えを改めていた。

英海軍がレーダーを運用し始めたのは事実のようだったが、その信頼性はさほど高くはないのではないのか。

測角値が大きくずれていることを見ても、レーダーによる観測のみでは、射撃管制に用いることが出来るほど精度の高いデータを得ることはできないのだろう。

だから、照明弾を用いた光学観測を併用せざるをえないのではないのか。

英国海軍のレーダー照準技術が未だ光学併用のものであるのなら、光学観測のみに頼るイタリア海軍であっても対抗することは出来るのではないのか。

確かに測距に限るとはいえ、レーダーによる正確な観測は可能であるようだったが、光学観測であればより大型の測距儀を使用することのできるヴィットリオ・ヴェネトの方が、英海軍の軽巡洋艦よりも精度が高いはずだった。

それに、いまだ敵艦隊との正確な距離はわからないが、発砲炎と着弾、それに発砲音とのずれからすると、ヴィットリオ・ヴェネトと敵艦は、距離一万程度で同航しつつあるようだった。

おそらく、自艦の主砲の実用射程距離や、正確なレーダ測距が可能となる距離から、一万程度を砲戦距離に選んだのではないのか。

だが、この距離であれば、ヴィットリオ・ヴェネトは主砲に加えて、副砲である15・2センチ砲も使用出来た。

敵艦隊主力が軽巡洋艦であれば、この副砲でも相手の主砲とほぼ同様の威力を発揮できた。

この副砲はルイージ・デイ・サヴォイア・デユカ・デリ・アブルツツイ級軽巡洋艦の主砲と同じ砲なのだからそれも当然だった。

ヴィットリオ・ヴェネトに搭載されている副砲のうち片舷に指向できるのは三連装砲塔二基、計六門だから相手よりも手数には劣るだろうが、戦艦という安定したプラットフォームからの砲撃というメリットもあるから、命中率と言えばそう大した違いはないはずだった。

それに、この距離であれば、旧式の12センチ砲でも、大雑把な照準ですむ照明弾ならば十分敵艦を照らし出すことができるはずだった。

だから、わざわざ主砲を用いて照明弾を放つ英国艦隊よりも優位に立てるかもしれない。

主砲威力や装甲防御では当然こちらのほうが圧倒的に優位なので、ボンデイーノ大佐はそう考えていた。

軽巡洋艦が有する魚雷発射の兆候を事前に察知し、回避することさえできるのであれば、一対三であっても勝利することは難しくないはずだった。

だが、ボンデイーノ大佐がそのように楽観的でいられたのも、実

際に12センチ砲から放たれた照明弾が敵艦付近で輝き出すまでだった。

敵艦が…いないだと

各部署に指示を出す合間に、着弾時間にあわせて双眼鏡を敵艦に向けていたボンディーノ大佐は、一瞬啞然としてしまっていた。

しかし、左舷の見張り員からの報告は違っていた。

「敵艦視認…巡洋艦3、うち前方2隻…集合煙突ありリアンダー級とみとむ、後方は二本煙突、同改型と思われる」
ボンディーノ大佐はまゆをしかめていた。

どうやら大型で視野の明るい双眼鏡を使用する見張り員はなんとか正確な敵勢を把握することができたようだった。

リアンダー級軽巡洋艦の特徴である集合煙突など敵艦の形状まで把握している以上、見張り員の報告は信頼できそうだった。

ただし、12センチ砲の照明弾では、手持ちの双眼鏡では十分な観測ができないほどの光量でしかないことは事実だった。

これでは、主砲や副砲の照準は困難なのではないのか。

砲術長からの報告はなかったが、実際主砲の発砲は、照明弾の弾着からかなり時間をかけていた。

おそらく限定された光量で行う測距の結果に自信が持てなかったのだろう。

副砲の発砲開始は、主砲よりも更に遅れていた。

照明弾は概ね敵一番艦に向けられていたから、更に光量の劣る敵二番艦を狙う副砲長は、砲術長よりもより慎重になっていたのだろう。

そのようになかなか実弾の発砲に移行できないヴィットリオ・ヴェネトをあざ笑うかのように、照明弾の斉射をおりませた敵艦からの砲撃は、次々と連続して着弾していた。

しかも、時間が経つに連れて、敵艦の照準は正確になりつつあった。

弾着のたびに、ヴィットリオ・ヴェネトと、敵弾による水柱との距離は狭まりつつあった。

夾叉されて、命中弾が出るのも時間の問題だろう。

一度そのような状態になれば、軽巡洋艦級の発射速度の高い主砲弾が次々と着弾する最悪の結果が待っているはずだった。

これに対してヴィットリオ・ヴェネトの2門の12センチ砲も次々と照明弾を放つてはいるのだが、その光量は弱々しいままだった。発射速度は同等なのだが、門数も、口径も敵艦に比べ劣っているために投射される砲弾重量が小さかったのだ。

さらに三隻の敵艦が照らし出すのはヴィットリオ・ヴェネトただ一隻で済むのに対して、こちらは二隻を照らし出さないと主砲と副砲で異なる敵艦を射撃するのは不可能だったのだ。

そして、ヴィットリオ・ヴェネトからの主砲と副砲からの弾着が発生した。

ボンデイーノ大佐の悪い予感にあたつたようだった。

砲術長や副砲長の腕が悪いとは思えないが、主砲も、副砲も散布界は正常の範囲内だったが、着弾点と敵艦とのずれは大きかった。

しかも、敵艦と違って、測角に加えて、測距値も誤差が大きいようだった。

主砲指揮所からの全弾遠と、次弾修正を告げる報告を聞きながら、ボンデイーノ大佐は、再び砲術長を呼び出していた。

さすがに電話に出た砲術長の声は、戦闘中であるにもかかわらず、沈んでいた。

申し訳なさそうに、次弾は近づけてみせると言い切る砲術長を遮って、ボンディーノ大佐はいった。

「砲術長、このままでは命中弾を得る前にこっちが滅茶苦茶にされてしまう。こちらも副砲で照明弾を一番艦に向けて放とう。別に一度に全門を撃つ必要もないから、常に敵艦を照らし出せるはずだ。とにかく敵艦を明るくしなくては、こっちは照準できんうちに一方的に叩かれるぞ」

砲術長からの返答は遅れた。

その間にヴィットリオ・ヴェネトは、主砲を一斉射していた。その作業で電話どころではなかったらしい。

そして、その短時間の間に砲術長の声は落ち着いていた。

しかし、ボンディーノ大佐は、砲術長が声ほどには冷静ではないと感じていた。

「主砲のみで一番艦を狙っているには二番艦以降に一方的に叩かれてしまいます。副砲はあくまでも二番艦以降を狙うべきです。確かに光量は不足気味ですが、照準は不可能ではありません。今は確かにずれちよりますが、今度は当てて見せます」

自信のあるような言い方だったが、ボンディーノ大佐は判断がつかなかった。

やがて主砲弾が着弾した。

確かに照準のずれは測距、測角とも小さくはなっているが、まだ敵艦と着弾点は遠かった。

これでは着弾修正にはまだ時間がかかるのではないのか。

それに、もしも狙われていると知った敵艦が回避機動を取れば、照準は一からやり直すはめになる。

相手が戦艦ではなく、機動性の高い巡洋艦である以上その可能性も否定出来なかった。

英艦隊にしてみれば、無理をして戦艦と砲撃戦を繰り返す必要は

ないはずだった。

敵艦の目的は、タラントに攻撃隊を発進させた敵空母を無事に逃がすための時間を稼ぐことにあるはずだった。

そうであれば、無理をして砲撃を行うよりも、ヴィットリオ・ヴェネトをこちらに無駄に引き付ければ作戦は成功となるはずだ。

極端な話、無理をして砲撃戦を継続するよりも、魚雷発射のタイミングを伺うような機動を継続するだけでも、十分な護衛艦艇のいないヴィットリオ・ヴェネトは回避と牽制砲撃を余儀なくされてしまつかもしれない。

ボンディーノ大佐としては、こちらの正体や戦力を掴みかねているのである。敵艦が漫然と砲撃を繰り返している間に、できるだけ早く敵艦を葬り去って置きたかった。

だが、この状況でも砲術長はまだ強気だった。あるいは、ただ意固地になっていただけだったかもしれないが。

「艦長：探照灯の使用を許可できませんか。本艦の大型探照灯であれば、この距離でも攻撃力を落とすことなく、十分な光量で連続して敵艦を照らし出すことができるはずですよ」

「それは…」

珍しく、ボンディーノ大佐は詰まっていた。

確かに、探照灯を用いれば、照準に十分な光量が得られるはずだった。

しかし、同時にその照射を始めれば、ただでさえ照明弾の明かりで浮かび上がっているヴィットリオ・ヴェネトの姿をこれ以上ないくらいに明るく照らし出す諸刃の剣となるだろう。

ボンディーノ大佐が、わずかに躊躇しているうちに、ヴィットリオ・ヴェネトに、生涯初めての命中弾が発生した。

艦橋の後方で起こった突発音に、考えを妨げられたかのように、ボンディーノ大佐は振り返っていた。

「着弾か、被害報告急げ」

ボンディーノ大佐の命令を伝えるてしばらくしてから、後部応急指揮所からの報告を伝令が読みあげた。

「後部カタパルト付近に着弾：搭載機全損、及び燃料に着火、現在消火活動中」

ぎよつとしてボンディーノ大佐が、ヴィットリオ・ヴェネトの後方へと向き直ると、確かに照明弾の橙色の光とは明らかに異なる赤い色が艦橋からでも見えていた。

思わずボンディーノ大佐は唸り声を上げかかっていた。

火災の発生は、ヴィットリオ・ヴェネトの姿を闇夜から明るく映しだしてしまうし、偵察機の喪失は、夜が開けてからの広域哨戒が不可能となったということでもあった。

一瞬だけ搭載機から燃料を抜いておかなかつた自分を戒めると、ボンディーノ大佐は、応急指揮官の副長に消火急げと命じた。

回線をつないだままだった主砲指揮所への電話から、諦めのこもった声で砲術長が言った。

「どのみち本艦の姿は照らしだされてしまったようですね…艦長、こうなつては探照灯の仕様をためらう理由はなくなつたかと思いませんが」

ボンディーノ大佐は、しかしそこで結論を出すのをためらっていた。

確かに搭載機の火災によって照らしだされていはいるが、消火に成功すればその明かりも消え失せるはずだ。

他に光源となるような火災が発生しなければ、まだ自らを光源とする探照灯の使用は危険だと考えていた。

だが、ボンディーノ大佐が答えるよりも早く、艦橋の外にまばゆいばかりの光が走っていた。

闇を切り裂く光の筋は、明らかに探照灯の閃光だった。

命令を待たずして探照灯を使用したのか、ボンディーノ大佐は、慌てて何かを命じる前に違和感を感じて艦橋の窓へと顔を押し付けるようにして光源を確かめようとした。

ヴィットリオ・ヴェネトの探照灯からにしては閃光の位置が奇妙に見える気がしていた。

1940タラント防空戦4

ボンデューノ大佐の違和感は当たっていた。

探照灯を照射したのはヴィットリオ・ヴェネトではなかった。

これまで敵軽快艦艇に備えて待機していたはずのアルテリエーレが、いつの間にかヴィットリオ・ヴェネトと敵艦隊の間に割りこむように機動していた。

そして、アルテリエーレから伸びた探照灯の光芒が、しばし海面を薙いでから、一点で固定された。

すでに探照灯は、主砲を連続して発砲する敵一番艦の姿を捉えていた。

もちろん、これはアルテリエーレにとって危険極まりない行動だった。

一つ間違えば、自らを光源とするアルテリエーレは敵艦から格好の標的となって集中砲火を浴びてしまうだろう。

それに、探照灯の光だけではなく、いまアルテリエーレは敵艦とヴィットリオ・ヴェネトとの間に割り込むことで、照明弾の明かりにも背後から照らし出される形になってしまっている。

戦艦であるヴィットリオ・ヴェネトにとって軽巡洋艦の主砲弾は、余程のことがない限り致命傷とはならないが、ソルダディ級駆逐艦のアルテリエーレにしてみれば、一発でも命中すれば、下手をすれば一撃で撃沈される可能性すらあった。

そのような危険を背負っているにもかかわらず、敵艦を探照灯の光で捕えて離そうとしないアルテリエーレの姿は、まるで決断をためらっていたボンデューノ大佐を艦長代理のルティーニ中佐が叱りつけているかのように感じていた。

主砲指揮所につながる電話を持ち直すと、ボンディーノ大佐は、一字一句間違わないように、決意を込めていった。

「砲術長、主砲敵一番艦。手早く仕留めろ」

砲術長からの返答はなかった。

その代わりに、間髪を入れずに主砲塔が発砲していた。

アルティリエーレの奮闘に答えるように発射されたその砲弾は、今度は命中する。

ボンディーノ大佐はそう確信していた。

やはりボンディーノ大佐の予想は、こんどは当たらずとも遠からじだった。

アルティリエーレの探照灯によって照らされた海面上に、数十秒後に次々と発生した着弾点は、敵一番艦には命中も、夾叉もしていなかったが、水柱と敵艦との距離はかなり狭まっていた。

その間も次々と発射される副砲も、ボンディーノ大佐の希望も入り交じっていたかもしれないが、敵二番艦へと確実に近づいているような気がしていた。

ボンディーノ大佐には、これ以上戦況の変化がない限りもう何もすることがなかった。

今のところ砲術長が確実に着弾修正を行うのを信じるしかない。

敵弾は次々と着弾し、その度に何らかの被害をヴィットリオ・ヴェネトにもたらしてはいたが、はるかに格下の軽巡洋艦から放たれた砲弾による被害は、許容範囲内に収まっていた。

少なくともよほど妙なところに命中しない限り、ヴィットリオ・ヴェネトの戦闘能力を奪うことはないだろう。

ただし、このまま命中弾が連続すれば、主装甲が抜かれなくとも、やがて出血多量で人間が死ぬように、ヴィットリオ・ヴェネトも火災と非防護区画の浸水でやがては沈んでしまうはずだ。

そのような事態になる前に敵艦を沈めなければならなかった。

ふとボンディーノ大佐は違和感を感じて首をかしげた。

気のせいか、ヴィットリオ・ヴェネトの周囲に十秒間隔で絶え間なく発生する水柱の数が減っているような気がしていた。

命中弾がいきなり増加したわけではないことは、副長からの報告を聞けば分かったから、実際に敵艦からの発射数が減っているようだった。

しかし、今のところ、敵艦に命中弾を与えたという報告は入ってきていなかった。

つまり、敵艦の砲撃力を削りとったわけではなさそうだった。

嫌な予感がしてボンディーノ大佐は、敵艦の方向に双眼鏡を向けた。

水柱に邪魔されて良くは観測できないが、敵三番艦の発砲がこれまでとはタイミングがずれているような気がした。

まさか…敵三番艦の目標は…

「いかん、避けるルティエーレ」

無駄だとも気が付かずに、思わずボンディーノ大佐はつぶやいていた。

だが、ボンディーノ大佐が何かを言い終わる前に、アルティエーレの周囲に着弾による水柱が発生していた。

どうやら敵艦隊は、一番艦と二番艦でヴィットリオ・ヴェネトを、三番艦でアルティエーレを分散して砲撃し始めたらしい。

しかし、照明弾の反射と自艦の探照灯で、まばゆいばかりの光を放っているというのに、水柱が示す着弾点とアルティエーレの位置はずれていた。

しかも着弾点のずれは、測角だけではなく、測距方向にも大きくずれているようだった。

もしかすると、英海軍でもレーダーを装備した艦は限られているのかもしれない。

少なくとも敵艦隊三番艦は、レーダーを装備していないのか、それともレーダー測距に慣れていないのだろうか。

だが、いずれは着弾修正を行った、そして装甲を持たない駆逐艦には危険極まりない15・2センチ砲弾がアルティリエーレに命中する時が来てしまうだろう。

もうボンデイーノ大佐には、アルティリエーレが探照灯で照らし出してくれている間に敵艦をかたっぱしから沈めてしまうことを祈ることしか出来なかった。

そして、破局の時が訪れた。

複数の命中弾が、ほぼ同時に発生していた。

最初に、これまでのように、敵一番艦と二番艦からの15・2センチ砲弾がヴィットリオ・ヴェネトに降り注ぎ、その内の二発が命中した。

一発目は、煙突基部近くに命中し、高角砲を一基吹き飛ばした。

二発目は、第二砲塔付近の船首楼甲板と上甲板の間の垂直装甲を貫通した。

だが、かろうじて垂直装甲を貫通した砲弾の運動エネルギーはそこで尽きており、結局最舷側の非防護区画一つに破片をまき散らして終わった。

もちろん二番砲塔のバーベットには全く損害は与えられなかった。

そのお返しとばかりに放たれたヴィットリオ・ヴェネトの副砲は、ようやく15・2センチ砲弾を敵二番艦に命中弾を与えることに成功していた。

命中弾は一発のみだったが、ほぼ同様の砲弾が二発命中したヴィットリオ・ヴェネトよりも損害はむしろ大きいようだった。

艦容に比して巨大なリアンダー級軽巡洋艦の艦橋後部に命中した砲弾は、傍目には小さな穴を開けただけにしか見えなかったが、実際には射撃指揮装置とその操作員に致命的な損害を与えていた。

しかし、このヴィットリオ・ヴェネトと敵二番艦への命中弾は、艦自体への破局とは成り得なかった。

アルティリエーレへの命中弾はそれとは違っていた。

水柱が今度は、アルティリエーレの艦体を包むように発生していた。

ボンデイーノ大佐は、確かにその水柱の中で赤く輝く直撃弾の命の中を見たと思った。

わずかに遅れ、前方の水柱をかき分けるようにして現れたアルティリエーレの艦容は一変していた。

艦体中央部に命中した砲弾は、艦橋直後の煙突上部を吹き飛ばしていた。

その黒ずんだ煙からすると、その下の機関内部にも被害が出ているようだった。

更にその後ろの第一三連装魚雷発射管も損害を被っていた。

ただし、魚雷発射管内部の魚雷が誘爆する恐れはなさそうだった。

魚雷発射管は海中へともぎ取られて、その基部にギザギザの後のみを残して消え去っていたからだ。

探照灯の眩い閃光も消え失せていた。

煙突を吹き飛ばした砲弾か、あるいは煙突の破片によって艦橋構造物も滅茶苦茶に破壊されていた。

当然艦橋後部の最上部に設置されていた探照灯も何処かへと消え失せていた。

しかし、敵一番艦への探照灯照射は、ヴィットリオ・ヴェネトにとつてもう必要ではなくなっていた。

アルティリエーレへの被弾の直後に、敵一番艦への命中弾が発生していたからだ。

炎に包まれつつあるアルティリエーレを沈痛そうな目で見ていたボンデーノ大佐は、更に大きな閃光の発生に気がついて、敵一番艦へとわずかに視線を動かした。

命中弾は二発だった。

一発目は第一砲塔直前にやや高めに命中した。

この距離にしては珍しく、水平甲板へと命中していたのだ。

ヴィットリオ・ヴェネトの高初速50口径38・1センチ砲弾は、この距離では極めて高い垂直装甲への貫通力を持つが、水平装甲の場合は、角度が浅いからはじかれる可能性が高くなる。

もっとも極めて貧弱な軽巡洋艦の装甲であれば高初速の低い弾道であろうがなかるうが関係はなかった。

船首楼甲板の舷側近くから、左舷に向けて斜めに突入した38・1センチ砲弾は、あっさりとその下の上甲板をも突き抜けて、ほとんど左舷へと突き抜けかけた所で炸薬へと添加した。

ヴィットリオ・ヴェネトにしてみれば、水平装甲への着弾はあるいは幸運であつたかもしれない。

斜めと突き進むたびに運動エネルギーを失った砲弾が、敵艦内で炸裂したからだ。

艦首部の薄い水平装甲に着弾していた場合、あるいは反対舷へと突き抜けてから炸裂して、僅かな破片と大穴を開けるだけで終わっていたかもしれない。

しかし、艦内で炸裂した砲弾による被害は甚大なものとなった。

左舷側の水平線近くの船殻が、炸裂によって生じた膨大な内圧を逃がすために、舷外へと大きくめくれ上がった。

さらに、構造材も爆発の衝撃と、飛び散った破片によって損害を生じていた。

だから、亀裂は船殻から構造材へと一瞬のうちに拡大した。

ほとんど最大戦速で前進していたリアンダー級の構造材はこの亀裂に耐えられなかった。

自らの推進力と炸薬のエネルギーによって敵一番艦の艦首は、主艦体と分裂し始めていた。

当然、艦首のあった区画からの膨大な水圧が第一砲塔バーベットの侵し始めていた。

浸水は言うまでもなかった。

だが、艦首部の分裂よりも、さらに大きな損害が一番艦を襲っていた。

二発目の命中弾の着弾点は、煙突後部のカタパルト直下の水平装甲だった。

その箇所は機関部を防護するために水平装甲で最も厚くなっている箇所だったが、この距離では600ミリを超える貫通力を誇るヴェットリオ・ヴェネトの38・1センチ砲にとつて、リアンダー級の100ミリ程度の垂直装甲など神のようなものだった。

それでも信管を作動させるには十分であつたらしく、砲弾は、水平装甲を貫いて、缶室内部で炸裂した。

砲弾の炸裂によって、その缶室のボイラー全てが破壊されていた。一瞬の内に破壊された蒸気配管から漏れ出した水蒸気によって機関部の将兵は全滅したが、それよりも早く、炸裂の衝撃で歪んだ艦底部から吹き出した海水が、未だ高温を保つボイラー内部の構造材と接触して水蒸気爆発を引き起こした。

ボンディーノ大佐は、一瞬の内に、艦首部が離脱し、艦中央部で大爆発起こした敵一番艦を唾然とした表情で見ている。信じられないことに、爆発の衝撃でカタパルトと搭載艇引き上げ用のクレーンがくるくると空中を舞い上がっていた。

その吹き上げられた敵一番艦の部材が、海面に落下するよりも早く、一瞬呆気にと取られていたボンディーノ大佐は我に返っていた。

自然発生的に、艦橋では歓声が沸き起こっていた。

だが、ボンディーノ大佐はその歓声に加わることなく、命令を周囲の歓喜の声よりも響くような大声で叫んだ。

「主砲目標変更敵三番艦、副砲はそのまま敵二番艦へ射撃続行。左舷探照灯照射初め、目標、敵三番艦」

ボンディーノ大佐が命令を言い終えた直後に、敵艦からの着弾がヴィットリオ・ヴェネトを襲った。

周囲に上がる水柱に混じって、艦橋直前の第二砲塔に命中弾が発生していた。

だが、分厚い砲塔装甲に命中した英15.2センチ砲弾は、赤い鍛造痕だけを残してあさつての方向へと跳ね飛ばされていた。

それを見ると、ボンディーノ大佐は壮絶な笑みを見せた。

確かにヴィットリオ・ヴェネトが受けた命中弾は多かったが、致命傷はまだ一発も受けていない。

だが今の敵一番艦の様子をみるまでもなく、ヴィットリオ・ヴェネトの主砲弾は一撃で敵巡洋艦を葬る威力があった。

アルティリエーレは大損害を被ったようだが、それに代わってヴィットリオ・ヴェネトの探照灯が敵艦を照らし出すことができる。

このまま押しこめば敵艦全てを撃沈するのも不可能ではなかった。

だが、ヴィットリオ・ヴェネトの探照灯の照射は、敵三番艦の舷側を照らし出すことは出来なかった。

それよりも早く、残存する敵艦二隻は、沈みゆく一番艦を放置して、大きく回頭して逃げ出そうとしていた。

探照灯の閃光は、逃げ出そうとする敵三番艦の艦尾に向けられていた。

もちろん、ボンディーノ大佐は、敵艦を逃がすつもりはなかった。リアンダー級軽巡洋艦は確かに高速だが、ヴィットリオ・ヴェネトも平水面であれば30ノットを発揮する高速戦艦なのだから、追撃戦は不可能ではない。

幸い、後続するアルテリエーレは最大戦速を発揮するのは不可能だが、航行そのものは不可能ではなさそうだった。

だからボンディーノ大佐は、アルテリエーレに損害復旧を命じ、後置して単艦での追撃戦に移行しようとしていた。

しかし、ボンディーノ大佐が逃げ行く敵艦の艦尾を睨みつけながら、具体的な命令を下す前に、右舷見張り員からの悲鳴のような報告が上がった。

「駆逐艦二隻、右舷より急速接近、艦種不明」

慌てて、ボンディーノ大佐も右舷へと顔を向けた。

確かに艦種はよくわからなかった。

敵駆逐艦二隻は、横陣でヴィットリオ・ヴェネトにまっすぐ艦首を向けて突進していたからだ。

この距離からでも、高速航行によって起こる白い艦首波がよく見えるほどだった。

間違いなく、敵駆逐艦は、魚雷による襲撃機動をとりつつあった。

おそらく、相手からは、燃え盛るアルティリエーレや敵一番艦の反照によってヴィットリオ・ヴェネトが浮かび上がって映っているのではないのか。

夜間とは思えないほど、敵艦の襲撃軌道にぶれは全く見られなかった。

しかも、敵駆逐艦は、艦首の砲塔から次々と砲弾を放ちつつあった。

その連装砲塔から、敵艦がトライバル級だとボンディーノ大佐は判断したが、相手がもつと旧式の駆逐艦であつても危険度は大して変わらないのではないのか。

敵巡洋艦を逃がすために突撃に移つたであろう敵駆逐艦の目標は、ヴィットリオ・ヴェネトだけではなく、動きの鈍つたアルティリエーレも含むだろうからだ。

むしろ、ヴィットリオ・ヴェネトをここで足止めするには、僚艦であるアルティリエーレを狙つたほうが有効かもしれない。

ボンディーノ大佐が、素早く追撃を撃ち切つて、敵駆逐艦の追撃を撃退するのを決意したからだ。

ヴィットリオ・ヴェネトに命中弾を与えるだけに、ここまで奮闘してくれたアルティリエーレのその乗員を見捨てることは出来なかった。

「先の命令取り消し、右舷の探照灯のみ照射初め、目標敵駆逐艦：どちらでも構わん、主砲、右舷副砲、高角砲砲撃初め、主砲は当てんでもいい。敵艦前方に打ち込んで航路をねじ曲げてやれ」

早くも艦橋から見える、1、2番主砲塔が、ゆっくりと右舷に向かつて旋回を開始していた。

いまだヴィットリオ・ヴェネトの戦闘は続いていた。

1940 タラント防空戦 5

タラント湾から出て、イオニア海上空へと乗り出した直後、ビスレーリ中尉は前方を観測していた。

明るい月を直接視認して夜間視力が失われないように注意しながら、前方空域の雲量や雲底高度を大雑把に計測していた。

長期時間の夜間単独飛行を強いられるが、自然環境はさほど悪くなさそうだった。

その前に簡素なものではあるが、原型機のファルコから水上戦闘機アストーレに改造されるにあたって増設されていたコンパスなどの航法支援機器の作動も確認していた。

だから、もう少しでイオニア海の海面近くの低空をすり抜けるように点滅する赤い光点が横切るのを見逃すところだった。

あまりにタラント近くでの不明目標の発見に、啞然としながらビスレーリ中尉はやもすればすぐに消え去りそうなほど不安定に瞬く赤白い点を見つめていた。

次の瞬間、自信の幸運ににやけ顔になるのを抑えきれずに、アストーレを半径の大きい横旋回に入れながら、今度はゆっくりと海面近くまで降下させていった。

その間も、月明かりによって出来る自機の影が赤い点近くに降りてこないように慎重に機動させていた。

タラントに向けて移動する光点の右舷側から、ゆっくりとビスレーリ中尉のアストーレは接近していた。

水上戦闘機への改造にあたって、フロートなど抵抗となる付加物の影響で、原型よりもだいたい速度の落ちているはずのアストーレではあったが、それでも油断すると光点を追い抜かしてしまいそうだ

った。

接近することで、光点の正体はつきりしていった。

ビスレーリ中尉が考えていたとおり、赤い光点は調整が悪いのか、エンジンの排気管から漏れ出した未燃焼ガスの気筒外燃焼によるものだった。

エンジン出力を絞れば、赤い排気炎も消えてしまっただろうが、そう簡単には、出力を落とすことはできなさそうだった。

もしそんなことをすれば、たちまち機速が危険なほど低下して、海面へと墜落してしまうのではないのか。

ビスレーリ中尉にそんな考えを抱かせるほど、その機体は性能の低そうな旧式機に見えた。

アストーレの前をよたよたと飛んでいたのは、英国海軍航空隊の複葉雷撃機であるフェアリー、ソードフィッシュだった。

その特徴的な機体構造は間違いようもなかった。

いまだき複葉の攻撃機を運用しているのは少ない。

もっともイタリア空軍も機動性の高さを評価して複葉戦闘機ファイアットCR・42を現役で運用しているのだからあまり人のことは言えないかもしれなかったが。

ビスレーリ中尉は、ほくそ笑みながら、気付かれないようにゆっくりとソードフィッシュにアストーレを接近させていった。

上手いこと相手の不手際のお陰で敵機を早くに発見できたのだから、こちらから発見されるようなことは避けたかった。

幸い、アストーレは、ソードフィッシュよりも空力的にも洗練されているし、エンジン馬力も大きいから、排気炎が漏れないように出力を慎重に絞ったままでも十分に追撃できた。

すこしばかり迷ったが、光が漏れるのを恐れて、光像式照準器の

電源を投入するのも、ぎりぎりまで控えることにした。

そのように慎重に出力を絞りながら、ソードフィッシュに接近しながら、ビスレーリ中尉は、素早く背後を振り返った。

敵機を射撃する前に、逆に追撃されていない確認するのは、ベテランの搭乗員にとって習慣付けされた動作だった。

もっとも、この状況では、後方から接近する敵機がありえないことは予め予想していた。

満天の星空のほかは何もないことを確認すると、ビスレーリ中尉は安心して、舌なめずりさえしそうになりながら、ソードフィッシュに最後の接近をかけた。

ビスレーリ中尉が、違和感を感じたのその時だった。

排気炎を漏らしながら飛行しているソードフィッシュは一機だけだったが、偵察でもない限り一機だけが飛行しているとは思えない。攻撃隊であれば同時に多数が飛行しているはずだった。

だが、機銃の射程近くまで接近したというのに、発見できたソードフィッシュは二機だけだった。

もう一機のソードフィッシュは、暗闇に紛れるように安定した飛行を行なっていたが、僚機から断続的に漏れ出る排気炎に照らさだされていたのだ。

しかし、その他のソードフィッシュは見当たらなかった。

夜間偵察にしては、二機、それもかなり緻密な編隊を組んでいるのは奇妙だった。

それに加えて思ったよりもアストレーとソードフィッシュとの間隔が詰まっていかなかった。

敵機に察知されるのを恐れるあまり、必要以上にエンジン出力を絞ってしまったのだろうか、あるいは燃料を大量に積載しているア

ストローレが重くて速度が出ていないのかもしれない。

そうも考えたが、手早くエンジン回転計や速度計を確認したかぎり、そうではなさそうだった。

単に、ビスレーリ中尉が考えていたよりも、ソードフィッシュの速度が大きいのが原因だった。

ビスレーリ中尉は、ソードフィッシュが過積載状態で巡航飛行を行っていると仮定して、ほとんどアストローレを失速ギリギリの速度で飛行させていたのだが、実際には、追跡中のソードフィッシュは、最大速度に近いかなりの速度を出しているようだった。

もちろん、それでもその速度は、アストローレ自身の最大速度からすれば約半分程度に過ぎない。

だから、多少エンジン出力を上げてでも追尾は容易だった。

ビスレーリ中尉は、違和感を押し殺すと、一気にエンジン出力を上げた。

一度の襲撃で一気に二機を撃墜するつもりで、敵編隊の同高度で右斜め後方からつきかけていった。

最初の標的は排気炎をもらさずに飛行している機体だった。

闇夜の中で目標となる排気炎を出しながら飛行する方が未熟なのだろうから、より簡単に撃墜できると考えたからだ。

それならば、奇襲となる初撃で確実にベテランから撃墜すれば、確実だろうからだった。

それに、僚機の排気炎から照らし出されるだけの機体よりも、排気炎で確認できる機体のほうが、もし見失ったとしても再発見は容易だろう。

アストローレは、出力を高めながら、大鷹を意味するその名のごとくに鋭く斬り込んでいったが、その急に大きくなった騒音が、ある

いは気配に気がついたのだろう。

目標としたソードフィツシユの後部席の機銃手がアストーレに気がついた、ような気がした。

実際には、もっと前からアストーレに気がついていた機銃手が、このタイミングで射撃を開始しただけかもしれない。

だが、いずれにせよ、斜め後方から突き進むアストーレを捉えきれずに、ソードフィツシユからの射弾は虚しく宙を切るだけだった。それどころか、ぼんやり僚機の排気炎の反照に浮かんでいただけの機体が、発砲炎で明確になっただけだった。

ビスレーリ中尉には、後部席機銃手の動揺を感じ取れるほどだった。

それに、味方機からの援護射撃が始まる気配もなかった。

目標ソードフィツシユの後部席から放たれる貧弱な7・7ミリ弾の弾道を見切りながら、一気に接近をかけると、ビスレーリ中尉は照準器の電源を入れて、機銃の引き金にそっと指を当てた。

機銃弾の弾帯に一定割合で含まれた曳光弾の弾道を追う必要もなかった。

ビスレーリ中尉は、ブレダ12・7ミリ機銃の射弾がソードフィツシユの胴体に食い込む手応えを感じていた。

機銃弾は、機銃手近くの英国国籍標識であるラウンデルから、前方へと命中痕を残していた。

命中痕が描く線は、最前部の操縦員席を超えてエンジンまで達していた。

アストーレから放たれた機銃弾は、ソードフィツシユのエンジンに致命的な損害を与えたらしく、射撃直後にくりと機速が低下していた。

正常な飛行態勢へと回復させるための動作を行う操縦員も機銃弾

で被害を受けたらしい。

射撃を受けたソードフィッシュは、機速を低下させたまま、海面に着水するようにゆっくりと機首を落としていった。

もちろん水上機ではないソードフィッシュがそのような態勢で着水出来るはずもない。

いまだ存速を保ったまま不安定な姿勢で海面に接触したソードフィッシュは、一瞬の内に機体を縦転させると、重量物のエンジンを下に向けてぐずぐずと沈んでいった。

ビスレーリ中尉は、ソードフィッシュが沈みゆくさまを確認しなかった。

命中弾を与えて、対象機が降下しつつある時点で、ビスレーリ中尉にしてみれば敵機を撃墜したも同然だった。

少なくともそのような状態でタラントに空襲をかける可能性はない。

それよりも、次の機体に攻撃をかけるほうが先決だった。

一機目への射撃は短時間で終了したはずだったが、それでも機首に設置されたブレダ機銃の発砲炎でビスレーリ中尉の目は眩惑されていた。

機銃の発砲炎がまだちらつきながらも、ビスレーリ中尉はアストーレのコクピットから周囲を見渡しながら、もう一機のソードフィッシュのエンジン排気炎を見つけ出そうとしていた。

だが、夜間視力が戻ってきたと、星空の見え具合から判断するほど時間がたっても、一度見逃してしまったソードフィッシュの排気炎を見つけることが出来なかった。

計算どおりならば、残り一機のソードフィッシュは、一機目を撃墜した時点で前方やや右側を飛行しているはずだった。

編隊の右側を占める一機を右側から射撃後に、一旦かじを切つて

今度は敵機の左側から接近するつもりだった。

本来ならば敵機の後ろ側から射撃を行うべきなのだが、それだと後部席の防護射撃を長時間受けることになるし、何よりもソードフィッシュは低速だから、後方から接近して行くのが難しかった。

それならば見越し射撃になるが、敵機の長大な側面を狙おうとしていたのだ。

横方向からの見越し射撃は確かに技量を必要とするが、低速のソードフィッシュならば狙うのは用意の筈だった。

しかし、排気炎という顕著な目標があるはずなのに、ソードフィッシュは見つからなかった。

一度追い抜いてしまったのだろうか、首をかしげながら、ビスレーリ中尉はアストーレを旋回させようとしていた。

前方から排気炎を確認するのは難しいだろうから、もう一度ソードフィッシュの後方を確実にとってから排気炎を確認して接近しようとしていたのだ。

アストーレに射弾が命中したのは、その瞬間だった。

上方からの射撃だと…

とっさに、操縦桿を握りしめてラダーペダルを蹴り上げてアストーレを鋭く旋回させて回避させながら、ビスレーリ中尉は上空を見上げた。

そこには、機首を発砲炎で真っ赤に染め上げながら一気に降下してくるソードフィッシュが見えた。

ソードフィッシュからの射弾は、アストーレの右翼面をかすっただけで終わった。

しかし、圧倒的に劣位であったはずの敵機から奇襲を受けた心理的な圧迫感は強かった。

もしかすると、機体から出ていた排気炎は単に整備の問題だけで、

実際にはこちらのほうが手練の乗員だったのかもしれない。

鋭く機銃弾を放ったあと、一気に海面近くまで降下したソードフィッシュを見ながら、ビスレーリ中尉はそう考えていた。

その時には、ビスレーリ中尉にも何が起こったのかわかっていた。僚機が銃撃された瞬間に、ソードフィッシュは機首を上げて素早く上昇した。

速度エネルギーを高度に転換することで、機体が持つエネルギー総量を維持したままアストーレから逃れるためだ。

ビスレーリ中尉は、間抜けなことにそれに気が付かずと同高度をそのまま直進しているか、旋回してむやみとエネルギーを喪失しているだろうと考えて敵機を搜索していたのだ。

だがソードフィッシュのパイロットの方が上手だった。

エネルギーを保ったまま、しかもアストーレに反撃さえ行くと、低空を高速で逃走した。

ビスレーリ中尉は、急な旋回で態勢が崩れたアストーレの飛行姿勢を安定させると、気持ちを切り替えながら、ソードフィッシュの追撃に移った。

確かにソードフィッシュのパイロットの技量は優れていた。

さらに言えば、ソードフィッシュという機体も侮っていたかもしれない。

複葉機とはいえ、相手は軽快で、安定した性能と信頼性を持つ機体だった。

しかし、そうはいつでも機体性能で言えば、こちらが圧倒的に優位であることは間違いない。

向こうは重量物である爆弾か魚雷を抱えているはずだし、エンジン出力、火力、速力全てがフロートという重荷を抱えているにもか

かわらずアストーレのほうが有力なのだ。

確かに奇襲といっても良い一撃を食らってはいたが、今のところ頑丈な翼構造に異常は見られないし、操縦翼面は全て支障なく稼働している。

だから、慎重に技量の全てを尽くして戦えば決して撃墜は難しくない。

そう自分に言い聞かせながらビスレーリ中尉はアストーレを加速させた。

だが、ほんの少しばかり飛び続けてソードフィッシュを再発見し、すぐにビスレーリ中尉は自分が再び間違っていたことを発見していた。

このソードフィッシュを撃墜するのは相当に難しそうだった。

ソードフィッシュは、相変わらず排気炎を光らせながら、高度をさらに下げて、海面に張り付くようにして飛行していた。

心なしか、排気炎の光量が大きくなってきているような気がしていた。もしかすると、エンジン出力をさらに上げて速力を増しているのかもしれない。

もちろんアストーレに比べれば、それでも鈍足であることにはかわりはないのだが、安易に上空から襲撃をかけるのは極めて危険だった。

大きな速度差を保ったまま、この状態のソードフィッシュに対して突っ込んでいけば、海面への衝突を避けるためにおそらく銃撃直後に機体を引き上げなければならなくなるだろう。

もしかすると射撃時間すらとれないかもしれない。

かといって速度をおとして接近するのも危険だった。

襲撃時はほとんど直線で飛行するしかないから、後部席からの狙

いすました防御射撃の目標とされるのは目に見えている。

それにどんなパターンを取るにせよ、襲撃機動に入った瞬間にソードフィッシュはさらにするりと回避するような気がしていた。

ソードフィッシュは複葉機である上に、羽布張り構造の軽い気体だから、重いフロートを抱えた単葉のアストーレよりも翼面荷重は極めて小さい。

そこへ機体を知り尽くしたパイロットの腕が加われば、恐ろしく小さな旋回半径でくるりくるりと避けられてしまうのではないのか。海面をただはうように飛行しているだけなのに、そのソードフィッシュからはそのような剣呑さが感じられていた。

もつとも、ソードフィッシュにそのような飛行を長時間続けられるだけの余裕があるとは思えなかった。

海面直上を大出力で飛行すれば燃費はかなり悪化するから長時間の巡航はできないし、夜間に海面ぎりぎりを高度に注意しながら飛び続けるのは予想以上に搭乗員の体力と注意力を消耗させる。

なによりもタラントを攻撃するつもりならば陸地に近づいた時点で何があるとも上昇しななければならない。

だから、低空をはうように飛行するソードフィッシュに無理をして襲撃をかけるよりも、相手がタラントを目前にして隙を見せた瞬間を狙えばよかった。

ビスレーリ中尉はそう判断すると、ソードフィッシュの搭乗員にプレッシャーを掛けるように、敵機の斜め上空にぴたりと張り付いて飛行を続けた。

これならば、ソードフィッシュの搭乗員は海面との間隔を常に注意しながら飛ばなければならぬが、ビスレーリ中尉の方は、光点となるソードフィッシュとの距離さえ一定に保てば安全だから、消

耗度は低いはずだった。

だが、そんな不自然な編隊を組んだ飛行が続くにつれて、ビスレーリ中尉の心に焦りが生じていた。

もうタラントまでほど近くなっても、ソードフィッシュに動きは見られなかった。

しかも、そのまま前進すれば、タラントの市街地より南に上陸する筈だった。

タラント軍港の艦艇泊地に襲撃をかけるのであれば、何処かで回頭しなければならぬはずだったが、その気配は全く見られなかった。

ビスレーリ中尉は、不可解な敵機の動きに首をかしげていた。

一体この機体は、どうやってタラントを攻撃するつもりなのだろうか。

そういえば、さっき上空から襲撃をかけた時のソードフィッシュの機動は、胴体下に長大な兵装を抱えているようには見えなかった。それにわずか二機で襲撃をかけるのも奇妙だった。

ほかに本隊が存在するのだとしても、わずか二機では分派しても有効な戦力になるとは見えなかった。

理由がよくわからないまま、ソードフィッシュとアストーレは、距離を保ったままタラント陸上へと乗り上げていた。

陸地上空に達したことで飛行条件が異なったせいか、ソードフィッシュは大きく揺れたが、飛行姿勢は次第に安定していった。泊地まではあと数分しかなかった。

さすがにここまで来ては放置しておくわけにも行かない。危険だが、上空から突撃するしかなかった。

ビスレーリ中尉は意を決すると、アストーレの機首をソードフィ

ツシユに向けて降下を始めた。

さっきの上空からの奇襲を逆転させたような突撃だった。

しかし、ビスレーリ中尉は一人でアストーレを操縦しているが、ソードフィツシユには三人が乗り込み、索敵を分担していた。

だから、上空からアストーレが突撃をかけた瞬間にそれは察知されたはずだった。

鋭く旋回避を試みるソードフィツシユに対して、ビスレーリ中尉は、アストーレの機首をわざとぶらすようにして機銃弾を広範囲にばらまくようにした。

だが、それでもわずかに何発かが主翼に命中しただけで終わったようだった。

羽布貼りのソードフィツシユにはそれは致命傷にはならなかったようだった。

何事もなかったかのように、わずかに高度を上げたソードフィツシユはさしたる損傷もなさそうだった。

だが、それはビスレーリ中尉も予想していた。

もちろん諦めるつもりはなかった。

シザーズ機動で今度はソードフィツシユの斜めから襲撃するつもりだった。

しかし、ビスレーリ中尉の襲撃は、唐突に外部要因で打ち切られた。

アストーレのコクピットに、凄まじい閃光が飛び込んできた。

咄嗟に目を細めながら周囲の地形を探っていた。

いつの間にか、タラント郊外の貯油施設近くにまで飛んできてしまっていたらしい。

ビスレーリ中尉の目を射ぬいたのは、貯油施設防衛のために設置

されていた探照灯に間違いなかった。

もうタラントの艦艇泊地まで数キロしか残されていないかった。

だが、こんな状態ではもう敵機を追撃するのは不可能だった。

それどころか、夜間視力を奪われて、下手をするとそのまま地面に墜落しかねなかった。

いまだにアストーレを眩く照らし出す探照灯を直接視認しないように注意しながら、ビスレーリ中尉は慎重に機体を上昇させていた。下手に探照灯を避けるような機動を行っては、味方の防空部隊から敵機と誤認される恐れがあった。

とにかくできるだけ防空部隊と慎重に距離をとって、あとのタラント防空の任務は彼らに任せるしかなかった。

嘆息を漏らしながら、ビスレーリ中尉はアストーレを再び海上へと向けて旋回させようとした。

だが、突然の探照灯の照射によって眩惑されていたのはビスレーリ中尉だけではなかった。

ビスレーリ中尉は、名残惜しそうな目で最後にソードフィッシュを見ていたが、唐突にそれに気がついていた。

それまで鋭い機動を連続していたソードフィッシュが、奇妙なほどのたくったような機動を行っていたのだ。

被弾による損傷とは思えなかった。

アストーレからの銃撃を受けてもさしたる損傷を受けたようには見えなかったし、防空部隊からの射撃は始まったばかりで有効打を与えているとはとても思えない方向に向けられていた。

探照灯の光を直接見てしまったのか

それがビスレーリ中尉の結論だった。

ソードフィッシュは、これまでの手練の乗員らしさが全く消え失せていた。

もしかすると搭乗員たちもパイロットの視力が失せたことでパニックになっていたのかもしれない。

ビスレーリ中尉は、大きく目を見開いた。

ソードフィツシュが前方の阻塞気球に向かって一直線に飛行していたからだ。

おそらく前方の阻塞気球は、搭乗員達の幻惑された視野では闇夜に紛れて見えなくなっていたのだろう。

だが、同じように夜間視力が低下してはいても、角度を大きく変えた上空に逃れたビスレーリ中尉の位置からは、阻塞気球に向かって突進するソードフィツシュの様子が手に取るように見えた。

思わずビスレーリ中尉は警告のために声をあげていた。

無線が通じるわけではないからそんなことをしてもソードフィツシュに伝わるはずはなかったし、第一なぜ敵機に向かって警告などしようとしたのか、それはビスレーリ中尉にもよくわからなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8552w/>

仮想戦記（仮

2012年1月14日08時47分発行